

目次

第1章	はじめに	1
1.1.	研究目的	1
1.2.	研究対象と研究方法	2
1.2.1.	研究対象	2
1.2.2.	研究資料と研究方法	2
第2章	先行研究	5
2.1.	-烈-についての先行研究	5
2.1.1.	辞書の記述	5
2.1.2.	文法書の記述	7
2.1.3.	論文の記述	8
2.2.	先行研究のまとめと検討	12
第3章	-烈-の文法範疇	16
3.1.	テンスとテンポラリティについて	16
3.2.	ムードとモダリティについて	17
3.3.	本稿における-烈-の文法範疇に対する立場	18
第4章	-烈-の出現環境	19
4.1.	他の語尾との結合制約	19
4.2.	先行節との関係	30
4.3.	まとめ	31
第5章	叙述形の文	33
5.1.	用例の分類方法	33
5.2.	研究対象と資料	33
5.3.	-烈-を用いた文の種類	33
5.3.1.	I型の文	34
5.3.2.	II型の文	35
5.3.3.	III型の文	37

5.3.3.1. 非過去形式の用例	37
5.3.3.2. 過去形式の用例	38
5.3.3.3. -디-と共起した用例	38
5.3.3.4. 文法的連語に結合した用例	38
5.3.4. IV型の文	39
5.3.5. 非文末に-렸디形式で用いられる用例	41
5.3.6. 文の意味の実現における-렸-の役割	42
5.4.形態素-렸-の機能	43
5.4.1. 未来性	44
5.4.1.1. I型に見られる未来性	44
5.4.1.2. II型に見られる未来性	47
5.4.1.3. III型に見られる未来性	48
5.4.2. 確実性	50
5.4.2.1. III型の非過去形式に見られる確実性	50
5.4.2.2. III型の過去形式に見られる確実性	53
5.4.3. 婉曲性	54
5.4.3.1. I型に見られる婉曲性	54
5.4.3.2. II型に見られる婉曲性	55
5.4.3.3. III型に見られる婉曲性	56
5.4.3.4. IV型に見られる婉曲性	57
5.5. -렸-の機能と-렸-を含んだ文の特徴	58
5.5.1. 文法的機能	58
5.5.2. 語用論的機能	59
5.5.2.1. 婉曲性から丁寧さへ：聞き手への配慮	60
5.5.2.2. 婉曲性から曖昧さへ：あたりさわりがないようにする	63
5.5.2.3. 婉曲性から誇張表現へ：比喩的に述べて自己の主張を効果的に伝える ..	65
5.5.2.4. 婉曲性から慮りへ：話し手以外の感情を代弁する	65
5.5.3. -렸-を用いた文に現れる特徴	69
5.6. まとめ	69
第6章 疑問形の文	71
6.1. 先行研究	71
6.1.1. 「疑問」についての先行研究	71

6.1.2. -ㄹ-を用いた疑問形についての先行研究.....	72
6.2. 研究対象と資料及び分類方法.....	72
6.3. -ㄹ-を用いた疑問形の文の種類.....	73
6.3.1. 普通疑問.....	73
6.3.1.1. I型の疑問形の文.....	74
6.3.1.2. III型の疑問形の文.....	75
6.3.1.2.1. 非過去形式の用例.....	75
6.3.1.2.2. 過去形式の用例.....	77
6.3.1.3. IV型の疑問形の文.....	78
6.3.2. 特殊疑問.....	79
6.3.2.1. 終結語尾-지と結合する文.....	79
6.3.2.2. 終結語尾-는가と結合する文.....	82
6.3.2.3. 修辭疑問.....	84
6.3.2.3.1. 反語表現.....	84
6.3.2.3.2. 感嘆を伝える文.....	88
6.3.2.3.3. 話し手の認識を聞き手に提示して同意を求める文.....	88
6.3.2.3.4. 行為を提案・督促する文.....	95
6.3.2.3.5. 行為を求める文.....	96
6.3.2.3.6. 過去の事柄を説明する文.....	96
6.3.3. 疑問形の「普通疑問」の文における-ㄹ-の役割.....	99
6.4. 形態素-ㄹ-の機能.....	100
6.4.1. 未来性.....	100
6.4.1.1. I型に見られる未来性.....	100
6.4.1.2. III型に見られる未来性.....	101
6.4.2. 確実性.....	102
6.4.2.1. III型の非過去形式に見られる確実性.....	102
6.4.2.2. III型の過去形式に見られる確実性.....	103
6.4.3. 婉曲性.....	104
6.4.3.1. I型に見られる婉曲性.....	104
6.4.3.2. III型に見られる婉曲性.....	104
6.4.3.3. IV型に見られる婉曲性.....	105
6.5. -ㄹ-の機能と-ㄹ-を含んだ文の特徴.....	105
6.5.1. 文法的機能.....	106

6.5.2. 語用論的機能.....	106
6.5.3. -烈-を用いた疑問形の文に現れる特徴.....	107
6.6. まとめ.....	108
第7章 叙述形と疑問形の対照.....	110
7.1. 文の種類の種類.....	110
7.2. -烈-の機能の対照.....	113
7.3. -烈-を用いた文に現れる特徴の対照.....	115
7.4. まとめ.....	115
第8章 -烈-を用いた文の特徴.....	117
8.1. -烈-を用いた文の特徴に関する先行研究.....	117
8.1.1. 現場性に関する研究.....	117
8.1.2 主体の固定性に関連する研究.....	117
8.1.3. 「前提性」に関連する研究.....	118
8.2. -烈-を用いた文の特徴.....	119
8.2.1. 現場性.....	119
8.2.2. 主体の固定性.....	127
8.2.3. 現場性と主体の固定性に見られる-烈-のダイクシスの機能.....	130
8.2.4. 前提性.....	141
8.2.4.1. 前提性とは.....	141
8.2.4.2. 「前提性」がある文.....	142
8.2.4.2.1. 用言語幹に直接結合している文.....	142
8.2.4.2.2. 文法的連語に結合した文.....	144
8.2.4.2.3. 過去形式と結合した文.....	144
8.2.4.3. 「前提性」が現れる文法的要件.....	144
8.2.4.4. -烈-を含まない文との違い.....	145
8.2.4.5. 「前提性」がない文.....	148
8.2.4.6. -烈-が用いられた文はどのように「前提性」現象をもたらすのか.....	149
8.3. まとめ.....	149
第9章 結論.....	152
9.1. -烈-の機能と特徴.....	152

9.1.1. -歟-の出現環境について	152
9.1.2. 叙述形の文について	152
9.1.3. 疑問形の文について	153
9.1.4. 叙述形と疑問形の対照	155
9.1.5. -歟-を含んだ文の特徴について	156
9.2. 先語末語尾-歟-の機能とそれがもたらす多義構造	158
参考文献	159
資料	164

表の目次

[表 1]	韓日辞典	5
[表 2]	韓国で出版された国語辞典	5
[表 3]	北朝鮮で出版された国語辞典	6
[表 4]	韓国語学習者のための文法書	7
[表 5]	-ㄷ-と終結語尾との結合頻度	19
[表 6]	-ㄷ-と連結語尾との結合頻度	21
[表 7]	-ㄷ-と冠形詞形語尾との結合頻度	23
[表 8]	-ㄷ-と名詞形語尾との結合頻度	23
[表 9]	-ㄷ-と終結語尾との結合制約	24
[表 10]	-ㄷ-と連結語尾との結合制約	25
[表 11]	-ㄷ-と冠形詞形語尾との結合制約	27
[表 12]	-ㄷ-と名詞形語尾との結合制約	27
[表 13]	-ㄷ-を含む複文の先行節の連結語尾の共起頻度	30
[表 14]	-ㄷ-を用いた叙述形の文の形態統語的制約の可否	33
[表 15]	各型の文に現れる-ㄷ-の役割	43
[表 16]	-ㄷ-を用いた疑問形の文の形態統語的制約の可否	74
[表 17]	各型の文に現れる-ㄷ-の役割	100
[表 18]	I型の下位分類	110
[表 19]	II型の文の下位分類	110
[表 20]	III型の文の下位分類	111
[表 21]	IV型の文の下位分類	112
[表 22]	文の種類の対照	112
[表 23]	<未来性><確実性><婉曲性>の現れ方の対照	114
[表 24]	文の意味に見られる特徴の対照	115
[表 25]	疑問形III型の中で「前提性」が認められると判断される場合	145

第1章 はじめに

1.1. 研究目的

本論文は、現代韓国語の先語末語尾-ㄹ-¹について論ずるものである。

先語末語尾である-ㄹ-は、先行する用言と後続する語尾の間に時には別の異なった先語末語尾と共起しながら出現し、さまざまな文の意味を実現させる。その用法は実に多様であり、主に「未来」「推量」「意志」「可能性」「予告」「婉曲」「丁寧」などを表すと説明される。このような用法の関係性については様々な観点から議論がなされ、-ㄹ-の「意味」「機能」を明らかにしようとする議論や研究が盛んになされてきた。

多義性を持つ形式について論じる時、その形式の中心的「意味」「機能」をひとつ定めて、それと多くの用法との関係性を説明する方法もあれば、中心的「意味」「機能」から派生的用法や例外的用法を設定して説明する方法もある。しかし従来の研究を見たとき、いずれの方法であれすべての用法の関連性が説明されたとは言い難い状況である。まず前者の方法では中心的「意味」「機能」とあらゆる用法との関係性に納得のいく道筋が示されてはいない。一方後者の方法でも、中心的「意味」「機能」から他の用法がどのように派生したのかという過程についての道筋が不十分で、かつ例外的用法はなぜ例外として枠の外にはみ出てしまったのかという説明が不明瞭である。例えば、-ㄹ-はしばしば「未来」を表すと言われるが、-ㄹ-は-았/였/였(-았/였/였-は今後-였-で代表させる。)及び-더-と共起して過ぎ去ったことについて述べる文にも現われる。さらに-ㄹ-は、「推量」や「意志」を表す文に頻繁に用いられるが、「推量」や「意志」は「可能性」「予告」「婉曲」「丁寧」などとどう関連付けられるのであろうか。

そもそも、「未来」「推量」「意志」「可能性」「予告」「婉曲」「丁寧」がすべて同じ次元で論じうるものなのかということを考える必要がある。「未来」「予告」は時間的要素と捉えうるし、「推量」「意志」「可能性」はモダリティ的要素と捉えうるし、「婉曲」「丁寧」は述べ方や敬語的要素と捉えることができる。つまり-ㄹ-の用法はいくつかの次元の枠組みに跨っていることが予想される。

ある文法的形態素が文に用いられてその意味成立に関与する時、文として成立する意味と形態素自身の「意味」「機能」が混同されることがある。しかし、文全体で表す意味とその中で文を構成する要素として用いられる形態素の働きは異なったものである。このように考えた時、「未来」「推量」「意志」「可能性」「予告」「婉曲」「丁寧」とは文のレベルでの意味を指すのか形態素の「意味」「機能」を指すのか、はっきり区別して論じる必要があると言えよう。

-ㄹ-の用法は多様ではあるが、同じ形態素が用いられた文であるならそれらに通底する要素を見出すことが可能かもしれない。それが文の意味か、形態素の機能か、形態素の性質かはわからないが、その中心的要素とさまざま用法の関連性を見出すことができれば、少なくとも-ㄹ-の本質の一角を明らかにしたと言えよう。

¹ 本稿において文法用語は基本的に남기심・고영근(1993)に倣う。

本論文では、これまでに培われた研究を基礎としながらも、従来の研究で見過ごされた領域はないのか、また十分な分析がなされていない用例はないのかという点にも留意しながら、-ㄷ-を含んだ用例をできる限り網羅的に取り上げる。そして、-ㄷ-を含む文の意味と-ㄷ-の働きを区別して、-ㄷ-がもたらす多義構造を明らかにしつつ、その構造がどのようにして多様な文の関連性を維持しているのかを体系的に記述することを目的とする。

1.2. 研究対象と研究方法

以下では、本論文の研究対象と、本論文の研究資料及びその方法を、全体的な構成を示しながら述べることにする。

1.2.1. 研究対象

本論文の研究対象は、過去、非過去テンスを含む終結形²の叙述形、疑問形における-ㄷ-を用いた諸形式とする。

1.2.2. 研究資料と研究方法

研究資料には、국립국어연구원(1999)『21세기 세종계획 균형말뭉치 (21世紀世宗計画均衡コーパス)』の「순구어(純口語)³」を用いる。『21세기 세종계획 균형말뭉치』は「문어(文語)⁴」と「구어(口語)⁵」で構成されており、「口語」はさらに「純口語」と「준구어(準口語)⁶」に分かれている。「純口語」は実際の発話を転写したテキストであり、「準口語」は主にドラマや演劇、映画などの台本がテキストとなっている。本稿では話し言葉によく用いられる-ㄷ-を分析するには「純口語」を中心に分析するのが適切であると考えるものである。検索プログラムは同コーパスの「글잡이Ⅱ(직접)」「글잡이Ⅱ(색인)」を利用する。

必要に応じて適宜、「準口語」、「文語」、국립국어원(2010)『21세기 세종계획 균형말뭉치 최종성과물(21世紀世宗計画均衡コーパス 最終成果物)』からも用例を引き、コーパスで網羅しきれていないと判断された場合は、先行研究や韓国語母語話者による作例あるいはインターネット上で得た資料なども示しながら論じていくことにする⁷。なお、用例の末尾にはコーパスの用例番号を付し、本稿の末尾には資料目録を付す。

本論文の全体的な構成を示しながら、研究の手順を次に示す。

² 文を終結している活用形を終結形という。남기심・고영근(1993:129)参照。

³ 「순구어(純口語)」は今後「純口語」と表記する。

⁴ 「문어(文語)」は今後「文語」と表記する。

⁵ 「구어(口語)」は今後「口語」と表記する。

⁶ 「준구어(準口語)」は今後「準口語」と表記する。

⁷ 用例を引用する時は、맞춤법及び띄어쓰기는コーパスの原文そのままを転記する。また、用例で2人以上の話者が出てくる場合、話し手のステータスが明示されている場合はそれに沿って表示し、明示されていない場合は単にA,Bと表記する。シナリオから用例を引く場合は元のシナリオに沿ってステータスや役柄名で表記することもある。

第2章では先行研究を概観する。辞書や文法書における記述、また時代に沿って研究者たちが-烈-をどのように捉えてきたかを通観し、その後議論のテーマごとにどのような見解が示されてきたかを整理した後、従来の研究を検討する。

第3章では-烈-の文法範疇について述べる。-烈-は文法形態素であるが、-烈-を含む文の意味と-烈-の働きを区別するという立場から、テンスとムードにとどまらずテンポラリティ及びモダリティにも言及しながら、その文法範疇について本稿の立場を述べる。

第4章では、コーパスのデータを用いた計数作業を行い-烈-の出現頻度を調べる。後続する語尾との承接関係から、結合制約や形態的特徴及び文法的意味に関わる特性があるかを検証する。具体的には『21세기 세종계획 균형말뭉치』の「純口語」テキスト全50万文節から抽出できた、文末及び非文末に-烈-を含む3,402用例を対象にした出現頻度調査を行う。その結果をもとに、コーパスにおける各語尾と-烈-との結合有無、またインフォーマント調査を行って母語話者の内省による言語的直観による結合制約を表にまとめる。そこからどのような語尾と結合しやすいのか、結合しにくいのか、またその制約との関係から文法的特性を見て、-烈-が関与する文の意味の実現との関わりを探る手がかりとする。さらに「純口語」コーパスのファイルにある全122種類の各テキストから冒頭約1500文節余りを抽出⁸して、新たな18万文節余りのコーパスを構成する。そこから終結形に-烈-が用いられている複文の用例を抽出して、-烈-が含まれている主節の先行節に用いられた連結語尾に注目して統語論的観点から特徴があるか調べる。

第5章では、叙述形の文について論じる。第4章で新たに構成した「純口語」テキスト18万文節余りのコーパスから抽出した終結形を持つ叙述形を文法的特徴からその用法ごとに文の種類を分類する。分類した各文の意味的特性を分析し、-烈-の役割を導き出す。その後、各文に共通して認められる-烈-の機能を整理し、文における-烈-の有無を対比させる作業も交えながら、その文法的機能と現われ方を分析していく。分析にあたっては、韓国語母語話者の協力を得ながら、母語話者の言語的直観によるインフォーマント調査をもとに考察を進める。また、用例分析するにあたっては-烈-が用言に直接結合した場合だけでなく、文法的連語⁹に結合した場合も分析の対象とする。その理由は、自立的な用言に結合した場合は用言の語彙的意味や特徴だけに注目すればよいが、文法的連語に結合した場合は-烈-が表すムードと文法的連語が表すムードが重複するからである。ムードの重複によって文の意味はどのように実現されるのか、またどのような文法的連語と結合しやすいのかを見ることで、-烈-の機能を考察することに間接的に役立つと考えるものである。

第6章では、疑問形の文について論じる。疑問形の文では、「純口語」テキスト全50万文節全てのテキストから抽出した終結形を持つ疑問形を対象にまず、「普通疑問」と「特殊疑問」に大別する。「普通疑問」は叙述形に倣って、文法的特徴からその用法ごとに文の種

⁸ 남윤진(1999:67)「標本の大きさが1,000(文節)以上なら比較的安定的な多様度のある語彙を得ることができる」に倣った。原著は韓国語で日本語訳は筆者による。

⁹ 임근석(2008:120)では、文法的連語の定義を임근석(2006)から引いて「語彙要素と文法要素の相互の緊密な統語的結合構成で、選択の主体となる語彙要素(連語核)が選択の対象となる文法要素(言語辺)を選好し成り立つ構成」と記述している。

類を分類する。分類した各文の意味的特性を分析し、-烈-の役割を導き出す。その後、各文に共通して認められる-烈-の機能を整理し、文における-烈-の有無を対比させる作業も交えながら、その文法的機能と現われ方を分析していく。分析にあたっては、韓国語母語話者の協力を得ながら、母語話者の言語的直観によるインフォーマント調査をもとに考察を進める。一方、「特殊疑問」は形態的及び意味的特徴からさらに用例を下位分類し、反語や修辭的用法における言語的操作に関連させながら-烈-の働きを分析する。

第7章では、叙述形と疑問形を対照させる。まず、両形式で分類された文の種類をさらに文法的結合制約及び他の語尾との共起関係から詳しく下位分類して、叙述形と疑問形の文の種類とそれぞれのモダリティ的意味を対照させる。次に、文の成立における形態素-烈-の機能を対照させ、最後に文の意味に見られる特徴を対照させる。このように叙述形と疑問形の文の種類、形態素-烈-の機能、文の意味に見られる特徴が、それぞれどのような現れ方をするのか整理し、両形式がどこまで並行的な様相を呈し、どこからどのような違いを見せ、さらにはそれぞれの形式特有の機能や特徴があるのかを観察する。

第8章では、-烈-を含んだ文に現れる特徴について論じる。第5章における叙述形の考察及び第6章における疑問形の考察の結果明らかになった、-烈-を含んだ文に認められる特徴について、それらが従来の研究ではいかに言及されていたのか、またこれまで見過ごされていたことはなかったのかという観点から先行研究を新たに概観する。その後、それぞれの特徴ごとに、既に抽出されている用例に加えて、新たな用例や作例などの幅広い用例も加えながら、それぞれ深度ある分析を加えて考察する。そして、それぞれの特徴の関係性、またそれらの特徴が現われる背景についても言及する。

第9章はまとめである。第4章から第8章までの分析及び考察の結果明らかになったことをまとめる。そして、各章で明らかになったことがどのような関係性を持ち、-烈-の機能がどのように文の意味に反映されて多様な文を成立させるのかを整理して、形態素-烈-がもたらす多義構造について述べる。

第2章 先行研究

本章では、先行研究を概観し検討する。形態素-ㄹ-が辞書、文法書、論考などでそれぞれどのように捉えられ記述されてきたかを概観し、従来の研究によって何が明らかにされているのかを考察するとともに、既存の研究で見落とされたことはないのか、また方法的に問題点はないのかなどを検討することにする。

2.1. -ㄹ-についての先行研究

形態素-ㄹ-に関する記述を辞書、韓国語学習者向けの文法書、論考の順に見ることにする。

2.1.1. 辞書の記述¹⁰

辞書は韓日辞典と国語辞典の記述を見る。対訳辞典である韓日辞典は韓国語を学習する日本語母語話者のための辞典であり学習者に対する記述である。国語辞典は韓国で出版されたものと北朝鮮で出版されたものを分けて示す。それぞれの辞書の記述をまとめたものを出版年順に示す。

[表 1] 韓日辞典

金素雲(1972)『韓日辞典』	決心・約束などの未来、推測、単純未来
安田吉実・孫洛範(1983)『잇센스韓日辞典』	未来、推測
大阪外国語大学朝鮮語研究室(1986)『朝鮮語大辞典』	推測、意志・意図、婉曲、可能性・能力・当然、予告・指示や丁寧な命令、相手の見解・意図を問う
菅野裕臣他(1991)『コスモス朝和辞典(第2版)』	蓋然性、婉曲、丁寧さ、意志
油谷幸利他(1993)『朝鮮語辞典』	推量、意志、控え目な気持ち、予告・指示・丁寧な命令、可能、強調

[表 2] 韓国で出版された国語辞典

李熙昇監修(1974)『民衆잇센스国語辞典』	未来、推測
신기철・신용철(1974)『새 우리말 큰 사전』	未来、推測、可能性
한글학회(1991)『우리말 큰사전』	未来、意志、推測、可能性
연세대학교언어정보개발연구원(1998)『연세』	近い単純な未来、推測、意図や意志、

¹⁰ 韓国で出版された国語辞典の日本語訳は筆者による。

한국어사전』	意見、可能性、聞き手の意志を問う、相手への要請、意味を強調、ㄷ 듯하다の意味、婉曲、聞き手の関心を引く
국립국어연구원(1999) 『표준국어대사전』	未来のことや推測、意志、可能性・能力、婉曲、押し量り

[表 3] 北朝鮮で出版された国語辞典

조선 민주주의 인민공화국 과학원 언어 문화 연구소 사전 연구실(1962) 『조선말 사전』	未来の時制、推測、意志、可能性
사회과학원언어학연구소(1973) 『조선문화어 사전』	純然たる未来、推測、意志、可能性
과학백과사전출판사(1981) 『현대조선말사전(제 2 판)』	純然たる未来、推測、意志、可能性
과학백과사전출판사(2004) 『조선말사전』	純然たる未来、純然たる推測、話し手の意志、決断、可能性

辞書は対訳辞典と国語辞典を含めて、日本、韓国、北朝鮮で出版されたもの 14 種を調べたところ、実に様々な表現で-ㄹ-の「意味」が記述されている。

まず、13 種で「推量(推測、押し量りなども含める)」の記述が含まれているが、日本で出版された菅野裕臣他(1991)だけが「蓋然性」という表現を使っている。また、10 種で「意志(意図なども含む)」の記述が含まれている。そして、韓国と北朝鮮で出版されたものにはすべて「未来」とする記述が含まれているが、日本で出版されたもの 5 種のうち 3 種には「未来」とする記述は見られなかった。

辞書に挙げられた用例を見ると、-ㄹ-が含まれる文に対する意味の捉え方はまちまちである。本稿では辞書ごとの用例を記述しないが、例えば、時刻を告げる用例が、「5 초뒤에 3 시가 되겠습니다.(5 秒後に 3 時になります。)」は「未来」と記述され、「잠시 후 열시가 되겠습니다.(まもなく 10 時になります。)」は「予告」と記述されている。また、「별 ~ 다 ~ 겠다」の形式で表される表現も、「별 소리 다 들겠다.(とんでもないことを言うんだね。)」は「強調」と記述され、「별 사람을 다 보겠다.(おかしい人もいるもんだ。)」は「押し量り」と記述されている。このように、辞書によって意味に対する見解が異なるのである。一方、알다、모르다に-ㄹ-が結合している文は「婉曲」、「丁寧さ」、「控え目な気持ち」など、似通った記述がなされている。

2.1.2. 文法書の記述 ¹¹

ここでは、韓国語を学習する日本語母語話者にむけて文法教育のために出版されている文法書の記述を見る。日本で出版され日本語で記述されたものと韓国で出版され韓国語で記述されたものを、出版年順に示す。

[表 4] 韓国語学習者のための文法書

著者	意味・用法	備考
菅野裕臣(1981)	意思＝推量形 婉曲性	1 人称陳述形は話し手の意思、2 人称疑問形は聞き手の意志、3 人称陳述形・疑問は推量。 ていねいさをもあらわす。 -ㄷ 것이다よりもていねいな感じ。
임호빈외(1997)	未来、意志、推測	未来形。話者の強い意志。
백봉자(1999)	話し手の意図・意志、未来の状況と現在の状況に対する推測、主語の動作完了を推測	未来時相を表す。話し手の現在の動作や状況を確実に表現するため、-ㄷ-という音節を挿入する。
이희자외(2001)	未来、推定や意志、慣用的用法	過去、現在、未来に用いられるので、時制の形態とはいえない。一般的に主語が1人称で、動作を表す動詞が用いられれば主語の意図を表す。
국립국어원(2005)	相手の意向を問う、意図や意志、話し手の評価や考え、推測や推量、まもなく起ころうとする事、可能性や能力、話し手の考えを迂回的に述べる、慣用的表現	未来時制を表すが、話者の意志や可能性、推測をも表す。

韓国語学習者のための文法書は、日本で出版されたもの1種、韓国で出版されたもの4種を調べた。韓国語学習者のための文法書の記述を見ると、5種ともに共通して「意志」と「推量」の記述が見られる。また、韓国で出版されたもののうち、3種は「未来」を表すとし、他の1種だけは時制としての「未来」を否定する記述をしている。

辞書と同様に、韓国で出版された文法書も「未来」としての意味を表す、あるいは「未

¹¹ 韓国で出版された文法書の日本語訳は筆者による。

来」時制を認める立場の記述が多いようである。

2.1.3. 論文の記述

-ㄹ-については多くの論考で言及、考察がなされているが、まずはその研究の流れを概観する¹²。

周時経¹³は「겟」を「이때」「간때」「올때」のうちの「올때」として未来を表すとしながらも、「올때를 표하는 겟은 거짓뜻함을 보이는 것이라」と述べて「거짓뜻함」の意味を「仮想」と捉えて、未来の用法だけではないことを記している。

최현배(1929/1955:358-361)では、-ㄹ-を「때 도움줄기 (時間補助語幹)」の中の「올적(未来)」とし、未来を有意志未来と無意志未来に分けている。そして、有意志未来は「意志」を表し、無意志未来は「普通の未来」を表すと述べている。さらに-ㄹ-は「할수 도움줄기 (可能補助語幹)」、「미룸 도움줄기 (推量補助語幹)」でもあるが、推量補助語幹の時には時間に関する意味はなく、これらを異なる機能を持つ異形態と捉えている。

나진석(1965:76-85)は-ㄹ-を「意図」「推量」を表す「叙相」の形態素と捉えて、-ㄹ-の機能には未来進行と現在進行の推量があり、未来進行は「意図」と「継起的推量」に下位分類でき、現在推量は「同時的推量」であると述べている。

1960年代までは文法全体または時制についての論考の中で-ㄹ-をいかに捉えているかという記述だけであるが、1970年からは-ㄹ-を巡る研究が始まる。

まず-ㄹ-について、それ自体を中心に据えた本格的な研究は申昌淳(1972)が初めと言えるであろう。ここでは言語資料を研究者の内省に頼るのではなく、文学作品などからも用例を挙げつつ分析するという新たな方法で論じている。申昌淳(1972:124,139-140)では、-ㄹ-は表面的には意図と推量の2つの機能を成すように見えるが、そこには話し手(疑問文では聞き手)が「推断した見解または決定した心の態度」という中心的意義があると主張する。それを便宜上、「推断」と「意図」に分けるが、「意図」という機能は、「話者が決定した心の態度の対象が今後行う自己の行動」という特殊な場合に限られ、大きくは「意図」の機能は「推断」の中に内包されると結論づけ、同時に機能としての「未来時」を否定している。

南基心(1972/1979:229)は-ㄹ-を「法」の文法範疇でとらえ、「推測・意図・能力」を表す3つの同音意義の形態素として設定したうえで、「未確認法」と呼んでいる。

その後、-ㄹ-と「意味機能」が似通った-ㄷ 것이다を比較した論争が見られるようになる。まずは李基用(1978/1985)と서정수(1978/1985)の相反する主張を見よう。

李基用(1978/1985:30,52-62)は、韓国語の叙述文を断定文と推定文に分け-ㄹ-と-을 것을「推定様相素」と定義したうえで、-ㄹ-を「강한 짐작 (強い推量)」、-을 것을「약한 짐작 (弱い推量)」としてその違いを指摘した。-ㄹ-の推定は主観的な確信が添えられていることから「強い推定」と述べることができ、-ㄹ-が意志を表すのは話者の確信を含意

¹² 先行研究からの引用部分に関する表記は、原則的に原著に従う。

¹³ 고영근・이현희교주(1986)『周時経、国語文法』参照。

しているためだと説明している。

一方、서정수(1978/1985:98-108)では、-ㄹ-は「話し手の主観」に基づいた推量を表し、-ㄷ ㄷ-は客観的な根拠に基づいた推量を表すと述べたうえで、客観的根拠を持っているという点から、-ㄷ ㄷ-が-ㄹ-よりも「確実な推定」を表すと主張し、李基用(1978/ 1985)と反対の立場をとっている。

また、成者徹(1979/1986:111,128-129)は「推定」の意味に焦点をあてながらも、主観・客観の対立や強弱の対立とは異なった視点から分析している。成者徹(1979/1986)は-ㄹ-と-을것이-が表す推定は「経験の時間上」の差によって弁別されると主張する。-ㄹ-は現在の経験に判断の根拠を置いた推定であるのに対し、-을것이-は過去の経験に根拠を置いた推定であり、経験当時に近いほど-ㄹ-が用いられ、遠い過去の経験ほど-을것이-が用いられるというのである。ここでいう「経験」とは直接経験のみならず、さまざまな知識や知っている全てのものが含まれているという。また、-ㄹ-が「蓋然性」が高いことや「現場性」があることも指摘している。

北朝鮮においては과학,백과사전출판사(1979:322-323)が、時間の文法的範疇を現在、過去、未来に3分したうえで、-ㄹ-を未来の「시간토」と捉えている。しかし未来が「様態的意味と密接に関連」していることも指摘しながら、単純な推測、意志・可能、話し手の直接目撃したことを生き生きと述べる、条件の羅列、発話の瞬間の認識状態、義務性などの多様な用法を提示している。

임흥빈 (1980/1998:265-266) は-ㄹ-が起源的に-거- + -이- + 있-に分解でき、-거-で「対象性」を提示し있다に「現在の事実の関連性」が内在しているという。「対象性」とは「話者の視点を前提とするもので、対象と話者の視点の間には視線の距離が横たわっている」と説明している。そして「推量」と「意図」は話者の立場に従って区分できるが、これらは「対象性」というひとつの原理のもとに統合できると主張する。

李南淳(1981:7-21)では韓国語の時制について、過去、現在、未来を設定するのは「認識的見地」によるもので文法範疇として設定できず、未来形という形式を認めない立場をとっている。そのうえで、-ㄹ-と-ㄷ ㄷ-を「事実性」と「非事実性」に対する「選択判断」を表す要素としつつ、その「判断」の範疇に「意志」と「推定」があると述べている。ふたつの違いについては、-ㄹ-は聞き手や第三者の判断が介入しない「排除的判断」であり、-ㄷ ㄷ-は聞き手や第三者の判断が介入する「包括的判断」と説明している。

김차균(1981:109-113)は-ㄹ-と-을-をひとつの形態素の変異体と見做し、基本の意味を「不確実」と呼んだ。そして「可能」と「推定」は「不確実」から2次的に生じる心理的現象であるという。そのうえでこのふたつの違いについて、-ㄹ-は話し手の状況判断とともに発話されるため発話の瞬間が問題視されるのに対して、-을-は状況判断の後に発話が行われると述べている。

安明哲(1983:21-29,83-85)では、文を断定文と推定文に分け、断定文は「話者が直接経験して認知する事件や事態」を記述するもので、推定文は「話者が直接経験して認知できない世界の事件や事態」を記述するものと見て、-ㄹ-は推定文に用いられうる叙法の形態素だと述べている。そのうえで推定文には「透明世界」と「不透明世界」があるが、「意図」

も「推定」も「不透明世界」のものという。また同じ推定文に用いられうる-ㄷ 것이다と比較して、-ㄷ-は発話現場の根拠を問題とした推定であり、-ㄷ 것이다は単に事件自体に関心があり、話し手は発話上の根拠に関心がない推定であると、その違いを述べている。

張京姫(1986:7,50-56)は-ㄷ-を「様態素」と称し、文脈によって「結果推量」、「推量」「意見」「可能性を含んだ内的状態発生」などの意味を認めた。そして-ㄷ-がそれらの意味を持つのは語源が-ㄷ- 생겼-であるからと説明している。また、-ㄷ-が持つ意味をもって説明できない慣用表現は「丁寧さ」を表すもので、この「丁寧さ」の用法は-ㄷ-が持つ意味のひとつである「意見」が起因しているのだろうと述べている。

日本においては梅田博之他(1982b:161-171)が、韓国語のモダリティについて述べる中で、モダリティの種類のうち、「意向」「推量」「感情表出」を表す表現形式のひとつとして-ㄷ-を取り上げている。これら3つについて、「意向」を「これから起こることに関する話者の意志を表す。疑問文では相手の意志を聞くことになる。(ㄷ)は接尾辞でありながらモダリティの意味的機能を多く担っている珍しい形態素である。」とし、「推量」を「一人称以外の主語の時、推量を表す。但し、状況判断の根拠が必要である。」とし、「感情表出」は-어 죽겠다の用例を挙げながら、「事がひどくてたまらないという強調表現」と説明している。

野間秀樹(1988:15-60)は、過去の研究動向や方法的特徴などを整理して諸研究を総括したうえで、-ㄷ-を含む文を命題における主体、結合する用言の品詞、過去形式との結合などに従って分類した。まず平叙形を「去就」「境遇」「評価」「帰結」を述べる文に下位分類し、過去形式は「過ぎ去ったことを思いやっ」述べる文とした。さらに疑問形は「判断を尋ねる文・反語」として別に分類し、-ㄷ-が実現する文を6つの場合に分けて分析した。その結果、-ㄷ-はテンス、アスペクト的性格の濃いムード形式と位置づけ、-ㄷ-を含む文は条件の違いはあっても一元的な統一性があるとし、それを「将然判断」と呼んだ。さらに한다を「已然確言」、할 것이다を「蓋然推量」と呼んで、これら3形式はムードにおいて対立したものと主張している。

他方、Samuel Martin(1992:613-615)では-ㄷ-の項目で未来時制(future)としたうえで、「確実な未来(definite future)」、「あり得る非未来(probable nonfuture)」、「その他の用法」と記している。「その他の用法」は-ㄷ-の項目で扱われており、ここでは、直接法の断定的未来としたうえで、いくつかの用法を取り上げている。まず、平叙文で1人称が主語、疑問文では2人称が主語で、will do/beの意味を持つ用法、次に、主語の制約がないものたいていは3人称でmustの意味を持つ用法、そして、알다、모르다に結合する用法、そして、-어 야(하)-と結合する用法、そして、처음 뵈겠습니다のような用法を「生き活きた、あるいは控えめな現在」と説明し、最後に、참 별 꼴 다 보겠다の用法を「生き活きた過去—予期していない出来事」の用法と説明している。

Lee and Ramsey(2000:178-179)では、先語末語尾-ㄷ-は未来時制を表す形態素として認識されてきたが、実際には現在、現在以前に存在していることや瞬時の出来事に対してもよく使われることを指摘し、-ㄷ-は「現在時制及び過去時制にも使われる」ことから「時制を表す形態素ではない」という立場をとっている。そのうえで、-ㄷ-は「単なる未来の

陳述」ではなく話し手の意図を表すし、また話者の意図が影響を及ぼすことがない意味の動詞が述語となる時は推測を表し、-ㄹ-は「話者の心理的態度、すなわち意志や推測を表示する先語末語尾」と結論付けている。そして韓国語には未来時制を表す「マーカー」がないと記している。

1990年以降の韓国における研究を見ると、한현중(1990:46-61)は-ㄹ-が「推測」「意志」「能力」「確認」「未来」の意味と密接に関連しているものの、その中心の意味を「推測法」と見ている。さらに-ㄹ-には時制性がないという立場をとりながら、残りの3つの意味を「推測法」で説明した。まず「意志」は「話者が能動的な状況として把握する自身の未来の行為に対する推測」、「能力」は「話者自身の現在の潜在能力を推測」するもの、最後に「確認法」は「既に認識した状況を対象に推測」するものというのである。

김용경(1994:90-99,120)では-ㄹ-によって実現される文脈の意味には「未来」「推定」「意図」「可能性」「能力」「期待」「予見(予言)」の7つがあるが、それらをひとつに括ることのできる基本の意味を「推定」と述べた。「推定」を-ㄹ-の基本の意味とするのは、話者が発話時現在、ある状態や事件を不透明な世界の中で認識してこれを推定して話す時-ㄹ-が用いられるためであるという。

전혜영(1995:133-145)は語用論の観点から-ㄹ-が表す「丁寧さ」の機能を論じた。-ㄹ-を用いて表す「推測」と「意図」に「発話態度の非確定(未確定)」という共通の意味を認め、それによって「丁寧さ」の意味が発生すると見ている。この「不確定」の意味は聞き手に対する命令、提案、要請、約束という「対聞き手の談話状況」において「非確定」の-ㄹ-が「丁寧さ」を獲得するという。これは-ㄹ-を「意図的に選択」して聞き手に対する命令や要請の発話随伴力を弱めたり断言を避けようとしたりする時に「丁寧さ」をもたらすと結論づけた。また、-ㄹ-が発話の現場で「話者の態度」を非確定的に表すのに対して、-ㄴ 것-は客観的な事態に対する不確実さを表すのに用いられると、その違いを述べている。

これまで見てきたように、1970年から1990年代にかけては-ㄹ-を共時的な観点から取り上げ、通時的な考察は周辺の見地から言及する程度の論考が多かった。そのような中で1990年代中盤から-ㄹ-の歴史的形成過程に関心を示す研究が見え始め、2000年代には盛んな論議が繰り広げられる。

이병기(1997/2000:11-30)は未来時制を認めただけで、事態の実現を指す「状況時制」とは別に認識の実現を指す「認識時制」を設定し、-ㄹ-は「意図」と「推定」の用法を持つが、基本的特徴は「認識時の後事性」と見ている。その生成過程については-ㄱ ㅎ- > -ㄱ ㅎ- > -ㄱ ㅎ- > -ㄹ-と認めている。また-ㄴ 것이との差は「現場性の有無」にあるとの指摘もしている。

임동훈(2001:117-146)は現代韓国語において-ㄹ-が「未来」「推測」「可能性」「意志」などの意味を持つのは、その起源が-ㄱ ㅎ-という構成から発達した「予定」の意味に基盤を置いているとした。-ㄱ ㅎ-構成の文法化は大きく形態変化と意味変化に分けて見ることができ、形態変化の起源は-ㄱ ㅎ- > -ㄱ ㅎ- > -ㄱ ㅎ- > -ㄹ-、あるいは-ㄱ ㅎ- > -ㄱ ㅎ- > -ㄱ ㅎ- > -ㄹ-の過程を経て発達したとし、意味変化は、第1段階と

して「予定」、第二段階として「意志」と「能力」「可能性」、第三段階として「未来」を経て「推測」へと発達したと見ている。文法化の段階においては、初期段階にあればあるほど制約が多く、後期段階に行くほど制約が少ないので、初期段階にある「意志」は人称や動詞の相的制約などが存在するが、後期段階の「推測」にはこのような制約が無くなったとしている。また、-ㄹ-の作用域(scope)にも言及し、作用区が動詞句の場合は動作主である主語の意志や能力を表し、作用域が命題の場合は「未来」や「推測」を表すと説明している。

고광모(2002:33-44)は-ㄹ-の発達過程を-게 하얏-/게 하얏시- > -게얏-/게얏시- > -ㄹ- > -ㄹ-としたうえで、-게얏- > -ㄹ-の縮約は미야미 > 매미、되야지 > 돼지等の縮約と同じであるとした。そして-게 하얏-が文法化する以前の起源的意味は「つもり(작정)」であったと解釈し、-게 하얏-が文法化されて叙述の機能を失うことにより「つもり」の意味から決定の主体が排除されて「予定」の意味を持つに至ったという。未来に関連する「予定」から「予測」「意志」が派生し、「予測」から再び「可能」「推測」が派生したと説明し、-ㄹ-の意味発達のキーワードは「未来性」であると述べている。しかし同時に-ㄹ-の機能を未来時制表示とすることは難しいとの指摘も加えられている。

박재연(2003:270)では、現代韓国語の-ㄹ-の意味を「推測」と「意図」に単純化して通時的観点から見ると、-ㄹ-は「予定」の主語指向的意味を持っていた-게 하얏-構成から形成され、様態の意味の方向を変えながら一方は「推測」という話・聴者指向的認識様態(epistemic modality)へ、もう一方は「意図」という話・聴者指向的行為様態へと発達したと見ることができると述べている。

이병기(2006)は再び-ㄹ-と-았-の結合について論じた。이병기(2006:188-204)では-ㄹ-았-の結合は承節可能という立場に立ち、-ㄹ-았-は各々の順序に従って階層的に意味を付け加え、「過去にある命題内容を推測していたこと」を表すと述べている。そして-았ㄹ-と-ㄹ-았-に見られる-ㄹ-はそれぞれの形態で異なった意味で使用されるとし、-았ㄹ-の-ㄹ-は現在の視点における推測を、-ㄹ-았-の-ㄹ-は過去の視点における推測を表すものと説明している。

나라바야시 아이(2007:194-221)は-게 하얏-を-ㄹ-の起源形と認めたとうえで、その意味変化を文法化の一方向性仮説の「主観化」で説明し、-게 하얏-から-ㄹ-への意味変化において「評価様態」の縮小と「認識様態」の拡大が起きたことを明らかにした。その後さらに奈良林愛(2012:27,54)では、現代語の-ㄹ-が「主観性の強い視点依存的な判断を述べる傾向が強い」のに対して、-게 하얏-は「視点に依存せず常に真偽の決まった推論を観念世界に思い描きながら事柄の帰結や可能性を判断して述べる」という性質があるということも明らかにした。

2.2. 先行研究のまとめと検討

辞書と韓国語学習者のための文法書の記述を見ると、-ㄹ-の「意味」として主に「未来」「推量」「意志」というような記述が多く見られる。「推量」「意志」に係わる表現は日本、韓国、北朝鮮に共通して現れるが、「未来」に関しては、特に韓国、北朝鮮で出版されたも

のにその傾向が強い。日本においては、あまり「未来」という表現を用いないでいることは、韓国語におけるテンスに関する立場の違いが現れているようである。研究者による論文の記述の流れを見ると、1970年代以降、未来時制説は払拭されたようにも見られるが、その流れが韓国語教育の現場に反映されていないようである。辞書と文法書は、韓国語学習者が教科書とともに身近に触れる道具であることを考えると、研究の成果をわかりやすい形で学習者のもとに伝えられることが重要であると考えられる。

論文の先行研究を見ると、形態素-ㄹ-はテンスの研究にも関連づけられながら、さまざまな視点から論じられてきた。これまでの研究において問題とされてきたことをここで整理しておきたい。

まず-ㄹ-が未来を表す形態素であるかどうかという議論である。このことはすなわち現代韓国語の時制が過去と非過去に2分されるのか過去、現在、未来に3分されるのかという議論でもある。まず1960年代までは「未来」を表す形態素として認識されて「未来形」と規定されることが多かった。周時経、최현배(1929/1955)、과학백과사전출판사(1979)がそうである。1970年代に入ると「未来」と認めない論考が出始めるが、이명기(1997/2000)ではあくまで時制を過去、現在、未来に分類しており、국립국어원(2005)でも未来時制を認めている。1970年代の頃には「意図」「推量」説が主流をなし、「未来」説は影を潜めるようになる。たしかに-ㄹ-は、発話時にまだ起こっていない事柄を述べる場合によく用いられるものの、発話時を基準にして過去、現在の事柄を述べる場合にも多く用いられる。また、過去を表す-았-と結合することから過去と対立をなすものとは言い難い。

その後나진석(1965)によって初めて「意志」説が加わり、「意志」と「推量」をめぐって盛んに論議が繰り広げられる。この論議は大きく2つの捉え方があり、「意志」と「推量」をひとつに括りうるという考えと個別のものとして捉えるべきという考えである。まず、「意志」と「推量」は一元化できるという考えであるが、これはさらに上位概念設定と「推量」に「意志」が含まれるという考え方に分かれる。前者では、나진석(1965)が「서상이적(叙想現在)」、南基心(1979)が「未確認法」、李南淳(1981)が「排除的判断」という上位概念のもとに「意志」と「推量」を下位分類した。後者では申昌淳(1972)は「推断」、李基用(1978/1985)は「強い推定」の中に「意志」が含まれると主張した。次に「意志」と「推量」が別の機能であるという考え方には、서정수(1978/1985)、김차균(1981)などがある。しかしこれらの議論に対して野間秀樹(1988)は、「意志」とは聞き手に働きかける「対聞き手モダリティ」であり「推量」とは命題を判断する「対事態モダリティ」であり、二つが異なった「平面」にあると主張し、「意志」か「推量」かという問いの立て方自体に疑問を投げかけている。

一方で、「未来」「意志」「推量」では説明できない様々な-ㄹ-の用法については例外や慣用表現として中心的な研究対象から除外された感もある。そのような中で과학백과사전출판사(1979)は-ㄹ-を「시간토」としながらも、時間的意味以外のさまざまな意味を持つので「言語実践」では意味特性を充分理解しなければ話の目的や内容、表現的効果に合わせるができないと、語用論的機能を示唆するような記述が見られる。安明哲(1983)は미치겠다, 죽겠다, 살겠다, 알겠다, 모르겠다の用例を挙げて、これらは発話の現場を

記述しているのであって、「推定」では説明しきれないことを指摘している。また張京姫(1986)や전혜영(1995)では「未来」「意図」「推量」では説明できない用例に「丁寧さ」の機能を認めて考察している。

これまでの研究の中では-ㄹ-の中心的意味機能を「推量」と認める立場が多くあるが、「推量」をめぐる議論は主に-ㄹ- 것との違いに焦点をあててなされた。李基用(1978/1985)と서정수(1978/1985)はそれぞれ確実性の強弱と推定の根拠という観点から、李基用(1978/1985)は-ㄹ-가「強い推定」、서정수(1978/1985)は-ㄹ- 것이「確実な推定」と真っ向から対立した見解を示した。他方、両者の見解に対して成著徹(1979/1986)は経験時間の差から-ㄹ-と-ㄹ- 것을比較して、-ㄹ-の「現場性」を初めて指摘した。その後李南淳(1981)も-ㄹ-と-ㄹ- 것은主観・客観性からの解釈でその違いを説明しきれないと述べたし、김차균(1981)にいたっては-ㄹ-と-을-を異形態とまで看做した。また安明哲(1983)、이병기(1997/2000)、野間秀樹(1990)では、判断の根拠や契機と「現場性」との関連から両者の比較がなされている。

-ㄹ-の「現場性」については、その他にも임홍빈(1980/1998)が「対象性」の観点から、安明哲(1983)が根拠の所在の観点から言及している。また野間秀樹(1988)でも「発話時に関心を留めつつ」述べると表現は異なるがその「現場性」を認めている。他に전혜영(1995)、이병기(1997/2000)、奈良林愛(2012)にも「現場性」を認める記述が見られる。

また、-ㄹ-の語源についてはいくつかの説がある。임홍빈(1980/1998)安明哲(1983)の-게 있-説、張京姫(1986)の-게 생겼-説、이병기(1997)、임동훈(2001)、고광모(2002)、박재연(2003)が主張する-게 켜-説などであるが、나라바야시 아이(2007)によると現在では-게 켜-を起源とするという学説が最も広く受け入れられているという。

-ㄹ-が多様な用法を持つことはどの論考でも共通して認められるところであり、それらは-ㄹ-の意味として、また-ㄹ-の文脈的意味として「未来」「意志」「推量」「可能」などを巡って議論されてきた。このように多義性を持った形態素であることを前提に、それらすべてに共通する意味を見出し一元化して捉えようとする研究もある。申昌淳(1972)は「推断」、임홍빈(1980/1998)は「対象性」、野間秀樹(1988)は「将然判断」한현중(1990)は「推測法」、김용경(1994)は「推定」をして-ㄹ-の基本的意味を認める一元説を称えている。しかし、一元的に括りうる基本的意味や概念を設定するならば、一元化された概念をして-ㄹ-を含むさまざまな文とそれとの繋がりを説明することができなければならない。ところがここに挙げた一元説を主張する論考では主張する概念と多様な文との関連性をすべて説明する道筋が示されているとは言いがたく、一元化には限界があると考えられる。

最後に-ㄹ-の文法範疇については、「時制」と捉えた周時経、최현배(1929)、이병기(1997)、과학백과사전출판사(1979)、「叙想」と捉えた나진석(1965)、「ムード」「法」と捉えた油谷幸利(1978)、南基心(1979)、安明哲(1983)、野間秀樹(1988)、そして「様態」と捉えた張京姫(1986)、李南淳(1981)などの諸説がある。

これまで-ㄹ-に関わる記述や議論を時代に沿ってまた議論のテーマ別に整理して諸説を概観してきた。まず先行研究に共通して言えることは、-ㄹ-を含んだ多様な用法を網羅

しきれていないことが指摘できる。用例分析の中心は叙述形に集中し疑問形の用例はあまり取り上げられていない。また用法を分類する文法的基準が細かくはつきりと示されているものも多くなく、研究者ごとの内省に頼って分類している場合が多いことを見ると、用例の取り上げ方や結合用言の品詞ごとの分析も不十分と言える。そのような中では野間秀樹(1988)は分類基準に用言の種類が取り入れられているものの疑問形の取り上げ方は叙述形と疑問形で均衡がとれていない。전혜영(1995)は語用論的観点からの考察であるため「丁寧さ」を表す修辭的用例を中心に詳しく分析されているが、-ㄹ-の語用論的機能が表す他の用法も一部「丁寧さ」に組み込まれてしまった感があり、その他の語用論的用法にまで踏み込んだ考察がなされていないようである。

次に言語資料に作例を用いた研究が多いことが挙げられる。これは韓国語母語話者の研究に見られる傾向であるが、作例では個人の思い浮かべうる数に限界があり、また恣意的かつ偏った例を用いる危険性がある。母語話者が作例を言語資料として自らの内省だけに頼って分析を行ったのでは、-ㄹ-が実現する多様かつ多彩な文を網羅して考察することに限界がある。そのような意味から申昌淳(1972)や野間秀樹(1988)では小説などから用例を引いて論じているので客観的な分析が行われたと言えよう。小説やその他の出版物から用例を収集すると作例に比べて多様で大量の資料を確保できるが、一方でそれは「書かれた話し言葉¹⁴」なので広い意味では母語話者の内省資料に近いとも言えよう。-ㄹ-が話し言葉によく用いられることを考えた時、文学作品や出版物から収集された資料に現れる用例だけでは-ㄹ-が文の意味にもたらす役割を詳細に考察するのは難しいと考えられる。現代韓国語において-ㄹ-がどのような用法を持ち、文の意味の実現にあつて果たす役割を観察するには「話された話し言葉」の存在を無視することはできないと考える。

用語についても指摘しておく必要がある。-ㄹ-を巡って「意志」と「推量」に対する言及が先行研究に多く見られたことは先にも述べたが、それぞれの用語は研究者ごとに異なっている。「意志」は「意図」「意向」などとも呼ばれ、「推量」は「推定」「推測」「짐작」「미룸」などとも呼ばれている。それぞれの論考における呼び方の違いが異なった認識を表しているものなのか、単に表現上の選択の違いに留まるのかを見極めることはできないので、本稿ではそれぞれを「意志」「推量」に代表させて述べることにする。

最後に、「-ㄹ-の意味」ということについて触れておく。古くから-ㄹ-を論ずる時に「未来」「意志」「推量」「可能」「予定」、甚だしくは「義務」などの表現が見られるが、これらは形態素-ㄹ-自体に含まれる意味なのだろうか。先行研究の中には「意味的機能」「文脈の意味」という表現も見られるが、文がその意味を実現する時の「文の意味」と文の意味が実現する時に形態素が果たす役割としての「機能」を混同させているのではないのかと

¹⁴ 「話し言葉」と「書き言葉」はそれぞれ下位分類されうる。さらに「話し言葉」は「書かれた話し言葉」と「話された話し言葉」に、「書き言葉」は「書かれた書き言葉」と「話された書き言葉」に分けることができよう。「書かれた話し言葉」には演説や講演での発話があり、「話された話し言葉」には自然発話を挙げるができる。一方「書かれた書き言葉」には新聞や雑誌また小説などの地の文を挙げることができ、「書かれた話し言葉」には小説の中の会話の部分やシナリオなどの台詞を挙げるができる。

いうことを指摘しておきたい。

第3章 -烈-の文法範疇

本章では、形態素-烈-の文法範疇について述べる。第2章の先行研究を概観した内容からもわかるとおり、-烈-の文法範疇についてはいくつかの説がある。本稿では-烈-がテンスとモードに係わる形態素であると考えているが、いずれの文法範疇で捉えるべきかを検討するため、テンスとテンポラリティ及びモードとモダリティに関するいくつか論考を取りあげながら本稿の立場について述べることにする。

3.1. テンスとテンポラリティについて

亀井孝他(1996:635)によると、テンスとは「時の表示」に関するものであるが、「言語的時間」は、「話し手の現在を起点とし、過去あるいは未来に向けられるもの」で対話の場面で規定されるものとしている。そして動詞のテンスを過去、現在、未来の時間の軸で捉えるのはわかりやすいが、いかなる言語もその3区分が形態として体系化されているわけではないと説明している。

남기심・고영근(1993:302-303)によると、テンスとは「発話時を中心に前後に時間を制限する文法範疇を指す。」と定義し、「発話時を基準として決定される文の時制を絶対的時制」といい、それは終結形で表示されるとしている。

서 정수(1996:221)は「時制(tense)とは、一定の時点を基準にして事態の時間的位置を表す文法範疇(grammatical category)」と定義し、文法範疇の「時制区分」と意味的な「時間区分」を異なったものとして、「時間区分は大概文脈的環境や時間副詞などで多様に実現され、それは時制的な区分とは必ずしも一致しない」ことを指摘している。テンスに関係する述語にテンポラリティがあるが、伊藤英人(1989:4)も、形態論的カテゴリとしてのテンスと、文のレベルでのテンポラリティとを区別して捉えるべきとしている。

Keith Brown, Jim Miller(2013:437-437)では「テンスは、状況を過去か現在か未来かを位置づける話者と関係し、「話し手は出来事や状態を時の中で位置づける」と説明している。発話時間は話者が話す瞬間が中心的であり、この瞬間に先行するのは過去、この瞬間を含むのが現在、この瞬間に後行するのが未来であるという。そのうえで、未来の状況は過去や現在の状況よりそれほど確かではないので、「未来について言及する時はしばしば意志や義務や予定と関係する句によって実現する」こと、また「法助動詞(modal verb)と本動詞(main verb)の組み合わせはしばしば未来の状況に位置づけられる」としている。

発話時を基準にして過去、現在、未来のことについて語る時、事柄は過去か現在か未来の領域にある。しかし、それを言語の形式で表そうとした時には、過去や現在は既存のこととして述べる事が出来るが、未来のことは、推測や願望や意向や予定などといったように、未来でのありようを述べる事だと考える。

本稿ではこれらの論考に倣い、韓国語のテンスの文法範疇には、少なくとも終結形においては、過去形と非過去形の対立があるのみで、未来を表す言語形式という意味での未来

形を認めない。そして用言の形態的なカテゴリとして表されるテンスと、文の意味論的なレベルで表されるテンポラリティを区別する立場にたつ。

3.2. ムードとモダリティ¹⁵について

亀井孝他(1996:1226)ではムードを「動詞の示す行動を中心とする事態に対する、話し手の心の態度を表現する文法範疇」と定義し、モダリティを「話し手の気持ちを言語形式に表したもの」としている。同時に、ムードは文法範疇で最も捉えにくく、言語によって表現方式が異なるので、普遍的に範疇化することの困難さも指摘している。

韓国におけるムードとモダリティの記述を見ると、남기심・고영근(1993:318)では、ムードについて、話し手の心理的態度が「一定の活用形態によって表示される時」とし、モダリティについては「意味論的側面」に係わるものと記している。申昌淳(1997)では、「西洋語を分析して導き出した法範疇の把握は、国語においては適用し難い」としつつ、「法とは心的態度が動詞の活用形態で表示されている場合にのみ言うことができ」、モダリティはムードも含めて、「より広く意味論的なものまで含む概念」と記している。

日本においては、野間秀樹(1988:11)もムードとモダリティの概念を厳格に区別する必要があると主張し、ムードはモダリティの一部をなすと捉えている。また第2章でも見たように、モダリティには「事態に対する話し手の態度」と「聞き手に対する話し手の態度」という異なった側面があると主張している。

また、日本語学ではモダリティについて、異なる立場の主張がある。

尾上圭介(2001:360)はモダリティ形式を「非現実の領域に位置する事態を語る時に用いられる専用の述定形式」とし、モダリティとは「モダリティ形式を用いて（つまり話者の「これは現実世界に存在することではない」という捉え方を事態の中に塗り込めて）語る時にその事態の一角に生ずる意味」と見ている。そしてこのモダリティ規定は「Lyons や Langacker らのモダリティ把握と軌を一にする」という。

一方、益岡隆志(2007:3)は、文は事態を表す領域と話し手の態度を表す領域からなり、前者を「命題」、後者を「モダリティ」と呼んでいる。そのうえでモダリティを「文論における意味的なカテゴリー」と位置づけ、ムードは「モダリティが述語の位置に現れる語類の形態に体系的に顕現したもの」としている。

Keith Brown, Jim Miller(2013:293-294,289-290)では、ムードは「文法的範疇にあり、動詞につく接辞のみならず文のタイプによっても区別され」、「現実や事実」と「非現実や非事実」の対立に対する話し手の状況判断に関係するという。

モダリティについては、その定義は論理学におけるものと同様であるものと同じではなく、言語学においてモダリティは、話し手の態度に関連するものであり、話し手の態度は文の種類や、法助動詞、直接法か仮定法かのムードの選択、そして談話小辞(discourse

¹⁵ ムード(mood)とモダリティ(modality)は日本語学および韓国語学で用いられるに際してさまざまな訳語があり、それぞれの用語の定義も一定ではない。本稿ではそれらの用語の不統一にこだわらず、ただムード、モダリティとしておく。

particles)によって実現されるという。そして、「現実と非現実」という用語は、しばしばこれらのモダリティに用いられるが、特定の言語によっては、モダリティを表す動詞の形態に適用されるとも説明している。また、「ムードとモダリティの文法的範疇を分けて見るところが有用である」とも述べている。

3.3. 本稿における-烈-の文法範疇に対する立場

ムードとモダリティを広い意味での「法性」としてひとつのものとする捉え方、両者を区別する捉え方がある。しかし、話し手の態度を言語に反映させる方法は用言の活用のみならず、助詞や副詞、名詞などの語彙的な要素をもって表すことも出来るし、さらには語調や抑揚、また語用論的な側面から言い表すことも出来る。そうすると、用言の形態論的な観点に限って述べようとするムードと文の意味論的な観点から述べるモダリティとは区別して捉える必要がある。そのうえで、ムードとモダリティの関係はテンスとテンポラリティの関係になぞらえることが出来ると言える。

話し手が事態を捉える方法は、過去であれ現在であれ未来であれ、話し手の心の中にある問題である。特に未来の事柄について述べようとする、話し手の心の態度であるムードと交錯せざるを得ない。時間の捉え方というのは話し手が事態をどのように認識するかによって異なるものである。過去のことや現在のことについて述べる時はそれを既存の事実として述べることは出来るが、未来のことは、時間軸上に現存するものではないので、まだ起こっていないことを言語の形式で表すことになる。それは、話し手が発話時以降に実現するであろう事柄を心に映し出しながら述べることなのである。亀井孝他(1996:1323)では「未来の事は、そっくりそのまま法の世界にとりこまれている」として「法としての未来」と捉えている。また Keith Brown, Jim Miller(2013:289)でも、未来時制を持たない特定の言語は、一般的に未来を単なる可能性として非現実の形式で表すことを述べている。

本稿ではこれらの論考に倣い、-烈-をムードとテンスの枠組みの中で捉えていく必要があると考えているが、その文法範疇は形態論的にはムードという範疇で論ぜられるべきという立場をとるものである。

第4章 -ㄷ-の出現環境

本章では、-ㄷ-と他の語尾との結合関係及び共起関係を見る。コーパスの検索システムを用いて計量作業を行い、その結果に加えてインフォーマントによる内省調査を行って先語末語尾-ㄷ-と後続の語尾との結合頻度を通して結合制約がある語尾、結合しやすい語尾、結合しにくい語尾にはそれぞれどのような語尾があるのか観察する。また、主節に-ㄷ-を含んだ複文では先行節にどのような連結語尾が来やすいのかという共起関係を調べて先行節との関係にも注目する。ここでの発話データを通じた調査を通して、文における先語末語尾-ㄷ-の出現環境を詳細に分析する。

4.1. 他の語尾との結合制約

ここでは、終結語尾、連結語尾、冠形詞形語尾、名詞形語尾の順にそれぞれの語尾の出現頻度と-ㄷ-との結合頻度を計数した結果を次の表に示す。

具体的方法は、『21세기 세종계획 균형말뭉치』『말뭉치 원시』の「純口語」にある12種のテキスト全50万文節を対象に検索プログラムソフト「글잡이」を用いて語尾の出現回数と-ㄷ-に結合した時の出現回数を計数¹⁶し、各語尾の出現回数を100%として、-ㄷ-と結合する場合の比率を示した。検索プログラム使用にあたっては基本的に「글잡이Ⅱ(직접)」を利用したが、連結語尾の「-ㄷ-と結合なし」の部分は「글잡이Ⅱ(색인)」を利用した。検索の結果、誤抽出と思われる用例などは筆者によって除外した。

[表5]¹⁷ -ㄷ-と終結語尾との結合頻度

	語尾	出現回数		-ㄷ-が結合する比率
		-ㄷ-が結合しない場合	-ㄷ-が結合する場合	
直説法	-ㅂ니다/-습니다	18,291	1,173	6.0%
	-나이다	3	1	25.0%
	-네 ¹⁸	155	24	13.4%
	-네요	530	77	12.7%
	-오/소, -우/-수	82	4	6.0%
	-ㄴ다/-는다, -다	1,277	143	10.1%
	-ㅂ니까/-습니까	1,553	138	8.2%

¹⁶ ここで計数対象とした語尾は表5から表8までに示した語尾にとどまり、コーパスの「純口語」のテキスト全50万文節中の3,402用例に出現する全ての語尾が計数対象になっているものではない。

¹⁷ 表5で用いた終結語尾の分類、種類、用語は菅野裕臣他(1991)を参考にし、表記も同著に従った。

¹⁸ 詠嘆形と思われるが、菅野裕臣他(1991)に倣って詠嘆形には入れなかった。

	-나이까	0	0	0%
	-나	47	6	11.3%
	-나요	106	0	0%
	-니까,-는가	55	12	17.9%
	-니까요,-는가요	9	0	0%
	-냐,느냐	457	30	6.2%
	-니	61	5	7.6%
	-너지,는지	44	0	0%
	-너지요,-는지요	22	4	15.4%
	-아/-어	* ¹⁹	9	
	-아요/-어요	5,290	230	4.2%
	-비디다/-습디다	25	0	0%
目撃法	-더라	16	0	0%
	-던가	3	0	0%
	-던가요	25	0	0%
	-던지	0	0	0%
	-던지요	2	0	0%
	-더냐	2	0	0%
推量法	-리라	5	0	0%
	-르까	163	0	0%
	-르까요	282	0	0%
	-랴	1	0	0%
	-르지	5	0	0%
	-르지요	*	0	
詠嘆形	-군,-는군	3	0	0%
	-군요,-는군요	251	7	2.7%
	-구나.,-는구나	61	7	10.3%
	-구만	12	1	7.7%
	-구만요	4	0	0%
	-구려,-는구려	0	0	0%
	-더군	0	0	0%
	-더군요	36	0	0%

¹⁹ *は検索プログラム「글잡이Ⅱ(직접)」を使用して計数できなかったことを表す。因みに「글잡이Ⅱ(색인)」を使用して用例抽出を試みたところ、-아/-어は1,234用例あり、-르지요は用例なしであった。表5の終結語尾のうち、この2つの語尾だけが異なった検索プログラムによる結果であるため、参考としてのみ脚注で計数結果を示すことにする。

婉曲形	-ㄴ 데, -는데	492	10	2.0%
	-ㄴ 데요, -는데요	819	33	3.9%
	-던 데	3	0	0%
	-던 데요	13	0	0%
	-ㄴ 걸, 는걸	1	0	0%
	-ㄴ 걸요, -는걸요	0	0	0%
	-던 걸	0	0	0%
	-던 걸요	0	0	0%
	-ㄴ 걸	1	0	0%
	-ㄴ 걸요	1	0	0%
確言形	-지	385	11	2.8%
	-지요	3,661	172	4.5%
確認形	-거든	34	0	0%
	-거든요	784	1	0.1%
意志法	-ㄴ 세	0	0	0%
	-마	1	0	0%
	-ㄴ 게	7	0	0%
	-ㄴ 게요	11	0	0%
	-ㄴ 래	9	0	0%
	-ㄴ 래요	14	0	0%

[表 6]²⁰ -ㄴ-と連結語尾との結合頻度

	語尾	意味的機能	出現回数		-ㄴ-が結合する比率
			-ㄴ-が結合しない場合	-ㄴ-が結合する場合	
対等連結	-고	説明・列挙	16,590	47	0.3%
	-(으)며	列挙	546	4	0.7%
	-거니와	反復・推想	3	0	0%
	-든지	選択	41	0	0%
	-(으)면서	兼行	1,461	0	0%
	-거나	選択	230	0	0%
	-느니(-으니)	不択	9	0	0%
従属連結	-(으)나	讓歩	502	2	0.4%
	-는데-(은데)	説明	3,532	46	1.3%

²⁰ 表6で用いた連結語尾の種類及び意味的機能の名称は梁昊淵(1982)を参考にし、表記も同著に従った。

- (으)니	說明	279	1	0.4%
- (으)면	假定	3,871	3	0.1%
-기에	原因	76	0	0%
-는지(-은지)	疑念	630	3	0.5%
- (으)므로	原因	12	0	0%
-아서/어서	說明・原因	6,317	0	0%
-거든	原因・假定	9	0	0%
-거늘	原因	0	0	0%
-건만	讓步	3	0	0%
-되	讓步	39	0	0%
- (으)니까	原因	1,740	1	0.1%
-아도/-어도	讓步	685	0	0%
-는지라(-을지라)	原因	0	0	0%
-걸랑	假定	0	0	0%
-자마자	連發	26	0	0%
-길래	原因	35	0	0%
-느라고	原因	29	0	0%
- (으)때	原因	0	0	0%
-더라도	讓步	129	0	0%
-르(을)지라도	讓步	0	0	0%
- (으)나마	讓步	3	0	0%
-거니와	讓步	3	0	0%
- (으)려니와	讓步	0	0	0%
- (으)런마는	讓步	0	0	0%
-ㄴ(은)들	讓步	0	0	0%
-르(을)지언정	讓步	2	0	0%
-르(을)망정	讓步	2	0	0%
- (으)려고	意向	196	0	0%
-고자	意向	63	0	0%
- (으)러	意向	121	0	0%
-다가	中斷	609	0	0%
-도록	到及	587	0	0%
-르(을)뿐더러	添加	0	0	0%
-르(을)수록	益甚	58	0	0%
-듯이	同一	103	0	0%
- (으)려니	推想	0	0	0%

	-ㄹ(을)지	疑念	124	0	0%
	-아야/-어야	必要	2,049	0	0%

[表 7]²¹ -ㄹ-と冠形詞形語尾との結合頻度

語尾	出現回数		-ㄹ-が結合する比率
	-ㄹ-が結合しない場合	-ㄹ-が結合する場合	
-ㄹ(을)	6,272	0	0%
-ㄹ(은)	3,692	0	0%
-는	13,158	3	0.02%
-던	1,521	0	0%

[表 8]²² -ㄹ-と名詞形語尾との結合頻度

語尾	出現回数		-ㄹ-が結合する比率
	-ㄹ-が結合しない場合	-ㄹ-が結合する場合	
-기	3,811	0	0%
-고(음)	112	1	0.9%

表 5 から表 8 までの計数結果はあくまでもコーパス 50 万文節内における結合頻度であり、結合比率が 0%といえども結合制約があるという結果にはならない。そこでさらに韓国語母語話者の内省による結合制約についての調査を行った。次の表は『21 세기 세종계 획 균형말뭉치』の「純口語」50 万文節を対象にした用例の出現有無、韓国語母語話者 4 人²³に対する内省調査の結果である。

表の中の「コーパス出現有無」の列には、表 5 から表 8 の結果を基に-ㄹ-と結合した用例が検索できた場合は○、出来なかった場合は×を付した。「インフォーマント」の列は、母語話者の内省で-ㄹ-との結合が文法的に正しいと思われる場合は○、文法的に間違っているとと思われる場合は×、曖昧な場合及び語彙によって一部可能な場合などは△を付してもらった。

²¹ 表 7 の冠形詞形語尾の選択は筆者による。

²² 表 8 の名詞形語尾の選択は筆者による。

²³ インフォーマントの情報

	性別	年齢	言語形成地	職業	日本滞在年数
ㄱ	男性	23歳	仁川	学生	6ヶ月
ㄴ	女性	25歳	ソウル	学生	9ヶ月
ㄷ	男性	46歳	ソウル	大学教員	2年6ヶ月
ㄹ	女性	45歳	ソウル	大学教員	10年

[表 9] -겠-と終結語尾との結合制約

	語尾	コーパス 出現有無	インフォーマント			
			ㄱ	ㄴ	ㄷ	ㄹ
直說法	-ㅁ니다/-습니다	○	○	○	○	○
	-나이다	○	○	○	○	○
	-네	○	○	○	○	○
	-네요	○	○	○	○	○
	-오/소, -우/-수	○	○	○	○	○
	-ㄴ다/-는다, -다	○	○	○	○	○
	-ㅁ니까/-습니까	○	○	○	○	○
	-나이까	×	○	×	○	△
	-나	○	○	○	○	○
	-나요	× ²⁴	○	○	○	○
	-ㄴ가,-는가	○	○	○	○	○
	-ㄴ가요,-는가요	×	×	×	○	○
	-냐,느냐	○	○	○	○	○
	-니	○	○	○	○	○
	-ㄴ지,는지	×	○	○	○	○
	-ㄴ지요,-는지요	○	○	×	○	○
	-아/-어	○	○	○	○	○
-아요/-어요	○	○	○	○	○	
-ㅁ디다/-습디다	×	×	×	○	○	
目撃法	-더라	×	○	○	○	○
	-던가	×	×	○	○	△ ²⁵
	-던가요	×	×	○	○	△
	-던지 ²⁶	×	×	×	×	△
	-던지요	×	×	×	×	△
-더냐	×	×	×	○	○	
推量法	-리라	×	×	×	×	×

²⁴ コーパスとインフォーマント 4 人全員の結果が異なるときは、太字で示す。

²⁵ △をつけた語尾について、他の用言なら不自然だが알다/모르다なら結合できる場合が多く、特に모르다がその傾向が強いということで、これは、모르겠다の語彙化が進んでいるのではないかとの指摘を受けた。

²⁶ コーパスとインフォーマント 4 人の結果がすべて×あるいは△の場合は、印に網をかける。

	-르까	×	○	×	×	×
	-르까요	×	○	×	×	×
	-라	×	×	×	×	×
	-르지	×	×	×	×	×
	-르지요	×	×	×	×	×
詠嘆形	-군, -는군	×	○	○	○	○
	-군요, -는군요	○	○	○	○	○
	-구나, -는구나	○	○	○	○	○
	-구만	○	○	○	○	○
	-구만요	×	○	○	○	○
	-구려, -는구려	×	○	○	○	○
	-더군	×	○	×	○	○
-더군요	×	○	×	○	○	
婉曲形	-는데, -는데	○	○	○	○	○
	-는데요, -는데요	○	○	○	○	○
	-던데	×	○	○	○	○
	-던데요	×	○	×	○	○
	-니걸, 는걸	×	○	○	○	○
	-니걸요, -는걸요	×	○	○	○	○
	-던걸	×	○	○	○	○
	-던걸요	×	○	○	○	○
	-르걸	×	×	×	×	×
	-르걸요	×	×	×	×	×
確言形	-지	○	○	○	○	○
	-지요	○	○	○	○	○
確認形	-거든	×	×	×	×	○
	-거든요	○	×	×	×	○
意志法	-고세	×	×	×	×	○
	-마	×	×	×	×	×
	-르게	×	×	×	×	×
	-르게요	×	×	×	×	×
	-르래	×	×	×	×	×
	-르래요	×	×	×	×	×

[表 10] -겠-と連結語尾との結合制約

	語尾	意味的 機能	コーパス 出現有無	インフォーマント			
				ㄱ	ㄴ	ㄷ	ㄹ

対等連結	-고	説明・列挙	○	○	○	○	○
	-(으)며	列挙	○	○	○	○	○
	-거니와	反復・推想	×	×	○	○	○
	-든지	選択	×	×	×	×	×
	-(으)면서	兼行	×	×	×	△	△
	-거나	選択	×	×	○	×	○
	-느니(-으니)	不択	×	○	○	×	×
従属連結	-(으)나	讓歩	○	○	○	○	○
	-는데(-은데)	説明	○	○	○	○	○
	-(으)니	説明	○	○	○	○	○
	-(으)면	假定	○	○	×	○	○
	-기에	原因	×	×	×	○	○
	-는지(-은지)	疑念	○	○	○	○	○
	-(으)므로	原因	×	×	○	○	○
	-아서/어서	説明・原因	×	×	×	×	○
	-거든	原因・假定	×	×	○	○	○
	-거늘	原因	×	×	×	×	○
	-건만	讓歩	×	○	○	○	○
	-되	讓歩	×	×	○	×	○
	-(으)니까	原因	○	○	○	△	○
	-아도/-어도	讓歩	×	○	○	○	○
	-는지라(-을지라)	原因	×	×	○	○	○
	-결랑	假定	×	○	○	△	○
	-자마자	連發	×	×	×	×	×
	-길래	原因	×	×	×	×	○
	-느라고	原因	×	○	×	×	×
	-(으)때	原因	×	×	×	×	○
	-더라도	讓歩	×	○	○	△	△
	-르(을)지라도	讓歩	×	×	○	△	○
	-(으)나마	讓歩	×	×	×	×	×
	-거니와	讓歩	×	○	○	○	○
	-(으)려니와	讓歩	×	×	×	×	△
	-(으)런마는	讓歩	×	×	×	×	×
	-느(은)들	讓歩	×	×	×	×	×
	-르(을)지언정	讓歩	×	×	×	×	△
	-르(을)망정	讓歩	×	×	×	×	△

- (으)려고	意向	×	×	×	×	×
-고자	意向	×	×	×	×	×
- (으)러	意向	×	×	×	×	×
-다가	中断	×	×	○	×	△
-도록	到及	×	×	×	×	×
- (으)뿐더러	添加	×	×	×	△	△
- (으)수록	益甚	×	×	×	×	△
-듯이	同一	×	×	×	△	○
- (으)려니	推想	×	×	×	×	×
- (으)지	疑念	×	×	×	×	×
-아야/-어야	必要	×	×	×	×	△

[表 11] -겠-と冠形詞形語尾との結合制約

語尾	コーパス 出現有無	インフォーマント			
		ㄱ	ㄴ	ㄷ	ㄹ
- (으)	×	×	×	×	×
- (은)	×	×	×	×	×
-는	○	×	×	×	△
-던	×	×	○	×	○

[表 12] -겠-と名詞形語尾との結合制約

語尾	コーパス 出現有無	インフォーマント			
		ㄱ	ㄴ	ㄷ	ㄹ
-기	×	×	×	×	×
- (으)	○	○	○	○	△

表 5 から表 8 までの計数結果と表 9 から表 12 までのインフォーマント調査結果を見ると、「コーパス出現有無」が×であっても「インフォーマント」で○が付されている場合は、当該語尾との結合用例が資料上に現れていないだけで実際の発話では可能であるということであり、結合制約は無いと言える。また、インフォーマントの中で結合制約の意見が分かれることから、文法的制約や非文の判断には個人差があるということが改めて確認できる。また、調査時には文脈の提示が無かったので、特定の語彙、特定の文脈が与えられれば○を付することができるということも認めなければならない。そこで本稿では「コーパス出現有無」と「インフォーマント」の列ですべてが×か△が付された語尾だけが結合制約があると見做すことにする。

では、表 9 から表 12 までの調査表を詳しく見よう。

まず後続語尾の種類から結合制約に注目すると、終結語尾、連結語尾、冠形詞形語尾、

名詞形語尾の4種類の語尾すべてに結合制約のある語尾が含まれていることがわかる。しかしその中でも冠形詞形語尾は、-ㄷ(을)、-ㄴ(은)に結合制約があり、-는はインフォーマントがほぼ結合制約ありとし、-던はコーパスと母語話者の間で結果が分かれ、冠形詞形語尾とは結合しにくいことがわかる。名詞形語尾は-기は結合制約があり、-ㄱ(을)は結合制約がないという結果ではほぼコーパスとインフォーマントの結果が一致している。冠形詞形語尾とは結合しにくいこと、名詞形語尾-기と結合制約があるということから、-ㄷ-は文末にも非文末にも出現しうるものの、非文末に現れた場合は体言を修飾することには関わりにくいということが言える。ただ、これは-ㄷ-が持つ特有の現象ではなく、話し手の判断が文末に比べて非文末には現れにくいという統語的性格によって、ムードを表す形態素が非文末に現れにくいという特徴が-ㄷ-にも見られた結果とも考えられる²⁷。

次に、それぞれの語尾の種類の中でどのように結合するのかを見る。

まず終結語尾では、直接法、詠嘆形、確言形ではほぼ結合制約が無いと見てよいであろう。確認形はコーパスとインフォーマントの結果が分かれるので結合制約なしとの判断は下せない。反対に、推量法はひとりの母語話者の意見を除くとすべての語尾に結合制約があるという結果であり、意志法も-ㄱ세に関するひとりのインフォーマントを除いて結合制約があるとの結果が得られた。結合制約の有無が分かれた目撃法は、-던지、-던지요だけが結合制約有り、婉曲形は、-ㄷ걸、-ㄷ걸요だけが結合制約ありという結果を得た。

連結語尾でコーパスとインフォーマントの結果がほぼ一致して結合制約ありという語尾は、対等連結の-든지、-(으)면서、従属連結の-자마자、-(으)나마、-(으)려니와、-(으)런마는、-ㄴ(은)들、-ㄷ(을)지연정、-ㄷ(을)망정、-(으)려고、-고자、-(으)러、-도록、-ㄷ(을)뿐더러、-ㄷ(을)수록、-(으)려니、-ㄷ(을)지、-아야/-어야であった。意味的機能に注目すると、「選択」、「兼行」、「連発」、「譲歩」、「意向」、「到及」、「添加」、「益甚」、「推想」、「疑念」、「必要」を表す語尾とは結合しないという結果であった。

冠形詞形語尾と名詞形語尾は先に述べたとおり、冠形詞形語尾-ㄷ(을)、-ㄴ(은)と、名詞形語尾-기에結合制約があった。

また、語尾の種類を問わずに形態的側面と意味的側面から結合制約を見よう。

まず形態的側面から見ると、-ㄷ-は-ㄷ-から始まる語尾との結合が困難ということがわかる。推量法は結合制約があるという結果を先に述べたが、推量法6種の語尾-리라、-ㄷ까、-ㄷ까요、-라、-ㄷ지、-ㄷ지요は全て-ㄷ-から始まっており、婉曲形は10種の語尾を調査対象にあげた中で、-ㄷ걸、-ㄷ걸요のように-ㄷ-ではじまる語尾だけが結合制約があるという結果であった。

意味的側面から見ると、推量法に見られる「推量」、意志法に見られる「意志」と意志法の語尾-야に見られる「約束」、「意志」「約束」に関連する「未来」、連結語尾の意味的機能から見られる「選択」「兼行」「連発」「譲歩」「意向」「到及」「添加」「益甚」「推想」「疑念」「必要」に係わる語尾と結合制約があると見做される。このことから、-ㄷ-がそれらの意味と全く無関係の形態素か、あるいは意味的に近い関わりのある形態素かというこが

²⁷ 박진호(2011:200)「冠形節では話者の判断が明示的な装置を通して現れにくい」参照。

考えられるが、先行研究を省みると、後者の可能性が高いことを示唆してくれるものとも考えられる。

以上、-겠-と他の語尾と結合頻度を計数し、その結果を基にインフォーマントの内省調査を行って-겠-と他の語尾との結合制約を見た。その結果、本稿の調査結果と先行研究で指摘されたことが異なる点があったので次に示しておく。

まず、菅野裕臣他(1991)では確認形-거든요に結合しないとの記述があったが、この調査では結合する用例が抽出された。次の例である。

- (1) 이것들이 오기 쉬운 것 일반적으로 봄을 탄다하는 증상이기 때문에 요 증상을 없애야 되겠거든요.(BK950014)

これら（体調不良の症状）が来やすいことは一般的に春に体調不良になる症状なので、この症状をなくさなければならぬんですよ。

次に、김용경(1994)では冠形詞形語尾-는との結合制約があるとの記述があったが、この調査では結合する用例が抽出された。冠形詞形語尾-는と結合したのは3例であったが、ここでは1例のみを示す。ちなみに、後続するのはすべて依存名詞-거-あるいは-듯-であった。

- (2) 뭐냐하면은 딸한테 엄지라는 이름을 붙이고 난 뒤에는 엄지라는 어떤 그 극중 인물한테 나쁜 역할을 못 주겠는 거예요.(BK950006)

何かと言うと、娘にオムジという名前を付けた後では、オムジというある劇中の人物に悪い役割を与えられないんですよ。

また、語尾との結合制約ではなく、副詞との共起制約についても先行研究の指摘に反する用例が抽出されたので、加えて提示しておく。李基用(1978/1985)で、-겠-は副詞아마と共起しないことが指摘されているが、この調査では共起する用例が아마 3例、아마도 1例が見られた。ここでは1例ずつ示しておく。

- (3) 에 앞으로 아마 우리가 이런 것을 많이 배우게 되겠는데.(CM000200)

えー、今後おそらく、我々がこのようなことをたくさん学ぶことになるのだろうが。

- (4) 손숙 언니 파트너 씨 아마도 맑은 물 맑은 공기를 지키기 위해서는 누구보다도 나 자신과 가정 주부인 저희들이 노력해야 되겠죠.(CL000188)

ソンスクさんのパートナーさん、たぶん、澄んだ水と空気を守るためには、誰よりも自分自身と専業主婦である私たちが努力しなければならないでしょうね。

4.2. 先行節との関係

ここでは、主節の述語に-겠-を含んだ複文²⁸における先行節の連結語尾との共起関係を見る。

先行節の連結語尾の種類とその出現頻度を見ることで、統語論的な観点から-겠-が用いられる文の特徴を見出す手がかりを探るものである。

具体的な方法は、『21세기 세종계획 균형말뭉치』の「純口語」コーパスのテキストから新たに構築した18万文節を対象に検索システム「글잡이Ⅱ(직잡)」を利用して-겠-が用いられた終結形を抽出したところ818用例あり、そこから主節に-겠-が用いられている複文と見做した用例を手作業で抽出すると289例あった。先行節の連結語尾の種類とその比率を以下の表に示す。

[表 13] -겠-を含む複文の先行節の連結語尾の共起頻度

先行節の連結語尾	頻度	比率	備考
-(으)면	135	46.7%	
-고	44	15.2%	-고요 1、-구요 1を含む
-아서/-어서	26	9.0%	
-(은)는데	24	8.3%	-는데요を1を含む
-(으)니까	16	5.5%	
-때문에	7	2.4%	
-(으)면서	6	2.1%	
-지만	5	1.7%	
-만	3	1.0%	-마는 2、-습니다만 2を含む
-더라도	3	1.0%	
-가지고	3	1.0%	
-고서	2	0.7%	
-아도/-어도	2	0.7%	
-라도	2	0.7%	
-위해	2	0.7%	-위해서 1を含む
-거니	1	0.3%	
-고나서	1	0.3%	
-느라고	1	0.3%	
-(으)니	1	0.3%	

²⁸ 複文の中には複雑な構造の文もあり、-겠-が用いられている主節の従属節と看做されるかどうか迷う先行節もあったが、あくまで筆者の判断による計数である。また、「純口語」テキストから収集した用例は実際の発話を転写しているので、接続語尾として挙げた語尾の中には厳密に接続語尾に含まれるかどうかということは問わなかった。

-는지(-은지)	1	0.3%	
-다가	1	0.3%	
-는데도(-은데도)	1	0.3%	
-르(을)텐데	1	0.3%	
-도록	1	0.3%	
合計	289	100%	

表 13 を見ると、主節に-ㄷ-が用いられた複文総数 289 例のうち-(으)면と共起した文が 135 例で 46.7%の比率を占め、高頻度を示している。この頻度の高さは願望を表す文法的連語「있으면 ~ ㄷ다」の用例を含んでいることにも起因するが、先行節で一定の条件を提示する時、後続節に-ㄷ-が現れやすいことがわかる。言い換えれば、-(으)면との共起性の高さが「있으면 ~ ㄷ다」という表現で固定性を強めて慣用句になったと考えられる。

4.3. まとめ

本章では、コーパスの検索システムを用いて-ㄷ-の出現頻度を計数し、加えてインフォーマントの内省調査を通して、後続の語尾との結合制約及び統語論的観点から連結語尾との共起関係を調べた。その結果明らかになったことを以下に示す。

- 1) -ㄷ-と後続語尾との結合制約を見ると、終結語尾、連結語尾、冠形詞形語尾、名詞形語尾の 4 種類すべての語尾の中に、-ㄷ-と結合制約がある語尾が含まれている。
- 2) -ㄷ-と結合制約がある語尾の種類に注目すると、冠形詞形語尾-르(을)、-ㄴ(은)、名詞形語尾-기と結合制約があり、冠形詞形語尾-는、-던とも結合しにくいことが明らかになった。これは形態素-ㄷ-が体言を修飾することに関わりにくいことを示唆してくれる。
- 3) -ㄷ-と後続語尾との関係を形態的特徴から見ると、-ㄷ-で始まる語尾とは結合制約がある。
- 4) -ㄷ-と後続語尾との関係を意味的及び意味機能的側面から見ると、「推量」「意志」「約束」「未来」「選択」「兼行」「連発」「譲歩」「意向」「到及」「添加」「益甚」「推想」「疑念」「必要」に関わる語尾と結合制約があった。このことは、-ㄷ-自身がそれらの意味と係わりのある形態素でありうることを示唆してくれる。
- 5) コーパスの検索システムを利用して大量の資料から用例を抽出した結果、先行研究で指摘された結合制約や非共起性の反証となる用例が見られた。確認形-거든요、冠形詞形語尾-는との結合制約、副詞아마との非共起性が言われていたが、本稿の調査によって実際の発話では用いられていることが確認された。
- 6) 主節の述語に-ㄷ-を含む複文における先行節との関係を見ると、先行節に連結語尾-(으)면がくる頻度が極めて高い。これは複文において一定の条件を示した先行節と-ㄷ-との共起性が高いことを意味する。

以上のことから、現代韓国語の先語末語尾-ㄷ-の後続語尾との結合制約と、条件を表す先行節との共起性の高さが明らかになった。従来の研究では言語資料を母語話者の直観や文学作品などに頼っていたため、結合制約や共起性の高さなどを数字で提示することは難しかったが、本稿では大量の発話データを用いて計数作業を行い、形態素-ㄷ-の実際の発話における結合制約や共起性などを、形態的側面及び意味機能的側面から明らかにすることができ、さらには先行研究における結合制約に対する反証の根拠ともなった。

第5章 叙述形の文

本章では、-ㄷ-を用いた叙述形式の文を対象に、用例を分類して用法ごとの文の意味を分析し、文の意味の実現における形態素-ㄷ-の関与のありかたを通してその機能と特徴について考察する。

5.1. 用例の分類方法

コーパスから抽出された用例は、文法的要件、形態的統語的観点から詳細な基準を決めて分類する。具体的に分類基準としたのは述部の主体、結合用言の種類、他の語尾との結合制約、テンポラリティである。主体は話し手か否か、結合用言は動詞、形容詞、存在詞、指定詞の4分類、共起関係を見る他の語尾は先語末語尾-았-と-더-, 終結語尾-지の3種、文レベルでの時間性は現在か過去か未来かという観点からテンポラリティを基準に加える。

文の種類を分類するにあたり、文の意味的観点から恣意的な分類を行うのを避けるべく、一定の基準のもとに可能な限り客観的分類方法を提示することにする。

5.2. 研究対象と資料

研究対象は、過去と非過去形式を含む終結形を持った-ㄷ-が用いられた叙述形の諸形式とする。

言語資料は『21세기 세종계획 균형말뭉치』の「純口語」を用いる。122種類の各テキストから冒頭約1,500文節を取り出して18万文節余りのコーパスを構成し、検索プログラム「글잡이 II (직접)」を利用して叙述形の用例を抽出したところ、690例が得られた。それらの用例を基にインフォーマント調査²⁹を行いながら文の意味と形態素-ㄷ-の機能を分析する。

5.3. -ㄷ-を用いた文の種類

5.1.で示した基準で分類すると、-ㄷ-を含む叙述形の文は4つの種類に分けられる。これらは用法においても差があり、それぞれ意志を述べる用法、予告する用法、命題に対して確実性を認識して述べる用法、主体が発話時に置かれている状態について述べる用法に分けられるが、便宜上それぞれの用法の文をI型、II型、III型、IV型と称する。これら4種類の文を形態統語的な制約可否で提示すると次のようになる。横軸の要素が縦軸に示した文に出現可である時は○、出現不可である時は×を付した。

[表 14] -ㄷ-を用いた叙述形の文の形態統語的制約の可否

²⁹ インフォーマントの情報は資料として末尾に示す。

	主体が話し手	結合用言				았/었의共起	더의共起	지의共起	テンポラリティ
		動詞	存在詞	形容詞	指定詞				
I型	○	○	○	×	×	×	×	×	未来
II型	×	○	○	×	×	×	×	×	未来
III型	○	○	○	○	○	○	○	○	未来/現在/過去
IV型	○	○	×	×	×	×	×	×	現在

表 14に見られるように叙述形の-ㄹ-を含む文は 4つに分類される。これより、それぞれの型の文ごとに用例を提示しながら分析していくことにする。

5.3.1. I型の文

I型の文は、話し手が自らの動作や「心の態度」を発話時以降に実現させることを述べる文である³⁰。主体は話し手で、意志動詞³¹あるいは存在詞に結合し、他の語尾との共起制約があり、テンポラリティは未来を表す。用例を見ることにしよう。

- (5) 세계화를 위해 국력의 결집에 노력하겠습니다.(BJ950032)

世界化のため国力の結集に努力いたします。

- (6) 내일 다시 오겠습니다.(CK000150)

明日もう一度まいります。

- (7) 대통령의 취임초 “앞으로는 돈을 절대로 안 받겠다.” 이렇게 말하지 않았습니까?(BK9X0030)

大統領就任当初、「今後は絶対金銭を受け取らない。」このようにおっしゃいましたか。

- (8) 누가 여기서 영철을 기다려야 된다면 내가 여기 있겠어요.(作例)

誰かがここでヨン Cholを待たなければならぬなら、私がここにいます。

(5)から(8)までの例はすべて発話時より後の事柄について述べられており、発話の時点で事態は実現していない。(5)の時間語がない用例も(6)のように時間語を伴って未来のある時点を示す用例も、また(7)の否定形の場合も話し手が事態を実現させようとしているのは発話時以降であることがわかる。(8)のように存在詞に結合して-ㄹ-が話し手の意志を述べる文の意味に關与する例もある。

次に、文法的連語に結合した用例を見る。

- (9) 밤으로 미트볼을 만들어 보겠습니다.(BK940027)

粟でミートボールを作ってみます。

³⁰ 従来の研究で「意志」といわれてきたものであるが、本稿では文レベルの意味として用いている。

³¹ 「命令法と勧誘法を取り得る動詞を意志動詞と呼び、」菅野裕臣他(1991:1040)参照。

(10) 저는요 그 집안을 화사하게 봄 빛깔로 장식할 수 있는 방법을 소개해 드리겠습니다.(BK950026)

私は、そのお宅を華やかな春色に飾る方法をご紹介します。

(9)は試図を表す-아/어/여 보다(-아/어/여は今後-어で代表させる)、(10)は謙讓の授受を表す-어 드리다に結合してムードの重複が見られる。(9)の「ミートボールを作る」動作も、(10)の「方法を紹介する」動作も、発話時以降に行うと述べている。I型の文ではこの他に、到達・志向を表す-도록 하다、決定を表す-기로 하다、試図を表す-어 보다、願望を表す-기 빌다、-기 바라다、-기 기대하다に結合した用例がある。

また、次のような例は次に見るII型に近い文と言える。

(11) 자 문제 내겠습니다.(CL000189)

さあ、問題です。(問題をさしあげます。)

(11)は、クイズ番組の司会者が問題を読み上げる直前の発話である。単に話し手の意志を述べることにとどまらず、聞き手(ここでは視聴者も含まれる)に対して発話直後に行おうとする内容を知らせようとしており、主体は話し手であるものの予告に近い例と言える。

I型の文は、話し手が自らの動作や行為を発話時以降に実行すると伝える、意志を述べる用法である。発話の状況によって約束や決意を表すこともあるし、不特定多数の聞き手に告知する時に합체とともに用いられると丁寧なニュアンスを帯びる。

I型の文には終結語尾-지と共起した用例は1例も見られなかった³²。終結語尾-지는意志を述べる用法を持つが、-겠-を介することで意志の意味が封じ込められるようである。

5.3.2. II型の文

II型の文は、話し手が発話時以降に予定されている事柄を、確実に起こることとして聞き手に通知する予告の文である³³。基本的に主体は聞き手で、動詞あるいは存在詞に結合し、テンポラリティは未来である。用例を見ることにしよう。

(12) 직접 건축한 건물을 취재하고 온 정창원 기자 나와서 소개하겠습니다.

(CK000163)

直接、建築した建物取材してき쑤쑤·쑤쑤쑤쑤記者が紹介いたします。

(13) 이제 한국성서신학원 원장이신 김근수 교수님의 공관복음 해석원리란 제목의

³² このことは、朝鮮語学研究会編(1987:237)の「-겠지」は意志は表さず、原則的に蓋然性の意味しかない。、申昌淳(1972:147)の「-겠지(요)」は「意図」の意味を表せない」という記述と一致する。

³³ 大阪外国語大学朝鮮語研究室編(1986)で「相手の行動についての予告」を表す用例が記述されている。

강의를 들으시겠습니다.(BL950009)

それでは、韓国聖書神学院の院長でいらっしゃるキムクンス教授の共観福音の解釈という題の講義をお聞きいただきます。

(14) 저희가 준비한 화면 함께 보시겠습니다.(CK000158)

私どもが準備した画面を、一緒にご覧いただきます。

(15) 주식회사 애리조 화장품에서 메이크업 수강증을 드리겠습니다.(CK000147)

株式会社エリーゾ化粧品から、メイキャップ受講証を差し上げます。

(16) 네 그림 본격적인 질문에 앞서서요, 먼저 김대중 대통령의 인사 말씀이 있으
시겠습니다.(CK000138)

では本格的な質問に先立ち、まずキム・デジュン大統領のご挨拶がございます。

ここに挙げた例はすべて発話時以降に実現される事柄を聞き手に告げており、発話時に事態は成立していない。

(12)の主体は「정창원 기자」で特定の第三者と言える。特定の第三者というのは、聞き手に対して話し手側のグループに属している者か、あるいは話し手によってその意思決定が可能な第三者である。(13)の主体は聞き手で、-시-と共起していることから主体に話し手が含まれないことがわかる。(14)も-시-と共起しているが、副詞함께が共起していることから主体に話し手が含まれる場合もある。この「함께 ~ 시겠습니다。」という表現は固定した一種の放送用語とも言える。(15)は助詞-에서で主体が「주식회사 애리조 화장품」という会社であることを示している。そして(16)は存在詞に結合した例で、主体は말씀である。述語に-시-を共起させており、行事や講演会などの公式的な場面で不特定多数の聞き手に対して次に行われる内容を告げる時に用いられる慣用的表現である。

次に、文法的連語に結合した用例を見る。

(17) 네,그러면 윤동렬 기자가 오늘 경기 내용을 자세하게 분석해 드리겠습니다.
(CK000175)

ではユン・ドンニョル記者が今日の試合内容を詳しく分析いたします。

(18) 직접 들어보시겠습니다.(BJ950029)

直接お聞きいただきます。(お聞きになってみられます。)

(17)は謙讓の授受を表す-어 드리다、(18)は試図を表す-어 보다と結合してムードの重複が見られる例であり、これらも発話時に事態は成立していない。他に、到達・志向を表す-도록 하다と結合した用例がある。

Ⅱ型の文は、放送や式典、会議、講演会などの特定の場面でしばしば耳にする。司会者が番組や講演を進行させるにあたり、次の内容を視聴者に知らせたり、予定されている順序を説明したりする時に用いられる表現である。합彙体に結合した例が多いこと、形式的に定まった言い回しが多いという特徴も観察され、あらたまったニュアンスを帯びる。Ⅱ

型の文には否定形及び疑問形、また先行節で一定の条件を示す連結語尾-(으)면と共起する用例は見られなかった。

5.3.3. III型の文

III型の文は、話し手が命題に対して確実性を認識して述べる文である³⁴。主体、用言の種類、他の語尾との共起、テンポラリティなど、文法要素の制約なしに文が成立する。ここでは非過去形式、過去形式の順に結合する用言ごとに用例を見ることにしよう。

5.3.3.1. 非過去形式の用例

非過去形式の用例を見ることにしよう。まずは肯定の用例である。

(19) 아 그러면 그 어버이날 내일은 비가 오겠습니다.(CL000193)

それでは、‘オボイナル’の明日は、雨が降るでしょう。

(20) 근데, 물론 우리들 중엔 그게 아니라구 생각하는 사람 많겠죠.(CM000197)

しかし、もちろん我々の中にはそうじゃないと思っている人が多いでしょう。

(21) 동기들보다는 나이가 좀 더 있겠는데요.(BK950015)

同期のひとたちより、少し年をとっている感じですね。

(22) 근데 그게 잘 산다는 게 비가 오면은 위로의 말이겠죠.(CL000193)

ところがそれは、(雨の日の花嫁は)幸せになるっていうのは、雨が降ったことを慰めて言ってるんでしょう。

ここに挙げた例はすべて、話し手が事柄を断定しないまでも確実性があると認識して述べている。(19)は動詞に結合した例で、「내일」という時間語と共起して発話時以降のある一定の時を指し示しながら、事態が成立すると確信して述べている。(20)は形容詞に結合した例であるが、一定の時を指し示していないことから、それが現在の事柄なのか未来の事柄なのかは不明瞭である。(21)は存在詞に、(22)は指定詞に結合した例であるが、いずれも話し手が事態に確実性を認識した文である。

続いて否定形の用例を見よう。

(23) 지금 그런 생각이 안 드시겠네요.(BK950014)

今、そういうお気持ちにはならないでしょうね。

(24) 이런 거 저런 거 다 생각하면, 오늘도 우리 일상탈출 못하겠네요.(BK940019)

あれこれ考えていたら、今日も日常からの脱出はできないでしょうね。

(23)は안を用いた否定で、(24)は못を用いた否定である。いずれも「気持ちにならない」「脱出できない」という事態に確実性を認識した発話である。못を用いた否定は、살다의

³⁴ 김차균(1981)における「不確実」と立場を同じくするものではない。

ように語彙的にアスペクト的性格を有する動詞に結合すると次に示すIV型の文に分類される。詳しくは 5.3.4 で用例を提示する。

5.3.3.2. 過去形式の用例

過去形式の用例であるが、ここでは肯定と否定を合わせて見ることにする。

- (25) 집에서 어머니가 굉장히 걱정하셨어요.(BK950015)
お宅でもお母さんがご心配なさったことでしょう。
- (26) 요즘에 입시철 뭐 바쁘셨습니까.(BK950007)
最近は入試の季節で、お忙しかったことでしょう。
- (27) 그 어차피 연기자의 길로 가서야 할 운명이었고 친구분들은 그럼 그 당시에도 지금 그, 이 얘기를 모르는 분들두 많이 계셨겠네요.(BK950024)
いずれにしても俳優の道に進まなければならなかったのだし、その当時も友人たちは、今の(話してくださった)お話を知らない方もたくさんいらしたんでしょう。
- (28) 아, 근데 악극단 생활을 시작하실 때에, 아마 그럼 반대가 보통이 아니셨겠네요.(BK950001)
それでは、楽劇団に入られる時には、きっと並の反対ではなかったのでしょうかね。

ここに挙げた例はいずれも、過去に起こったであろう事態について述べている。話し手は事態の成立を事実として把握できていないが、きっとそうだっただろうと高い確実性を認識している発話である。(25)は動詞、(26)は形容詞、(27)は存在詞、(28)は指定詞に結合しており、過去形式でも用言の制約がないことがわかる。

5.3.3.3. -더-と共起した用例

過去形式とは別に、-더-と共起した場合の用例を見ることにする。

- (29) 텔레비전에서 뭐 모두들 선거 연설하는 것 잠깐 썩 들어보면은 모든 분들이 나라를 위해서 그야말로 분골쇄신 하시겠더라고요.(CL000190)
テレビで(候補者が)選挙演説しているのを少しずつ聞いてみたら、皆さん国のために、それこそ粉骨砕身してくれそうでしたよ。

(29)は過去に候補者の演説を聞いて、彼らがきっと身を粉にして働いてくれるだろうと認識した時のことを、今、語っているのである。過去のある時点で、主体である話し手が事態をどのように認識したかを述べる用法である。-더-と共起した用例は 7 例あったが、すべて語尾が-라고(요)に結合していたことが特徴的である。

5.3.3.4. 文法的連語に結合した用例

ここでは、文法的連語と-겠-が結合した用例を見ることにする。

(30) 네, 외국 기업들의 국내 투자를 위해서 실질적인 대책이 마련되어야 하겠습니
다. (CK000156)

そのとおり、外国企業が国内投資をするために、実質的な対策が執られなければなりません。

(31) 차라리 눈이 왔음 좋겠어요.(BK940027)

むしろ雪が降ったほうがいいです。

(32) 이제 그 돈을 불우한 보훈가족을 돕는 데 쓰면 되겠네요.(BK9X0030)

これからはそのお金を、困っている報勲家族を助けるのに使えばいいですね。

(33) 근데 지금 바꾸셔두 되겠어요.(BK950018)

でも、今換えても大丈夫です。

ここに挙げた用例はすべて文法的連語が表すムード形式に-겠-が結合している。(30)は当為・義務、(31)は願望、(32)は放任、(33)は許可を表しているが、それらを-겠-のムードが包み込むように覆うことで文法的連語の表す意味や役割が希薄化しているようである。文法的連語との結合は他に、転成を表す-게 되다、可能性・不可能性を表す-을 수 있다, 없다、授受を表す-어 주다、願望を表す-는게 좋다、-(으)면 좋겠다、-있으면 감사하겠다、-있으면 고맙겠다、当為・義務を表す-어야 되다、-어야겠다、禁止を表す-어서는 안 되다などの用例が見られた。承接する用言が動詞の場合は本動詞の語彙のもつ意味と繋がっていくが、存在詞あるいは形容詞の場合は、文法的連語が表す意味が前面に出てくるようである。

Ⅲ型の文は、話し手がなんらかの情報や根拠に基づいて、事態が成立するであろう、または真であろうということが確実であると述べる用法である。また、話し手が事態に確実性を認めつつも事実として断定しえず、判断根拠を通して述べることで間接的、あるいは曖昧な述べ方になる場合もある。

5.3.4. IV型の文

IV型の文は、主体が発話時にどのような状態におかれているかを述べる文である³⁵。結合用言は動詞という制約があり、事態が発話の直前から発話時の瞬間を含んで発話直後まで持続して成立している。また特定の動詞と結合頻度が高く、慣用的な表現が多い。

(34) A : 사진은 어떤 걸로요?

写真はどんなものを使いましょうか。

³⁵ IV型の文は、野間秀樹(1988)の「境遇を述べる文」の分類と重なる部分があるが、用言や主体の制約などの面で必ずしも一致しない。特に「처음 뵈겠습니다」「모르겠어」などの表現が、「事態を将来的に述べ」ているという説明には無理であろうし、-겠-の「意味」を同次元で一元的に捉えるということと本稿は立場を同じくしない。

B: 그냥 얼굴 크게 잘 나온 거면 되요.

顔が大ききはっきりと写ってればいいですよ。

A: 네, 알겠습니다.(BK950026)

かしこまりました。(わかりました)

(35) 잘 모르겠어요.(CK000155)

よくわかりません。

(36) 참 뵙겠습니다.(CL000189)

はじめてお目にかかります。

(37) 별소리 다 들겠다.(油谷幸利他(1993)より)

とんでもないことを言うんだね。(とんでもないことを聞くものだ。)

(38) 맨날 궂은 일이 제가 도맡아서 다 하고 결정적으로 뭐 먹을 때는 나가 있으라고 그러고 참, 저 정말 이렇게 못살겠습니다.(CK000145)

いつも人の嫌がる仕事はすべてわたしが引き受けてやって、いざ何かを食べる時には出ていっているだなんて、まったく、私、こんな風じゃやられてられません。

ここに挙げた例はすべて、話し手が発話時に置かれている状態について述べている。

(34)(35)の알다、모르다は-겠-との結合頻度の高い動詞であり、語彙的レベルで肯定・否定の対をなしている。共に動作性がなく形容詞的で、話し手の行動を表す文を実現するものではない。(34)の「알겠습니다」というのは、命令や要請を受けた時によく聞かれる返答で、「理解完了」という動作の局面を示している³⁶。(35)は発話の直前から発話時の瞬間を含んで発話直後まで持続してわからない状態が続いている。

(36)(37)はいずれも慣用的表現である。(36)の「会う」という事態は実現しているし、(37)の「とんでもないこと」もすでに聞いた後であり、いずれも事態は成立している。(38)は呉の否定形であるが、自らの今の状態が耐え難いものだと言き手に訴えている。先に述べたⅢ型の否定形の用例の中にも呉と共起した文はあったが、アスペクト的性質を有する動詞と結合した「못살겠다」の場合は、現在置かれている「やりきれない状況」を述べていることからⅣ型に分類した。

(39) 김지수 씨의 상대역으로 박기정 검사로 나오는 사람은 누구일까요가 문제가 되겠습니다.(CK000142)

キム・ジスさんの相手役で、パク・キジョン検事として出演しているのは誰でしょうか、というのが問題です。

(39)の例は、「문제가 되겠습니다」を「문제입니다」と言うこともでき、名詞述語文に言い換えることができる形式である。これは、出題内容を先に提示し、それが問題である

³⁶ 同じ알다に結合した場合でも연세대학교언어정보개발연구원(1998)で示されている「자네 뜻을 알겠네」のように、心情などについて述べるときにはⅢ型に分類される。用例は5.4.2.1で示す。

と説明しているのです、現在のことを述べている文である。

IV型の文は、事態が発話の前から発話時を含んで発話後まで持続して成立していることからテンポラリティは現在である。発話時以降のことについて述べている例はなく、すべて事態は実現している。主体に話し手が含まれている場合は、話し手自身が現在置かれている立場や状態を述べており、主体に話し手が含まれない場合は、主体がどのような状態にあるかを、聞き手に説明している。いずれも未実現の事態はなく、事態を非断定的に述べている例もない。また、事柄を直接的に述べるのではなく、慣用的表現や定まった言い回しに置き換えて、間接的に述べていると言える。알다、모르다を除いては、疑問形を持たない形式が多い。

5.3.5. 非文末に-겠다形式で用いられる用例

ここでは終結語尾-다と結合しながら、常に-겠다という形式で固定的に用いられる用例を見る。従来の研究では例外的用法とされる場合が多かった用例である。

(40) 저 선생님은 명예도 있겠다 돈도 있겠다 다른 사람 부러울 게 하나도 없을 거야.(作例)

あの先生は、名誉はある、お金はある、他人をうらやむことなどないだろう。

(41) 졸업 논문 통과도 했겠다 이제 졸업 걱정은 없어.(作例)

卒業論文は通ったし、これで卒業の心配はない。

(40)は「겠다 ~ 겠다」、(41)は「-었겠다」という形式で用いられる特別な用法である。終結語尾-다に結合しているが決して文末には来ない。また、必ず-겠다の形で現れて-다を他の異なった語尾と言い換えることもできず、そのため疑問形も否定形も持たない固定した形式である。

(40)の例を見ると、主体である「あの先生」が「他人をうらやむことは何ひとつない」と推測される根拠が「名誉もお金もある」にあることを提示しているのである。また、(41)は、「卒業の心配はない」ことの根拠が「卒業論文が通過した」ことにあることを示している。このように固定した構造の形式は-겠-自体の役割を取り出して考えるよりは-겠다というひとまとまりの形態で文の意味の実現に関与していると捉えるべきであろう。「겠다 ~ 겠다」の形式は、原因や条件などが充分であることを羅列する「것다 ~ 겠다」と言い換えることができるが、남기심・고영근(1993:323)はこれを、-것-が-겠-として間違っって用いられたからと記述している。

現代韓国語では(40)の例のように-겠-を-것-に言い換えても意味的な差が見られない場合があり、-겠-と-것-をめぐっては古くから議論されている。최현배(1929/1955)に始まり申昌淳(1972:150)、이병기(1997/2000)は両形式が異なった起源であることを前提に現代語では-것-が-겠-として認識されていることを認めている。임홍빈(1980/1998)は「対象性」の観点から-것-と-겠-は同質の形態素と見て、한현중(1990)もこの見解を認めてい

る。

その後정경재(2007)は-것-の起源と通時的変化の考察から現代韓国語の-ㄷ-との関係を論じた。정경재(2007:75-89)によると、現代韓国語の-ㄷ-の文には-게 き엿-が文法化したものを起源とする用法と、近代において-것-と-ㄷ-が混同した時期を経て現代に用いられている用法があるという。後者における-것-と-ㄷ-が混同されていく過程は、まず前期近代語（17世紀から18世紀中盤）までは-것-が独自の存在しており後期近代語（18世紀中盤から19世紀末）に-것-は語末語尾-다とのみ結合するようになる。そして後期近代語に-ㄷ-が登場してから混用されるようになったというのである。そのうえで、「ㄷ다 ~ ㄷ다」「-있ㄷ다」構文は-것-起源の用法であると結論付けている。

また、近代語の資料の中に-것다が用いられた例で-ㄷ-に置き換えても意味の差異がないものが見られる。후쿠이 레이(2006)によると、東京大学小倉文庫に所蔵されている韓国語学習書の中に『酉年工夫』という説話集があり雨森芳洲が著者と考えられるという。「酉年」とは1705年を意味し、雨森芳洲が1703年から1705年に釜山にいるあいだに編纂したようであるが、その資料に次のようなくだりがある：

- (42) 히 지도록 가니 三十五리라 하니 그 말이 마장 올킷다 하고 (酉年工夫 2話)
日が暮れるまで歩くと 35里なので、(なぞなぞに対する答えは)それがたいへん正しい、といい
- (43) 내 알꺷다 그 썩 칩더니 (酉年工夫 2話)
わかった(思い出した)、あの時は寒かった

(42)は올꺷다、(43)は알꺷다という現代語に言い換えることができる。これが18世紀初めの資料と推定されるので、現代語-ㄷ-の用法の起源と考えられる-것-の用法の存在を示唆する前期近代語の資料と言えるのではないだろうか。

(40)(41)の例に話を戻せば、-꺷다形式で非文末に現れる用例を本稿の分類基準に照らすと、形態的にも意味的にもI型からIV型のいずれの型の文にも分類されず、-ㄷ-の用法を持って説明することが難しい形式である。そのため、-꺷다形式で非文末に現れる用例は本稿の分類の外にある用法として扱うことにする。そして、-것-の通時的変化や-ㄷ-の文法化過程について詳しく検証することが本稿の主たる目的ではないので、両形態素に関するいくつかの論考を引きながら関連用例を提示するに留めることにする。

5.3.6. 文の意味の実現における-ㄷ-の役割

-ㄷ-が用いられたI型からIV型までの文のうち、I型は話し手が発話時以降に事態を成立させると述べ、II型は発話以降に事態の成立が予定されていることを聞き手に告げており、非過去形式で用言に結合したIII型は発話時以降に事態が成立することに確実性を認識して述べている。これらに共通していることは、事態が未実現であり話し手が事態を未来に向けて述べているということであり、未来性がある。

次に、Ⅲ型の文のうち、時間副詞などと共起して未来性が認められる文以外は、話し手が事態を断定しえないながらも、命題の確実性を認識している。

最後に、Ⅰ型とⅡ型の文の中には形式的であったり公式的な言い回しであったりする述べ方が認められた。Ⅲ型の文の中には、事態を間接的にあるいは曖昧に表す述べ方が認められた。Ⅳ型の文の中には、事態を誇張したり回りくどく表現したりする述べ方が認められたが、これらは事態を間接的に述べるということで婉曲性がある。

以上のことから、-ㄷ-が用いられた文は、Ⅰ型からⅣ型までを通して「未来性」「確実性³⁷⁾」「婉曲性」という要素が取り出せることがわかる。-ㄷ-が用いられた文に共通するこれらの要素が、-ㄷ-によってもたらされたものであるならば、それが文の意味の実現における-ㄷ-の役割と言える。

「未来性」「確実性」「婉曲性」を-ㄷ-の役割と仮定して、各要素がどの型の文に現れるのかを示すと次の表のようになる。横軸の要素が縦軸の文に現れる時は○、現れない時は×、現れ方が不明瞭な時は△で示した。

[表 15] 各型の文に現れる-ㄷ-の役割

	未来性	確実性	婉曲性
Ⅰ型	○	×	○
Ⅱ型	○	×	○
Ⅲ型	△	○	○
Ⅳ型	×	×	○

表 15 を見ると、Ⅰ型の文には「未来性」と「婉曲性」が認められ、Ⅱ型の文にも「未来性」と「婉曲性」が認められる。Ⅲ型の文には「未来性」「確実性」「婉曲性」のすべてが認められ、Ⅳ型の文には「婉曲性」しか認められない。これら3つの要素は単独で認められる場合もあれば重なって認められる場合もあり、互いに排除することなく文の意味の実現に関わっているということが出来る。

それぞれの役割を文法的観点から考えてみると、「未来性」とは時間軸上から捉えたテンス・テンポラリティに関わるものであり、「確実性」とは認識のあり方に係わるムード・モダリティ的なものである。しかし「婉曲性」は事態を間接的に述べるというニュアンスの差をもたらすもので、語用論的観点から捉えるべきものと言える。つまり、「未来性」と「確実性」という2つの役割は文法的要素であるが、「婉曲性」とは語用論的要素として把握するべきもので、それぞれの役割の質を異なるものとする必要がある。

5.4.形態素-ㄷ-の機能

5.3 では-ㄷ-を含んだ文を一定の基準をもうけて分類し、そのモダリティの意味からそ

³⁷⁾ 全恵子(2010)、全恵子(2013)、전혜자(2013)では菅野裕臣他(1991)の用語に倣って「蓋然性」と呼んでいたが、本稿では「確実性」に変更して称することにする。

それぞれの用法ごとに分析を行った。しかし、文レベルでの分類がすなわち形態素-ㄷ-の機能の分類と一致するわけではないので、文レベルのモダリティの意味と形態素の機能は分けて論ずる必要がある。従ってここでは、文の意味の実現に関与することがわかった「未来性」「確実性」「婉曲性」という要素が形態素-ㄷ-によってもたらされるのかを考察する。-ㄷ-の役割がこれらの要素を文の意味に加味することであれば、それがすなわち形態素-ㄷ-の機能である。

形態素の機能とは、その形態素が用いられることによって加味され、取り除かれることによって喪失する、文法的対立及び、意味的差異に見出すことができよう。そこでここでは、-ㄷ-の有無が文の意味にどのような差異をもたらすのかを分析する。-ㄷ-の有無を対比させて用例を提示する場合、コーパスから収集した用例は a、a の用例から-ㄷ-を抜いた用例は b で示す。時間語および感嘆詞などの共起によって-ㄷ-を抜いた文が不自然になる場合は、それらの要素を除いた部分のみを示すことにする。

5.4.1. 未来性

「未来性」は、I 型、II 型、III 型の文に認められた。文の型ごとに「未来性」が-ㄷ-によってもたらされているかを確認することにする。

5.4.1.1. I 型に見られる未来性

まず、I 型の文に認められる「未来性」が、形態素-ㄷ-によってもたらされた要素であるのかを、動詞と存在詞の順で見ることにする。

(44) a. 예 함께 가겠습니다.(BK950004)

はい、一緒に行きます。

b. 예 함께 갑니다.

(44)は動作性のある動詞に結合した例で、(44)a, (44)b とともに意志を表明している文である。しかし(44)b は現在進行中の行動を表しているとも解釈できる。たとえば、「今(誰かと)一緒に行っていますか」と聞かれて、「はい、一緒に行っているところです」と、移動中の動作を表しているという解釈が可能な発話である。一方(44)a の方は、発話時以降に「行く」という動作を実現させると述べているのであって、発話時点ではその動作は実現していないことがわかる。つまり、「갑니다」は実現中の動作も未実現の動作も表すことができるが、「가겠습니다」というように形態素-ㄷ-が介入すると必ず未実現の動作になるということである。

また(44)b は、必ずしも主体が話し手でない場合にも成立するが、(44)a は特別な文脈を与えない限り、主体は話し手であるという解釈が自然である。

形態素-ㄷ-が介入すると必ず未実現の動作になるということは次の例でも確認できる。

(45) a. 영원한 형님으루 모시겠습니다.(BK950024)

永遠の先輩としてついていきます。

b. 영원한 형님으루 모십니다.

(46) 사회자 : 네. 오늘의 DJ 는요, 이종희씨데요. 자, DJ, 오늘의 첫 노래는 어떤 겁니까?

司会者 : 今日の DJ はイ・ジョンヒさんですが、(呼びかけて) DJ、今日の一曲目は何ですか。

D J : 네, 복장도 DJ 복장입니다. 그리구요, 첫 노래는 제가 DJ니까 제 맘대로 선택해두 되는 거 아닙니까?

D J : はい、衣装も DJ スタイルですよ。そして最初の曲は DJ の私が好きな曲を選んでもいいんじゃないですか。

사회자 : a. 아, 그럼요. 우리는 DJ 가 틀어주는 대루 들겠습니다.(BK950018)もちろんですよ。我々は DJ のかけてくれる曲を聴きます。

司会者 : b. 우리는 DJ 가 틀어주는 대루 들습니다.

(45) (46)ともに動詞に結合している例であるが、どちらも発話時より後を示す時間語はない。(45)を見ると、(45)a はこれから将来に向けて「永遠の先輩」としてつきあっていくのだという決意を表している。一方(45)b のように-겠-が用いられない文だと、現在の関係性について述べている文としても解釈できる。(46)はラジオ番組で司会者と DJ が選曲について交わしている発話である。(46)a の発話ではまだ曲が流れていないことがわかる。しかし(46)b のように-겠-がなければ、既に流れている曲を聴いている時の発話としても不自然さはない。

次に、動作性のない動詞に結合する例を見よう。

(47) 보조사회자 : 예. 제가 잠시 뒤에 소개를 해 드리겠습니다.

アシスタント : では、後ほど私为您介绍いたします。

사회자 : a. 기대하겠습니다.(BK950028)

司会者 : 기대しています。

b. 기대합니다.

(47)のように기대하다という動作性のない動詞に結合すると、話し手の心のありようを述べることになる。(47)a は、発話時以降に実現されることに対して「期待する」気持ちを述べているので「未来性」が認められるが、(47)b の場合は既に実現していることに対して「期待感を持っている」という気持ちを述べている文としても解釈可能である。

(48) a. 저는 집에 있겠습니다.(作例)

私は家にいます。

b. 저는 집에 있습니다.

(48)は存在詞に結合した例である。(48)aの場合、話し手が現在どこにいるかは不明であるが、発話時以降の居場所について述べている。一方(48)bは、今現在、話し手の居場所を告げている文とも解釈できる。

(49) 자 외치겠습니다.(BK950021)

さあ、叫びますよ。

(50) 시월 시일 이후 완벽히 만들어 제출하겠다.(CK000171)

10月の期日以降、完璧に作って提出する。

(51) 잠시 후 안녕맨 김진 씨와 재미있는 이야기 나누겠습니다.(CK000140)

後ほど、アンニョンマンのキム・ジンさんに、楽しいお話を聞かせていただきます。

(49)から(51)の例は感嘆詞や時間語を伴った用例である。(49)は、聞き手の注目を引こうとする子という感嘆詞があることで、今まさに叫ぼうとする直前の状態であることがわかる。(50)(51)は未来の一定の時間を指し示して、その時点で動作を実現させると述べている。それぞれの用例から未来を指し示す要素を取り去り、述語の部分だけに注目すると「만들어 제출한다」、「나눅니다」となり、現在進行中の動作とも解釈できる文になる。つまり、-겠-がない文では、感嘆詞や時間語が積極的に未実現であることを示しているようである。

(52) 한달치 월급을 안받고라도 한 달 쉬겠다.(BK940019)

ひと月給料をもらわなくても、一ヶ月休むぞ。

(53) 무슨 책 같은 거라도 이렇게 주면 나 그거는 찬성하겠어요.(BK950014)

こうして、たとえ本でもくれるなら、私、それは賛成します。

(54) 어, 그 돈이 있다면요, 대학 동기들하구 술을 왕창 마시겠어요.(BK950017)

そんなお金があったらですね、大学時代の同期と浴びるほどお酒を飲みます。

(55) 저 같은면 인제 세계여행을 하겠습니다.(BK950017)

私ならいますぐ世界旅行をします。

(52)から(55)の例はすべて先行節で一定の条件を示している文である。ある条件のもとで話し手が事柄をどのように実現させるのかを述べている。先行節に-라도、-(으)면のような条件を表す連結語尾があると、後続節に-겠-が用いられやすいようである。これらの文から-겠-を取り除くと不自然さが感じられる文になる。

以上の分析からもわかるように、I型の文は、主体である話し手自身が発話時以降に事柄を実現させようと述べているので「未来性」があり、発話時に事態は未実現である。I型の文から-겠-を取り除くと、事態が進行中であるか、既実現のことを述べる文としても解釈が可能になる。つまりI型の文における-겠-は、文の意味に「未来性」を加え、未実現であることを示す機能を担っているのである。

その事態の動作なり心のありようは、以前から決めていたことというより、発話の現場で決定したというニュアンスを帯びて、意思決定から発話までの時間的近さを感じさせる。また、いつか遠い将来に行おうとしているのではなく、近い将来、発話直後の未来に実現させるという、発話時と事態との近接感を感じさせる場合が多々ある。

また、-ㄷ-が用いられることで主体の存在が浮かび上がり、事態の動作を行うのは話し手でなければならない文になる。

ここで、従来の研究で-ㄷ-が「意志」を表すとも言われてきたことについて考えて見る。5.4.1.1で行った分析からもわかるとおり、文から-ㄷ-を取り除いても意志を表すことはできる。たとえば用言を하다で代表させたとして、「한다」「할 것이다」「하리다」「할 테다」「할 란다」「할 작정이다」「할 생각이다」「할까 한다」「할래」「하지」などの形式を用いて意志を述べる文を実現させることは可能なのである。意志を表す文は、主体に話し手が含まれて意志動詞に結合すれば「意志」を表すことはできる。つまり意志を述べる文であることは形態素-ㄷ-が機能してもたらした結果とは言えないのである³⁸。ただ、話し手が自らの意志を述べる場合にも様々な述べ方があるし、その述べ方の違いがそれぞれの形式の違いに現れているのである。このように様々な述べ方の中で-ㄷ-を含んだ意志の文とはどのような特徴を持っているのか考察を進めていくことにする。

5.4.1.2. II型に見られる未来性

続いて、II型の文に認められる「未来性」が、形態素-ㄷ-によってもたらされた要素であるのかを見ることにする。

- (56) a. 환영식 장면 함께 보시겠습니다.(BJ950033)
 歓迎式の場面を、一緒にご覧いただきます。
 b. 환영식 장면 함께 보십니다.
- (57) a. 광주 문화방송 윤문수 기자 전해드리겠습니다.(CK000182)
 クァンジュ文化放送(の)ユン・ムンス記者(が)お伝えいたします。
 b. 광주 문화방송 윤문수 기자 전해드립니다.

(56)a はこれから画面を見ようとする直前に、話し手が聞き手の動作を述べているので、「未来性」が認められる。しかし-ㄷ-を取り除いた(56)b は、現在、話し手と主体が一緒に画面を見ている最中の発話としても成立する。

(57)は放送で司会者が番組を進行している発話で、主体はニュースを伝えると紹介された記者である。(57)a の発話は「伝える」と言う動作が必ず未実現であることがわかる。一方(57)b は、動作が未実現としても解釈できるが、もし「~에 대해서는 매주 ~」という文脈を与えれば反復的な動作を述べる文としても解釈が可能になる。

³⁸ -ㄷ-がいわゆる「意志」を表すという説に対するこのような見解は、野間秀樹(1988)で指摘されており、筆者はそれと同じ立場に立つものである。

ここでの分析からわかるように、Ⅱ型の文は、話し手が発話時以降に実行される事柄を聞き手に伝えているので、「未来性」があり発話時に事態は未実現である。Ⅱ型の文から-ㄹ-を取り除くと実現中の事態を述べる文や反復する動作を表す文としても成立するので、「未来性」を加えて未実現であることを示す機能を担っているのは-ㄹ-である。

Ⅱ型の文で予告する内容は聞き手に係わる情報か、聞き手自身の動作についてのものである。発話の現場において、話し手は次に行われる動作が確実に実行されるものと把握して、事柄の展開を説明している。発話直後のことを告げているので、発話と事態成立が時間的に近い場合が多い。

5.4.1.3. Ⅲ型に見られる未来性

最後に、Ⅲ型の文に認められる「未来性」が、形態素-ㄹ-によってもたらされた要素であるのかを見ることにする。

- (58) a. 서울 경기 지방 오늘은 구름이 조금 끼겠습니다.(CL000195)
ソウル、キョンギ地方は今日、少し雲がかかります。
b. 서울 경기 지방 오늘은 구름이 조금 깁니다.

(58)a は天気予報などで耳にする発話である。ここで오늘を発話時以降も含んだ時間語と捉えれば、「未来性」が認められる。しかし(58)b は、오늘を昨日と対照させた今日、すなわち現在のことを指していると捉えると、既に曇っている空模様のことを述べているとも解釈できる。つまり-ㄹ-が用いられることで、事態に「未来性」が加わり、時間的にはまだ実現していないということを述べる文になるのである。

- (59) a. 내일 아침 양원경씨 고향동네 어머니 시장을 한 열 바퀴 도시겠어요.
(BK950004)

明日の朝、ヤン・ウォンギョンさんの田舎のお母さんが、市場を10周ぐらいなさるでしょうね。

- b. 양원경씨 고향동네 어머니 시장을 한 열 바퀴 도시세요.

- (60) a. 요번에는 욕을 더 들으시겠는데요.(BK950013)

今回は、もっと悪口を言われるでしょう。

- b. 요번에는 욕을 더 들으시는데요.

(59)a は、発話時以降のある時点で主体が行うであろう動作を述べている。しかし(59)b のように내일 아침という時間語がないと、今の状況を述べている文としても成立する。(60)a は発話時以降に「悪口を言われる」状況になるだろうと述べているのであって、今はまだ事態は実現していない。一方(60)b の発話は、既に「悪口を言われている」状況を述べる文とも解釈できる。これは、요번에という表現に現在が含まれているどうか、文脈

によって異なる。

次に、先行節に連結語尾-(으)면のある例を見よう。

- (61) 요런 줄 같은 거 그냥 모양으로 하나 해 놓으시면은 없는 것 보다 훨씬 고급스럽고 세련된 느낌이 들겠죠.(BK940027)
(お部屋に柵を作る時)こういったラインをなにげなく入れておくと、何もないよりずっと高級感がでておしゃれな感じになるんですよ。
- (62) 도둑놈이 한번 들어갈라 그러면 흐 아휴 힘빼나 들겠네.(BK950004)
泥棒が入ろうとしたら、わー、相当やっかいだろうな。
- (63) 뭘 잘했다고 내가 거기까지 가서 모셔와 저희들이 못 살겠으면 들어들 오시겠지.(CK000142)
どうして私がそこまで迎えに行かなきゃならないの？自分たちが窮すれば(生活できなければ)帰っていらっしゃるだろうよ。

(61)から(63)の例は、ある一定の条件のもとで発話時以降に事柄が成立するだろうと述べている。I型の文の場合と同様、連結語尾-(으)면と-겠-を用いた表現は呼応しやすいようである。これらの文から-겠-を取り除くと、不自然さが感じられる文になる。

ここに挙げた(58)から(63)まではすべて動詞に結合した例である。いずれも事態は成立していないものの、話し手は、時間軸上の未来の領域において、きっとそうなるであろうと心の中で描きながら述べている。

しかし、(59)と(60)は未来のある時点を指し示す時間語があり、(61)から(63)は先行節で一定の条件提示がなされており、いずれも「未来性」に係わる要素が含まれている。これらの例からその要素を取り去り述語の部分だけに注目すると、現在進行中の動作としても解釈が可能な文になる。つまり、積極的に「未来性」を示しているのは時間語や条件節であるとも考えられるのである。

一方(58)の例は、오늘がなくとも「未来性」が感じられる。この例が他の5例と異なるのは、主体が無情名詞³⁹という点である。これはII型の文に近い例であり、III型の文では「未来性」をもたらすのが必ずしも-겠-であると言い切れないということになる。そのため表6のIII型の文に「未来性」が現われるかは△で記しておいた。

以上の分析から、III型の文は、話し手が未実現の事柄が発話時以降に必ずおこるだろうと確信して述べていることがわかる。III型の文における-겠-は、事態が未来の領域にあることを述べる機能がある。発話と事態の成立とは、時間的に短い場合ばかりではないが、天気予報の用例からもわかるように、話し手が高い確率でそうなるだろうと信じてい

³⁹ 남기심・고영근(1993:239)では、「아버지, 철수, 사람, 개, 고양이」などの「感情を表現できる」名詞を「有情名詞」、「꽃, 풀, 진달래, 돌, 바위」などの「感情表現の能力がない」名詞を「無情名詞」としている。

る。また、主体は話し手が含まれているという制約はないが、事態が未来の領域で成立するだろうという認識はあくまでも話し手の主観的な捉え方に依るものであって、一般的認識に頼るものではない。

5.4.2. 確実性

「確実性」が認められるのはⅢ型の文のみである。ここでは非過去、過去形式に分けて「確実性」が-ㄷ-によってもたらされているかを確認することにする。

5.4.2.1. Ⅲ型の非過去形式に見られる確実性

まず、非過去形式の文に認められる「確実性」が、形態素-ㄷ-によってもたらされた要素であるのかを見ることにする。ここでは、用言に直接結合した用例、文法的連語に結合した用例の順に見ていくことにする。

(64) a. 원장님 찾겠다. 가서 일하자.응?(CK000149)

院長が(僕たちを)探してるはずだ。仕事に戻ろうよ、な。

b. 원장님 찾는다.

(64)は動詞に結合した例で、仕事の現場から席をはずしていた看護師ふたりの一方が、もうひとりの看護師に仕事場に戻ろうと催促している場面の発話である。(64)a は、院長が自分たちを探していることを見たり聞いたりしてはいないが、話し手の認識では、きっと「院長が探している」はずだと「確実性」を認めている。一方(64)b の場合、一定のイントネーションを与えない限り、「院長が探している」という事態は現実のことであり、そのことを話し手が直接目撃しているか、誰かからの伝聞で知らされている発話になる。つまり-ㄷ-が用いられることで、事態を断定することはできないものの確実性があると認識した文になる。

(65) a. 와, 너무너무 재미있겠다. (CK000148)

わあ、すごくおもしろそう。

b. 와, 너무너무 재미있다.

(66) a. 부엌에서 설거지할 때 부담이 없겠어요, 뭐, 한 두개 깨져도 뭐 얼마든지 가져다 줄 사람이 있으니까. (BK950011)

台所で洗い物をする時、気が楽でしょう。ひとつやふたつ割れたって、いくらでも(新しい食器を)もってきてくれる人がいるのだから。

b. 부엌에서 설거지할 때 부담이 없어요.

(67) a. 분명히 개선돼야 할 개혁돼야 할 대상이겠습니다. (BJ950034)

まぎれもなく、改善されるべき、改革されるべき対象でしょう。

b. 분명히 개선돼야 할 개혁돼야 할 대상입니다.

(65)a は形容詞 40 に結合している。(65)a の文は現実に事柄を体験してはいないが、(65)b は現実に話し手が事柄をおもしろいと感じていることがわかる。

(66)a は「新しい食器を持ってきてくれる人がいる」という事実を根拠に、話し手の判断として「気が楽だろう」と述べている。一方(66)b は、食器を割っても「気が楽だ」ということを断定している。

(67)a は指定詞に結合している。(67)b の場合は、主体が改善、改革される対象であることをはっきりと断定している文であるが、(67)a のように-ㄷ-が用いられると断定を避けて、話し手の判断として述べた発話になる。しかし 분명히 という副詞と共に起していることから、確信をもって高い確実性を認めていることがわかる。叙述形で指定詞に結合する用例は 15 例あり、終結語尾レベルでは-지 と結合するケースが多く、-습니다 と結合したのはこの 1 例だけであった。

(68) 왜 앞에 그렇게 긴 설명이 있었는지 알겠네요.(BK950016.)

なぜはじめに、あんなに長い説明があったのかわかる気がします。

(68)は動作性のない動詞알다に結合している例で、「長い説明があった理由」がわかる気がすると、断定を避けて述べている。IV型の文のように「理解完了」と返事をしてではなく、「わかる」ということに確実性を認識した文である。主体、結合用言ともに同じでも、-ㄷ-が文の意味を実現させる役割は異なり、その機能は文脈の中でしか把握できない。ただ、-네、-는데など、ムードを帯びた終結語尾に結合するとほぼⅢ型に分類できるようであるし、また終結語尾-지と共に起する時には必ずⅢ型に分類される。

(69) 모두들 좋아하겠죠.(BK950024)

皆、喜んでいでしょう。/ 皆、喜ぶでしょう。

(70) 견적이 안 나오겠다.(BK9X0002)

見積もりが出ていないだろう。/ 見積もりが出ないだろう。

(69)(70) 41 はともに主体は話し手以外で動詞に結合した用例である。この例はどちらも事態が発話時を含んで発話前後で持続的に成立しているかどうか、つまり現在のことについて述べているのか発話時以降のことについて述べているのかは判断できない。未来を示す他の要素があれば「未来性」があると認められるし、発話現在を示す要素があれば「確実性」があると認められる。このようにⅢ型の文において、-ㄷ-の機能が「未来性」をもたらすことなのか「確実性」をもたらすことなのか、その境界が曖昧なために述語部分だけでは判断できず、他のモダリティを表す要素や語彙や文脈、または発話状況によって

40 재미있다については、品詞を存在詞と見る立場と形容詞とみる立場があるが、本稿では연세대학교언어정보개발연구원(1998)にしたがって形容詞と看做した。

41 (69)(70)の日本語訳に「/」を付けて 2 種類の訳を付したのは、現在のこととも未来のこととも解釈されるからである。

異なってくる。

次の用例は事態が眼前にあるかどうかに関わる例である。

(71) a. 고개를 까딱까닥 하시겠는데요.(BK950028)

うんうんと、うなずいていらっしゃるはずですよ。

b. 고개를 까딱까닥 하시는데요.

(71)はラジオ番組の司会者の発話である。出演者の発言に対して視聴者が共感してうなずいているはずだと述べている。(71)aの発話だと、司会者は主体である視聴者がうなずく姿を視覚で捉えていないが、(71)bの場合は、視聴者がうなずく姿を実際に見なくては成立しない文である。つまり、-겠-を用いて現在起こっているであろうと述べる場合、眼前にない異なった空間にある場合に限られるようである。このことは8.2.1で再度述べる。

文法的連語に結合した用例を見ることにする。

(72) 제우야 이걸 아무래도 말해야 되겠다.(CL000190)

チェウ、これはどう考えても言わなきゃだめだ。

(73) 그런 실수도 있을 수가 있겠는데요.(BK950006)

そんな失敗も有り得ますよね。

(74) 너무 억지스러운 장면까지 가서는 안 되겠죠.(CK000151)

あまり無理強いする場面までいってはだめでしょう。

(75) 잘 됐으면 좋겠어요.(CK000146)

(ドラマの主人公たちが)うまくいけば良いと思います。

(76) 이런 투자기금에서 선두적인 투자 역할, 이런 것을 국내외에 구분 없이 우리 업체가 주도하는 그런 프로젝트에 투자가 진행될 수 있도록 그런 길을 열어 주셨으면 감사하겠습니다.(CK000160)

このような投資基金が先頭になって投資の役割を、このようなことを国内外の区別なく、我々の会社が主導するそんなプロジェクトに投資がなされるように道を開いて下さればありがたく存じます。

(72)は当為・義務、(73)は可能性、(74)は禁止、(75)(76)は願望を表す形式に-겠-が結合した例である。用例を見ると、文法的連語を-겠-のモードが包み込むように覆う形になり、モードが重複している。それによって-겠-の機能が積極的に表れてこないし、また用言の語彙的意味やそれぞれのモード形式が表す意味も希薄化している。これはモードの重複によって意味や機能が溶け合って薄くなっている可能性がある。この場合、具体的で直接的に得た根拠が証拠性に繋がるのではなく、根拠は文法的連語が持つモードに含まれており、それを話し手の思考や判断や常識という認識のありかたの中で捉えて、話し手の見解として述べているという点が特徴的である。

文法的連語に-ㄷ-が結合する場合は個別的な特定の事柄に限られた文になり、一般的事実や常識、習慣的なことを表わす文には-ㄷ-が用いられないようである。このことは 8.2.1.で再度述べることにする。

Ⅲ型の文ではムードを表す様々な文法的連語との結合が見られるが、その中でも-ㄷ-は特に、当為・義務を表す形式や願望を表す形式と結合しやすいようである。結合の頻度が高いため、(72)(75)に見られるように-어야 겠다や-었으면 좋겠다のように-ㄷ-を組み込んで形式化したと考えられる。このことは 4.2 で述べた、先行節で一定の条件を提示すると後続節に-ㄷ-が現れやすいという共起性の高さとも一致する。

同時に、文法的連語が表すムードについて「確実性」とともに「未来性」も感じられる。確実性がある事態を、現在のことではなく将来的なこととして捉えており、主体に話し手が含まれない場合は用言に直接結合した場合と同様、「未来性」と「確実性」の境界が曖昧である。

5.4.2.2. Ⅲ型の過去形式に見られる確実性

次に、過去形式に結合した用例を見ることにする。

(77) a. 뭔 약인 줄 알고 주었겠지요.(CL000186)

何の薬か知ってて渡したんでしょう。

b. 뭔 약인 줄 알고 주었지요.

(78) a. 근데 그 좁은 주방에다가, 거실도 넉넉하지 않은데 재봉틀까지 있으니까 여러모로 참 불편하셨겠어요.(BK950026)

それはそうと、あの狭い台所に、居間も広くない、そのうえミシンまであるんだから、いろんな意味で本当に窮屈だったでしょうね。

b. 근데 그 좁은 주방에다가, 거실도 넉넉하지 않은데 재봉틀까지 있으니까 여러모로 참 불편하셨어요.

(79) a. 아니, 그러니깐 요즘 얼굴 상하신 게 저 정도니까 젊은 시절엔 굉장히 미인이셨겠어요.(BK950018)

ということは、最近顔がやつれたっていうのがその程度なんだから、若いときは相当美人でいらっやっしたんでしょうね。

b. 미인이셨어요.

(77)は動詞、(78)は形容詞、(79)は指定詞に結合した例である。(77)は주다という語彙の意味から主体は話し手以外ということが察せられるし、(78)(79)は-시-と共起していることから主体は話し手ではないことがわかる。主体が「知っていながら渡した」こと、「窮屈だった」こと、「美人だった」ことに何らかの根拠をもって「確実性」を認めて述べた発話である。

以上の分析から、Ⅲ型の文は、話し手が事柄を断定し得ないまでも確実性を認識してい

ることが認められる。文から-ㄷ-を取り除くと、事態は現実のこと、既存の事実を述べた文になるので、-ㄷ-はⅢ型の文において「確実性」をもたらす機能を担っているということになる。話し手はその機能の働きによって、過去、現在、発話時以降の事態成立に高い確実性を認めて述べるのである。

話し手が「確実性」を認める根拠は、既存の事実及び過去から現在に引き延びていることより、今ここで得られた情報、発話の現場の状況にある。過去形式に結合する場合は、発話時以前の事柄を今の視点で生き活きと述べることになる。また、-ㄷ-を用いて「確実性」を認識した発話は、一般論ではなく、発話の現場における話し手の判断、話し手の捉え方として述べられている。特に主体に話し手が含まれない場合は、話し手自らの判断で自分以外のことについて述べるために自然に話し手の存在が浮かび上がるのである。

ここで、従来の研究、特に韓国で発表された論考で頻りに用いられる「推量」という表現について本稿の立場を述べる。Ⅲ型の文は従来の研究において「推量」と呼ばれてきた文である。「推量」という表現には、話し手と事態との心理的距離感、「いずれは」や「このままいく」という時間的な猶予や距離感が感じられるが、これは、-ㄷ-が用いられた文に認められる近接感とは相容れないと考える。話し手の判断が、話し手自身の記憶や過去の経験や、または一般的な常識に頼った結果の場合には「推量」という表現が適切であろうが、発話現場に判断根拠がある-ㄷ-を用いた文には適切な表現とは言いがたい。そのため本稿では、Ⅲ型の文法的条件のもとで-ㄷ-が文の意味の成立において果たす役割を「推量」とはしない。話し手が、当該事態をどのように把握しているかの表し方として-ㄷ-を用いるのは、事態の成立または事態が真であることが確実であると認識しているからである。このような確かさの度合いを表すためには「確実性」という用語が適切であると考えてこの表現を用いた⁴²。「確実性」とは、話し手が事態の成立や事態の真偽判断に対して高い確実性を認めているという認識のあり方を表したものである。このことは 8.2.1.において再度詳しく述べることにする。

5.4.3. 婉曲性

「婉曲性」はⅠ型からⅣ型までの全ての文の型に現れた。文の型ごとに「婉曲性」が-ㄷ-によってもたらされているかを確認することにする。

5.4.3.1. Ⅰ型に見られる婉曲性

ここでは、Ⅰ型に見られる「婉曲性」が形態素-ㄷ-によってもたらされた要素であるのを見ることにする。

(80) 여기서 모두 마치겠습니다.(CL000195)

⁴² 野間秀樹(1988:57)でも、「推量」を「事態を想像の上で展開するという態度」としてその非推量性が指摘されている。その根拠として아마との非共起性をあげているが、아마と-ㄷ-の共起については、4.1.で述べたとおりである。

これで終わります。

- (81) 정답을 맞추시는 분들에게는 준비되어 있는 선물을 드리도록 하겠습니다.
(CK000154)

正解なさった方々には、用意したプレゼントを差し上げることにいたします。

(80)は、ニュースや番組のエンディングで司会者が番組を終える時の発話である。しかし司会者によっては、「여기서 모두 마칩니다.」と言って番組を締めくくる場合もある。同じ場面では-겠-の有無にかかわらずどちらも自然な表現ではあるが、-겠-が用いられるとより形式的で丁寧なニュアンスが加わる。

(81)は到達や志向を表す-도록 하다に結合しているが、「드리겠습니다」に言い換えることができる。드리다という用言に直接結合しても意味的には変わらないが、迂回的な表現を選択するために文法的連語に結合させ、さらに-겠-を介入させることで回りくどい表現になっている。

I型の文では、終結語尾합쇼체에結合し、さらに-겠-が加わることでより丁寧なニュアンスが加わる。同じ場面では-요체를用いて述べると発話状況とマッチしない場違いな感じがすることがある。I型の中でも不特定多数の聞き手に対する場合は、합쇼체를用いて格式的に述べることで公式的な表現になるのである。I型の文における「婉曲性」とは、-겠-が用いられることによって丁寧さや公式的なニュアンスが加わることと言えよう。

5.4.3.2. II型に見られる婉曲性

次に、II型に見られる「婉曲性」が、形態素-겠-によってもたらされた要素であるのかを見ることにする。

- (82) 완벽한 공연을 보여주기 위해서 맹연습중인 그녀의 초보 새댁 애기와 다시 서는 무대예기를 한번 오늘 함께 하시겠습니다.(BK950013)

完璧な公演をご覧に入れるために猛練習中の彼女の、新米主婦と舞台復帰のお話を今日はご一緒に聞かせていただきましょう。

- (83) 지금까지는 남동에서 전해드렸고 다음은 성남지역의 오동섭 통신원이 전해 드리겠습니다.(CL000196)

これまではナムドンからお伝えし、次はソンナム地域のオ・ドンソプ通信員がお伝えいたします。

(82)は、放送などで司会者が聞き手である視聴者に対して次に予定されている内容を告げる発話である。-시-と結合させることで主体を聞き手にし、함께という副詞を共起させて、事態が話し手を含む不特定多数とともに実現されるような、公式的なニュアンスをもたらしている。

(83)もニュース番組の司会者が、聞き手に関する情報を伝えている。합쇼체에結合し、

視聴者に対して丁寧に次の順序を説明している。「전하겠습니다」とも言えるが、-어 드리다の形式を用いて遠回しに述べている。さらに-겠-が加わることでより迂回的になり、格式ばった表現になるようである。

Ⅱ型の文では、終結語尾は합彙体に結合して-시-と共起し、さらに-겠-が加わることで、より丁寧なニュアンスが加わる。不特定多数の聞き手に対する発話が形式的で公式的な表現になり丁寧さを帯びるのである。予告の文における「婉曲性」とは、-겠-が用いられることによって丁寧さや公式的なニュアンスが加わることと言える。

5.4.3.3. Ⅲ型に見られる婉曲性

続いて、Ⅲ型に見られる「婉曲性」が、形態素-겠-によってもたらされた要素であるのかを見ることにする。

(84) 이렇게 활달한 아내의 모습을 오늘 남편도 함께 지켜보셨는데, 자랑스러우시겠어요. (BK950010)

こんなふうに闊達な妻の姿を今日、ご主人も一緒にご覧になって、さぞかし誇らしいでしょう。

(85) 정말 같이 이렇게 이쁜 애들이랑 있으니까 너무 좋으시겠어요. (BK950026)

こんなふうに、可愛い子どもたちと一緒にいるなんて、本当によろしいですね。

(84)(85)ともに形容詞に結合している。(84)の자랑스럽다も(85)의 좋다も、どちらも本人でなければ実感できない第三者が断定しえない感情や感覚である。本人しか感じ得ない感情や感覚を第三者である話し手の判断で述べると、話し手が主体の心のうちを察するようなニュアンスを持つ。これは単に事態に対する「確実性」を述べるのではなく、話し手が主体の状況や立場を察する気持ちを迂回させて述べているように捉えられる。

(86) 한국 사회에 적응하지 못한 이들이 간 곳은 정신병원이었고 결국 스스로 삶을 마감했습니다. 답답했겠죠. (BJ950024)

韓国社会に適應できなかった彼らが行った先は精神病院で、結局自らが人生の幕を下ろしました。もどかしかったでしょうね。

(86)は過去形式で、感情に係わる形容詞に結合している例である。過去にあった状況からして、話し手が主体に同情あるいは共感している。過去のことについて、今、この現場での根拠をもとに述べているので、一般的にはどう捉えられるかということには関心が薄く、あくまで話し手の捉え方として述べている文である。

Ⅲ型の文では、事態に確実性を認めることで直接的な表現を避けることができる。Ⅲ型の文における「婉曲性」とは、主体の状況や感情に配慮した話し手の思いを遠回しに述べ

たものと言える。特に過去に起こった事柄⁴³について述べると、その状況にあった経験者だけが知りえる気持ちを慮りながら、聞き手に語りかけているような文になる。

5.4.3.4. IV型に見られる婉曲性

最後にIV型に見られる「婉曲性」が、形態素-ㄷ-によってもたらされた要素であるのかを見ることにする。IV型の文は主体が話し手か話し手以外かで、その「婉曲性」のありようが異なるので、ここでは主体に話し手が含まれる例と含まれない例に分けて分析する。

まず、主体に話し手が含まれる用例から見よう。

(89) 아니 그거 잘은 모르겠어요.(BK940009)

いえ、それはよくわかりません。

(90) 궁금해 죽겠네.(CK000149)

気になってしかたありません。(気になって死にそうです。)

(91) 별사람을 다 보겠다.(국립국어연구원(1999)より)

あきれたやつがいるもんだ。(あきれたやつを見るもんだ。)

(89)は用言모르다가が語彙的レベルで否定の意味を持っているため、-ㄷ-を用いることで直接的否定を避けている。「知らない」という否定的な発話がはばかれるような状況では、断定的な述べ方を避けて確実性を認めながらぼやかすことでやわらかさがもたらされる。

(90)は、-어서 죽겠다/미치겠다という定まった言い回しで用いられる、一種の誇張法と言えよう。죽다、미치다など特定の用言を用いた場合、「死ぬ」「狂う」という文字通りの意味ではなく、おおげさな表現で誇張することによって自らの伝えたい内容を強く訴えかけることができる。

(91)は、「あきれたやつ」は既に見た状態にあるので「未来性」も「確実性」もない。「별 ~ 다 ~」という固定した形式で「별 말씀 다 하십니다」という表現があるが、この場合の主体は聞き手であり、主体に話し手が含まれない場合は-ㄷ-が用いられない。

次に主体に話し手が含まれない用例を見る。

⁴³ 非過去形式で形態的に特徴がある用例が抽出できたので示しておく。

(87) 시집 보내도 됐었겠어요.(BK950012)

お嫁に行かせても大丈夫だったでしょう。

(88) 논란이 더 됐으면 좋았겠다.(BK950008)

もっと論難がなされていたらよかったのに。

(87)は許可を表す-어도 되다の形式に-었었겠-が加わって結合し、過去の時点で事柄が完了していたと判断した文である。(88)は願望を表す-었으면 좋겠다の前部要素と後部要素にさらに-었-が加わり、過去のある時点で事態が完了していれば良かったのに、成就しなかったことに思いを馳せて遺憾を表している文であるが、「됐으면 좋겠다/됐으면 좋겠다」なら願望で、「됐으면 좋았겠다」なら遺憾になるので、遺憾になる原因は後部要素に加わった-었-である可能性がある。

(92) 혹시 그 성경책을 갖고 계신 분은요 성경책 사십 사십삼페이지에 해당하겠습니다.(BL940011)

もし聖書をお持ちの方がいれば、聖書の 40…43 ページです。(40…43 ページにあたります。)

(93) 손 님 : 이 옷 얼마예요?

この服、いくらですか。

상 인 : 2 만원 되겠습니다.(전혜영(1995)より)

2万ウォンです。

(92)は「사십삼페이지에 해당하겠습니다.」を「사십삼페이지입니다」に、(93)は「2 만원 되겠습니다.」を「2 만원입니다」にそれぞれ置き換えても意味は変わらない。「AはBである」という繫辞文で述べる文であるが、それを「-이/가 되겠습니다(-이/가는今後-가で代表させる。）」、「-에 해당하겠습니다」という固定した形式にあてはめて婉曲的に述べることで丁寧さに繋がっている。

IV型の文は、事柄を直接的ではなく間接的に述べている。ストレートに言えることをまわりくどく述べることで否定的な内容を曖昧にしたり、定まった言い回しにあてはめて誇張することで主張を強く打ち出したり、固定した形式で言い換えることで丁寧さをもたらしたりすることができる。IV型の文における「婉曲性」とは、話し手が伝えたい事柄を、発話の効果を加えて聞き手に届けうるものと言える。しかし、IV型の文は特定の場面で用いられる場合が多いので、「文字通りの意味」ではないということが、発話の場面を共有している聞き手との間で了解されていなければその効果は伝わらない文である。

5.5. -ㄷ-の機能と-ㄷ-を含んだ文の特徴

ここまで、-ㄷ-を含んだ文を4つの型に分類してその用法ごとに文の意味を分析し、さらにそれらの文の意味の実現に係る形態素-ㄷ-の機能について考察した。ここでは、その結果を踏まえて、-ㄷ-が有する異なった次元の機能の関連性とそのありよう、そして-ㄷ-が用いられた文に現れる特徴について述べる。

5.5.1. 文法的機能

これまで用例を分析したところ、-ㄷ-は文の意味の実現において、事態に「未来性」と「確実性」をもたらす機能があることが認められた。

このふたつの関係をどのように位置づけるかということに関しては、文法的観点からひとつの共通項を見出すことができる。「未来性」とは、事柄を時間軸上で捉えて、現実には未だ成立していない未実現を意味しており、「確実性」とは、事柄を現実のことと断定しないで、話し手の認識として事態を捉えたものである。つまり、いずれも事態は「現実」の領域にはなく、「非現実」の領域にあるということで共通している。

「非現実」の領域とは、尾上圭介(2001:360)の「非現実の領域に位置する事態を語る」に

做うことができる。尾上圭介(2004:48)は「非現実領域」を、「この世で未実現の領域」、「推理・推論、仮定世界など観念上の領域」、「この世で既実現ではあるが話し手の経験的把握を超えた『よくわからない』領域」の3つの場合であると説明している。他方、言語上の「現実」とは、うそ、勘違い、皮肉などを含む、話し手の事態の捉え方を言語形式に表したものであり、事柄が実際に実現したかどうか、事実かどうかということは問題にはならないと言えよう。そして「現実」か「非現実」かの捉え方の違いは、文法的対立をなす言語形式で表すことができる。

以上のことから、-烈-は文に「未来性」や「確実性」をもたらすことで、事態が「非現実」のものであるということを表す文法的機能を有すると言える。つまり、文の意味の実現にあって、「現実」に対する「非現実」という文法的な対立をもたらすムード形式なのである。

本稿で言う「未来性」とはテンスとしての未来、つまり未来を表す言語形式という意味ではなくあくまでも文のレベルで捉えたテンポラリティとしての「未来性」を指すものである。文の意味に「未来性」が認められるということは事態が未実現であることを意味する。韓国語においては意志動詞の多くは、非過去形式で未実現のことも既に実現していることも表すことができるが、話し手は-烈-を用いることで事態が未だ成立していないことを明確に表すことができるのである。言い換えれば、「未来性」をもたらすためではなく事態がすでに成立している現実のことであることを回避するために-烈-を挿入して話し手が意図するところが文の意味に反映させる手段として用いるとも言えるのではないだろうか。

そして「確実性」とは話し手の事態に対する認識のあり方を表すものである。話し手は事柄が既に成立していたり事柄を事実として認識したりしている時は事態を「現実の領域」にあると捉えて述べる。一方事柄が未だ成立していない時や事柄が話し手の経験の外にある時は「非現実の領域」にあると捉えて述べるのであるが、その述べ方は事態に対する判断根拠の所在、確信の度合いなどによって用いられる言語形式が異なる。5.4.2でも述べたように、このようにいくつかの形式の中で-烈-が表す「非現実」の事態に対する認識のあり方を「確実性」と呼んだのは、話し手が発話現場の根拠に根ざし確実に事態が成立すると認識しているその確信度の高さからである。

5.5.2. 語用論的機能

「未来性」と「確実性」は「非現実」を上位概念として設定できる文法的機能であるが、「婉曲性」は事態を間接的に述べるものの、事態を「非現実」のものであると捉えた述べ方ではない。つまり、「婉曲性」は文法的な対立をもたらす文法的機能ではなく、直接的に述べるか間接的に述べるかという述べ方の違いを表す語用的機能と言える。

文法的機能が本来の機能とするならば、「婉曲性」とは語用論的観点からとらえた派生的機能と言える。形態的には「非現実」のムード形式の用言を用いるが、それは事態が「非現実」の領域にあるという捉え方を言語形式で表しているのではなく、その形式を用いて事態を間接的に述べ、そのことが発話の現場において話し手と聞き手のあいだで語用論的に捉えられた結果、「婉曲性」が認められる文になるのである。

「婉曲性」は用言に結合した形態だけをもってその機能を見出すことはできず、文脈の中で、特定の場面や談話の状況におかれてこそ認められるものである。

「婉曲性」が認められる文の多くは、非現実で語るムード形式が、定まった言い回しの中に組み込まれて、その組み合わせ全体で特定の意味を表すという、修辭的な用いられ方をする。そのため、その中から-ㄷ-だけを取り出して個別の要素として形態素の機能を文法的に説明することは困難である。「非現実」のムードを表す形式を含んだ文が、本来の機能以外にどのように用いられて語用論的機能を発揮するのか、考えてみることにする。「非現実」を表すムード形式は-ㄷ-以外にもあるが、それらの形式がすべて「婉曲性」をもたらすものではない。-ㄷ-だけが派生的意味をもたらさうならば、そこに-ㄷ-の本質を見出しうる手掛りがあるものと考えられる。

5.4.3.においてI型からIV型まで、それぞれの文の型における「婉曲性」について分析したが、文の意味の成立に語用論的に機能するそのありようはさまざまであった。「婉曲性」とはものごとを間接化させることでもたらされる。では、話し手が-ㄷ-を用いて事態を間接的に述べる方法にはどのようなものがあるのか、またそれが文の意味に何をもたらすのか、そして文の意味にもたらされたものがどのような発話の効果を持つのか、これより-ㄷ-がもたらす「婉曲性」の語用論的機能を詳しく見ていくことにする。

5.5.2.1. 婉曲性から丁寧さへ：聞き手への配慮

終結語尾-습니다と-ㄷ-が結合して、公式的なニュアンスをあたえる場合があった。次のような例である。

(94) 아, 그럼 제가 힌트를 드리겠습니다.(CL000189)

では、私がヒントをさしあげます。

(95) 이상 발표를 마치겠습니다.(4CM00112)

以上で発表を終わります。

(96) 아주 흥미있는 얘기, 또 좋은 얘기, 삶의 얘기를 같이 들어보도록 하겠습니다.
(BK950001)

大変興味深いお話、また良いお話、人生のお話を共に聞いてみることにいたします。

(94)から(96)はいずれも-ㄷ-を用いなくとも不自然な文にはならず、-ㄷ-の有無に関わらず意味的な差異が感じられない。-ㄷ-がなくとも終結語尾-습니다と結合することで格式的な語尾で聞き手を丁寧に待遇した文として成立する。しかし、(94) (95)のように形態素-ㄷ-の追加で語形が長くなったり、(96)のように文法的連語との結合によって文節が長くなったりすることでより丁寧さが加わった表現になる。また発話者の役割に注目すると、(94)はクイズ番組の出題者、(95)は講義や講演や研究会などでの発表者、(96)はラジオ番組の司会者である。発話の状況を見ると、いずれの場合も聞き手は不特定多数であるこ

と、発話状況が公的なあらたまった場面であることで共通している。これらの話し手は、単純に情報を伝達するだけでなく、聞き手との関係やその場面に配慮すべき状況にあることがわかる。

(97) 수요일 건축시간에 소개해 드릴 작품은 대학로에 있는 바탕골 소극장이 되겠습니다.(CK000161)

水曜日の建築の時間にご紹介する作品は、テハンノにあるパタンゴル小劇場です。

(98) 시청률이 높은 드라마 같은 경우에는 정해진 광고를 다 내보낼 수 있어서 이익이 있지만 이 시청률이 낮은 드라마는 적자를 가져온다 라는 그런 얘기가 되겠습니다.(CK000147)

視聴率が高いドラマの場合は、決まった広告を全部できるので利益がありますが、この視聴率の低いドラマは赤字を招くという、そういうこと(話)になります。

(92)' 혹시 그 성경책을 갖고 계신 분은요 성경책 사십 사십삼페이지에 해당하겠습니다.(BL940011)

(97)(98)、そして再掲⁴⁴する(92)の例はすべて-입니다に言い換えることができる。「AはBです」という繋辞文で述べる文を、-가 되겠습니다 や-에 해당하겠습니다という形式に言い換えて述べている。-입니다に言い換えると断定し切った印象を与えるが、-가 되겠습니다や-에 해당하겠습니다という固定した言い回しの中に組み込むことで文節が長くなり、もってまわった表現になる。そのようにもってまわった間接的な言い回しは、-입니다という断定的で少々ぶっきらぼうな表現より丁寧な印象を与えることができる。日本語でも接客場面で「～です」を「～になります」という表現に置き換えることがあるが、これは接客者と客という関係からわかるように、話し手が聞き手に配慮すべき場面でよく使われる表現である。話し手が聞き手に配慮すべき場面ということでは、上に挙げたような、聞き手が不特定多数である場合や発話状況があらたまった場合であることと共通している。

ただ韓国語では「～になります」に対応する表現では-가 됩니다でも-가 되겠습니다でも、-겠-の有無に関わらず-입니다に言い換えることができる。しかし「저희 아내가 됩니다.」というようにその関係性を示す場合は-겠-が用いられない。次の例も同様である。

(99) A : 아 안녕하십니까?

こんにちは。

B : 예.

はい。

⁴⁴ 既に挙げた用例を再度示す時は日本語訳を付さないことにする。用例番号は既出番号のまま提示し、用例番号の括弧の最後に「'」を付す。

A : 어머 우리 박춘영씨 어머님 되세요?

まあ、パク・チュノンさんのお母さんですか。

B : 예 맞습니다.

そうです。

A : 안녕하십니까? 여기 저 여성시대라는 프로그램입니다.(CL000192)

こんにちは。こちらは「女性時代」という番組です。

(99)のAの下線部を「박춘영씨 어머님이세요?」と言い換えることができるが、パク・チュノンという人物との関係性を尋ねているために-ㄷ-が含まれることはない。

さらに-가 되겠습니다の形式では叙述形式で用いられることはあっても疑問形にはなりにくいことも特徴的である。これは、個人的関係性については-ㄷ-が介入しにくいからか、または-가 됩니다に先行する名詞が聞き手との関わりについて述べているのではなく、話し手との関わりについて述べているからとも考えられる。存在詞に結合して順序を説明しようとする「다음은 ~ 가 있습니다。」という表現は、次に何が行われるかという説明内容は聞き手に関わるものである。この場合、「다음은 ~ 가 있습니다」と言うのが公式的場面には不似合いな表現になる。

これまでの分析からも、直接的表現をさけて間接的に述べようとする時には語形が長くなったり、文節数が増えたり、表現が長くなることがわかる。日本語の場合をみても、「失礼します」より「失礼させていただきます」、また「失礼させていただいていいですか」より「失礼させていただいてよろしいでしょうか」や「失礼させていただいてはいけませんでしょうか」のように、元の情報に受け身が加わり、疑問形になり、さらに受け身の疑問形で了承を得る表現になり、またもそれが否定疑問になることでより一層丁寧さが加わっていく。話し手が伝えたい内容は変わらなくても、ひとひねりもふたひねりもして長くなればなるほど丁寧さは増していくのである。これは丁寧さを加える目的でわざと回りくどく述べているとも言える。このように話し手は、事態をストレートに言い切ってしまうのではなく間接的な表現を選択することで、発話に「婉曲性」がもたらされて丁寧な表現になり聞き手への配慮を込めることができる。配慮すべき聞き手とは、放送関係の視聴者、接客する客、講演などの聴衆というように、話し手が気を遣い丁寧に接しなければいけない関係にある相手であり、発話の状況は公式的なあらたまった場面である。話し手はこのような聞き手及び発話の場面において待遇表現のうちもっとも丁寧な합체体に、より一層丁寧さを加える手段として-ㄷ-を用いて待遇のレベルアップを図ろうとしていると思われる。さらに形態素の追加のみならず、文節の追加、定まった言い回しに述べる内容を組み込む方法などを選択し、表現を長く、回りくどく述べることで文に「婉曲性」をもたらして丁寧度を上げようとするのであろう。

これらの言い回しは、疑問形にならない、否定形にならない、합체体以外の終結語尾はとりにくい、というように一定の制約があり、かなり固定した表現として慣用化しており、特定の発話状況で用いられるものである。

5.5.2.2. 婉曲性から曖昧さへ：あたりさわりがないようにする

話し手が事態に確実性を認めることで曖昧さが加わることがある。否定的内容をあたりさわりがないように「婉曲性」をもたらし、曖昧に述べることで聞き手に配慮した表現となる。

用例を見よう。

(100) A: …… 박광정 씨는 실제 성격하고 그 배역의 성격하고 어때요? 많이 틀려요?

……パク・クァンジョンさんは、実際の性格とあの配役の性格とどうですか。随分違いますか。

B: 모르겠어요. 저도 어떤 배우나 자기 내부에 있는 거를 끄집어내서 연기를 하는 거니까 비슷한 게 있을지 모르겠지만 저는 제일 싫어하는 스타일 예요.(CK000145)

わかりません。私も他の俳優も、自分自身の内部にあるものを引き出して演技をするわけですから、似たものがあるかも知りませんが、(あの役の性格は) 私が最も嫌うスタイルです。

(100)は俳優 B が過去に放映されたドラマについてインタビューに応じている対話である。役柄と実際の自分の性格が似ているかどうか尋ねられて「わからない」と答えている。この場合、実際に自分の性格を完璧に把握しきれていないので「はっきりとはわからない」とも解釈できるし、まったく「わからない」と感じているものの丁寧な述べようとして-ㄷ-を用いて述べたとも解釈できる。仮に後者であるとする、「몰라요」と言い切ってしまうと丁寧さに欠けた、聞き手への配慮が感じられない印象を与えてしまうかもしれない。しかし-ㄷ-が加わることで、「わからない」という否定的応答に柔らかさが伴う表現になる。

(101) A: 미룩아, 아버지 어디 가셨니?

ミルクちゃん、お父さんどこに行ったの。

B: 몰라요.

知りません。

A: 모르다니? 아버지 어디 가신 것도 모른단 말야? 보리야, 너도 몰라?

(BEXX0019)

知らないって。お父さんがどこに行ったかも知らないと言うの。ポリちゃん、あなたも知らないの。

(101)は、母親が娘に父親の行先を尋ねている。返答は「知っている」か「知らない」かのいずれかであり、事態に確実性を認識する余地はない。しかしここで娘が「모르겠어요」

と答えても不自然さはなく、知らないという事実を曖昧に答えることもできよう。知らないことを「몰라요」と言い切ってしまうのではなく、-겠-を用いて「모르겠어요」、さらに終結語尾-는데요に結合して含みを残して「모르겠는데요」とも言えよう。また잘という副詞と共起させて「잘 모르겠는데요」と答えればさらに曖昧さが増すことがわかる。話し手が疑問化された事態を「知らない」事実には変わりはないものの、否定的な内容に「婉曲性」をもたらす要素が加わるにつれてより曖昧でぼやけた表現になっていき、「知らない」という否定的内容を柔らかい印象で聞き手に届けることができる。

また、5.5.2.1.で述べたように、対話の相手や状況に配慮が必要な時はこのような婉曲さが丁寧さに繋がるようである。(101)は母親と娘の対話であったが、これを先生と学生、上司と部下、また軍隊での上官と部下という発話状況で考えると、「몰라요」と言い切ってしまうと丁寧さに欠けるようである。学校で、職場で、軍隊のような上下関係が厳しい組織などで、「知らない」ことをそのまま「몰라요」と述べるのは多少の違和感が残る。年齢や地位的上位者に対しても해요体を用いることはできるが、上位者でありかつ配慮が必要な相手には、-겠-を用いて丁寧度をあげるといった言語上の選択をすることが多いと思われる。

日本語でも曖昧に述べることであたりさわりがないようにすることがある。例えば、突然約束を断るときに、「今日は行けません」というより「今日は行けそうもありません」と曖昧に表現したほうが丁寧な断り方である。行けないことが決まっても、わざわざ断定的表現を避けた述べ方は聞き手へ配慮を込めた表現となるのである⁴⁵。

否定的なことを曖昧に述べて聞き手の感情を和らげる効果が見られるのは次の例も同様である。

(102) 그렇게는 못 하겠어요.(7CM00009)

そんなことはできません。

(102)は못を用いた否定形の文で、話し手が事柄を成立させることができないと述べている。これは、話し手が事態の成立について高い確実性を認めて、自分には「出来そうもない」という意味にもとれるし、また、話し手が聞き手の要請に対して拒絶しているとも解釈できる。もし後者の場合なら、拒絶することが申し訳ない状況で-겠-を用いてストレートな拒絶を回避することで、聞き手への気遣いを図ることができる。

以上のことから、否定的な語彙や否定的応答、及び拒絶するようなときに、露骨に拒絶するのではなく、-겠-を用いて表現をぼやかし曖昧にすることで柔らかなニュアンスが加

⁴⁵ 断定を避けて曖昧に述べるのは否定的な内容のみならず、話し手と聞き手の関係性に依る場合にも用いられることがある。それは、話し手と聞き手が初対面の時や、両者に気遣いが必要な場合である。会社などで訪れた客に用件を聞くとき、「왜 오셨어요?」ではなく「어떻게 오셨어요?」と尋ねる。「왜」というように直接理由を尋ねるのではなく어떻게のほうがぼかしたニュアンスがある。また、「どちら様ですか」と尋ねたい時も、누구십니까?よりも어디십니까?というようにストレートに누구と問いかけるより어디という疑問詞を用いたほうが幅を持たせた表現で、焦点がぼやけた印象を与える。

わり、聞き手のマイナスの印象を緩和させることができる。さしさわりのある内容や状況を、少しおおざっぱに述べてあたりさわりのないように表現を緩めるという「婉曲性」が、ネガティブな内容をカバーしてくれるものと考えられる。さらに、聞き手が配慮すべき対象であるときは、その曖昧さが丁寧さにも繋がると思われる。

5.5.2.3. 婉曲性から誇張表現へ：比喩的に述べて自己の主張を効果的に伝える

話し手が伝えたい事柄を強く主張することを目的に、誇張して述べることがある。次のような例である。

(103) 나도 죽겠다.(6CM00056)

私も死にそうだ。

(104) 더워 죽겠네.(4CM00027)

暑くて死にそうだ。

(105) 정말 미치겠어.(4CM00029)

ほんとに、おかしくなりそうだ。

(106) 화가 나 미치겠어요.(作例)

腹が立ってしかたがありません。(おかしくなりそうです。)

ここに挙げた表現は죽다、미치다という語彙が述部に用いられているが、「死ぬ」や「狂う」という事態の成立について述べているものではない。(103)は「死にそうだ」、(105)は「おかしくなりそうだ」という表現を用いて、話し手が置かれている状況がいかにか切迫しているのかを誇張して述べているのである。(104) (106)は先行節に-어という連結語尾を用いて主節の状況の理由を説明している。話し手が強調したいことは主節より先行節で示されており、「暑い」ことや「腹が立つ」状況が甚だしい程度まで達していることを죽다、미치다という表現で言い換えている。過激な語彙を用いながらもそれを断定するのではなく、高い確実性を認める-겠-と結合させることで、今にもそうなりそうだ、そうなる限界のところにいると自らの現状を比喩的に訴えているのである。これらは固定した形式として慣用的に用いられるので先行節の連結語尾は必ず-어でなければならず、他の理由を表す-니까や-기 때문에で言い換えることはできない。

5.5.2.4. 婉曲性から慮りへ：話し手以外の感情を代弁する

人の感覚や感情に関する形容詞を述語に持つ時、叙述形では主体は話し手でなければならない。しかし、-겠-を用いることで話し手は聞き手及び第三者の感情に言及することができる。次のような例である。

(107) 사회자 : 이 팔부작으로 끝났죠?

司会者 : これ (ドラマ) は 8 話で終わりましたよね。

여배우 : 네.

女 優：ええ。

사회자：아쉬웠겠어요.

司会者：残念だったでしょ。

여배우：아쉬웠는데요.(CK000153)

女 優：残念でしたね。

(108) 아유, 속이 많이 상하셨겠어요.(BK9X0020)

あ、随分悔しかったです。

(109) 산을 오르는 게 힘드셨겠어요.(BK940019)

山に登るのは大変だったでしょう。

(107)から(109)まではいずれも過去形式に結合した例である。それぞれの主体は文脈によって聞き手とも第三者とも解釈できるが、いずれも話し手以外が主体であることがわかる。(107)はトーク番組に出演した女優にインタビューしている司会者の発話である。ゲストの女優が出演したドラマが8話完結作品であったことを指して、ドラマが短くて「残念だった」であろうと、ゲストの心情に寄り添って述べている。(108)と(109)もそれぞれ、主体が「悔しかった」「大変だった」であろうことは想像するに余りあると、話し手は自分のことのように述べている。

形容詞の中でも좋다に-겠-が結合すると話し手の共感度はより強まる。

(110) 송 자：우리 승민 오늘 인사 가, 남자 집에

ソンジャ：うちのスンミンは、今日挨拶に行くの。男性の家に。

은 주：아, 지난번 선

ウンジュ：ああ、この間のお見合い。

송 자：응, 검사

ソンジャ：うん。検事。

은 주：좋으시겠어요(CJ000227)

ウンジュ：よかったですね。(喜んでいらっしゃるでしょう。)

(110) は-시-に共起していること、また文脈からも主体は聞き手であることがわかる。聞き手が「喜んでいて」ことに高い確実性を認めながら「さぞかし嬉しいことでしょう」と、その感情を代弁するように述べている。

さらに、좋다を用いて話し手自身の感情を述べることもできる。例を見よう。

(111) 근데 저는 또 한편으로 아휴 참 구지민씨는 좋겠다. 엄마가 이렇게 건강하게 아직 뭐 젊으시니까.(CL000191)

ところで私は、また一方で、ク・ジミンさんはいいですね。お母さんがこんなに元気でお若いから。

(111)では、聞き手の感情に共感するというより話し手が聞き手の状況をうらやむ気持ちを述べている。「若くて元気なお母さん」の存在をうらやましく思う話し手の心情を、主体の感情しか表しえない形容詞を介して表現しているものである。

さらに좋다を用いた類例を挙げる。

(112) A: 혹시 인봉 오빠가 언니 좋아하는 거 아니예요?

ひょっとして、インボンさんはお姉さんのことが好きなんじゃないの。

B: 좋아하기는 무슨. 안 그래도 나 때문에 사람들한테 오해받는다고 필쩍 뛰던데.

まさか。それでなくても私のせいで他の人から誤解されてるって、とんでもないって否定してたのよ。

A: 언니는 전에 사귀던 여자랑 헤어진지 얼마 안 돼서 민망해서 그러죠. 그리고 전에 장 간호사랑도 둘이 안 사귀었다고 그랬다면서요. 아유, 언니는 좋겠다 연하의 남자한테 사랑도 받고.(CK000145)

お姉さんったら。以前付き合ってた女性と別れて間もないから照れくさくてそう言うのよ。それに、前に看護師のチャンさんとも付き合ってたって言ってたんでしょ。あーあ、お姉さんは良いわね、年下の男性に愛されて。

(112)の例も話し手は聞き手の状況に共感するというのではなく、「うらやましい」という話し手の感情を述べている。自らの感情を主体（ここでは聞き手）しか表現しえない形容詞を借りて間接的に述べているのである。話し手は聞き手に対して해요体を用いる関係にあることがわかるが、下線部の좋겠다の発話だけは해라体で述べられているのを見ると、話し手の感情を表す-다という語尾が思わず飛び出したのかもしれない。つまり話し手の中では「うらやましい」と同義であり、主体は話し手になってしまっているのである。

話し手が、事態に高い確実性を認める文法的機能を有した-ㄹ-を用いて聞き手の感情に言及することは、主体がそのような感情を抱くのはもともとである、まさしくそう感じるに違いないと同調し共感しているということである。話し手が、主体だけが描きうる感情に高い確実性を認めるのは、主体の感情に深く共感しているからである。これは、話し手が主体の心情を慮る気持ちを、主体のみが感じる形容詞述語を通して迂回的に述べているということになる。嬉しさならばそれが賞賛となり、悔しさならばそれが慰めとなり、悲しさならばそれが同情する気持ちを述べることになるであろう。話し手が第三者の感情を代弁するがごとく婉曲的に主体の心情に寄り添う表現となる。

話し手が述べ伝えたいことをそのまま直接的に伝えるのではなく、間接化させて「婉曲性」を加えて伝えるというのは話し手による言語的操作である。その方法は、形態素を加えて語形を長くしたり、内容をぼかして述べたり、比喩的に述べたり、第三者の感情を代

弁するよう述べたりと、様々である。これらの方法を選択する手段として形態素-列-が用いられた例を上に見てきたが、それぞれの述べ方は婉曲さが丁寧さを、曖昧さを、誇張を、慮りをもたらしてその意味内容が広がる。その結果、聞き手は公式的な印象を受けたり、柔らかい印象を受けたり、強烈な印象を受けたり、共感されるような印象を受けたりする。これらは、話し手が情報伝達に際して合理的に最小限の情報のみを聞き手にもたらすということに留まるのではなく、話し手が伝達情報を待遇的配慮や感情的気遣いや演出的思惑で包みこんで間接化させ、「婉曲性」をもたらすことの効果を見込んで聞き手に伝えようとする言語操作である。このようにして形態素-列-は文の意味の成立に「婉曲性」という語用論的効果をもたらすのである。

菊池康人(2003:1-17)は、敬語を含めてより広いものを指す待遇表現の「待遇」を、「(人に対する)扱いという意味であり、「おっしゃる」と「言う」と「ぬかす」とでは、事柄事態は同じでも、その人に対する待遇が違う」と説明している。そのうえで、「ごく普通の意味での敬語」という言語現象は社会言語学的な側面である「<現実の世界>での<社会的・心理的諸要因と、待遇レベルとの関係>」と文法的側面である「<言葉の世界>での<語形(および問題の人物の文法上の性質)と、待遇レベルとの関係>」に分けて捉えられるという。さらに社会的・心理的諸要因として、「場及び話題や人間関係」を含む社会的ファクターや「待遇意図や背景的ファクターや表現技術」を含む心理的ファクターを指摘している。話し手はこの社会的ファクターに心理的ファクターが加わって待遇表現を選択するという。

また熊井浩子(2003:31-32)では、敬語以外に相手に対する敬意や丁寧さを表す形式が存在していると指摘し、次のような文を比べている。

- (113) いっしょに来て。
- (114) いっしょに来てくれる？
- (115) いっしょに来てくれない？
- (116) いっしょに来てもらえる？
- (117) いっしょに来てもらえない？(熊井浩子(2003:31)より)

ここに挙げた5つの文は、それぞれ丁寧さに違いはあるがそれが敬語によってもたらされたものではない。疑問文かどうか、肯定か否定か、受益を表す形式が含まれているかどうかの差があるかどうかだけである。このように、相手に対する丁寧さは敬語によってのみ表されるのではなく、敬語以外の表現があることを説明し、これを「待遇表現」と呼んでいる。「待遇」とは「相手や相手との関係・場面などに応じて、それにふさわしいもてなしの仕方」を選ぶことを言い、これを「言語の選択」に当てはめるのが「待遇表現」であるというのである。さらに「待遇表現」に関わる「環境」として、コミュニケーションの参加者、場面、話題、コミュニケーションの手段、コミュニケーションや談話構成上の機能の5つを挙げている。

5.5.3. -ㄹ-を用いた文に現れる特徴

5.3 及び 5.4 の分析を通して-ㄹ-を用いた文には 2 つの特徴が認められた。第一には、文の意味に「発話時に・発話現場で」というニュアンスが感じられることである。これは成耆徹(1979/1986)によって「現場性」という表現で指摘され以来、いくつかの論考でも言及されている。しかし、従来の研究では主に「推量」に焦点をあてて論じられていた。「推量」とは本稿の分類ではⅢ型にほぼ相当するが、これまでの分析を通して、Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅳ型の用法でも「現場性」が確認された。また、言語資料をコーパスから抽出した論考は管見の限り見あたらないので、本稿において初めて発話データにのっとって導き出された結果と言える。Ⅰ型の文では意思決定と発話時間が短いことを指摘したが、これは発話現場での意思決定に-ㄹ-が用いられやすいからである。またⅢ型では、話し手が確実性を認識する根拠は一般的な事実などに見出すのではなく、発話の現場で経験した場合が多かった。Ⅳ型として用いられる、命令や依頼に対する「알겠습니다」という返事も、たった今「わかった」という場合に用いられた。

第二に、主体が明瞭に提示されないまでも、それが話し手であることの固定性が認められる文が見られた。本稿ではこれを「主体の固定性⁴⁶⁾」と称することにする。Ⅰ型では、-ㄹ-を用いて意志動詞に結合すると、特別な文脈を与えない限り述語の動作は話し手が行うものでなければならない。Ⅲ型の文では、確実性を認識するのは一般的根拠に照らすというより、話し手個人の判断によるものである。Ⅳ型の文でも、動作の主体が話し手として固定している文が確認された。

これら 2 つの特徴については、第 8 章で詳しく述べることにする。

先行研究ではこれまで、形態素-ㄹ-は、「意志」「推測」「未来」を中心に、さまざまな表現でその「意味」や「機能」が称えられてきた。しかし形態素-ㄹ-自体がそれら個別の「意味」を持つのであろうか。5.4.1.1.でも述べたとおり、意志を表す文としての文法的要件に-ㄹ-が加わり、-ㄹ-を含んだ意志の文として意味が成立する。形態素自身が何らかの個別的な「意味」を持つのではなく、「非現実」を表わすムード形式として未実現を明示すべく機能し、結合する用言の種類や後続する語尾、共起する異なる他の先語末語尾などと影響を授受しあいながら、統語論的な関係や文脈そして発話の場面などの諸条件の中で文の意味を実現させることに係わるものと考えられる。

5.6. まとめ

本章では-ㄹ-が用いられる叙述形の文を、文法的基準を定めて用法を分類し、さらに文の意味と形態素の機能を区別して論じた。その結果明らかになったことを以下に示す。

- 1) -ㄹ-が用いられる終結形の叙述形の文は、主体、結合する用言の種類、他の語尾と

⁴⁶⁾ 全恵子(2010)では野間秀樹(1988)を引いて「話し手の顕在化」について考察し、全恵子(2013)ではそれを「主体の明瞭さ」と称した。そして전혜자(2013)で「主体の固定性」と用語を変更した。

の結合制約、テンポラリティという文法的基準に照らして分類すると4種類の型に分かれる。これら文法的特徴はそれぞれの型の文の用法においても違いがあり、意志を述べる用法、予告する用法、命題に確実性を認識して述べる用法、発話時に主体が置かれている状態を述べる用法として分類できる。便宜上これらの型の文をⅠ型、Ⅱ型、Ⅲ型、Ⅳ型と称した。

- 2) Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅲ型、Ⅳ型の文が、それぞれの文の意味の実現において、形態素-烈-には「未来性」「確実性」「婉曲性」をもたらす役割がある。これらは互いに排除することなく文にあって機能しながら文の意味の実現に関与する。
- 3) 「未来性」と「確実性」は、事態を「非現実」のものと捉えた述べ方であり、文の意味の実現に「現実」に対する「非現実」という文法的な対立をもたらす文法的機能である。
- 4) 一方「婉曲性」は、事態を間接的に述べるものであって「非現実」のものと捉えた述べ方ではなく、文の意味の実現において文法的対立に直接関与しない語用論的機能である。「婉曲性」は丁寧さ、曖昧さ、誇張表現、主体の感情を慮るという4つの語用論的効果をもたらす。
- 5) -烈-を用いた文には「現場性」と「主体の固定性」という2つの特徴があることを確認した。「現場性」とは、文の意味に「発話時に・発話現場で」というニュアンスが感じられることである。「主体の固定性」とは、主体が明瞭に提示されないまでも、それが話し手であることの固定性が認められるということである。この2つの特徴のうち「現場性」はいくつかの論考で既に指摘されていたし、「主体の固定性」は一部の論考で「話し手の顕在化」と称されて言及されたことがあるが、いずれの論考も特定の用法に現れる場合について指摘されるにとどまっている。しかし本稿では4つの型の文を通して文の特徴として現れうることで発話データをもって裏付けられた。

以上のことから現代韓国語の先語末語尾-烈-は、叙述形の文の意味の実現に「未来性」と「確実性」をもたらす文法的機能を有した「非現実」のムード形式であり、異なった次元で派生的に「婉曲性」をもたらす語用論的機能も備えた形態素である。同時に-烈-を用いた文には「現場性」と「主体の固定性」という特徴が見られることが明らかになった。

従来の研究においては、-烈-を含んだ文の意味と形態素-烈-の機能を混同した分析及び考察が見られたが、本稿において初めて文のレベルの意味と形態素の機能を区別して論じた。また、文法的機能と語用論的機能を異なった次元と捉えて論じ、文法的機能がどのように語用論的に援用されるのか、またどのように派生していくのかという繋がりを示すことができた。

第6章 疑問形の文

本章では、-烈-を用いた疑問形式の文を対象に、用例を分類して用法ごとの文の意味を分析し、文の意味の実現における形態素-烈-の関与のありかたを通してその機能と特徴について考察する。

6.1. 先行研究

ここでは、従来の研究で「疑問」がいかにか捉えられているか、また、-烈-を扱った研究で疑問形における文法的機能についてどのように述べられているかを概観する。

6.1.1. 「疑問」についての先行研究

亀井孝他編著(1996:279-280)では、「疑問」を「話し手が自分にとって不明な事柄を相手に伝えて、その不明を明らかにしようとする」と定義したうえで、疑問の表現形式を用いて「問題提起」や「主張の強調」という疑問以外の表現に用いられることもあると述べている。

国立国語研究所(1960:108-109)では疑問と質問は疑念の表明としては共通するとしながらも、対自的なものは「疑問」、対他的なものは「質問」として区別されている。質問は「相手に対して求めるところがある」という点から「要求表現」の一種とし、「要求表現」は返答を求める「質問的表現」と行動を求める「命令的表現」に下位分類されている。

崔明玉(1976:146-148)は疑問を「未知の事実に対する情報の欠如を表したり、そのような情報を提供してくれることを要求する言語行為」とし、命令は「非言語的行為」を要求するが、疑問は「言語的対答」を要求することと記している。そして、現代標準語における疑問表示の形態的手段には「抑揚」と「疑問語尾」があると述べている。

李賢熙(1982:1-11)は「疑問の意味は原則的に話者が聴者に応答を要求するもの」であるが、形式的には疑問法でありながら異なった文体法の意味と変わらない場合もあるとし、前者を「原則的意味」、後者を「周辺の意味」と称した。そして、直接疑問と間接疑問、判定疑問と説明疑問等を普通疑問、確認疑問⁴⁷、修辞疑問⁴⁸、反問等を特殊疑問と称することができる。としたうえで、特殊疑問には選定疑問が成立しないこと、確認疑問と反問は説明疑問がないことを指摘している。

남기심・고영근(1993:349)は疑問文を「話し手が聞き手に質問を投げかけることによって答えを要求する文の種類として成立する」と説明している。「はい/いいえ」の答えを要求するものを「判定疑問」、疑問詞を伴って具体的情報の説明を要求するものを「説明疑問」と呼んでいる。また、形態は疑問文でありながら意味上は疑問文でない疑問文を「修辞疑問文」としている。

⁴⁷ 確認疑問とは、事態を話者が確信して聞き手に確認を要求すると説明している。

⁴⁸ 修辞疑問とは、命題の否定的事実を強調するための技巧のひとつで、表現意味と内包意味が乖離していること、また、話者の否定的確信の確認疑問の一種としている。

韓国語の疑問法に関する研究を見ると、中期朝鮮語については数多くの業績が見られるものの、現代語については語尾や否定形、疑問詞などを個別に取り上げた論考は見られるが、疑問形全体を体系的に捉えるほどには十分な研究が進んでいないように思われる。

6.1.2. -ㄷ-を用いた疑問形についての先行研究

-ㄷ-については多くの先行研究があるにもかかわらず、疑問形を中心に据えた論考は管見のかぎり見あたらない。その中で、疑問形についてまとまった記述をしているものに次のような論考がある。

申昌淳(1972:136-137)は、疑問形語尾が連結した-ㄷ-の用法を「聞き手の推断したところの見解を聞くこと」としたうえで、動詞に結合して「時相」が未来で行動の主体者が聞き手という条件の下では「相手の今後の自身の行動に対する心の態度の決定を尋ねる」ことになると述べている。また、反語的な表現や「相手の注意を引く」効果をもつ疑問形の用例も挙げている。

野間秀樹(1988:45-50)は「平叙文と疑問文はモダリティの面で決定的に異なる」ため同列に扱うことの危険性を指摘しながら、疑問形に-ㄷ-が用いられた用法を「基本的に主観的な考えを尋ねたり糾したりする用法」とし、一般的な判断ではなくあくまで聞き手自身の判断を求めているという。さらに、反語の例の比重の高さを指摘しつつ「疑問詞……ㄷ+疑問形」は反語表現の典型としうると述べている。

-ㄷ-についての先行研究は叙述形を中心に考察したものが多く、疑問形について詳細に分析及び記述がなされているとはいいがたい。上に挙げた 2 つの論考においても、疑問形の文の種類や終結語尾との関係などの観点から十分な考察がなされているとは言えない。

以上のことから、形態素-ㄷ-を体系的に論じるためには叙述形における機能のみならず、疑問形におけるその機能と特徴の追究が不可欠なものと考え、これより詳細な分析を行うことにする。

6.2. 研究対象と資料及び分類方法

研究対象は、過去と非過去テンスを含む終結語尾を持った-ㄷ-が用いられる疑問形の諸形式とする。

研究資料は、『21 세기 세종계획 균형말뭉치』の「純口語」を用いる。122 種類のテキスト全 50 万文節から検索プログラムソフト「글잡이 II (직접)」を利用して用例を抽出したところ 362 例が得られた。用例抽出においては、疑問形語尾-습니까、-냐、-가、-노、-니、-나、-소이까及び-어、-지(요)、-는지(요)、-는지(요)が付されたものを疑問形⁴⁹と見做した。それらの用例をまず、李賢熙(1982)が示した「疑問の種類」に倣い、一次的に「普通疑問」と「特殊疑問」に分けた後、それぞれを下位分類する。分類方法は、まず「普通疑問」は叙述形に倣って、述部の主体、結合用言の種類、他の語尾との結合制約、テンポラリティを分

⁴⁹ 菅野裕臣他著(1991)に倣った。抽出された用例で?が付されていなくても疑問形語尾が用いられた用例は疑問形と見做し、?が付されていても-네、-다、-는데の形式は疑問形と看做さず除外した。

類基準にして、主体は話し手か否か、結合用言は動詞、形容詞、存在詞、指定詞の4分類、共起関係を見る他の語尾は先語末語尾-있-と-더-, 終結語尾-지の3種、文レベルでの時間性は現在か過去か未来かという観点からテンポラリティを見る。その後インフォーマント調査⁵⁰を行いながら文の意味と文における形態素-ㄷ-の機能を分析する。

6.3. -ㄷ-を用いた疑問形の文の種類

疑問形は、話し手が自らに不明な部分があるため、それを聞き手に示して応答を求め、そこから得た情報で不明な部分を解消することを目的として用いられる形式である。つまり疑問形の本来の機能は「質問」することと言えよう。しかし実際の発話では「質問」以外の目的で疑問形が用いられることがある。聞き手に示した内容が話し手にとって不明な事柄ではなかったり、不明な部分を聞き手に示すものの応答を求めることはしなかったり、聞き手から情報を求めるのではなく話し手が情報を提供したりと、本来の目的からずれるような疑問形の文もある。

ここでは、-ㄷ-を用いた疑問形の文を分類するにあたり、まず、話し手が「質問」という本来の目的を達成するために用いたかどうかという観点から「普通疑問」と「特殊疑問」に分けることにする。「質問」の条件として、1つ目は話し手が事態の真偽、成立に対して判断を下しているのかどうか、2つ目は話し手が聞き手に応答を求めているのかどうかということを設定し、これらを満たしているものを「普通疑問」、いずれかが欠けているかまたはいずれも満たしていないものを「特殊疑問」とする。

まず、-ㄷ-を含んだ「普通疑問」は「質問」としての条件を備えながらも、話し手が聞き手に問いかける時に、話し手が聞き手の知識についてどのように認識しているかという点において-ㄷ-が含まれない疑問形と異なる。-ㄷ-が含まれない疑問形は、話し手は疑問化された内容に対する知識なり情報を聞き手が有していると思って尋ねているのに対して、-ㄷ-が含まれた疑問形の一部は、聞き手も疑問化された事態の真偽を知らないという判断のもとに尋ねているのである。次に「特殊疑問」は「質問」のどのような条件が満たされていないかを注視する必要がある。例えば、確認を求めるものは「質問」の条件の1つ目が欠けており、疑念を表すものは2つ目が欠けており、修辞疑問には1つ目と2つ目の両方が欠けているものもある。

これらのことを前提に用例を提示しながら分析していくことにする。

6.3.1. 普通疑問

疑問形を大きく二つに分けたうちの「普通疑問」は聞き手に対する「質問」という機能を果たすものとする。-ㄷ-を含む疑問形の普通疑問の文は、叙述語の主体が聞き手か否か、結合する用言の種類、他の語尾との結合制約、テンポラリティ等の基準に従って、3つの種類に分けられる。これらは用法においてもそれぞれ、聞き手の意志を問う用法、聞き

⁵⁰ インフォーマントの情報は資料として末尾に示す。

手が命題に対して確実性を認識しているか問う用法、聞き手が発話時に置かれている状態について問う用法に分けられる。叙述形に倣ってそれぞれの用法の文を、I型、III型、IV型と称する。これを表で提示すると次のようになる。横軸の要素が縦軸に示した文に出現可である時は○、出現不可である時は×を付した。

[表 16] -ㄹ-を用いた疑問形の文の形態統語的制約の可否

	主体が 聞き手	結合用言				았/였의 共起	더의共起	ㅂ의共起	テンポラリティ
		動詞	存在詞	形容詞	指定詞				
I型	○	○	○	×	×	×	×	×	未来
II型	-								
III型	○	○	○	○	○	○	○	○	未来/現在/過去
IV型	○	○	×	×	×	×	×	×	現在

表 16 表に見られるように疑問形の-ㄹ-を含む文はII型が無く、3つに分類される。これより、それぞれの型の文ごとに用例を提示しながら分析していくことにする。

6.3.1.1. I型の疑問形の文

I型の疑問形の文は、話し手が聞き手の意志を尋ねる文である。話し手が、聞き手自らの動作や態度について、発話時以降に実現させるのか否か、またどのように実現させるのかを問っている。主体は聞き手で、意志動詞及び存在詞に結合し、他の語尾との結合制約があり、テンポラリティは未来である。用例を見よう。

(118) 아, 그랜저 3.5 를 하나 공짜로 드리고 싶은데 타시겠습니까?(BK9X0020)

えー、グレンザー3.5を一台、ただで差し上げたいのですが、お乗りになりますか。

(119) 어떻게 히겠습니까?(BK950021)

どうするつもりですか。

(120) 넌 그냥 여기 있겠어?(作例)

君はこのままここにいるの。

(118)(119)は動詞に結合した例である。聞き手が発話時以降に述語の動作を実現させるか否か、またどのように実現させるのかを尋ねている。事態は発話の時点で未実現であることがわかる。(120)は存在詞に結合した例であるが、疑問形においても存在詞を用いて聞き手の意志を問うことができる。

また(118)のように、-시-と共起して합쇼体に結合すると公式的な言い回しになり丁寧さが感じられる。

文法的連語に結合した用例も見られる。

(121) 근데 만약에요, 출근 안해도 된다 그러면 어떤 일상탈출을 해보시겠어요?

(BK940019)

ところで、もしもですよ、出勤しなくてもいいと言われればどのような日常からの脱出をしてみますか。

(122) 네, 그럼 계속해서 또 어떤 분이 질문을 해 주시겠는지요?(CK000138)

では、続けて、どなたが質問していただけますか。

(121)は試図を表す-어 보다、(122)は授受を表す-어 주다に結合してムードが重複している。このように文法的連語に結合しても、発話時に事態は成立しておらず、未実現であることがわかる。

(123) 이종균씨는 프로의 세계에서 특히 그 세일즈의 세계에서 얻은 게 있다면 뭘 끝 으시겠어요?(BK9X0020)

イ・ジョンキュンさんは、プロの世界、特にこのセールスの世界で得たものがあったとすれば、何ですか。(何を挙げますか)

(124) 실제 이 상황이 지금 거짓말에서 나왔던 그 드라마가 실제 상황이 이라면 어떻게 하시겠어요?(CK000139)

実際にこの状況、今、嘘から始まったこのドラマが、実際の状況だったらどうしますか。

(123)(124)は先行節に連結語尾-(으)면をとった用例である。一定の条件を示しながら、その状況下で聞き手がどのように事態を成立させるのかを尋ねている。この文から-겠-を取り除くと不自然な文となり、叙述形と同様、疑問形でも連結語尾-(으)면と-겠-は共起しやすいようである。

これまでの分析でみたように、I型の疑問形は、発話時に事態が未実現であることから、「未来性」があると言える。また叙述形と同様に終結語尾-지と結合した用例は見られなかった。

6.3.1.2. III型の疑問形の文

III型の疑問形の文は、聞き手が事態に確実性を認識しているのか尋ねる文である。聞き手が事態の成立に確実性があると捉えているのかどうか、またどのような捉え方をしているのかを問うている。主体、用言の種類、他の語尾との結合制約がなく、テンポラリティも現在、過去、未来のいずれの時も成立して、文法要素の制約がない。III型の疑問形は非過去形式と過去形式を分けて用例を示す。

6.3.1.2.1. 非過去形式の用例

まず、非過去形式の用例から見ることにしよう。

(125) 노래가 나오겠어요?(BK950026)

歌が歌える(出てくる)でしょうか。

(126) 범인 열 명을 놓치면 신문, 방송이 조용하겠어요?(BK9X003)

犯人10人を逃がして、新聞や放送が黙っているでしょうか。

(127) 개가 지금 거기 있겠어요?(作例)

あの子が今、そこにいるでしょうか。

(128) 뭐 한 두개이겠습니까.(CL000191)

ひとつやふたつでしょうか。

これらはそれぞれ、(125)は動詞、(126)は形容詞、(127)は存在詞、(128)は指定詞に結合した用例である。いずれの例も、話し手は聞き手に対して事態の真偽そのものを尋ねているのではなく、聞き手の考えや意見を返答として求めている。(126)の例で言うなら、新聞や放送が「黙っている」「黙っていない」のどちらなのかが知りたいのではなく、新聞や放送が「黙っている」という事態が成立すると考えるのかどうかを問うている。そのため、話し手は聞き手が事態の真偽そのものを判断できないと思っている場合でも発話は成立する。発話時以降の事柄について尋ねている場合は「未来性」が認められるが、時間を表す副詞などがなければ「未来性」の現われ方は不明瞭である。

また、上に挙げた用例はいずれも反語として捉えることもできるようである。話し手が事態の成立に否定的判断を持っているニュアンスがあり、事態に対しての真偽予測が中立的な問いかけではないとも解釈できる。用例選択にあたって、主体に聞き手が含まれず用言語幹に直接結合している文のうち、話し手の事態に対する真偽予測が中立的と感じられる文は多くなかった⁵¹。

(129) 당신이라면 그렇게 할 수 있겠어?(CK000146)

あなたなら、そんなふうにできますか。

(130) 어떻게 했으면 좋겠습니까?(CL000189)

どうしたらいいですか。

(131) 압박과 핍박 속에서 하루하루 살아야겠습니까?(BK950021)

圧迫と逼迫の中で毎日暮らさなければいけませんか。

(132) 한반도를 둘러싼 모든 강대국들이 핵무기를 보유하고 있는데 우리라고 가만히 있으면 되겠습니까?(BK9X0030)

韓半島をとりまく全ての強大国が核兵器を持っているのに、我々がじっとしていいのですか。

(133) 아, 올라가도 되겠습니까?(BK940019)

あの、(上の階の部屋に)行ってもよろしいですか。

⁵¹ ただし、終結語尾の形態が-겠지の諸形式で現れる場合は否定的判断が感じられない用例が多かった。インフォーマントに、主体に聞き手が含まれておらず用言語幹に直接結合した普通疑問の作例を依頼すると、反語的なニュアンスになりがちで判断が中立的な文を作りにくいとの指摘があった。ただし、テレビやラジオのクイズ番組などの問題文の場合は不自然なニュアンスがないようだというコメントもあった。

これらは文法的連語に結合した用例である。(129)は可能性、(130)は願望、(131)は当為・義務、(132)は放任、(133)は許可を表す形式に-겠-が結合してムードの重複が見られる。いずれも直接的に事柄の判断を迫るのではなく間接的な尋ね方になっている。また、(133)は話し手が聞き手に対して、発話時の状況に限定されて成立するもので、これが、「한국에서는 신발 신고 방에 들어가도 됩니까?」というような社会的常識について尋ねる場合は-겠-を用いると不自然な文になる。

このように、用言語幹に結合する場合だけでなく文法的連語に結合した場合も、-겠-が用いられると尋ね方が間接的になり、丁寧さや配慮が感じられる表現になりうる。また、恒常的、社会通念上、習慣的な一般化された状況について尋ねる場合には-겠-が用いられないように、これは叙述形の場合と同様である。

6.3.1.2.2. 過去形式の用例

次に、過去形式の用例を見ることにする。

(134) 선생님들도 뭐 좀 나무랄래도 좀 눈치 보였겠어요?(BK9X0029)

先生方も少し何かたしなめようとしても、(気を使って)顔色を伺ったでしょうね。

(135) 꽤 힘들었겠어요?(BK950016)

ずいぶん大変だったでしょうね。

(134)(135)ともに発話時以前に起こったであろう事態について問いかけているが、どちらも話し手が確信的に捉えた事態に対して聞き手の確認を求めているように解される。

(134)の話し手はテレビ番組の司会者である。話し手はバスケットボール選手だった聞き手が、高校生の頃から長身だったと説明するのを聞いて応答するように述べたのである。これは「先生たちが気をつかった」という事態に確実性を認識したかどうかを尋ねているのではない。話し手は、選手の説明から状況を察するに十分な根拠を得て、事態に確実性があると認識したことを聞き手に再度示して同意を得ようとしているのである。(135)の例も、話し手が聞き手の状況について「さぞかし大変だっただろう」という予測から同情的な気持ちを伝えようとしているように感じられる。

過去形式では聞き手の応答を求めるというよりも、過ぎ去った事柄に対する話し手自身の認識を伝えているようで、-였지の形式で言い換えができそうである。抽出した用例中、過去形式で聞き手の確実性認識を問う文は4例しかなかったが、どの例も確認要求のニュアンスを帯びた文であった。

Ⅲ型の疑問形は、話し手が、聞き手にあって事態が確実性の高いものと捉えているかを尋ねている。話し手は聞き手に返答を要求しているものの、求めているのは事態の真偽そのものではなく、事態の成立を確信的に捉えているのか、その認識のありようはどうかということである。

また-ㄷ-を用いることで間接的な聞き方、曖昧さが加わった聞き方となり、直接的な聞き方を避けることで丁寧さが加わることもある。文法的連語に結合してムードの重複が見られる文及び過去形式で形容詞に結合する文では、疑問形でありながら話し手の判断を遠慮がちに確認するようなニュアンスも帯びる。

Ⅲ型の疑問形のうち、主体が第三者で用言語幹に結合した文や過去形式の文は「普通疑問」として成立しにくい可能性があるとも考えられる。

6.3.1.3. IV型の疑問形の文

IV型の疑問形の文は、主体がどのような状態におかれているのかを尋ねる文である。主体に制約がなく、結合動詞は動詞という制約があり、テンポラリティは現在である。さらに動詞の中でも動作性のない動詞との結合が多く見られ、文法的連語との結合や慣用句的な表現が多く含まれているのが特徴的である。

まず、主体が聞き手の用例から見よう。

(136) A : 박영구가 아니고요. 박명구요. 아시겠어요?

パク・ヨングじゃなくて、パク・ミョングです。お分かりになりましたか。

B : 아 알았어. 알았어. 그러니까 박명구. (CK000140)

あー、わかった、わかった。だからパク・メング(だね)。

(137) 믿는 도끼에 발등 찍힌 기분 이제야 알겠소?(BK9X0030)

飼い犬に手をかまれる気分、今になってわかったのか。

(138) 우조・계면조 이 말이 언제부터 쓰였는지 그건 모르시겠어요?(BM9X0001)

ウジョ(羽調)・ケミョンジョ(界面調)、この言葉はいつから使われたか、そのことはご存知ないのですか。

(136)から(138)の主体は聞き手で、動詞알다と모르다に結合した例である。(136)は話し手が提示した事柄について発話時点で「理解完了」したかどうか尋ねており、(138)は発話時を含んで「知らない」状態が続いているかどうかを尋ねている。いずれも主体が明示されているわけではないが、-시-が用いられていることから聞き手自身の状態を尋ねていることがわかる。第三者について尋ねる場合も尊敬を表すために-시-が用いられることがあるが、動詞알다と모르다に-겠-が結合した時は主体を第三者と想定すると不自然な文になる。-시-との共起の如何にかかわらず、-겠-が結合すると主体は聞き手に固定される。

(139) ‘아빠의 청춘’, 준비 되겠습니까?(BK950018)

「パパの青春」(歌の題名)、準備はよろしいですか。

(140) 그거를 다른 말로 하면 전문 용어로 뭐가 되겠습니까?(BK950014)

それを他の言葉で言い換えると、専門用語でなんと申しますか。

(139)(140)は主体が聞き手以外の例である。(139)の主体は「準備」と言えるので、「準備が完了した」状態にあるかを尋ねている。これは「준비 되었습니까?」と言い換えることも可能であるが、-겠-を用いた言い回しの方があらたまった感じがする。(140)は「뭐가 되겠습니까?」を「뭐니까?」と名詞述語文に言い換えることができるが、(139)と同様に-겠-を含んだ-가 되겠습니까?の形式にあてはめた表現のほうがあらたまって丁寧なニュアンスを帯びる。

IV型の疑問形は、発話の前から発話時を含んで発話後まで持続して事態が成立している現在の状態について尋ねていることが特徴的である。実現された事態について尋ねているので「未来性」はないことがわかる。また、聞き手が認知できることについて尋ねたり、聞き手が置かれている状態について尋ねたりしているので「確実性」の有無を問うものでもない。IV型の疑問形の文には「未来形」も「確実性」も認められず、事態について間接的に問いかける「婉曲性」だけが認められる。

6.3.2. 特殊疑問

疑問形を大きく二つに分けたうちの「特殊疑問」は、「質問」の機能を果たす 2 つの条件のいずれか、またはどちらも満たしていないものである。ここでは、「質問」のどのような条件が満たされていないのかに注目しながら、文法的要素を基準に照らすのではなく形態的特徴や意味的側面から下位分類し、表現的意味と内包的意味という観点から分析していくことにする。

6.3.2.1. 終結語尾-지と結合する文

主体、用言の種類、テンスなどの文法要素の制約はなく、終結語尾-지と結合する。形態的には必ず-겠지という固定した形式で用いられ、話し手が自らの判断や認識のありかたを聞き手に提示して確認を求めている。これを確認の用法と称することにする。

用例をみることにしよう。まずは、用言に直接結合した非過去形式と過去形式、そして文法的連語に結合した順で示す。

(141) 강 의원께서는 앞으로도 12.12 진상규명에 적극 나서겠죠?(BK9X0030)

カン議員は今後も、12.12の真相究明に積極的に取り組みますよね。

(142) 소스를 좀 많이 만드셔서 냉장고에 비치해 두셨다가 필요할 때 쓰시면 좋겠
죠?(BK940027)

ソースを少し多めに作りおきして冷蔵庫に入れておき、必要な時にお使いになればいいでしょ。

(143) 저같은 바보스런 엄마는 또 없겠죠?(CL000187)

私のような愚かな母親も他にいないでしょうね。

(144) 네, 명지 초등학교 뭔가 새로운 느낌의 초등학교인데 여기는 사립 초등학교
죠? (CK000163)

미ョン지小学校、何か新しい感じがする小学校ですが、ここは私立の小学校でしょうね。

- (145) 클린턴 대통령은 북한의 핵문제가 뜻대로 해결이 안될 경우 혹시 영변에도 토마호크 미사일을 퍼붓는 건 아니겠죠?(BK9X0030)

クリントン大統領は、北朝鮮の核問題が思い通りに解決されない場合、まさか寧辺にまでトマホークミサイルを浴びせるってことはありませんよね。

(141)は動詞、(142)は形容詞、(143)は存在詞、(144) (145)は指定詞に結合した非過去形式の用例である。いずれの場合も、事態に対する話し手の認識のありかたを聞き手に提示して、同意するかどうか問いかけている。(141)を見ると、話し手は主体が「真相究明に取り組む」だろうと考えており、その認識のありかたについて聞き手が同意するか否かを問うている。「真相究明に取り組む」かどうかについて知りたいのではなく、「真相究明に取り組む」だろうという話し手の認識について確認を求めているのである。(142)は「必要な時に使えばいい」だろう、(143)は「愚かな母親は他にはいない」だろう、(145)は「ミサイルを撃ち込むことはない」だろう、(144)は「私立の小学校」だろうという認識に対して、聞き手も同様の認識を持つのかを確認している。

(144)の(145)のように指定詞に結合した場合は-지가なければいささか不自然な文になる。叙述形においては指定詞と-겠-が結合する場合はほとんどなかったが、-겠지の形態では肯定、否定を問わず自然に指定詞と結合することがわかる。

次に過去形式の用例を見よう。

- (146) 응모를 하게 되기까지 주위에서 이쁘다, 이쁘다 이런 얘기를 많이 들었기 때문에 응모를 했겠죠?(CK000154)

応募するまで、周囲からずいぶん可愛い可愛いと言われていたから応募したのでしよう。

(146)のような過去形式の場合も、発話時以前に成立した事態についての話し手の認識のあり方について、聞き手に同意を求めている。主体が周囲からの反応を信じて「応募した」のだろうという話し手自身の判断を聞き手に提示しながら、聞き手に問いかけている。

最後に、文法的連語に結合した用例を見よう。

- (147) 조금 식혔다가 말아야겠죠?(BK950028)

少し冷ましてから混ぜなければならないでしょう。

- (148) 제가 생각하기에는 저 정도면 괜찮은데, 어떻게, 그렇게 만들 수 있겠죠?
(CK000154)

私の考えでは、あの程度ならいいんですが、どうです、あんなふうには作れるでしょ。

- (149) 참을 수 없겠지요?(8CL00001)

我慢できないでしょ。

(147)は当為・義務、(148)は可能性、(149)は不可能性を表すムード形式に結合した用例である。文法的連語に結合した場合も、事柄に対する判断を求めるのではなく話し手の事態に対する認識のあり方に対して、聞き手に確認しようと問うている。

以上の分析の結果、まず、非過去形式で動詞に結合すると事態は未実現のことであり「未来性」を帯びるが、未来のある時点を示す時間語がない場合は現在のことを述べているとも解釈できる。形容詞や指定詞に結合すると、話し手が高い確実性を認識した事柄を聞き手に示していることがわかる。過去形式の場合は、話し手が過去に起こったであろうことを、きっとそうだったであろうと確実性を認識して述べている。文法的連語に結合した場合も、文法的連語が表すムードの意味を非現実のムードが包み込んで、事態が現実の領域にないものとの認識のあり方を表している。

終結語尾-지と結合した確認の用法の文は、先に挙げたⅢ型の文における-겠-の機能の現れ方と類似しているが、聞き手に問いかけるのが「事柄」についてか「話し手の認識のあり方」についてかという大きな違いがある。-겠지の形式で問いかける時、話し手の事態に対する認識のあり方は成立しており、話し手が問いたいのはその認識のあり方に聞き手の同意が得られる否かということである。このように考えると、「質問」の1つ目の条件が欠けていると言えよう。そのためⅢ型における尋ねかたとは一線を画することができると考え、「普通疑問」ではなて「特殊疑問」に分類した。終結語尾-지と結合する文は、-겠지というひとかたまりの形式で捉える必要があり、単純に-겠-と-지のムードの重複として-겠-の機能だけを取り出すのは難しく、さらに用例によっては-지の用法も異なるかも知れない。ここでは-겠지を含む文のモダリティの意味が「確認要求」と見做して、述語の部分だけを取り出して考えてみることにしよう。

(141)' a. 나서겠죠?(BK9X0030)

b. 나서죠?

(142)' a. 좋겠죠?(BK940027)

b. 좋죠?

(143)' a. 없겠죠?(CL000187)

b. 없죠?

(144)' a. 초등학교겠죠?(CK000163)

b. 초등학교죠?

(145)' a. 아니겠죠?(BK9X0030)

b. 아니죠?

(146)' a. 했겠죠?(CK000154)

b. 했죠?

(147)' a. 말아야겠죠?(BK950028)

b. 말아야죠?

(148)' a. 만들 수 있겠~~지~~요?(CK000154)

b. 만들 수 있~~지~~요?

(149)' a. 참을 수 없~~지~~지요?(8CL00001)

b. 참을 수 없~~지~~요?

(141)' から(149)' は、(141)から(149)の用例の述語部分だけを取り出して、a は-겠-を含んだ文、b は-겠-を含まない文である。これらを観察すると、用言の種類、過去形式及び非過去形式の区別に関係なく、また文法的連語に結合した述語もすべて、b は話し手が断定していることについて確認を要求し、a は話し手が確実性を認識していることについて確認を求めていることがわかる。確認を求めるということでは a も b も同様であるが、事柄に対する話し手の捉え方だけが異なっているのである。つまり、話し手が「現実」と捉えたことか「非現実」と捉えたことかの対立が見られ、確認要求の場合、「非現実」のムードを表す機能があると言える。しかし、それが「未来性」か「確実性」かは述語部分だけでは判断できないし、またこれらがある文脈の中で「婉曲性」という語用論的機能を表すことになるのかも判断し得ない。本稿では用例を提示し、述語部分の簡単な分析を通して、ムードの観点から観察結果を述べるにとどめることにする。

最後に、李賢熙(1982)では、-지를用いた疑問では選定疑問及び疑問詞を伴う疑問文は成立しないことが指摘されているが、「누가 오겠지?(誰か来るでしょう。)」 「어디 있겠지요?(どこかにあるでしょう。)」 「언제 잘 되겠지.(いつかはうまくいくでしょう。)」などのように、누가, 어디, 언제が不定代名詞として用いられる場合なら文は成立することを指摘しておく。

6.3.2.2. 終結語尾-는가と結合する文

主体、用言の種類、テンスなどの文法要素の制約はなく、終結語尾-ㄴ/은/는가(以後は-는가で代表させる)と結合する。形態的には必ず-겠는가という固定した形式で用いられ、話し手の疑念を独り言として自らに問いかけたり聞き手に訴えかけたりしようとしている。これを疑念の用法と称することにする。

用例を見ることにする。

(150) 그리고 이 셋째로는 말하자면 한국의 정치가 안정이 되겠는가?(CK000138)

そして3つめは、いわば韓国の政治が安定するのだろうか。

(151) 북남 간에 후퇴가 오지 않겠는가?(CK000176)

北南間に後退が訪れるのではないだろうか。

(152) 그래서 저도 한 번 해보면 길이 있지 않겠는가.(BK950008)

そのため、私も一度やってみたら道が開けるのではないだろうか。

(153) 그들이 우리 나라를 여러 가지로 힘으로 제압하다 안되니까 나중에 문화 말살 정책을 쓴 것도 바로 그런 이유라고 볼 때에 우리 기독교가 이 문화 문제에 대해서 경제 문제보다 훨씬 더 심각하게 생각하고 거기에 대한 대책이 있어야 되

지 않겠는가, 외람 되지만은 평소에 저는 그런 소신을 가지고 있습니다.(BL9X0001)

彼らが我が国をさまざまな力で制圧したがうまくいかないの、後に文化抹殺政策を用いたこともまさしくそのような理由からだとする時、キリスト教がこの文化の問題に対して経済の問題よりも、ずっと深刻に考えてそれについての対策がなければならぬのではないだろうか、僭越ながら日頃私はそのような信念をもっております。

(150)から(153)はすべて、話し手が疑念として心に浮かんだ事柄を表している。-는가という語尾は自らの疑念を表したり聞き手に問題を訴えかけたりする場合に用いられるが、-겠-と結合することによって「～ではないだろうか」という漠然とした疑念となっている。この場合、話し手の自問で留まることもあれば、自らの疑念を聞き手に問題提起することもあるものの、必ずしも聞き手に応答を求めてはいない⁵²。抽出された6用例中、否定形が5例であったことから、反語的にも捉えられる。時間を表す副詞と共起する場合は「未来性」を帯びる場合もあるし、聞き手が断定し得ない事柄の場合は事態に確実性を認識した文になる。また、事柄について直接的な訴えかけを避けて漠然とした疑念として問いかけようとしているので、「婉曲性」も認められる。

ここで、述語の部分だけを取り出して-겠-がどのような機能を有するのか見ることにする。

- (150)' a. 안정이 되겠는가?(CK000138)
b. 안정이 되는가?
(151)' a. 후퇴가 오지 않겠는가?(CK000176)
b. 후퇴가 오지 않는가?
(152)' a. 길이 있지 않겠는가.(BK950008)
b. 길이 있지 않는가.
(153)' a. 있어야 되지 않겠는가.(BL9X0001)
b. 있어야 되지 않는가.

(150)' から(153)' は、(150)から(153)の用例の述語部分だけを取り出して、aは-겠-を含んだ文、bは-겠-を含まない文である。これらを観察すると、まず過去形式に結合する用例は見られない。また用言に直接結合しても文法的連語に結合しても、現時点で心に思い浮かぶ話し手の疑念を表していることから「未来性」は認められない。しかし、bよりも-겠-を含

⁵² -겠는가の形式は書き言葉に多く用いられるが、話し言葉として用いられると発話者として老人や時代劇の登場人物が想起されるという指摘があった。聞き手に対して자네と呼びかける場合は、古い言い回しと捉えられるものの、疑念の表明ではなく応答を求める文としても違和感がないという。

んだ a の方が話し手自身の疑念の度合いが漠然としている。つまり-ㄹ-が介入することではっきりした疑念ではなく、そうではないだろうかと確実性を認識するに留まる疑念となるのである。

疑念を表す文は、話し手の命題に対する疑念を聞き手に問いかける場合もあれば、話し手自身の中で想起するにとどまる場合もある。後者の場合なら、聞き手から応答を得ようとしているのではないから、「質問」の条件の 2 つ目が欠けているということになり、「普通疑問」ではなく「特殊疑問」に分類した。また、話し手の持つ疑念を聞き手に訴えかけようとしていることは、聞き手に情報を与えているということにもなるので、修辞疑問に下位分類できるとも考えられる。本稿では用例を提示し、述語部分の-ㄹ-の有無を対比させて簡単な分析を通して、ムードの観点から観察結果を述べるに留めることにする。

6.3.2.3. 修辞疑問

修辞疑問は、形態的には疑問形の形式をとりながら、聞き手に応答を要求するのではなく、話し手自身の判断や主張を聞き手に伝達しようとするものである。疑問形を考えるうえで、先に述べた話し手が事態の真偽、成立に対して判断を下しているのかどうか、話し手が聞き手に応答を求めているのかどうかという 2 つの条件から考えると、修辞疑問は先の確認の用法や疑念の用法よりも「普通疑問」からいっそう距離を置いた疑問であり、話し手が自らの判断や意向を疑問形式を用いて聞き手に伝えようとする語用論的用法である。-ㄹ-を用いた修辞疑問はその形式的特徴や伝える内容が実に多様であるが、形式的特徴や伝達内容から次のように下位分類できる。用例を見ることにする。

6.3.2.3.1. 反語表現

-ㄹ-を含んだ疑問形が反語的になりやすいことは先行研究でも述べられているが、ここではその形式的特徴ごとに 4 つのパターンに分けて用例を見ることにする。

【疑問詞 + -ㄹ-】

(154) 내 것 내놓으면서 기분 좋을 사람 어디 있겠어요?(BK9X0030)

自分のものを差し出して気分がいい人なんてどこにいますか。

(155) 내가 이런 병에 걸릴지 누가 알았겠냐?(CK000139)

私がこんな病気にかかるかと誰が思っただろうか。

まず、疑問詞と共起して肯定の疑問形を用いた例である。(154)は「どこにいるか」と問いかけて「いない」ことを主張し、(155)は「誰が思ったか」と問いかけながら「誰も思わなかった」ことを主張している。非過去形式、過去形式を問わず、疑問詞と共起して肯定形で問いかけて否定の意見を強く主張している。

【否定形式 + -ㄹ-】

(156) 대변인이 정당의 입이라면 대표는 정당의 얼굴인데, 얼굴을 증인으로 불러

세우자는 데 입이 ‘옳소’할 수는 없지 않겠어요?(BK9X0030)

代弁人が政党の口なら代表は政党の顔なのに、「顔」を証人に立たせようというのに「口」が「もっともだ」とは言えないのではないんですか。

(157) 그게 효도 아니겠어요?(CL000192)

それが親孝行じゃないですか。

次に、否定疑問の形式を用いた例である。(156)は없다가語彙レベルで否定を表しているので二重否定となり、「言えないのではないか」と問いかけながら「言えない」と否定を主張する文である。一方(157)は、「それが親孝行ではないのか」と否定形で問いかけて「それが親孝行だ」と肯定を主張する文になっている。

【오죽+-겠-】

(158) 야, 이 녀석아 니가 오죽했으면 아버지가 이러시겠니?(CK000151)

おい、お前のせいでお父さんがここまでなざるんじゃないか。

(159) 국민학교 삼학년 때 쫓겨났으니 그 마음이 오죽 간절했겠습니까.(CL000194)

小学校3年の時に追い出されたのだから、その気持ちはどれほど切実だったことでしょうか。

続いて、오죽と共起した例である。(158)は「おまえがどれほどひどいから父親がここまでするのか」と問いかけて「おまえのひどさ」を強く批判し、(159)では「どんなにか切実ただらうか」と問いかけて「極めて切実であつただらう」ということを訴えかけている。研究対象とした50万文節のテキストから오죽の用例を抽出すると11例あつたが、そのうち7例が-겠-を含んだ文であり、その共起性の高さがうかがえる。

【他の文法的、語彙的要素+-겠-】

(160) 명색이 경찰 고위 간부 체면이 있지 …물장사를 하겠어요, 술장사를 하겠어요?
(BK9X0030)

仮にも警察の高位幹部なのだから面子もあるでしょう…水を売るんですか酒を売るんですか。

(161) 이 세상에 전부다 쉬운 게 있겠습니까?(BK940019)

この世の中で、すべて簡単なものなんてありますか。

(162) 평소 이쁘게 생겼다는 소리를 자주 듣는 저는 글썽요 누가 뭐 질 보고 서러움 많은 아이라고 생각이나 하겠습니까?(CL000187)

日頃からよく、可愛い顔しているとされていた私は…そうですね、誰が私のことを、悲しみを抱えた子どもだと思ってしまうのでしょうか。

最後に、副詞や助詞やその他の文法的、語彙的意味も含めて反語解釈ができる場合である。(160)は「水や酒を売るのか」と問いかけて「水や酒を売る商売はできない」ことを述べ、(1

61)は「世の中に簡単なものなどあるのか」と問いかけて「簡単なものはない」ことを述べ、(162)は「悲しみを抱えた子どもと思うのか」と問いかけて「そのようには思わない」ことを述べている。いずれも肯定で問いかけて強く否定の主張をしているのである。形態的にはⅢ型の疑問形と区別することは難しいが、Ⅲ型で挙げた用例よりも事態が成立しないことを想起させる文法的、語彙的否定要素が多く含まれている。その結果、示された命題に対する否定の主張が強くなり反語として解釈されるのである。

以上、形式的面から反語表現を分析してきたが、これらの中には-ㄷ-を含まずとも反語として解釈可能な用例もある。-ㄷ-の有無がどのような意味的な差をもたらすのかは、そのニュアンスの差が非常に曖昧で、インフォーマントによっても意見のばらつきが著しかった。ただ、用例を観察していくうちに-ㄷ-を含んだ反語が表れにくい状況は考えられる。

まず、対話における応答部分には-ㄷ-を含んだ反語は現れにくいようである。例えば、理不尽な内容や承服しかねないような内容の発話に対して応答する時、「그런 게 어디 있어」というが、「그런 게 어디 있겠어」とは言わない。類例を見よう。

(163) A: 이 일은 도영씨에게 알리지 말아주세요. 그리고 아주머니도 몰랐던 것으로 해주세요. 제발 부탁이에요.

このことはトヨンさんに知らせないで下さい。そしておばさんも知らなかったことにしてください。お願いですから。

B: 그런 말이 어디 있어. 내가 몰랐다면 모르지만 이미 알았는데 어떻게 모른 채 할 수가 있겠어. (2CE0020)

何てこと言うんですか。(そんな言いぐさがどこにあるんですか。)私が知らなかったら別ですが、もう知ってしまったのにどうして知らないふりをすることができるとですか。

(163)は、Aが、ある事実をトヨンという人物に内緒にしてほしいとBに依頼している。Bは何らかの理由でその依頼を受け入れられないと推察される。そして、「そんな言いぐさ(頼み)がどこにあるのか。(ないじゃないか。)」と返答するのである。文脈からすると、「그런 말」とはAが述べた「몰랐던 것으로 해주세요.」を指しており、それに対する応答として反語表現を用いていることがわかる。ここでは、「そんな言いぐさはないじゃないか」と述べるところを「どこにあるのか」と反語的に表現しているのであるが、この状況では-ㄷ-を用いて「그런 말이 어디 있겠어.」と述べるより-ㄷ-を用いない方がより自然である。

また、相手の発話内容を反復しながら反発して応答する時なども-ㄷ-を含んだ反語が表れにくいようである。用例を見よう。

(164) A: 아니, 뭐야 지금. 그래 따지는 거야 뭐야?

なんだよ。今、問い詰めているのか。

B: 따지는 게 아니라 원칙이 없잖아요. 원칙이.

問い詰めているんじゃないなくて、原則(つてももの)がないじゃないか。原則が。

A: 뭐야? 원칙이 없기는 왜 없어?(CK000140)

なんだって。原則がないだなんて、どうして無いんだ。(あるじゃないか。)

(165) A: 집세야! 학교 가자!

チプセ、学校行こう。

B: 그래, 나갈까. 기다려.

うん。今行く。待ってて。

A: 빨리 나와!

早く来いよ。

B: 나간다는데 독촉이야...

今行くって言ってるのに、急かすのか。

A: 뭘 해?

何してるの。

B: 앗! 두번째...

あ、二回目だ。

좋아. 내 기분을 상하게 했으니까 뒷문으로 나간다.

よーし。僕を不愉快にしたから裏から出てやる。

같이 가기는 뭘 같이 가... 나 혼자 가지.(CK000140)

一緒に行くなんて御免だ。一人で行ってやる。

(164)(165)はともに、「-기는 + 疑問詞 ?」の形式を用いて相手の発話に対して反語を用いて自らの主張や態度を述べている。(164)は「原則というものがない」と責め立てる相手に、「なぜ無いというのだ」と問いかけながら「原則はある」と主張し反論している。対話の内容から、-기는を用いて相手の発話を反復していることがわかる。また(165)も、相手が学校に行こうと誘っていることを-기는を用いて反復し、それに対して「一緒に行くものか」という話し手の態度を「何が一緒行こうか」なんだと反発しながら独り言として応答している。この2例も-ㄷ-を用いて応答すると不自然な表現となるようだ。

(163)から(165)までの内容を見ると、그という指示詞で内容を指していること、-기는という形式を用いて内容を反復していることから、いずれも反語が応答部分に用いられている⁵³例である。

⁵³ しかし、アスペクトに関連する動詞살다に結合すると応答する発話でも-ㄷ-を含んだ反語が不自然ではないようである。例えば、「왜 그렇게 사냐?」に対して「내가 나 때문에 이렇게 사냐?」と答えたとしよう。これはさまざまな状況が設定できるが、「なぜそんな生き方をしているのか」という批判に対して「私は自分自身のためでにこうした生き方をしているのではない、誰か他の人のためなのだ」ということを主張している。この例では「내가 누구 때문에 이렇게 살겠니?」という表現でも不自然さはなく、-ㄷ-を用いることができる。

反語を形式的意味と含意された意味との乖離と捉えるとその範囲はかなり広い。本稿でも修辞疑問の下位分類として反語を捉えているが、下位分類された他の用例の中にも反語として解釈可能なものもある。また、状況や話し手と聞き手の認識などによっても反語として発せられた発話なのかは規定しがたく、言語の形式だけを持ってその解釈は困難であろう。本稿では修辞疑問の考察が本来の目的ではないので、-ㄷ-を含んだ疑問形の用法における出現制約の可能性を指摘するに留める。

6.3.2.3.2. 感嘆を伝える文

副詞얼마나と共起して、話し手の事態に対する感情や意見を聞き手に訴えかける文である。

(166) 얼마나 이쁘겠습니까?(BK950026)

どれほど可愛いことでしょうか。

(167) 그것도 결혼을 시켜줬으니까 얼마나 또 정이 많이 쌓여 있겠습니까.(BK940027)

それも、結婚させてあげたのですから、どれほど情が深まっていることでしょうか。

(166)は「可愛い」と思う感情を、(167)は「情が深まっているだろう」という意見を疑問形式で聞き手に主張したり、喚起したりしている。疑問形の形態をとっているが聞き手の感情や認識のあり方を問うているものではない。-ㄷ-が無いとイントネーションによっては質問する文にもなりうるが、-ㄷ-があると尋ねているニュアンスは感じられず話し手自身の感情を強く主張する文になる。-ㄷ-の有無に関わらずで感嘆を伝える文として意味が成立するものの、感嘆度の強弱が見られ、-ㄷ-のないほう感嘆度が増すようである。

6.3.2.3.3. 話し手の認識を聞き手に提示して同意を求める文

ここでは、指定詞の否定形아니다に-ㄷ-が結合する形式に注目してみたい。この形式は否定疑問であるが、名詞及び名詞句が先行して「名詞/名詞句 + 아녜- ?」の形式で、話し手の命題に対する認識を聞き手に示して同意を得ようとする文である。叙述形では指定詞と結合した用例は少なかったが、疑問形では否定疑問の形式 69 例中 36 例が指定詞-아니다との結合例であった。아녜-に前接するしかたは多様で、名詞では助詞がつくかつかないか、用言は冠形詞語尾 + 依存名詞が挿入されて名詞句をつくるがその形態も多様で、それぞれ意味的ニュアンスも微妙な差異が観察される。順次用例を見ていくことにする。

まず、「名詞 + 아녜- ?」の例である。

(168) 내가 또 뭐 남자 아녜습니까?(BK950025)

僕は男じゃないですか。

(168)は主体が話し手であることが明示されているので、話し手自身が男性であることはわかっているし、また眼前にいる聞き手も周知のことである。このように、話し手と聞き手との間の共通認識事項を疑問化するのには、「僕は男なのだ」と強調しそれを聞き手にも再認識させようとしてのである。

次に助詞が入る「名詞 + 主格助詞 + 아니겠- ?」の用例である。

(169) 아 뭐, 인제 심장마비 좀 걱정하고 정년까지 그냥 열심히 근무하는 것이 최대의 꿈이 아니겠습니까, 선배님?(BK940019)

これからは、心臓麻痺をちょっと心配しながら、定年(退職)まで一生懸命勤務することが最大の夢じゃありませんか。先輩。

(169)は、40代にさしかかった男性が、定年まで健康に勤めあげるのが最大の夢だと述べている。最後に「선배님?」と付け加えていることから若干の問いかけ性が残っていることが感じられるが、これは話し手の意見に同調してくれるよう聞き手に促しているのである。定年までの勤務の仕方についてサラリーマン一般の考え方はこのようなものだろうと示しているだけで、命題の真偽を問うているものではない。

続いて名詞句が先行する例を見る。

(170) 각 파트 별 활동과 일정표가 잘 짜여져있지 않으면 그 결과는 뻔한 것 아니겠습니까?(BM9X0003)

パートごとに活動と日程表がうまく組まれていなければ、その結果は目に見えていくじゃないですか。

(171) 그리고 또 호떡의 속에 들어갈, 그 내용물이 또 중요한 거 아니겠습니까?
(BK950021)

そして、ホットクの中に入る、その中身がまた大切なものなんじゃないですか。

(170) (171)ともに「形容詞 + 冠形詞語尾 + 依存名詞 + 아니겠-?」の形式で命題が名詞化されている。「結果は目に見えている」という話し手の認識、「中身が大切だ」という話し手の意見を名詞句で括って聞き手に差し出しながら、聞き手の認識や意見と照らし合わせて見るように問いかけている。

(172) 아무래도 제가 방금 말씀을 드렸지만 붉은 색이라는 것이 젊음을 상징하는 것 아니겠습니까?(CK000161)

今、私が申し上げましたが、やはり赤い色というのが若さを象徴するのではありませんか。

(173) 어, 일주일에 매일 하는 거 아니겠습니까, 설거지는?(BK950016)

一週間、毎日するものじゃないんですか、洗い物は。

(172)(173)は共に「動詞 + 冠形詞語尾 + 依存名詞 + 아니겠-?」の形式で述べられているが、動詞に冠形詞語尾-는が結合していること、また内容からしても一般的且つ常識的なことが命題になっている。「赤は若さの象徴」は人々の持つ一般的認識と言えるし、「洗い物は毎日するもの」ということも常識的な内容と言える。このように一般的認識や常識的事実を名詞句にして、聞き手の持つ認識や常識的思考も同じであることを再確認している。

最後に文法的連語に結合した例を見よう。

(174) 그리고 간단한 고장은 전화로도 해결할 수 있는 거 아니겠습니까?(CK000150)
それに、簡単な故障は電話でも解決できるのではないんですか。

(174)は「-ㄴ 수 있- + 冠形詞語尾 + 依存名詞 + 아니겠-?」の形式で、可能性を表すムード形式に結合した用例である。「簡単な故障なら電話の問い合わせで解決する」という内容は一般的に共通して認識しうるものである。それを聞き手に提示して聞き手の同意を得ようとしているのである。

(168)から(174)までの用例をみると、(168)は話し手と聞き手の間で共有されている当然の事柄、(169)はサラリーマン全体に共通するような価値観、(170)(171)は個別の事柄ではあるものの、話し手は自らの認識が聞き手の認識と同じであろうという見込みがあり、(172)(173)は一般的認識や常識的事柄、などとすべて話し手が命題を真とした内容を聞き手に提示しながら、聞き手の認識や意見も同じであることを再確認しようとしている。

疑問化されている内容によっては、(168)の例のように否定しがたい事実の時は「Aではありませんか」と語りかけながら「Aです」と強く主張することを目的⁵⁴としている。(169)(170)(172)(173)は世間一般の価値観や認識、常識に照らして容易くその判断が予想できるものを示して聞き手に同調を求めている。一方、(171)のように事態が話し手と聞き手を取り巻

⁵⁴ 「名詞 + 아니겠-?」の形式に限ってみると、(168)と(169)のように主格助詞の有無で若干のニュアンスの差があるようにも感じられる。主格助詞の無い(168)は「男だ」ということをアピールしているのであって、聞き手の同意を得ることが目的ではない。次の例も同様である。

(175) 그런데요, 이 뭐, 뭐니뭐니해도 세일즈는 고객 아니겠습니까?(BK9X0020)
ところで、なんと言ってもセールスと言えは顧客じゃありませんか。

(176) 예, 김병세씨는 영화에서 너무도 유명하신 분 아니시겠습니까?(BK950015)
ええ。キム・ビョンセさんは映画であまりにも有名な方ではありませんか。

(175)はセールスの時に最も大事な顧客だと自らのポリシーを述べ、また(176)はキム・ビョンセは有名人であると念押ししているのである。いずれも「세일즈는 고객입니다。」「김병세씨는 영화에서 너무도 유명하신 분입니다。」と言い換えができそうである。

一方、主格助詞を伴う時は若干の問いかけ性が残るようである。用例を示す。

(177) 어렸을 적부터 이런 예의 범절을 가르치는 것도 부모의 도리가 아니겠습니까?
까. (CL000190)

幼いときからこのよな礼儀作法を教えるのも親として当然ではありませんか。

(177)の場合は並列を意味する助詞-도の意味も加わり若干の問いかけ性を残していると言えそうである。

く個別の環境の下での話となれば、話し手が自らの判断を持ちかけて聞き手の判断と一致するかどうかを尋ねようとする問いかけの余地は残されているものの、命題を真とする話し手の認識には変わらないようである。話し手は、自らが真と判断した内容を疑問化して聞き手に提示し、命題が真であることを主張したり、自らの認識に同調してくれることを求めたり、話し手自らの認識と聞き手の認識が一致していることを再確認したりしようとしている。これらの用例は全て話し手の意見や判断が聞き手のそれと同じであろうという見込みがあるところに共通点がある。話し手が主張したいこと、またそうであろうという判断を疑問化して聞き手の認識を喚起したり、聞き手の認識に照らし合わせるように求めたりしているのである。

ここまで「名詞/名詞句 + 아니겠-?」の形式の用例を分析してきたが、これらを「名詞/名詞句 + 아니- ?」と言い換えても不自然さが残らない例が多いようである。ここでは、この形式における-겠-の役割はどのようなものか考えてみたい。用例のいくつかを再度取り上げて-겠-の有無から相違を探ってみる。

(168)' a. 내가 또 뭐 남자 아니겠습니까?(BK950025)

b. 내가 또 뭐 남자 아닙니까?⁵⁵

(170)' a. 각 파트 별 활동과 일정표가 잘 짜여져있지 않으면 그 결과는 뻔한 것 아니겠습니까?(BM9X0003)

b. 각 파트 별 활동과 일정표가 잘 짜여져있지 않으면 그 결과는 뻔한 것 아닙니까?

(173)' a. 어, 일주일에 매일 하는 거 아니겠습니까, 설거지는?(BK950016)

b. 어, 일주일에 매일 하는 거 아닙니까?, 설거지는?

(168)'(170)'(173)'の用例をみると、-겠-を含んだ文と比べて大きく意味的な差異は見られない。(168)'は話し手が自らの性別を述べており、(170)'は뻔하다という語彙的意味からも話し手が当然の結果を予測しており、(173)'は常識的な事実を述べているので、これらの用例では-겠-の有無に関わらず、話し手が命題を真と認識していることがわかり、話し手の判断は成立していると解釈できる。-겠-が含まれていても含まれていなくても疑問化された命題に対する判断は成立しているが、その提示の仕方には若干の差があるかもしれない。ひとつは、-겠-が含まれていると断定的に命題を提示するのではなく、提示した命題が真であることに同意を得ようとする問いかけ性が残されている。一方的に話し手の判断を主張するだけでなく、聞き手に「考えてみてください」「あなたの認識と照合してみてください」とその問いかけに「婉曲性」が加わり同意を求める態度が柔らかくなるようである。それは話し手が疑問化されている命題を、断定を避けて控えめに提示しようとする

⁵⁵ また、아니겠습니까?は反語的であるが、아니겠어요?は問いかけの余地を残しているニュアンスがあって、完全な反語になりにくいようである。これは-까?の持つ力とも考えられる。

ことで問いかけの態度をソフトにし、聞き手を発話の現場に囲い込もうとする話し手の含みが感じられる。

では、「名詞/名詞句 + 아니겠-?」と「名詞/名詞句 + 아니-?」との違いは「婉曲性」だけなのだろうか。まず、「名詞/名詞句 + 아니-?」の用例を見てみよう。

- (178) 원 씨 : 내가 특별히 선물을 하나 줄라는데...(낡은 주판을 내민다)
ウォンさん : 私が特別に贈り物をひとつあげようと思ってるんだが...(古い算盤を差し出す)
창 회 : 어, 이거 주판 아니예요?(CJ000262)
チャンヒ : あ、これ、算盤じゃないですか。

(178)はウォンさんがチャンヒに贈り物として算盤を差し出すシーンである。チャンヒは贈り物として差し出された算盤に思わず「算盤じゃないですか」と驚きを表している。これを「名詞+아니겠-?」で言い換えると不自然である。

- (179) A : 그리고 바닥도 보시면, 바닥을 잠깐 내려가면 이게 나무 느낌이 나죠?
それから、床もご覧いただくと、床をちょっと降りていくと、これ、木の感じがするでしょ。
B : 나무 아니예요?
木じゃないんですか。
A : 나무 아니예요. 만저도 나무 느낌이 나거든요.(BK950028)
木じゃありません。(でも)触っても木の感触がするんですよ。

(179)はリフォームした部屋のインテリアについて A が B に説明している。A が素材を示しながら「木ではない」ことを思わせると、B はその素材について自らの認識が正しいのかどうかを確認するために「木ではないのか」と尋ねる。A は質問に対して「木ではない」と応答して、B は素材が木製ではないことを確認するのである。ここでも「名詞+아니겠-?」で言い換えると不自然な文になる。

- (180) A : 아니, 근데 말이에요, 이 무대 매너에다가 그 여유있는 표정, 몸짓, 관객을 유도하는 거, 혹시 이런 무대에 많이 서보신 거 아니예요?
ところでですね、この舞台のマナーといい、その余裕の表情、身振り、観客をリードするところ、ひょっとしてこういう舞台に何度もお立ちになったんじゃないですか。
B : 예. 저, 대학교 때는 많이 서봤습니다.(BK950018)
ええ。私、大学の時に随分(舞台に)立ちました。

(180)はラジオ番組の司会者とゲストの対話である。A は話し手である司会者が、あまりに

舞台慣れしているゲストを見て漠然と心に浮かんだことを疑問化して聞き手に確認している。話し手は情報を求め、聞き手は情報を提供して対話が成立している。司会者はゲストの身のこなしや受け答えを根拠にしてある見込みを持ってはいるものの、聞き手の過去の経験について判断を下すことはできないので本人からの情報で判断を成立させるべく尋ねているのである。ここでも「名詞 + 아니겠-?」で言い換えると不自然な文になることがわかる。

(178)から(180)の例をみると、まず(178)は発話現場で発見したものを驚きを込めて述べた発話である。(179)(180)はいずれも、話し手が命題に対して一定の見込みを持ってはいるものの、それは完全なものではなくて聞き手の応答なしに判断を成立させることが難しい状況である。(179)は床が木製であるかどうかの判断は成立しておらず、(180)はゲストが過去に舞台上に立った経験があるかないかは判断できないでいる。そこで話し手は、判断成立のための情報を持っている聞き手に自らの判断を成立させることを目的にして質問しているのである。これは、先の(168)から(174)に挙げた-ㄷ-が含まれた文と大きく異なる点である。つまり、成立した判断に同意や同調を求める場合は-ㄷ-の介入は可能であるが、判断を成立させるために聞き手の応答が必要な時には-ㄷ-を用いると不自然になるということである。

(178)は発見の驚きを述べる発話であったが、同様に偶然思いがけない場所で知人に会った時に、「어 이게 누구야, 철수 아니야?」と言うが、この時-ㄷ-は用いられない。これは何かを新たに発見したときには話し手の判断が成立していないので、判断が未成立の命題は-ㄷ-を使って疑問化しにくいということであろう。

また(179)(180)で観察されるように、事態に対して何らかの根拠があり命題の成立に一定の見込みがあったとしてもそれが不確かな時も-ㄷ-は介入しにくようである。持ち主のわからないものを指して「이게 니 것 아니야?」と言う時に、そのものが聞き手の持ち物であろうという見込みはあるものの話し手にとっては不確かなために聞き手に確認しようと尋ねているので、-ㄷ-は用いられない。

このことは、命題の真偽判断が成立している内容に聞き手の同意や同調を求める時は「名詞/名詞句 + 아니겠-?」でも「名詞/名詞句 + 아니-?」でも可能であるが、命題の真偽に対する判断が未成立で、その判断を成立させることを目的に聞き手に確認を求める時は「名詞/名詞句 + 아니겠-?」を用いるのは難しいということである。同意を求めるということは、話し手の判断が成立しているということであり、確認を求めるということは話し手の判断が成立していない(何らかの見込みはあったとしても)ということである。同意要求は疑問化された命題に対する認識や意見が話し手と聞き手の間で同一ということが言える一方、確認要求は疑問化された命題に対して話し手よりも聞き手の方に情報量が多いもしくは正確だということができる。聞き手の持つ情報が正しいかどうかは問題ではなく、少なくとも話し手はそう思って聞き手に語りかけているのである。

ここでさらに、発見の驚きと、判断成立のために聞き手に確認を要求する例で합全体に結合した例を見る。

(181) A: 아, 우리 금연교실에서 금연 하루만에 실패하시는 분은 거의 없었는데 증

세가 심각하시군요.

あ、当禁煙教室では禁煙1日目で失敗する方はほとんどいなかったんですが、症状が深刻でいらっしゃいますね。

B: 증세가 심각하나마나 강력한 방법 없습니까?

症状が深刻としても、強力な方法は無いんですか。

A: 네, 좋습니다. 이렇게 되면 특별 도구를 쓰는 수밖에 없겠군요.

わかりました。こうなったら特別な道具を使うしかありませんね。

B: 아니, 도구라니?

え、道具ですって。

A: 보십시오.

ご覧ください。

B: 아니, 이 거 나팔 아닙니까?

え、これ、ラッパじゃないんですか。

A: 물론 걸어로 보기에 는 나팔이겠죠. 하지만 더 이상 나팔이 아닙니다. 이제부터 우리는 이것을 담배라고 부릅시다.(CK000148)

もちろん、見た目はラッパでしょう。でも、もうラッパじゃありません。今から私たちはこれをタバコと呼びましょう。

(182) A: 김성수 기자! 협상시한이 오늘밤 자정까지 아닙니까?

キム・ソンス記者、協議期限は今日の午前0時までじゃありませんか。

B: 네, 그렇습니다.(BJ950031)

ええ、そうです。

(181)は発見の驚きを述べる例、(182)は判断成立のために確認を要求する例である。先に挙げた例は全て해요体であったが합쇼체でもその結果に変わりはなく、「名詞 + 아니겠-?」で言い換えると(181)は不自然になり、(182)は質問としては不自然になる。

修辞疑問の下位分類として、-겠-を含んだ指定詞の否定疑問に注目して用例を分析してきた。もとより否定疑問は疑問化された命題に対して話し手が一定の見込みを持って尋ねる文になることが多い。そのため、質問か反語かは文脈、イントネーションの上昇及び下降、発話の状況に負うところが多く、形式だけで両者のあいだに境界を引くことは難しい。また、否定疑問の中でも指定詞の否定形-아니다は体言に後接するものであり、用言に後接させるためには用言を冠形詞形に活用させて依存名詞を修飾して名詞句を構成する必要がある。そう考えると、用言の否定疑問と用言を名詞句に括った否定疑問とでは何らかの意味的差異があることは予想される。しかし本稿では否定疑問全体を扱うことはせず、修辞疑問に見られる一形式としての「名詞/名詞句 + 아니겠-?」に注目して考察を行った。その結果、まず「名詞/名詞句 + 아니겠-?」と「名詞/名詞句 + 아니-?」では、話し手の判断を聞き手に持ちかけて同意を得ようとする用法における文法的対立は見つけられず、-겠-

が含まれることで婉曲的な言いまわしになるというニュアンス的な異なりに留まるということがわかった。

しかしその中でも「名詞/名詞句 + 아냐-?」の形式が持つ他の用法の中には-ㄹ-が含まれると不自然な文になる用法を観察することができた。それは、ひとつは発見の驚きを表す文であり、もうひとつは判断成立のため聞き手に応答を求める用法である。

まず前者は、発見時は話し手の命題に対する判断が未成立でありそれを疑問化することができないからだと考えられる。

次に後者は、疑問化された命題について「名詞/名詞句 + 아냐-?」で問いかける時、話し手には一定の見込みがあるものの判断は未成立であり、その判断を確実に成立させるために聞き手の情報を必要とするから応答を求めるのである。同じ状況で-ㄹ-が用いられると不自然になるのは、「名詞/名詞句 + 아냐ㄹ-?」の形式で問いかける時には当該命題に対する判断は既に成立しているからであろう。つまり、命題に対する判断が成立するかどうかの確認要求と、命題が真であることへの同意要求かの違いである。判断成立のための確認要求は話し手より聞き手の方が情報的に優位であり、成立した判断への同意要求は話し手と聞き手の情報は同様であるか話し手の方が優位であるということになる。言い換えれば、確認要求は聞き手の情報が必要な時で、同意要求は聞き手の情報は必要でないといえることができる。これは、「名詞/名詞句 + 아냐-?」は「質問」の一種であるが、「名詞/名詞句 + 아냐ㄹ-?」は「質問」の機能がなくなっているというところに違いがある。このことは、話し手の中で事態成立には段階があることを意味するとは言えるのではないだろう。そして、疑問化された命題の真偽を成立させるために聞き手の情報が必要な時には-ㄹ-が介入しにくいということである。つまり、-ㄹ-を用いて指定詞の否定疑問で問いかける時には、話し手の命題の真偽判断は既に成立しているといえることができる。

6.3.2.3.4. 行為を提案・督促する文

-ㄹ-を含んだ疑問形をもって、聞き手の行為を提案したり促したりすることができる。用例を見よう。

(183) 저 이쪽으로 서시겠어요?(BK9X0029)

あの、こちらのほうに立っていただけますか。

(184) 부모님께 음식 씹는 즐거움을 드리지 않겠습니까?(CL000194)

ご両親に、食べ物を噛む楽しさを贈りませんか。

(183)と(184)はともに動作を促したり、提案したりしている。-ㄹ-が用いられなければ単純な質問文となるが、-ㄹ-を含んでいることで、(183)は「저 이쪽으로 서시지요」とも言い換えることができ、丁寧に命令していると言える。(184)は否定疑問の形式なので、主体に話し手も含まれている場合は文レベルの意味としては勧誘文に近いとも感じられる。ここに挙げた例は-ㄹ-を用いて聞き手の行動を促す文と言える。

(185) 어서 잘못했다고 빌지 못하겠어!(作例)

ごめんなさいって、謝れないの。

(185)は聞き手に動作を催促している。뭇との共起によって事態の状況に批判的な話し手の意向が伺えるので、勧告している文とも言える。-겠-が用いられない場合でも勧告する文として成立するが、-겠-が入ることで「婉曲性」が加わるためか迫力が緩和される。「무해!」のように断じきってしまうより、-겠-を介入させることによってその叱責の強さが若干柔らかかみを帯びるものと見られる。

6.3.2.3.5. 行為を求める文

-겠-を含んだ疑問形をもって、聞き手に行為を要求することができる。ここでは常に動詞주다と直接結合か授受を表す文法的連語との結合である。用例を見よう。

(186) 이제 도마도 좀 주시겠습니까?(BK940027)

じゃあ、まな板、くれますか。

(187) 왜 그렇게 붙였는지 얘기 좀 해주시겠어요?(BK9X0002)

どうしてそんな風に(あだ名を)つけたのか、ちょっと話していただけますか。

(188) 김승현씨 우리 애들 더욱 건강하고 심성 착한 아이들로 바르게 잘 자랄 수 있도록 같이 기도해 주시길 앞으시겠습니까.(CL000190)

キム・スンヒョンさん、うちの子供たちがもっと健康で、心根のやさしい子どもとして正しく育つように、ともに祈っていただけませんか。

ここに挙げた用例はいずれも聞き手に何らかの動作を求めている。(186)は用言주다に、(187)は授受を表す-어 주다の形式にそれぞれ-시-が用いられて尊敬の意味が加わっている。ここに-겠-が加わることによって、「わたす」「話す」という行為を要求する文、あるいは命令文とも解釈できるようになる。(188)は-어 주다の形式に尊敬の-시-が共起してさらに否定形にすることで回りくどい表現になって丁寧さが増し、謙虚に依頼している文となる。-겠-がなければイントネーションによっては単純な質問文とも捉えられる。これらは-겠-の有無にかかわらず、文レベルの意味としては命令文に近いと言え、聞き手の行為を要求する文と言える。

聞き手に対して求めるところがあるという意味では「普通疑問」に下位分類できるとも考えられるが、要求しているものが「返答」ではなく「行為」なのでここに分類した。

最後に、「어디 앞으시겠어요?」のように疑問詞を含む文は行為を求める文にはならないことも指摘しておきたい。

6.3.2.3.6. 過去の事柄を説明する文

-겠-を用いて話し手が過去に起こった事柄を聞き手に伝えることができる。常に指定詞아니다と結合して文が成立している。用例を見よう。

(189) 그 집 안으로 초대를 받았다는 거 아니겠습니까?(BK940027)

その家に招待されたんですよ。(招待されたじゃありませんか。)

(190) 내가 개네 집 찾아갔다는 거 아니겠어?(4CM00055)

私が彼女の家を訪ねて行ったんですよ。(訪ねて行ったじゃありませんか。)

ここに示した(189)と(190)の例は発話時以前に完了している事柄を説明している。過去にあった事柄を名詞句としてひとかたまりにして-는 것 に結合させ、さらに否定疑問を後続させて、話し手が聞き手の関心を引こうとするように訴えかけている。過去のある時点での状況を「～したんですよ」と聞き手に述べている。

このような文は形態的には疑問形であるが、聞き手からの情報を得ようとしているものではなく、話し手の持つ情報を伝えているということから、文レベルの意味としては叙述文に近い。-졌-を用いて過去の事柄を説明する文である。

このような表現のしかたは叙述形でも見られたので用例を示す。次の例はラジオ番組で、司会者が視聴者からのエピソードを紹介している。内容は、5歳の幼稚園児をキャンプに送り出した時の失敗談を母親が手紙で送ったものである。子どもたちは皆リュックに荷物を入れて背負うのであるが、この母親は、鞆を子ども自身が持ち運びすることを知らずに、荷物をおむつ鞆にパンパンに入れて持たせたのである。卒業式に1年間の思い出のビデオを鑑賞して初めて、その事実を知ることになる。その画面の様子が語られている。

(191) 그렇게 걸어가고 있는데 두 가방은 땅에 질질 끌려가고 있는 게 아니겠어요.
(CL000187)

そうやって歩いているのに、かばんを道にずるずる引きずっているんですよ。
(引きずっているじゃありませんか。)

(192) 저희 아이는 다섯 살이었지만 또래 아이들보다 키가 작은 편임. 그 장면을 보는 순간 우습기도 하고 아이에게 미안하기도 하고 또 그 장면을 본 모든 사람에게 창피해서 얼굴이 빨갱게 달아오르고 있는데 같이 보고 있던 아이가 하는 말. 엄마 나 저 때 가방 무거웠어. 하는 게 아니겠어요.(CL000187)

うちの子は5歳だったんですが、同じ年頃の子どもよりも背が低い方。その場面を見た瞬間、おかしかったり子どもに申し訳なかったり、またその場面を見た全員の人に恥ずかしくて顔が真っ赤になっているところに、一緒に見ていた子どもが、「ママ、私ね、あの時かばん重かった」って言うんですよ。(言うじゃありませんか。)

(193) 그래서 우습지만 웃지도 못하고 미안한 마음으로 아이를 꼭 껴안고는 그 다음엔 지연이 예쁜 가방 사줄게 하고 있는데 화면이 다시 한 번 저희 아이만 또 비추는 게 아니겠어요.(CL000187)

それで、おかしかったけれど笑うこともできず、申し訳ない思いで子どもをしっかり抱きしめて、「チョン、今度可愛い鞆を買ってあげるね」って言うてる時

に、画面が再びうちの子どもだけを映すんですよ。(映すじゃありませんか。)

(191)から(193)の例は疑問形の終結語尾に結合していないし「？」も付いていないために疑問形に分類しなかったが、同様の用法なのでここで例を挙げる。これらは、話し手が過去に起こった事柄を聞き手に説明しているので、聞き手にとっては新しい情報である。両者が共有していない内容なので、6.3.2.3.3 で示した用法と大きく異なる。形態的に異なる部分は、名詞句部分の構成に制約があるものと推測されるが、ここに挙げた用例からは、-는 거 아니겠-の先行部分が動詞であること、アスペクトに関わる要素があること、過去を表す要素があること、引用部分があることなどが観察できる。過去の出来事を説明する文は아니겠-を用いた疑問形式の周辺の用法と言える。

ここで、過去形を用いずに過去の事柄、すなわち発話時より以前に起こったことを述べるということについて考えてみる。伊藤英人(1989:28)では、動詞の終止形のテンス語形を動詞하다を例にとって、非過去形을 한다、過去形을 했다, 했었다形で代表させたうえで、非過去テンス形式の用法に「過去のことがらの質的側面のとりたて」があると説明している。それは、動詞の示す事柄は既におきたことであるが、過去時という特定時のかかわらせづけが捨象されている文である。伊藤英人(1989)において-겠-を含んだ文でも同様であるとの記述はないが、示唆するところが大きい。つまり、-는 게 아니겠-の形式で、過去の出来事を名詞句でひとかたまりとして取り上げて、時間的側面を切り捨て、否定 + 疑問の形式で迂回的に述べることによって、話し手の主張が強く聞き手に訴えかける文になっているのである。

6.3.2.3.3に加えてここでも아니겠-の形態を含んだ疑問形式の用例を見てきたが、これは同時に아니다を含んだ疑問形の修辭的表現の分析でもある。その中で-겠-が果たす役割を個別に取り出して深く考察するにはいたらなかったが、これは韓国語の疑問表現の考察の中に位置づけて論じられるべきものと考え、ここでは用例を示していくつかの指摘をするに留める。

以上述べたとおり、-겠-を用いた疑問形はさまざまな修辭疑問として用いられ、「質問」を目的として聞き手から情報を得ようとするよりは、話し手から聞き手へ情報や主張が伝達されている⁵⁶。修辭疑問においては-겠-を含む文と含まない文ではその意味的な差異が明瞭ではないことは先に述べたが、ただ、一部の述べ方の中には-겠-を取り除くことで、修辭疑問と解釈しにくくなる例がある。それは、6.3.2.3.4の行為を提案・督促する文、6.3.2.3.5の行為を求める文における肯定形式の文である。-겠-の有無を示して比較してみよう。

まず、行為を提案・督促する文である。

⁵⁶ このように、文の意味レベルで叙述文や命令文、勧誘文に近い文になるのは、-ㄴ 것이다、-ㄴ 것 같다など、他の非現実を表すムード形式には見られない-겠-特有の用法と考えられる。

(183)' a. 저 이쪽으로 서시겠어요?(BK9X0029)

b. 저 이쪽으로 서세요?

(183)'b のように-겠-を含まない例をみると、この発話が上昇イントネーションなら質問となり、下降イントネーションなら命令文となる。このように、-겠-を含まない場合は行動を促すという意味から離れる。

次に、行為を求める文である。

(186)' a. 이제 도마도 좀 주시겠습니까?(BK940027)

b. 이제 도마도 좀 주십니까?

(187)' a. 왜 그렇게 붙였는지 얘기 좀 해주시겠어요? (BK9X0002)

b. 왜 그렇게 붙였는지 얘기 (좀) 해주세요?

(186)'b はまな板をくれるかどうかを尋ねる文として成立し、依頼するニュアンスは感じられにくい。また疑問形語尾-ㅁ니까?が後続しているので命令文としては解釈できないことがわかる。

(187)'a は副詞좀が行為を求める意味合いをいっそう強めているが、(187)'b は副詞좀があると不自然さが感じられる。副詞좀が無い文として考えると、上昇イントネーションなら「話をしてくれるかどうか」を質問する文として解釈でき、下降イントネーションなら命令文と解釈されて行為を求めるというニュアンスがなくなる。

ここに挙げた、-겠-がないと修辭疑問として解釈しにくくなる例は、どれも事態が聞き手の行為に関わること、また聞き手が行う動作について話し手が言及しているという共通性が見られる。同時にこれらの文は意味的差異を感じさせるだけでなく、「主体の固定性」という観点から違いがあるので、8.2.2で再度述べることにする。

6.3.3. 疑問形の「普通疑問」の文における-겠-の役割

ここでは疑問形のうち、「普通疑問」だけを対象にして-겠-の役割を整理する。それは、「普通疑問」だけを叙述形に倣って形態統語論的観点から分類し、叙述形と疑問形を同じ基準で分類したからである。

-겠-が用いられた疑問形のⅠ型からⅣ型までの文のうち、Ⅰ型は聞き手が発話時以降に事態を成立させる意志があるのかを問い、非過去形式で用言に結合したⅢ型は発話時以降に事態が成立することに確実性を認識しているのかを問うている。これらに共通していることは、事態が未実現であり話し手が事態を未来に向けて尋ねているということであり、「未来性」がある。

次に、Ⅲ型の文のうち、時間副詞などと共起して「未来性」が認められる文以外は、聞き手が事態を断定し得ないまでも命題に確実性を認識しているのかを問うている。

最後に、I型には尋ね方が形式的であったり公式的な言い回しであったりする場合が認められた。III型の文の中には、事態を間接的にあるいは曖昧な問いかけかたが認められた。IV型の文の中には、直接的な尋ね方でなくまわりくどいしかたでの尋ね方が認められたが、これらは事態を間接的に問うということで「婉曲性」がある。

以上のことから、-烈-が用いられた疑問形の文は、I型からIV型までを通して「未来性」「確実性」「婉曲性」という要素が取り出せることがわかる。-烈-が用いられた疑問形の文に共通するこれらの要素が、-烈-によってもたらされたものであるならば、それが文の意味の実現における-烈-の役割と言える。

「未来性」「確実性」「婉曲性」を-烈-の役割と仮定して、各要素がどの型の文に現れるのかを示すと次の表のようになる。横軸の要素が縦軸の文に現れる時は○、現れない時は×、現れ方が不明瞭な時は△で示した。

【表 17】 各型の文に現れる-烈-の役割

	未来性	確実性	婉曲性
I型	○	×	○
III型	△	○	○
IV型	×	×	○

表 17 を見ると、I型の文には「未来性」と「婉曲性」が認められ、III型の文には「未来性」「確実性」「婉曲性」のすべてが認められ、IV型の文には「婉曲性」しか認められない。これら3つの要素は単独で認められる場合もあれば重なって認められる場合もあり、互いに排除することなく文の意味の実現に関わっているといえることができる。

6.4. 形態素-烈-の機能

ここでは、-烈-が文の意味の実現に「未来性」「確実性」「婉曲性」をもたらす機能があるかを見る。分析の方法は叙述形に倣って、主に文レベルで、-烈-の有無が文の意味にどのような差異をもたらすのかを分析する。-烈-の有無を対比させて用例を提示する場合、コーパスから収集した用例は a、a の用例から-烈-を抜いた用例は b で示す。時間語および感嘆詞などの共起によって-烈-を抜いた文が不自然になる場合は、それらの要素を除いた部分のみを示すことにする。

6.4.1. 未来性

「未来性」が認められるのは、I型とIII型であった。これより用例を見ることにする。

6.4.1.1. I型に見られる未来性

まず、I型の文に認められる「未来性」が、形態素-烈-によってもたらされた要素であるのかを見ることにする。

(194) a. 아니, 어떻게 그 돈을 하루에, 뭐에다 쓰시겠어요?(BK950017)

え、それほどの額のお金を一日で、何にお使いになりますか。

b. 뭐에다 쓰세요?

(194)a の場合は発話時以降、何にお金を使うのかと尋ねているので事態は未実現であるが、(194)b の場合は実現しつつある動作や習慣的なお金の使い方について尋ねているという解釈も可能であり、必ずしも未実現の事態とは言えない。

(195) a. 지금 마음이 착잡하시겠지만요, 진정을 하시구요, 남편의 첫사랑, 어떻게, 인정하시겠습니까?(BK950018)

今は気持ちが乱れていらっしゃるでしょうが、落ち着いて、ご主人の初恋を、どうですか、認められますか。

b. 남편의 첫사랑, 어떻게, 인정하십니까?

(195)の述語인정하다は動作性のない動詞であるが、(195)a の場合、今はまだ認めていないが今後の態度について尋ねている。一方(195)b の場合は発話の時点で認めているかどうかを尋ねているとも解釈できる。-겠-がなければ(195)b のように既実現の事態か未実現の事態か区別がはっきりしない。

以上のことから、I型の文は聞き手が発話時以降に事柄を実現させるのか否か、またどのように実現させるのか尋ねているので、事態は未実現であることがわかる。I型の文における-겠-は、事態が未実現であり文の意味に「未来性」を加える機能を担っている⁵⁷。

聞き手の意志を問うとき、既に決定されている事柄について尋ねる場合と、その場で決めるべき事柄について尋ねる場合がある。例えば、食事に出かけた先で話し手が聞き手に何を食べるかと-겠-を用いて尋ねるような場合で、これから食事をしようとする現場で、今まさに食べるものを決めようとしている場面である。このように発話の現場における意思決定について問いかける時には-겠-を用いた疑問形式がふさわしいのであろう。

6.4.1.2. III型に見られる未来性

次に、III型の文に認められる「未来性」が、形態素-겠-によってもたらされた要素であるのかを見ることにする。

⁵⁷ 聞き手の意志を問う場合に-겠-が用いられているからといって、-겠-が意志を問う機能を担っているわけではない。聞き手に対してその意志を問う形式は「쓰시다」を例にとれば、「쓰세요?」「쓰실 거예요?」「쓰실 작정이예요?」「쓰실 생각이예요?」「쓰실래요?」などの形式を用いても意志を問う文として意味は成立しうる。つまり、主体が聞き手で意志動詞に結合すれば、意志を問う文になりうるのであり、-겠-が機能して意志を問う文が成立しているものでないことがわかる。このことは叙述形の分析においても同様であった。

(196) 모두가 경제를 살리기 위해서 이렇게 합심하고 있는데 이 경기는 과연 언제쯤 얼마만큼 좋아지겠습니까?(CK000137)

皆で経済を立て直そうとこんなに結束していますが、この景気は果たしていつごろ、どれくらい良くなるのでしょうか。

(197) 이 뒷이야기 어떻게 됐으면 좋겠어요?(CK000146)

この後の話、どうなってほしいですか。

(196)は疑問詞と共起し、(197)は条件を表す連結語尾-(으)면と共起している。いずれも発話時より後の、未だ実現していない事態のあり方について問いかけていることがわかる。(196)は좋아지다という動詞の語彙的意味からも「未来性」が感じられるし、(197)は뒷이야기という語彙からも「未来性」が感じられる。

Ⅲ型の疑問形で、動詞語幹あるいは文法的連語に結合して発話時以降の事態について尋ねることがあるが、発話時より後のことについての問いかけなので「未来性」があることはわかる。しかしその「未来性」は-겠-がもたらしたかどうかははっきりせず、用言の語彙的意味や連結語尾などの要因からのものとも考えられる。そのため、表 17 のⅢ型の文に「未来性」が現われるかは△で記しておいた。

6.4.2. 確実性

「確実性」が認められたのはⅢ型の文のみである。Ⅲ型の文における「確実性」の現れ方を見る。

6.4.2.1. Ⅲ型の非過去形式に見られる確実性

まず、非過去形式の文に認められる「確実性」が、形態素-겠-によってもたらされた要素であるのかを見ることにする。ここでは、用言に直接結合した用例、そして文法的連語に結合した用例の順に見ていくことにする。

(198) a. 머리에 들어가겠어?(CK000147)

頭に入るのか。

b. 머리에 들어가?

(198)の例は、オートバイのヘルメットが聞き手の頭のサイズに合うのか、君の頭に入るのかと尋ねたものである。(198)b の場合なら、ヘルメットが入るかどうかの可否を尋ねているのであるが、(198)a の場合は、聞き手が「頭に入る」という事態に確実性があると認識しているかを尋ねている。

(199) a. 아이엠에프 한파만큼이나 춥겠습니까?(CK000137)

IMF のときの寒波ほど寒いでしょうか。

b. 아이엠에프 한파만큼이나 춥습니까?

(199)は形容詞に結合した用例である。ラジオの視聴者が司会者に対して、気温の低さと経済危機の厳しさを「寒さ」に擬えて尋ねている。-이나という助詞があるので反語的にも捉えられるが、(199)bは聞き手が事態の真偽を知っているとの認識で尋ねているのに対して、(199)aは経済危機の寒さと比べてどのように判断されるのか思い描いてみるように促しているようである。

(200) a. 엄마 정말 잘 할 수 있겠어요?(CK000153)

ママ、本当にうまくできるの。

b. 엄마 정말 잘 할 수 있어요?

(200)は可能性を表す形式に結合した用例である。(200) bのように尋ねると事態の可能性の有無を問うことになるが、(200) aのように-겠-を用いることで聞き手自身の考えを尋ねる文になる。

以上のことから、Ⅲ型の文の疑問形の非過去形式における「確実性」とは、話し手が事柄に対する真偽そのものについて聞き手から応答を得ようとするのではなく、事態の成立を確信的に捉えて聞き手が高い確実性を認めているかどうかを問うことである。話し手はその根拠を聞き手自身の判断に頼ろうとしており、関心は聞き手の認識や見解にある。Ⅲ型の文における-겠-は、疑問化された事態に確実性の認識の有無を区別する機能を担っている

6.4.2.2. Ⅲ型の過去形式に見られる確実性

次に、過去形式の文に認められる「確実性」が、形態素-겠-によってもたらされた要素であるのかを見ることにする。

(201) a. 시간외수당 108000 원, 직책수당 20000 원, 근속수당 35000 원, 휴일근로 야간근로수당, 뭐 이런 것들이 있는데요, 뭐 이 정도면은 진짜 일 많이 하셨구 월급두 상당히 되셨어요?(BK950017)

時間外手当 108000 ウォン、職責手当 20000 ウォン、勤続手当 35000 ウォン、休日出勤手当、夜間勤務手当、などがありますが、これぐらいならほんとうによく働いて、給料も相当な額になったでしょうね。

b. 월급두 상당히 되셨어요?

(201)は過去形式の用例で、内容は聞き手の収入について述べたものである。(201)bのように-겠-がない場合は、収入が相当な額になるのかそうでないのかを尋ねているが、(201) aのように-겠-が含まれると、話し手が相当な額になるだろうという認識をもっており、それを聞き手に提示しているようである。6.3.1.2.2でⅢ型の疑問形の過去形式の文は話し手の認識のあり方を確認するするニュアンスがあることを述べた。-겠-が用いられな場合

は聞き手の収入について話し手は判断がまったく成立しない状態で尋ねているが、-ㄹ-が介入することによって話し手の認識が命題に含まれそれが疑問化されるということになる。つまり、-ㄹ-は文の意味に話し手の認識する「確実性」をもたらすということになる。

過去形式では聞き手の応答を求めるというよりも、過ぎ去った事柄に対する話し手自身の認識を伝えているようで、-ㄹ지-の形式で言い換えができそうな同意を求める意味が含まれる。Ⅲ型の用例中、過去形式は7例あったが、同意を求めるニュアンスを帯びた文が多かった。

6.4.3. 婉曲性

「婉曲性」はⅠ型、Ⅲ型、Ⅳ型すべての文に認められた。ここでは「婉曲性」が形態素-ㄹ-によってもたらされた要素であるのかを見ることにする。

6.4.3.1. Ⅰ型に見られる婉曲性

まず、Ⅰ型に見られる「婉曲性」が、形態素-ㄹ-によってもたらされた要素であるのかを見ることにする。

(202) a. 다른 것은 다 잊어버리고요, 당신은 나의 운명부터 시작하시겠어요?

(BK950011)

ほかの事はすべて忘れて、「君は我が運命」(歌の題名)から始められますか。

b. 다른 것은 다 잊어버리고요, 당신은 나의 운명부터 시작하세요?

(203) a. 그럼 다음주에는 어떤 건축물을 소개해 주시겠습니까?(CK000160)

それでは来週は、どんな建築物を紹介していただけますか。

b. 그럼 다음주에는 어떤 건축물을 소개해 주십니까?

(202)(203)ともに聞き手が事態の動作を実現させるのかを尋ねた文である。いずれも尊敬の-시-と共起しているので聞き手に丁寧に尋ねていることはわかる。そのうえで、(202)bのように-ㄹ-がないと単に事態の可否を尋ねるにとどまる文であるが、-ㄹ-が用いられることで、格式ばったニュアンスが加わる。それによっていっそう丁寧さがまして聞き手に柔らかな印象をあたえることができるようである。

授受を表すムード形式に尊敬の-시-と-ㄹ-が共起して-어 주시겠어요?という形式では修辭的に依頼を表すことが多いが、(203) aは質問する文として成立している。これは 어떤 という疑問詞があるせいとも考えられ、聞き手が主体で疑問詞を伴う文は修辭疑問にならないようである。このことは、6.3.2.3.5の行為を求める文において指摘したことと一致する。

6.4.3.2. Ⅲ型に見られる婉曲性

次に、Ⅲ型に見られる「婉曲性」が、形態素-ㄹ-によってもたらされた要素であるのかを見ることにする。

(204) a. 야, 그 남자 말고 난 어떻게 안 되겠냐?(CK000146)

おい、その男じゃなくて、何とか僕ではだめだろうか。

b. 야, 그 남자 말고 난 어떻게 안 되냐?

(205) a. 아니요, 선배님, 괜찮으시겠습니까?(BK940019)

いや、先輩、大丈夫ですか。

b. 아니요, 선배님, 괜찮으십니까?

(204)は動作性のない動詞に結合した用例である。話し手が聞き手に、他の男性ではなく自分と付き合ってくれと申しこんでいる場面である。(204)b の場合はだめかどうか、直接的な尋ね方であるが、(204)a の場合は控えめに相手の顔色をうかがったおもねるような聞き方で、自己をアピールするには-ㄹ-が含まれない時よりも説得力に欠けるようである。(205)a は形容詞に結合しているが、-ㄹ-を用いることで聞き手の状況や感情に寄り添った、慮るようなニュアンスが感じられる。

6.4.3.3. IV型に見られる婉曲性

最後に、IV型に見られる「婉曲性」が、形態素-ㄹ-によってもたらされた要素であるのかを見ることにする。

(206) a. 십오분도 저러고 있는 거 보면 모르겠니?(CK000150)

15分もああしているのを見て、わからないのか。

b. 십오분도 저러고 있는 거 보면 모르니?

(207) a. 그 숫자가 몇 명 되겠어요?(BL940003)

その数は、何人ぐらいになりますか。

b. 그 숫자가 몇 명 돼요?

(206)a は모르다という否定の語彙を用いているが、-ㄹ-が加わることで曖昧な尋ね方になり、非難的なニュアンスが和らぐ。(207)は「그 숫자가 몇 명이예요?」とも言い換えられるが、(207)b のように-(가) 되다の形式で尋ねるとまわりくどくなるし、さらに(207)a のように-ㄹ-が加わることで曖昧な感じになり、具体的数字の提示を求める直接的表現を避けることができる。

これまでの分析から、IV型の文の疑問形における「婉曲性」とは、直接的な表現を避けて間接的に尋ねることでやわらかさを加えたり、定まった言い回しを用いてまわりくどく問いかけることで丁寧さを加えたりすることである。

6.5. -ㄹ-の機能と-ㄹ-を含んだ文の特徴

ここでは、6.3 と 6.4 の分析結果に基づいて疑問形の文における-ㄹ-の機能と-ㄹ-を含んだ文の特徴について述べる。

6.5.1. 文法的機能

これまでの用例を分析したところ、-烈-は疑問形の文の意味の実現において事態に「未来性」と「確実性」をもたらす機能があることが明らかになった。この2つの機能の関係性については、5.5.1の叙述形の文で述べたように「非現実」を上位概念として位置付けることができる文法的機能である。

6.5.2. 語用論的機能

「未来性」と「確実性」が文法的機能であるのに対して、「婉曲性」は疑問形の文の意味の成立に文法的対立をもたらすことはない。事柄を直接的に表現するか、間接的に表現するかの違いであり、話し手が選択的に言語を操作する語用論的機能である。物事を間接化させるということは、遠まわしに述べたり曖昧に述べたりすることによって直接的に述べる場合とその表現方法は異なるものの、情報自体が異なった内容に変容するものではない。

本章では、疑問形を大きく「普通疑問」と「特殊疑問」に分けて考察を行った。「普通疑問」においてはI型、III型、IV型をとおしてすべての文の型で「婉曲性」が認められ、それが丁寧さや、柔らかさ、また聞き手の心中を慮るような、時には聞き手におもねるような印象をもたらすことがわかった。

「特殊疑問」は、下位分類として終結語尾-シと結合した確認要求の用法、終結語尾-ニガと結合した疑念を表す用法、そして修辞疑問があったが、ここで修辞疑問と「婉曲性」という語用論的機能について考えてみることにする。

修辞疑問は疑問形でありながら疑問文以外の役割を帯びて文の意味が成立する。疑問形の本来の目的が、話し手に不明な部分があり、それを聞き手に示して応答を求め、不明な部分を解消することを目的とした「質問」ならば、修辞疑問は、話し手は事態に対する判断が成立しており聞き手に提示するのは話し手が疑問とするところではなく、聞き手に知識や情報を求めているので、質問以外の目的を持った疑問形である。つまり情報を要求する形式ではなく話し手の持つ情報や主張を聞き手に伝えるという他の目的を持って疑問形を選択しているのである。疑問形の姿そのままを聞き手に差し出したのでは目的は達成できないので、疑問形に何らかの装置を用いて加工したのちに聞き手に差し出さない以上、聞き手は疑問形の文字通りの意味として捉えるしかなく、話し手の意図は伝わらない。また、加工した形の意味、装備された装置の機能を聞き手が知らない場合も、話し手の意図が伝わらないのは同じである。そのため、話し手が疑問形を用いて修辞的に文を聞き手に提示するのは、聞き手もそれを了解できる発話環境、発話状況、文脈でなければならない。

本稿では、6.3.2.3で修辞疑問をさらに6つに分けて分析を行った。まず、反語表現、感嘆を伝える文、行為を求める文、行為を提案・督促する文、聞き手の喚起を促す文、過去の事柄を説明する文である。これらの文は-烈-の有無で意味的差異がさほど感じられないものもあれば、-烈-がなければ自然さを欠いた文になるもの、あるいは修辞疑問にならないものもあった。

疑問形で修辞疑問が多いのは、疑問形自身が修辞的表現を用いるのに効果的で利用しやすいからであろうが、それに-烈-はさらなる語用論的意味を付与すべく選択されて用いら

れると考えられる。

6.5.3. -ㄹ-を用いた疑問形の文に現れる特徴

6.3 及び 6.4 の分析を通して、-ㄹ-を用いた疑問形の文には 3 つの特徴が認められた。第一には「現場性」である。これは、叙述形にも現われた特徴であるが、文の意味に「発話時に・発話現場で」というニュアンスが感じられるということであった。疑問形の文でも、I 型の文で聞き手の意志を尋ねる場合、発話現場で決定すべき事柄について問いかけている。IV 型の文では、動詞알다に結合して尋ねる時、話し手が発話の現場で示した事柄に対して、聞き手が今この局面で「理解完了」したかどうかを問う場合に限られる。III 型に認められる「確実性」は、話し手と聞き手が情報を交わす現場の事柄やその場の根拠に依る場合に成立するので、おのずと「現場性」を帯びた文になるようである。このように発話の参与者に限定された状況で成立するため、叙述形の場合と同様に一般的真理や習慣的なことについて尋ねるときには-ㄹ-を含んだ疑問形は用いられにくい。それはこれらに「現場性」がないからであろう。このことは次に述べる「主体の固定性」へと 2 次的に表出されていくと思われる。

第二に、「主体の固定性」である。これは、文の中で明示されていないものの、主体が聞き手であることが固定している場合を指す。叙述形で固定されている主体は話し手を指していたが、疑問形では聞き手に転ずる。I 型の文で聞き手の意志を問うとき、特に-시-と共起したときは、尊敬を表す対象が聞き手であることが顕著である。III 型の文でも、聞き手が確実性を認識しているのかを尋ねているし、IV 型で「아시겠어요?」と問えば、必ず聞き手が理解したかを問うていることがわかる⁵⁸。

第三に、聞き手に対して投げかけられた問いかけの中に、話し手の認識が強く反映されていることである。疑問形は本来、話し手がわからないことを聞き手に問いかけるために用いられる文体であり、話し手は事態に対する判断が未成立のはずである。ところが、-ㄹ-を用いた疑問形の文の中には少なからず話し手の認識のありかた、事態に対する見込みといったものが感じられる。疑問化された事態に対して話し手が何らかの予測を込めて聞き手に尋ねる用例が観察された。本稿ではこのような現象を「前提性⁵⁹」と呼ぶことにする。「前提性」とは、話し手が聞き手に対して尋ねるときに、事態の真偽や成立に何らかの予測を持っていることをいう。これは、叙述形には見られない、疑問形特有の特徴である。

ここに挙げた 3 つの特徴については、第 8 章で用例を提示しながら詳しく述べることにする。

⁵⁸ 同時に、疑問形の中には「話し手」の存在も色濃く感じられる場合もある。III 型では話し手の判断が盛り込まれたまま聞き手に尋ねる場合があるし、過去形式では話し手の判断を聞き手に確認するような尋ね方であった。-ㄹ-を用いた疑問形式は、事態に対する判断を完全に聞き手に託すのではなく、話し手自身の判断を塗り込んで聞き手に問いかけることができるように感じられる。

⁵⁹ 全恵子(2013)で初めて-ㄹ-が用いられる疑問形の特徴を「傾き」という用語で説明したが、전혜자(2013)で「前提性」に変更して称した。

6.6. まとめ

本章では-ㄹ-が用いられる疑問形を大きく「普通疑問」と「特殊疑問」にわけてそれぞれを下位分類して論じた。「普通疑問」は叙述形にならって文法的基準を定めて用法を分類した後、文の意味と形態素の機能を区別して分析し、「特殊疑問」は文の意味的側面に注目して分析した。その結果明らかになったことを以下に示す。

- 1) -ㄹ-が用いられる疑問形の文の「普通疑問」は、主体、結合する用言の種類、他の語尾との結合制約、テンポラリティという文法的基準に照らして分類すると3種類の型に分かれる。これら文法的特徴はそれぞれの型の文の用法においても違いがあり、聞き手の意志を尋ねる用法、命題に確実性を認識しているのかを尋ねる用法、発話時に主体が置かれている状態について尋ねる用法として分類できる。便宜上これらを叙述形に準じてⅠ型、Ⅲ型、Ⅳ型の疑問形と称した。
- 2) 「普通疑問」のⅠ型、Ⅲ型、Ⅳ型の疑問形の文が、それぞれの文の意味の実現において、形態素-ㄹ-には「未来性」「確実性」「婉曲性」をもたらす役割がある。これらは互いに排除することなく文にあって機能しながら文の意味の実現に関与する。
- 3) 「普通疑問」において「未来性」と「確実性」は、事態を「非現実」のものとして捉えた述べ方であり、文の意味の実現に「現実」に対する「非現実」という文法的な対立をもたらす文法的機能である。
- 4) 「普通疑問」における「婉曲性」は、事態を間接的に述べるものであって「非現実」のものとして捉えた述べ方ではなく、文の意味の実現において文法的対立に直接関与しない語用論的機能である。「婉曲性」は丁寧さや曖昧さなどの語用論的效果をもたらす。
- 5) -ㄹ-が用いられる疑問形の文の「特殊疑問」は、終結語尾-시と結合する確認要求の用法と終結語尾-는가と結合する疑念の用法、そして修辞疑問に下位分類される。
- 6) 終結語尾-시と結合する確認要求の用法、及び終結語尾-는가と結合する疑念の用法における-ㄹ-の役割は、ムードの観点から「非現実」を表す機能があるということを明らかにするに留まった。
- 7) 「特殊疑問」に下位分類される修辞疑問は、さらに反語表現、感嘆を伝える文、話し手の認識を聞き手に提示して同意を求める文、行為を提案・督促する文、行為を求める文、過去の事柄を説明する文の6つに分けることができる。修辞疑問においては、-ㄹ-の有無による意味的な差異が曖昧で、形態素-ㄹ-の機能を明確に見出すことは困難であった。

しかし、用例を詳しく観察した結果、次の3点を指摘しうる。第一に、-ㄹ-を含んだ反語は、相手の発話内容に対して反発するときや、対話における応答では現れにくいことが観察された。第二には、「名詞/名詞句 + 아니ㄹ-?」の形態で話し手の認識を聞き手に提示して同意を求める文においては、同意要求はできても確認要求はしにくい。他方、-ㄹ-が介入しない「名詞/名詞句 + 아니-?」の場合は同意要求も確認要求も発見の驚きも伝えられることが観察された。このことから、話し手の中で事態への判

断が成立するには段階があると考えられ、判断が成立していない場合には-ㄷ-が介入しないほうが自然であるということが出来る。最後に、行為を提案・督促する文、行為を求める文における肯定形式の文のうち、聞き手の動作に言及する文では-ㄷ-の介入なしでは修辞疑問として成立しなくなる。

- 8) -ㄷ-を用いた文には「現場性」「主体の固定性」「前提性」といふ3つの特徴があることを確認した。叙述形の文の考察でも述べたとおり、「現場性」とは文の意味に「発話時に・発話現場で」というニュアンスが感じられることである。「主体の固定性」とは、主体が明瞭に提示されないまでも、それが疑問形においては聞き手であることの固定性が認められるということである。そして、本章において新たに確認できた「前提性」とは、話し手が聞き手に対して尋ねるときに、疑問化された命題の成立及び真偽判断に何らかの予測を持っていることをいう。この「前提性」は、疑問形の文にのみ認められる見られる特有の現象である。

以上のことから、現代韓国語の先語末語尾-ㄷ-を含んだ疑問形は「特殊疑問」と「普通疑問」に下位分類され、「普通疑問」においては、文の意味の実現に「未来性」と「確実性」をもたらす文法的機能を有し、異なった次元で派生的に「婉曲性」をもたらす語用的機能も備えた形態素であることがわかった。また、-ㄷ-を用いた疑問形の文には「現場性」と「主体の固定性」に加えて新たに「前提性」という特徴があることも明らかになった。一方、「特殊疑問」のもとに下位分類される確認要求の用法、及び疑念の用法における-ㄷ-の役割は、「非現実」を表す機能があることを明らかにした。また、修辞疑問における-ㄷ-の役割を明らかにすることはできなかったが、用例の観察を通して、-ㄷ-を含んだ文が反語として現れにくい発話状況、「名詞/名詞句 + 아냐ㄷ-?」の形態では判断が成立していない事態の確認要求がしにくいこと、特定の文において-ㄷ-がなければ修辞疑問として成立しなくなることを指摘した。

従来の研究においては、疑問形における-ㄷ-の詳細な研究が見過ごされていたが、本稿において初めて疑問形の文を詳細に分類しながら、疑問形における-ㄷ-の役割を考察することで、叙述形だけでは見えなかった新たな-ㄷ-の機能的、意味的一面を明らかにすることができた。

第7章 叙述形と疑問形の対照

本章では叙述形と疑問形を対照させながら、-ㄷ-の機能や特徴の現れ方を整理する。

第5章と第6章において叙述形と疑問形をそれぞれ同じ基準で分類したが、それぞれの形式の文が対をなして並行的に成立するのか、それぞれの機能は同様に現れるのか、文の特徴は同じ様相で現れるのかあるいは違いがあるのか、違いがあるなら両形式にそれぞれ特有の特徴があるのかを整理する。

7.1. 文の種類の特照

第5章及び第6章の分類から、叙述形と疑問形が並行的に文の型が成立するとは限らないことがわかる。ここでは4つの型の文を、さらに文法的結合制約及び共起の関係から下位分類し、どの型の文が疑問形として成立しないのかを詳しく見ることにする⁶⁰。インフォーマント調査をもとに、叙述形で成立する場合は用例を示し、疑問形として成立しない場合は×で示し、成立しうるが不自然な表現と感じられるものには△を付した。

[表 18] I型の下位分類

叙述形		主体が話し手	結合用言		テンポラリティ	用例
			動	存		
	I A	+	+	-	未来	내일 다시 오겠습니다. (CK000150)
	I B	+	-	+	未来	난 그냥 여기 있겠어. (BEXX0025)
疑問形		主体が聞き手	結合用言		テンポラリティ	用例
			動	存		
	I A	+	+	-	未来	아, 그런데 3.5를 하나 공짜로 드리고 싶은데 타시겠습니까? (BK9X0020)
	I B	+	-	+	未来	넌 그냥 여기 있겠어? (作例)

表 18 を見ると、I型はI A、I Bともに叙述形と疑問形の文が並行的に成立することがわかる。

[表 19] II型の文の下位分類

叙述形		主体が話し手	結合用言		テンポラリティ	用例
			動	存		
	II A	-	+	-	未来	해석원리란 제목의 강의를 들으시겠습니다. (BL950009)
	II B	-	-	+	未来	먼저 김대중 대통령의 인사 말씀이 있으시겠습니다. (CK000138)

疑問形の文の中には、II型の文と対をなすような用法は分類できなかつた。表 19 のII Aの用例を疑問形にすると聞き手の意志を尋ねる文になる。II Bの用例を疑問形にすると何を尋ねているのか解釈しがたい文となってしまう。予告とは話し手が聞き手に対して一方通行的

⁶⁰ 下位分類の表に示した用例には新たに加えられたものもあるが番号を付さないことにし、コーパスでは用例が検索できない場合は作例をもって用例として示した。また表の中では、動詞は動、存在詞は存、形容詞は形、指定詞は指と略して表記する。

になされる発話であるため疑問形が成立しないものと考えられるので、予告を尋ねるという用法は成立しないことから、Ⅱ型は疑問形を持たない型であるということが出来る。

[表 20] Ⅲ型の文の下位分類

	主体が話し手	結合用言				았/았의共起	더의共起	テンポラリティ	用例
		動	存	形	指				
ⅢA	+	+	-	-	-	-	-	未来	나는 못 가겠어. (作例)
ⅢB	+	-	+	-	-	-	-	現在/未来	나는 못 있겠어. (作例)
ⅢC	+	-	-	+	-	-	-	現在/未来	내가 좋겠어. (作例)
ⅢD	+	-	-	-	+	-	-	現在/未来	언니가 박사라면 난 천재겠다. (作例)
ⅢE	+	+	-	-	-	-	+	過去	제가 한문을 좀 읽어 드리고 싶은데 못 읽겠드라고요. (BK950004)
ⅢF	+	-	+	-	-	-	+	過去	나는 못 있겠더라. (作例)
ⅢG	+	-	-	+	-	-	+	過去	이서방, 나는 떡만 먹고 산다면 좋겠더라. (BEXX0005)
ⅢH	-	+	-	-	-	-	-	現在/未来	양원경씨 고향동네 어머니가 시장을 한 열 바퀴 도시겠어요. (BK950004)
ⅢI	-	-	+	-	-	-	-	現在/未来	동기들보다는 나이가 좀 더 있겠는데요. (BK950015)
ⅢJ	-	-	-	+	-	-	-	現在	잡 구지민씨는 좋겠다. (CL000191)
ⅢK	-	-	-	-	+	-	-	現在	근데 그게 잘 산다는 게 비가 오면은 위로의 말이겠죠. (CL000193)
ⅢL	-	+	-	-	-	+	-	過去	엄마도 우셨겠네, 뒤에서. (BK950024)
ⅢM	-	-	+	-	-	+	-	過去	이 얘기를 모르는 분들도 많이 계셨겠네요. (BK950024)
ⅢN	-	-	-	+	-	+	-	過去	요즘에 입시철 뭐 바쁘셨겠습니까. (BK950007)
ⅢO	-	-	-	-	+	+	-	過去	요즘 얼굴 상하신 게 저 정도니까 젊은 시절엔 굉장히 미인이셨겠어요. (BK950018)
ⅢP	-	+	-	-	-	-	+	過去	정말 돌이 마음 맞아서 잘 하겠더라고요. (BK940019)
ⅢQ	-	-	+	-	-	-	+	過去	눈 깜짝할 사이에 물이 불어나는데, 사무실 안에 있는 소금이나 서류는 손쓸 거를도 없겠더라고요. (CB98D286)
ⅢR	-	-	-	+	-	-	+	過去	당신이 영화로 만들어도 좋겠더군요. (CE000021)
ⅢS	-	-	-	-	+	-	+	過去	종계만 나갔다가는 망신당하기 십상이겠더라고요 (CE000079)
	主体が聞き手	結合用言				았/았의共起	더의共起	テンポラリティ	用例
		動	存	形	指				
ⅢA	+	+	-	-	-	-	-	未来	내일 내가 불일이 있는데 너 대신 못 가겠어? (作例)
ⅢB	+	-	+	-	-	-	-	現在/未来	넌 못 있겠어? (作例)
ⅢC	+	-	-	+	-	-	-	現在/未来	이 뒷이야기 어떻게 됐으면 좋겠어요? (CK000146)
ⅢD	+	-	-	-	+	-	-	現在/未来	×
ⅢE	+	+	-	-	-	-	+	過去	△
ⅢF	+	-	+	-	-	-	+	過去	△
ⅢG	+	-	-	+	-	-	+	過去	×
ⅢH	-	+	-	-	-	-	-	現在/未来	노래가 나오겠어요? (BK950026)
ⅢI	-	-	+	-	-	-	-	現在/未来	그 사람이 아직 거기 있겠어요? (作例)
ⅢJ	-	-	-	+	-	-	-	現在	범인 열 명을 놓치면 신문, 방송이 조용하겠어요? (BK9X003)
ⅢK	-	-	-	-	+	-	-	現在	뭐 한 두개이었습니까. (CL000191)
ⅢL	-	+	-	-	-	+	-	過去	선생님들도 뭐 좀 나무랄래도 좀 눈치 보였겠어요? (BK9X0029)
ⅢM	-	-	+	-	-	+	-	過去	이 얘기를 모르는 분들도 많이 계셨겠어요? (作例)
ⅢN	-	-	-	+	-	+	-	過去	꽤 힘들었겠어요? (BK950016)
ⅢO	-	-	-	-	+	+	-	過去	△
ⅢP	-	+	-	-	-	-	+	過去	△
ⅢQ	-	-	+	-	-	-	+	過去	△
ⅢR	-	-	-	+	-	-	+	過去	△
ⅢS	-	-	-	-	+	-	+	過去	×

表 20 を見ると、Ⅲ型は、ⅢA からⅢC のように主体が聞き手でテンポラリティが未来か現在の場合は結合用言が指定詞以外の場合は叙述形と並行的に疑問形が成立する。しかし、主体が聞き手でも用言が指定詞のときは疑問形に結合制約が有り、同時に指定詞以外でも-더-と共起してテンポラリティが過去のときは疑問形が成立しないか反語表現となりやすいことがわかった。また主体に聞き手が含まれないときは、指定詞と結合しかつ-았-と共起した場

合と-더-と共起してテンポラリティが過去の場合は疑問形が成立しにくいことが見てとれる。つまり主体との関連性を考慮しなくても、-더-と共起する場合は疑問形が成立しにくいということが言えるが、これは-ㄹ-に起因するものか-더-に起因するものかは解釈が難しい。また-더-以外に△が付されている用言は指定詞であった。Ⅲ型の疑問形の文が一定の文法的条件のもとでは「普通疑問」として認めにくいことを見ると、Ⅲ型は疑問形が成立しにくいことがわかる。

[表 21] IV型の文の下位分類

叙述形		主体が話し手	結合用言		テンポラリティ	用例
			動	存		
	IVA	+	+	-	現在	알겠습니다. (BK950026)
	IVB	-	+	-	現在	2만원 되겠습니다. (전혜영 (1995) より)
疑問形		主体が聞き手	結合用言		テンポラリティ	用例
			動	存		
	IVA	+	+	-	現在	우조・계면조 이 말이 언제부터 쓰였는지 그건 모르시겠어요? (BM9X0001)
	IVB	-	+	-	現在	‘아빠의 청춘’, 준비 되겠습니까? (BK950018)

表 21 を見ると、IV型は叙述形と疑問形が並行的に成立しうることがわかる。しかし次の文のように慣用句的表現や固定した言い回し⁶¹の文の中には疑問形を持たない文もある。用例を見よう。

(36) 침 뵈겠습니다. (CL000189)

(208) 별 이상한 사람 다 보겠네. (作例)

まったくおかしい人だなあ。(おかしい人を見るなあ。)

(36)はあいさつ表現、(208)は誇張表現として常に「별 ~ 다 ~」の形態で用いられるが、これらは疑問形が成立しない文である。

以上、叙述形と疑問形の文の種類とそれぞれのモダリティ的意味について対照させた結果を以下にまとめる。

[表 22] 文の種類への対照

	叙述形	疑問形
I型	・話し手の意志を述べる	・聞き手の意志を問う
II型	・予告する	—

⁶¹ 6.3.2.3.6の修辞疑問の分析を通して、文の意味として叙述文や命令文、勧誘文に近い文になるのは、他の非現実を表すムード形式には見られない-ㄹ-の特徴であることを述べたが、ここで述べたように-ㄹ-が定まった言い回しで慣用句として用いられることも、-ㄴ 것이 다や-ㄴ 것 같다などの他の非現実を表すムード形式には見られない特徴と言える。

Ⅲ型	・ 高い確実性を認識する	・ 聞き手が事態に高い確実性を認識しているかを問う
		・ 疑問化された事態に話し手の否定的見込みが感じられる ・ -더-と共起する場合は疑問形が成立しない場合がある ⁶² 。
Ⅳ型	・ 主体が発話時にどのような状態に置かれているかを述べる	・ 主体が発話時にどのような状態にあるか問う
		・ 慣用句的な場合は疑問形式が成立しない場合がある。

表 22 から文の種類を対照させると、叙述形は 4 種類の文に分けられるが、疑問形は 3 種類にしか分けられない。疑問形には予告する用法がないのでⅡ型の疑問形が成立せず、また、Ⅲ型及びⅣ型においても、一部疑問形が成立しない場合があることがわかる。

7.2. -ㄹ-の機能の対照

ここでは、叙述形と疑問形でそれぞれ-ㄹ-の機能が並行的に現れるかを観察する。-ㄹ-の機能は文法的機能として「未来形」と「確実性」、語用論的機能として「婉曲性」があった。「未来性」はⅠ型とⅢ型に認められ、「確実性」はⅢ型だけに認められ、「婉曲性」は全ての型に認められた。それぞれの機能が両形式のそれぞれの型の文に現れるのか順に見ていくことにする。

<未来性>

次に示す 2 つの文は、Ⅰ型の叙述形と疑問形として対をなし、共に事態は未実現で、「未来性」が認められる。

(6)' 내일 다시 오겠습니다. (CK000150)

(194)' 아니, 어떻게 그 돈을 하루에, 뭐에다 쓰시겠어요? (BK950017)

次に示す 2 つの文は、Ⅲ型の叙述形と疑問形として対をなし、共に発話時以降の事態について述べているので文のレベルでは「未来性」が認められるが、それが時間副詞に起因しているとも考えられるので、-ㄹ-の機能かどうかは不明瞭である。

(59)' 내일 아침 양원경씨 고향동네 어머니가 시장을 한 열 바퀴 도시겠어요.
(BK950004)

(196)' 모두가 경제를 살리기 위해서 이렇게 합심하고 있는데 이 경기는 과연 언제쯤

⁶² これは、-ㄹ-と-더-の共起性の問題か、-더-の問題かは判断しがたい。

얼마만큼 좋아지겠습니까?(CK000137)

<確実性>

次に示す 2 つの文は、Ⅲ型の叙述形と疑問形として対をなし、共に事態に「確実性」が認められる。

(65)' 와, 너무너무 재미있겠다.(CK000148)

(199)' 아이엠에프 한파만큼이나 춥겠습니까?(CK000137)

<婉曲性>

次に示す 2 つの文は、Ⅰ型の叙述形と疑問形として対をなし、共に-겠-が含まれていることで間接的な表現となって公式的なニュアンスを帯び、丁寧さを生じさせる。

(80)' 여기서 모두 마치겠습니다.(CL000195)

(202)' 다른 것은 다 잊어버리고요, 당신은 나의 운명부터 시작하시겠어요?(BK950011)

次に示す 2 つの文は、Ⅲ型の叙述形と疑問形として対をなし、共に聞き手の感情を慮った気持ちを間接的に述べた「婉曲性」が認められる。

(85)' 정말 같이 이렇게 이쁜 애들이랑 있으니까 너무 좋으시겠어요.(BK950026)

(205)' 아니요, 선배님, 괜찮으시겠습니까?(BK940019)

次に示す 2 つの文は、Ⅳ型の叙述形と疑問形として対をなし、共に直接的な表現を避けたやわらかいニュアンスが加わり、「婉曲性」が認められる。

(35)' 잘 모르겠어요.(CK000155)

(138)' 우조·계면조 이 말이 언제부터 쓰였는지 그건 모르시겠어요?(BM9X0001)

以上、叙述形と疑問形についてそれぞれの機能を対照させた内容を表にすると次のようになる。それぞれの機能が認めうる場合は○、認められない場合は×、不明瞭な場合は△を付した。

[表 23] <未来性><確実性><婉曲性>の現れ方の対照

	叙述形			疑問形		
	未来性	確実性	婉曲性	未来性	確実性	婉曲性
I 型	○	×	○	○	×	○
Ⅲ型	△	○	○	△	○	○

IV型	×	×	○	×	×	○
-----	---	---	---	---	---	---

表 23 を見ると 3 つの型の文のに、「未来性」、「確実性」、「婉曲性」がほぼ並行的に認められることがわかる。

7.3. -烈-を用いた文に現れる特徴の対照

ここでは第 5 章と第 6 章の考察の結果から 4 つの型の文に現れる特徴を対照させる。

まず「現場性」は叙述形、疑問形のすべての型においてそのその特徴が見られた。

次に「主体の固定性」は両形式によって現れ方が異なっており、叙述形には主体が話し手に固定しており疑問形は主体が聞き手に固定していたことが認められた。

最後に「前提性」は叙述形には認められず、疑問形だけに確認できたので、疑問形特有の特徴と言える。これらのことを表にすると次のようになる。それぞれの特徴が認めうる場合は○、認められない場合は×を付した。

[表 24] 文の意味に見られる特徴の対照

	叙述形			疑問形		
	現場性	主体の固定性	前提性	現場性	主体の固定性	前提性
I 型	○	話し手	×	○	聞き手	×
II 型	○	話し手	×	—		
III 型	○	話し手	×	○	聞き手	○
IV 型	○	話し手	×	○	聞き手	×

表 24 を見ると、「現場性」は両形式に並行的に現れ、「主体の固定性」は叙述形では主体が「話し手」で固定しているが疑問形になるとそれが「聞き手」に転じる。「前提性」は疑問形の III 型の文にのみ認められる特有の現象であることがわかる。これら 3 つの特徴がどのように現れるかは、次の第 8 章で詳しく考察する。

7.4. まとめ

本章では-烈-が用いられる叙述形の文と疑問形の文を、文の型の種類、形態素-烈-の機能、文に現れる特徴という観点から対照させ、両形式の文が、文の種類や機能や特徴がどこまで並行的に成立し現れ、そしてどこからが違いを見せるのかを考察した。その結果明らかになったことを以下に示す。

- 1) 叙述形と疑問形の文の種類を対照させると、叙述形が 4 種類の用法が成立することに対して疑問形は 3 種類の用法しか成立せず、II 型である予告する用法に対応する疑問形はなく、また、III 型と IV 型の文でも叙述形に対応する疑問形を持たない場合があることが

わかる。このことは、-ㄷ-が疑問形には生起しにくい形態素であることを示唆してくれる。

- 2) 叙述形と疑問形の文の意味の実現において形態素-ㄷ-は「未来性」「確実性」「婉曲性」を加える機能があり、それらは両形式でほぼ並行的に認められる。
- 3) 叙述形と疑問形の両形式において「現場性」という特徴が認められる。
- 4) 叙述形と疑問形の両形式において「主体の固定性」という特徴が認められるが、その現れ方は叙述形においては主体が話し手として固定しており、疑問形においてはそれが聞き手に転じる。
- 5) -ㄷ-を含んだ文の特徴として見られる「前提性」は、疑問形のⅢ型の文にのみ現れる疑問形特有の特徴である。

以上のことから、現代韓国語の先語末語尾-ㄷ-は、叙述形と疑問形において文の型の種類や機能、あるいは文に現れる特徴などが必ずしも並行的ではないことがわかった。また叙述形と疑問形の両形式を、文の型ごとにそれぞれ文法的結合制約及び共起の関係からさらに下位分類して、一々文として成立しうるかどうかを確認することで、叙述形に比べて疑問形が成立しづらいことが明らかになるとともに、どのような文法的条件の下で疑問形が成立しないのかまでも詳細に示した。

第8章 -ㄹ-を用いた文の特徴

本章では、先語末語尾-ㄹ-を含んだ文に現れる特徴について論じる。第6章と第7章において-ㄹ-を「非現実」を表すムード形式と捉え、文の意味の実現における文法的機能及び語用論的機能について考察した。その過程で-ㄹ-を含んだ文には、叙述形においては「現場性」「主体の固定性」、疑問形においては「現場性」「主体の固定性」「前提性」といった特徴があることがわかった。これよりこれらの特徴について詳細に分析し考察することにする。

言語資料は、第6章の叙述形と第7章の疑問形で用いた用例に加え、『21세기 세종계획 균형말뭉치 최종성과물』やドラマ、作例など随時多様な資料を用いて論じていく。

8.1. -ㄹ-を用いた文の特徴に関する先行研究

第6章と第7章の考察から叙述形と疑問形の-ㄹ-を含んだ文には、「現場性」「主体の固定性」「前提性」という特徴が認められた。これらの特徴について、従来の研究ではこれらの特徴をどのように捉え、何が指摘され、どこまで明らかになったのかを概観し、検討することにする。

8.1.1. 現場性に関する研究

「現場性」という表現が最初に見られるのは成耆徹(1979/1986)である。成耆徹(1979/1986:128)では「推定」の意味に焦点をあてて、-ㄹ-は現在の経験に判断の根拠を置くのに対し、-을 것이-は過去の経験に根拠を置いているところに差があるとしている。そして、-ㄹ-には「現場性」があるために「確実性」が高いと述べている。

임흥빈(1980/1998:111)では-ㄹ-が起源的に-거- + -이- + 있- に分解できるとして、-거-の意味として「対象性」を提示し、「있다」に「現在の事実の関連性」が内在していると見て-ㄹ-の「現場性」を認めている。

また、安明哲(1983:74)では「発話現場の根拠」、전혜영(1995:144)では「発話の現場で‘話者の態度’を非確定的に表す」などと表現は異なるものの、その「現場性」を認めている。

이병기(1997:29)も-ㄹ-と-ㄴ 것이-の差について성기철(1979)と同じ立場に立ち「話し手が推定の根拠を、いつ経験したのかに依る差」と説明している。

野間秀樹(1988:51)では、「今・ここの発話の現場の関心」という表現を用いて「現場性」を認めながら、それは「하겠다」が持つ「将然性」に起因していると述べている。

8.1.2 主体の固定性に関連する研究

野間秀樹(1988:22)では「하겠다」は話し手が事態を主観的に判断して述べるもので、「話し手を顕在化」させることを挙げている。

これは本稿で称している「主体の固定性」と共通点があるが、「顕在化」が形態として表面に現れることを意味するのに対して、「主体の固定性」は必ずしも文の中に明瞭に現れ

るのではない。また、これは叙述形においては「話し手」が主体として固定的であり、疑問形では主体が「聞き手」に転じられ、両形式に見られる特徴であることが「話し手を顕在化させる」という表現と異なった点である。

8.1.3. 「前提性」に関連する研究

久野暉(1973:180)は否定疑問文には「質問者」が「被質問者」の答えに対して五分五分の予期しかしていない「中立的な無色の質問」と肯定の答えを予期した否定疑問文があると、両者を区別している。

太田朗(1980:621)は「疑問文が肯定、否定いずれの答えをより多く予測するか」ということを「片寄り(bias)」と呼び、疑問文には答えに対する話し手の予測に、「肯定の片寄り」、「否定の片寄り」、中立的といった3種類があるとしている。そのうえで yes-no 疑問文では否定疑問は多くの場合肯定の片寄り、肯定疑問では中立的予測か否定の片寄りを有するという。そして話し手は「肯定なり否定なりを主張する修辞手段としてこの片寄りを利用する」と述べている。

장경기(1986:229)は、話者の前提という観点から、話者が何の前提もなく中立的な態度で発話する「非前提用法」と、話者がある前提を持って非中立的に発話する「前提用法」に判定疑問を分類している。さらに「前提用法」は、話者の前提が談話状況に従って崩れる可能性が高い「一次前提用法」と話者が前提を聞き手の同意や確認を求めて強化しようとする「二次前提用法」に分けられるという。

安達太郎(1999:24)は「傾き」という概念を示しているが、「疑問化されている事態の肯否についての見込み」「命題の真偽に対して話し手がある方向への傾斜を有している」と説明している。「傾き」は否定疑問にも肯定疑問にも見られる現象であるが、否定疑問の場合が圧倒的に多く、話し手が命題について「傾き」をもたない中立的な状況では無標の肯定疑問文を使うのが普通であると指摘している。

仁田義雄(1999:148-151)は「事態の成立・不成立に関して、ある傾き・予測を持って発せられる」問いかかけを「傾きを有する問いかかけ」と呼んでいる。そのうえで、「傾きを有する疑問表現には、否定疑問が多く、「肯定疑問は、傾きを有する疑問表現にならないこともないが、大多数が傾きを持たない中立的な疑問文である」ことを付け加えている。

先行研究を検討すると、「答えを予期」「片寄り」「前提用法」「傾き」などと様々な用語が用いられている。一方、反対の場合についても「中立的な無色の質問」「中立的な質問文」「非前提用法」「中立文」と多様である。本稿ではこのような現象を指す用語として「前提性」を用いることにする。しかし、「前提性」に関わる論考はすべて否定疑問における現象を論じたものである。肯定疑問でも同じような現象がみられることを認めているものの、肯定疑問の場合は多くが「前提性」を持たない文として成立し、「前提性」は否定疑問に見られる特徴のひとつということではほぼ共通している。その反面、「前提性」に関連して否定疑問以外の有標形式に関する議論はほぼ見あたらず、形態素-烈-に言及した論考の中で「前提性」に関連づけて論じたものは管見のかぎりでは見あたらない。このような、「前提

性」を表す議論の状況に着目し、本稿では否定疑問以外の有標形式として-ㄷ-が用いられた疑問形が「前提性」を表す用法を詳しく見ることにする。

8.2. -ㄷ-を用いた文の特徴

ここでは、-ㄷ-を含んだ文に現れる 3 つの特徴とはいかなるものであるか、またそれぞれが文の型ごとにどのような現われ方をするのかについて詳細な考察を行う。

8.2.1. 現場性

「現場性」とは、文の意味に「発話時に・発話現場で」というニュアンスをもたらすということである。-ㄷ-が用いられる文で「現場性」がどのように現れるのか見ることにする。

I 型の文では、意思決定と発話までの時間が比較的短い。例えば次のような状況を設定し、-ㄷ-の有無を対比させながらどのようなニュアンスの差があるか考えてみよう。初めの設定はゼミの時間に発表者を決めている場面である。先生が次の発表者は誰かと尋ねたときに、発表者が次のように答えたとする。

(209) a. 제가 합니다.

b. 제가 하겠습니다.

私がやります。

(209)a の発話は既に順番が決まっていたか、話し手が既に自分が発表しようとしていたニュアンスがある。一方(209) b の発話はその場で自分がすることに決めたというニュアンスが感じられる。

次に、満員の電車かバスから降りようとしている場面を設定しよう。発話者が出口に向かって道をあけてもらいたいときに次のように述べたとする。

(210) a. 내려요.

b. 내리겠어요.

降ります。

この状況では(210)a のほうが自然な文と言える⁶³。それは、(210)a は、降車駅がすでに決まっている既存の決定事項について述べているのであって、その場で突然降りようとしたのではないからと考えられる。一方、(210)b の発話が自然に感じられる状況は、例えば電車が駅に近づく中で、次に降車するかしないかの決断をしなければならぬが迷っている。そのような差し迫った状況で話し手が降りようとして意志を固めたと仮定すれば、(210)b のように発せられるであろう。-ㄷ-を用いて話し手が自らの意志を述べようとするとき、

⁶³ 数人の韓国語母語話者の意見によるものであるが、その中で延辺方言母語話者は(210)b の発話でも不自然ではないというコメントであった。

前者の例のように実現させようとする事態が発話時以降のいつか、という場合もあれば、後者のように発話時直後の場合もある。しかし両方とも意思決定から発話までが時間的に短く、意思決定が発話の現場でなされている。

意志決定がまさに発話現場でなされた例を見よう。次の対話はテレビドラマのワンシーンの台詞を転写したものである。

(211) 교 수 : 니가 유전자를 잘 못 골라나서 내가 다시 다 찾아보고 계산하게 생겼잖아. 내일까지 초안 나와야 되는데. 차라리 하겠다고 하질 말든가.

教授 : 君が遺伝子を選び間違えたから、私がもう一度調べて計算することになったじゃないか。明日までに初案が出なければならぬのに。最初から(自分が)やると言わなければいいのに。

의사 1 : 죄송합니다. 제가 얼른 다시 할게요.

医師 1 : 申し訳ありません。私がすぐにやり直します。

교 수 : 됐어. 앞으로 나서지 마.

教授 : 結構だ。今後口出しするな。

의사 2 : 교수님 제가 돕겠습니다.(브레인 20 회)

医師 2 : 教授、私がお手伝いいたします。

(211)の対話は大学病院の教授と医局員のやりとりである。教授の研究に必要なデータ分析をかってでた医師 1 が分析対象を間違えてしまい教授から叱責されるシーンである。その場にいた同僚の医師 2 が教授の激しい怒りに思わず自分が協力すると申し出る場面である。これはまさしく発話現場で意志が決定された発話である。

次に、発話と動作の実行が近い例を見よう。

(212) A : 아, 그럼 찢죠.

では、破りますよ。

B : 아하하, 짹 짹 찢어요.

あはは。ビリビリに破ってください。

A : 잘게 잘게요? 그러겠습니다. 아이, 시원시원하게. 자.(BK940019)

細かくですか。そうします。(細かく破ります。)思いきり、さあ。

(212)の例は B に促されて A が紙を破ろうとするときの発話である。자という、まさに動作を始めようとするときの表現からもわかるように、「そうします」と述べた直後に破る動作が実現している。発話直後の動作を述べる文である。

その他にも発話直後に動作が始まる例をいくつか挙げる。

(213) 네 월요일 여성시대 두 번째 편지 읽어드리겠습니다.(CL000194)

はい、月曜日、「女性時代」(ラジオ番組のタイトル)、2番目のお手紙をお読みします。

(214) 삼 교시 시작하겠습니다.(6CM00013)

3限目(の授業を)始めます。

(215) 다녀오겠습니다.(7CM00005)

行ってきます。

(213)は「읽어드리겠습니다。」と述べてすぐに手紙を読み始める。(214)の「시작하겠습니다。」はまるで授業開始の合図のようである。(215)は「다녀오겠습니다」という発話の直後に家を出ることがわかる。これらはすべて発話時以降の動作を予告し、それぞれの発話が終わるや述語の動作が実行される例である。

I型の疑問形でも、聞き手が既に固めていた意志について尋ねるのではなく発話の現場で決定すべき事態に対して答えを求めるものが多い。

(216) 주문하시겠어요?(4CM00029)

ご注文はいかがいたしましょうか。(ご注文なさいますか。)

(216)は、飲食店でオーダーを取りに来たときに聞かれる発話である。飲食店に入って何を食べるかは、発話時、発話現場で決めるものである。

次のような場合もある。

(217) 그럼 몇 점이나 남편 노래에 점수 주시겠어요?(BK950018)

では、何点、ご主人の歌に点数つけますか。

(217)の例は、ラジオ番組で出演者である夫が歌を歌い、その評価を妻に問いかけている。これは、発話の現場で聞いた歌に対して評価を求めている。

II型の叙述形は予告する用法であった。発話者が発話現在予定されている内容を聞き手に伝えている例を挙げる。

(218) A: 지금까지 남서지역이었습니다. 다음은 경인지역의 김형곤 통신원이 전해 드리겠습니다.

ただ今はナムソ地域でした。次はキョンイン地域のキム・ヒョンゴン通信員がお伝えいたします。

B: 네. 먼저 삼십 구번 국도와 김포 매립지 입구에서 나온 차량들은 매립지 입구 삼거리 좌회전 차량들과 부천 인천 방면으로는 박천교 삼거리와 임학 사거리가 각각 신호 대기 시간 길어지고 있습니다.(CL000196)

はい、まず、39号線の国道とキンポ埋立地入口から来た車は埋立地入口の三叉路を左折する車両と、プチョン、インチョン方面へはパクチョン橋三叉路とイマック交差点が、それぞれ信号待ちの時間が長くなっています。

(218)の発話者 B は、発話者 A が紹介したキム・ヒョンゴン通信員である。A が予告した内容が発話直後に B によって実行されている例である。

発話内容が発話直後に実行される場合が多い II 型は発話と事態成立が直結しており、「現場性」が確認しやすい型でもある。放送や式典、会議などの司会者が番組や会議を進行するうえで、次に予定されている内容を順次告げるといふ発話の特徴から-ㄷ-が頻繁に現れるのであろう。そしてこれはまさに今、この場における「現場性」という特徴となって現れるのであろう。

I 型と II 型では意思決定と発話の間の時間的間隔、また発話と事態実現の時間的間隔が短いために事態との近接感を感じさせる。益岡隆志(2007:164-165)は、意志表現には「発話時に形成された意志」と「発話時以前に既に定まっている意志」のタイプがあり、前者の場合は「話し手がリアルタイムに行う心的処理」であると説明しているが、-ㄷ-が用いられる文はリアルタイムの意志決定を告げるときに多く用いられるようである。

IV 型の文は、発話時、発話現場で話し手がどのような状態に置かれているかを述べる用法であった。알다に結合して発話現場で事態を認知した用例を見よう。

(219) A : 그 앞으로도 저, 같이 집 좀 꾸미시고 그러셔야 되요. 부인께만 너무 말지 마시고.

これからも、一緒に部屋づくりなさらないとだめですよ。奥さんに任せきりにしないで。

B : 네. 알겠습니다.(BK940027)

ええ、わかりました。

(219)の例は、発話者 A のアドバイスを発話者 B が受け入れる対話である。要請や命令だけでなく、発話現場で初めて聞いた内容を、今、ここで受け入れている。

(220) A : 주요 사건들이 있잖아요,

主な事件があるじゃないですか。

B : 아 알겠다.(7CM00054)

あ、わかった。

(220)の例は、発話者 A が聞き手である発話者 B に喚起を促している。発話 A が発話者

Bと情報のすり合わせをしようとして、それが合致した瞬間の発話である。

命令や要請に応答する「알겠습니다」は、相手の発話に対してその場で「理解完了」という事態の局面を示していることを先に述べたが、命令や要請のみならず、発話現場で了解したり、何かに気づいたりするとき、-겠-が用いられなければ不自然な発話になる。既存の知識について尋ねられて「알겠습니다」と答えると不自然になる例として、전혜영(1995:135)では次のような例を挙げている。

(221) 선생님 : 프랑스 혁명이 언제 일어났는제 알아요?

先 生 : 프랑스革命がいつ起こったか知っていますか。

학 생 : 가. 네, 압니다.

学 生 : 가. はい、知ってます。

나. ?네, 알겠습니다

다. *네, 알았습니다. (전혜영(1995:135))

疑問形では話し手が発話現場で示した事柄に対して「理解完了」したのかを尋ねることになる。用例を見よう。

(222) 자 짜잔 자 여러분 이게 무엇인지 아시겠습니까?(BK950012)

ジャジャーン、皆さん、これ、何かお分かりになりますか。

(222)の例は、짜잔という表現から、現瞬間に対象物が聞き手に提示されたことがわかる。また、「これ」と対象物を指示しているので、それが発話現場に存在していることもわかる。これらの要素からも、まさに「今」「ここ」にあるものについてそれが何かを尋ねる例である。

(223) 잘 들으세요. 누가 남의 집 공사를 발주했는지 아저씨들이 그 사람을 가려줘야되요. 그렇지 않으면 아저씨들은 남의 집을 무단으로 침입해서 함부로 공사하고 돈을 청구하는 공갈범이 되는 거라고요. 아시겠어요?(CK000154)

さあ、よく聞いてください。誰が他人の家の工事を発注したのか、あなたたちが発注者をよく見分けてくれなきゃ。そうでないと、あなたたちは他人の家に無断で侵入して勝手に工事してお金を請求する恐喝犯になるんですよ。わかりますか。

(223)の例は、発話者が聞き手に現状況を説明して、その内容が理解できたかを問うている。「よく聞いてください」と説明を始めることを宣言し、状況説明が終わった時点で聞き手に「たった今述べた私の話、わかりましたか。」と確認している。

初対面で挨拶に用いられる表現である。

(224) (승미 들어서는, 우선 지 여사에게 목례)

スンミ、(家に)入ってまず、キジョンの母に黙礼。

기 정 : 어머니세요

키ジョン : 母です。

승 미 : 안녕하세요 처음 뵙겠습니다

스 닌미 : こんにちは。はじめてお目にかかります。

어 머 니 : 어서 와요 (점잖은 미소) (CJ00027)

母 親 : いらっしやい。(上品な微笑み)

(224)の例では、発話現場で「今、私は初めてあなたに会っている」という話し手自身のありようを述べていることがわかる。

これらはいつも発話現場で発生する個別的な事柄をめぐってなされる発話でこそ成立する。叙述形でも疑問形でも、一般的真理や普遍的事実、習慣的な事柄を語るときは-ㄹ-が用いられないことを述べたが、それは-ㄹ-の「現場性」がこれらの状況とそぐわないからであろう⁶⁴。

次の用例を見よう。

(225) 사람은 먹어야 산다.(作例)

人は食べなければ生きていけない。

(226) 해는 동쪽에서 뜬다.(作例)

陽は東から上る。

(227) 호랑이도 제 말 하면 온다.

噂をすれば影。(虎も自分のことを言われれば現れる。)

(228) 나는 시험을 보기 전엔 항상 긴장한다.(作例)

私は、試験前になるといつも緊張する。

(225)は一般心理、(226)は自然の摂理、(227)は諺、(228)は人の習慣的特性について述べたものである。これらの文に-ㄹ-を介入させると不自然な文になる。

最後にⅢ型の文における「現場性」を「証拠性」に関連させて述べることにする。「証拠性」とは話し手が述べようとする事態の内容を支えている根拠はどこにあるのか、何を情報源としているのかということである。Ⅲ型の文は、話し手が事態の成立が確実であると認識して述べる用法であるが、確実だと認識する根拠は一般的な事実や話し手の過去の

⁶⁴ その他、テレビや映画の脚本のト書き、小説の地文などでも-ㄹ-が用いられにくい。

経験に依拠するのではなく、発話現場で見たり、聞いたり、感じたりしたこと、あるいは発話時の状況やそこに残された痕跡を体験的に感じたことに依拠したものと言える。つまり、発話時、発話現場で得た体験的経験によって事態に高い確実性を認めるときに-ㄷ-が用いられるのである。박진호(2011:209-216)には、「‘ㄷ’は知覚された情報を基にした推理という証拠性の意味成分及び意外性という意味成分を持つ」、「感覚的経験を通して得た根拠を基に推測するときには‘ㄷ’が選好される」という記述があるが、-ㄷ-が用いられる文が成立する証拠性が体験的や直接的経験に依拠するという本稿の見解と一致する。

また寺村秀夫(1984:237-241)は「ソウダ」を予想、予感の助動詞とし、動詞や形容詞の種類によって、「ある対象が、近くある動的事象が起こることを予想させるような様相を呈していること、あるいはある性質、内情が表面に現われていることをいう表現である」とその意味を説明しているが、-ㄷ-が形容詞と結合した場合にも、対象が外面に現す様相を話し手が体験的に捉えて確実性があると認識したときに成立すると考えられる。次の例を見てみよう。

(229) (종업원 먹음직스런 새우 튀김과 초밥 날라 온다)

店員がいかにもおいしそうなエビのてんぷらとおすしを運んでくる)

금 주 : 아 맛있겠다.(CJ000225)

クムジュ : あ! おいしそう。

(229)の例を見ると、話し手は眼前に運ばれた料理を視覚でとらえ、おいしそうな様子が外見に現れ出ているのを見て「おいしいこと」を確信して高い確実性を認めている。しかし話し手はその料理を食べてはいない。つまりその確実性は経験の外にあるため-ㄷ-を用いて맛있겠다となるのである。事態の内容を支える情報の獲得場所が発話現場、獲得時は発話時、獲得方法は話し手の五感という状況のときに-ㄷ-を用いた文が「現場性」という特徴を帯びるものと考えられる。次の例も同様である。

(230) 책의 해 이달의 인물로 뽑히셔서 기쁘시겠습니다. 축하드립니다.(BA93A100)

「本の年」、今月の人物に選ばれてお喜びでしょう。おめでとうございます。

(230)の例は、眼前にいる聞き手の感情について述べている。主体である聞き手の姿は視覚で捉えられるが、「기쁘다」という感覚は本人だけが感じるもので、話し手は聞き手の感情を断定できない。益岡隆志(1990:75)が、「人の内面に存する感情や思考は、基本的に主観的な事柄として表現され、平叙文においては一人称の内面しか描くことができない。」と記しているように、「춌다」「좋다」など主観的な判断しか成立しない形容詞に-ㄷ-を結合させることで話し手が、断定できないまでも高い確実性を認識した叙述文が成立する。

しかし同じ形容詞でも対象が眼前にある場合、話し手が視覚をもって客観的に判断できる形態や形状を表す「크다」「둥글다」「하얗다」などを述語に持つ文に-ㄷ-は結合しない。

一方、眼前にない対象についてもⅢ型の文は成立する。用例を見てみよう。

(71)' 고개를 까딱까딱 하시겠는데요.(BK950028)

(71)'の例は、ラジオ番組の司会者が出演者の発言を受けて、それに視聴者が納得しているはずだという発話である。眼前の視聴者、つまりスタジオの視聴者の姿について言うならば「고개를 까딱까딱 하시는데요.」というのが自然であるが、眼前にいない場合は-ㄷ-が用いられなければ成立しない。発話現場でなされた発言を根拠にして、視聴者は同意してうなずいているという事態に高い確実性を認めた発話となっている。

ここで、-ㄷ-が表すのは「推量」なのかということについて再度考えてみたい。5.4.2.でも述べたように、従来の研究では形態素-ㄷ-の中心的な意味として「推量」が議論の中心に置かれることが多かった。しかし、Ⅲ型に見られる「現場性」の現れ方を見ると、「推量」という表現が適しているのか疑問を呈したい。それは先述した事態の内容を支える根拠、すなわち情報源という要素のためである。「推量」とは、話し手が事柄を述べるにあたり、過去から現在に及ぶ話し手の経験、一般的な常識や状況のあり方などを思い描いて、そこから得られる情報をもとに推し量った結果といえよう。話し手が当該事態の判断を下すために想起しうる情報に検索をかけ、そこから導き出されるものと言える。しかし-ㄷ-が用いられた文では、話し手が発話現場で直感的かつ体験的に感じたことや状況に依拠して判断を下す。形容詞に結合した文で言えば、対象が外面に醸し出す様相を五感で捉えたそのままを述べている。また、떨어지다, 울다などの特定の動詞に結合した文の場合、発話現場において眼前に映し出された状況を一幅の絵のように切り取って言語化している。そこでは一般的な常識や自らの過去の経験や想像に検索をかける余地はない。仁田義雄(1999:122-128)では「ある時空の元に生起、存在する現象をそのまま主観の加工を加えないで言語表現化して述べ伝えた」文を「現象描写文」と呼んでいる。「現象描写文」にはいくつかの種類があるが、その中で「近接未来の徴候を表す現象描写文」がある。このタイプの文として「あっ、荷物が落ちる」という用例を挙げて、これはその状況が現在存在しているわけではないが、そういった状況や現象が近接未来に起こる徴候を元に近接未来に起こる状況を描写しているのだと説明している。7.1の表20に示したⅢH型のタイプとして成立する떨어지다, 울다などの動詞を述語にとった文も一種の「現象描写文」と見ることにする⁶⁵。そうのように捉えるとおよそ「推量」という表現では説明できないと考えるのである。

-ㄷ-は事態が「非現実」の領域にあることを示す文法的機能があることを第5章で明らかにしたが、それは極めて「現実」の領域に隣接した、ときには「現実」との限界地点にある場合に用いられると言えるのではないだろうか。

⁶⁵ 仁田義雄(1999:133)では、現象描写文は疑問文になりにくいと述べている。

8.2.2. 主体の固定性

8.1.2 で述べたように、-겠-が用いられた文の特徴として「話し手の顕在化」が指摘されている。しかし本稿においては、それを「主体の固定性」と呼ぶことにする。これは、文に現れてはいない主体が、第三者ではない「話し手」及び「聞き手」であることが固定していることを指す。叙述形では、-겠-を含んだ文は動作の主体が「話し手」でなければならず、疑問形のときはそれが「聞き手」に転換する。

まず、I型の用例を見てみよう。

- (6)' a. 내일 다시 오겠습니다.(CK000150)
b. 내일 다시 옵니다.

(6)'a の用例では動作の主体は「話し手」であり、(6)'b のように-겠-が含まれていない文では動作の主体が曖昧になり、第三者が主体の文としても成立する。否定形の例を見てみよう。

- (231) a. 저야 뭐 이것을 해석을 하거나 설명을 하지 않겠습니다.(BL9X0001)
私はこれを、解釈したり説明したりいたしません。
b. 이것을 해석을 하거나 설명을 하지 않습니다.

(231)の例では主体が明示されているが、(231)a の場合は저야という要素がなくても「解説や説明をしない」という意志の持ち主は話し手であることが明瞭で、特別な文脈がない限りは第三者の意志として文は成立しない。一方、(231)b のように-겠-が用いられないと「主体の固定性」は失われる。肯定形より否定形の方が「主体の固定性」は顕著に現われるようである。

疑問形においては固定される主体は話し手から聞き手に転ずる。用例を見よう。

- (232) 만약에 딸래미가 세일즈맨인 사람에게 시집가겠다면 어떻게, 허락하시겠어요? (BK9X0020)
もしも娘さんがセールスマンと結婚すると言ったら、どうです、お許しになりますか。

(232)の発話からもわかるように、「許可する」という事態を成立させる主体は聞き手である。聞き手以外の動作として尋ねる文としてはかなり不自然になり、聞き手自身の意志を問う文としてこそ成立する。

- (233) 어떻게 하겠어요?(5CM00074)
どうしますか。

(233)のように、-시-がなくても主体が聞き手であることは固定的である。

Ⅲ型の文は、叙述形の場合、事態の成立を確実性が高いものと認める根拠は話し手自身の判断であり、疑問形の場合、事態成立の確実性の根拠として一般的な判断より聞き手自身の個人的な意見や見解を問うものであった。そして動作の主体のみならず、命題の真偽判断の主体が聞き手に固定している場合もある。次の例を見てみよう。

(234) 들어가도 되겠습니까?(作例)

入ってもいいですか。

(234)のように許可を求める-어도 되겠습니까?の場合も、許可をする主体は聞き手に限定されており、聞き手自身の判断を問う場合に用いられる。反対に言えば、聞き手自身の見解を尋ねるのではなく、世間一般の常識に照らして事態の真偽が判断できることに-겠-が用いられると不自然な表現になる。用例を示す。

(235) 미국에서는 신발 신고 방에 들어가도 돼요?(作例)

アメリカでは靴を履いたまま部屋に入ってもいいんですか。

Ⅳ型の文でも「主体の固定性」が観察される。用例を見よう。

(36)' 침 뵈겠습니다.(CL000189)

(90)' 궁금해 죽겠네.(CK000149)

(36)'と(90)'の例は、主体が明示されていないものの、話し手が置かれている状態を述べており、話し手が主体でなければならないことがわかる。

(91)' 별사람을 다 보겠다.(국립국어연구원(1999))

(91)'のような「별~ 다 ~」という慣用的表現で-겠-を含んだ場合、話し手は主体でなければならない。「별 말씀 다 하십니다。」のように話し手が主体ではない場合は-겠-が用いられない。-겠-と結合頻度の高い알다、모르다가Ⅳ型の用法で用いられる「알겠습니다」「모르겠습니다」という場合、主体は必ず話し手でなければならない。

このように、-겠-を含んだ文は主体が明示されていなくても、行為や動作を行うのは叙述形においては「話し手」、疑問形においては「聞き手」であることがわかる。特に慣用句で用いられる場合は、主体が明示されたほうが不自然な文となる。「(제가)알겠습니다」「(제가)침 뵈겠습니다。」とは言わない。

Ⅳ型の文にかぎらず、挨拶の表現として慣用句になっているものは、主体が話し手に固

定されている。用例を示しておく。

(236) 처음 뵙겠습니다. (作例)

はじめまして。

(237) 다녀오겠습니다. (作例)

行ってきます。

(238) 잘 드립니다. (作例)

いただきます。

(239) 또 뵙겠습니다. (作例)

またお目にかかります。

最後に、修辞疑問においても「主体の固定性」が確認できる例を挙げておく。

(183)' a. 저 이쪽으로 서시겠어요? (BK9X0029)

b. 저 이쪽으로 서세요?

(183)'は行為を提案・督促する文であるが、聞き手の動作を促していることがわかり、主体は聞き手であることが固定している。一方、(183)'のように-겠-がない文は上昇イントネーションでは質問と解釈されて、서다の主体は聞き手でなくても文の意味は成立する。

(186)' a. 이제 도마도 좀 주시겠습니까? (BK940027)

b. 이제 도마도 좀 주십니까?

(187)' a. 왜 그렇게 붙었는지 얘기 좀 해주시겠어요? (BK9X0002)

b. 왜 그렇게 붙었는지 얘기 (좀) 해주세요?

(186)'aは行為を求める文であるが、要求する相手は聞き手であり주다の主体は聞き手で固定している。一方(186)'bのように-겠-がない文は、주다の主体が聞き手以外でも単に事態が成立するかどうかを尋ねる質問として成立する。

また(187)'aも「話す」という行為を求める相手は必ず聞き手であるが、-겠-がない(187)'bの文は必ずしも主体は聞き手として固定しているとは言えない。

修辞疑問の中から3つの例を挙げ、「普通疑問」のみならず修辞疑問にも「主体の固定性」が認められることを確認した。-겠-が修辞疑問によく用いられることは述べたが、修辞疑問において「主体の固定性」がどのようなありようで見られるのかまでは詳しく分析できなかった。本稿では、「普通疑問」の分析結果から導き出された「主体の固定性」という特徴が、修辞疑問の一部の用例にも認められることを指摘するに留める。

-겠-を含んだ文は一般的なことや社会通念的なことを述べる場合ではなく特定の状況

で用いられることを先に述べたが、その場合、発話の現場にいる対話の参与者である話し手と聞き手が、対象について自らの判断を述べたり聞き手の個人的な意見を尋ねたりするために、広い意味での文脈から見て当然主体は「話し手」及び「聞き手」であることが推測されて、両者の存在が自然に浮かび上がってくるものと考えられる。つまり、「主体の固定性」は「現場性」という特徴から2次的に導き出された特徴と言えるのではないだろうか。

8.2.3. 現場性と主体の固定性に見られる-烈-のダイクシスの機能

ここでは、-烈-が用いられた文に見られる「現場性」と「主体の固定性」という2つの特徴をダイクシス(deixis)の観点から注目してみる。ダイクシスは日本では「直示」「現場指示」と訳されることがあり、韓国では「直示」「話示」「指示」と訳されることがある。また、ダイクシスについての定義や下位分類の方法、カテゴリの設定なども論考によってさまざまな捉え方がなされている。まず、ダイクシスがどのように定義され、ダイクシス表現にはどのようなものがあるのか見ることにする。

まず、亀井孝他(1996:591)は直示を「発話関与者の人称、時間的・空間的位置関係に依存する言語形式」と説明している。

次に渡部伸治(2009:161,170)は、ダイクシスを「原点を言語外世界(言語内世界)の特定の要素にリンクさせ、原点から指示対象を言語を用いて指し示し、言語的文脈に取り込むこと」と定義し、原点を「ダイクシス表現の発話の際に仮想的に生起する点的な抽象的要素」と定義した。そのうえでダイクシスを「人称ダイクシス」「時間ダイクシス」、そして「場所ダイクシス」と「物ダイクシス」を含む「空間ダイクシス」に下位分類している。その後渡辺伸治(2012:4,9)では、直示には狭義の直示と広義の直示があり、「私/ここ/今」という指示表現のみを直示表現とし、「行く/来る」などは準直示表現と呼んで区別した。

金水敏他(2000:122-125)は直示(deixis)の典型的定義とは「話し手の現在の立場から直接指し示す表現」であろうと説明している。日本語を例にとると、人称詞、指示詞、時の名詞、方向性を持った動詞、授受動詞などが直示表現であるという。

澤田淳(2010:1)ではダイクシスの基本的カテゴリーを、「時間直示(time deixis)」、「場所直示(place deixis)」、「人称直示(person deixis)」に分け、それぞれ、「発話時(今)」「発話場所(ここ)」「話し手(私)」を座標軸の原点に据えた。さらに澤田淳(2011:165)では、「ダイクシス表現(直示表現)」(deictic expressions)を「話し手・聞き手・発話時・発話場所などから構成される「発話場面」に依存して解釈が決まる言語表現」と捉えて、授与動詞、移動動詞、移送動詞などをダイクシス動詞と称してダイクシス表現に組み込んでいる。

韓国の論考に目をむけると、ダイクシス表現のカテゴリーを広く捉えているようである。

まず、김광희(2004:243)は、「直示体系の分析の基準となる伝統的範疇は人称、場所、時間」であると述べたうえで、Levinson(1983)が談話直示と社会的直示を付け加えていることを引いて、韓国語においては、発話に社会的位階がそのまま投影されるのが特徴的であることを指摘して、尊対法を直示のひとつと見ている。

また박철우(2011:19-30)でも、「伝統的話し手範疇」として「人称」「場所」「時間」を挙げて韓国語の話し手体系について述べ、「拡張された話し手範疇」として「談話話示」「社会的話

示」さらには「感情話示」まで含まれるという立場から用例を挙げて論じている。박철우(2011:26)はさらに、-ㄹ-や-ㄴ-이-가「記述された事態が発話状況を基準にそれ以後に存在することを示す」のは、時制によって表されうる⁶⁶「時間話示」であるという。

さらにポライトネス研究で知られるペネロピ・ブラウン他(2011:160)では、ダイクシスは「文が発話内容の一定の側面にどのように結びついているのかを扱い、そこにはそのスピーチ・イベント(speech event)の参加者の役割や、時空間的、社会的位置関係も含まれる」と述べて、より広い概念で捉えている。

上掲のように、ダイクシスに対する概念の捉え方は様々であると同時に、ダイクシスについて言及される論考も、ダイクシス自体を考察対象にする論考、特定の言語形式を考察するための概念として言及する論考、また他の文法カテゴリとの関連性から論じるものなどがある。本稿においては、-ㄹ-を含んだ文の特徴である「現場性」と「主体の固定性」が、ダイクシスという概念に関連付けて説明し得ると考えて、このふたつの特徴についてより深度ある考察を行おうとするものである。そのため、ダイクシスを巡る論議自体に踏み入って言及することはせず、用語も直示と称することにする。本章で述べている「現場性」とは、文の意味に「発話時に・発話現場で」というニュアンスをもたらすものと説明し、「主体の固定性」とは、文に現れてはいない主体が、第三者ではない「話し手」及び「聞き手」であることが固定していることを指すと説明した。これら「発話時に」「発話現場で」「話し手及び聞き手」を、それぞれ「場所直示」、「時間直示」、「人称直示」に関連付けて捉えながら分析を試みることにする。

まず、I型の文の叙述形で-ㄹ-が時間直示及び場所直示的表現として用いられる用例から見よう。

- (209)' a. 제가 합니다.
b. 제가 하겠습니다.
(210)' a. 내려요.
b. 내리겠어요.

(209)'と(210)'は共に、8.2.1で提示した用例である。(209)'はゼミの時間に発表者を決めているという設定で、話し手の意思決定が発話以前になされていたか発話時になされたかで解釈が異なり、(210)'は降車駅が既に決まっているときの発話か降車するかどうかを突然決めた時の発話かでニュアンスの違いがあった。このように「リアルタイムの意志」を決定する時には-ㄹ-が適合することを述べたが、これは「発話時に」と「発話現場で」というニュアンスがそれぞれ、「時間直示」と「場所直示」的表現であると言える。類例をもうひとつ提示する。

⁶⁶ 本稿では、時制の文法範疇とダイクシスとは異なった文法現象と捉え、時間ダイクシスの範疇の一つとして時制を捉えるという立場はとらない。

(240) A: 이 남은 술 누가 마실거야?

この残ったお酒、誰が飲む。

B: 제가 마시겠어요.(作例)

僕が飲みます。

(240)を、お酒の席で交わされた先輩と後輩のやりとりとしよう。先輩が、お酒を残さず誰かが飲むように促した場面としたら、後輩は先輩の発話を聞いてから自らが「飲む」ことを申し出るのである。つまり発話現場におけるリアルタイムの意志決定と言える。

しかし、I型の叙述形が常に発話現場で形成された意志決定だけを表すことになるわけではない。話し手の意志が発話時に形成されたものではない場合でも、-겠-を用いて意志表明することは可能であろう。ただ、ここに挙げた用例だけで考えられることは、発話現場の聞き手との対話の中で、あるいは聞き手からの問いかけに対して応答する場合には、その意思決定が「発話時」「発話現場」を示すと言えそうである。発話現場で新たな状況に置かれたとき、新たな環境が与えられたときに-겠-を用いて応答すると、「発話時に、発話現場で」決めたというニュアンスを帯びる。これは、「場所」と「時間」を示す直示的機能が働くからでないかと考えられる。

続いて発話と動作の実行が近い例を見よう。

(212)'⁶⁷ A: 아, 그림 찢죠.

では、破りますよ。

B: 아하하, 짝짝 찢어요.

あはは。ビリビリに破ってください。

A: 잘게 잘게요? 그러겠습니다. 아이, 시원시원하게. 자.(BK940019)

細かくですか。そうします。(細かく破ります。)思いきり、さあ。

(212)'の例は、「그러다」が指し示す「찢다」という動作が発話直後に行われるという時間的「近接」を示している。同様の用例をいくつか挙げる。

(241) 네, 자 이제 문제 드리겠습니다. 오늘날 우리가 쓰고 있는 십진법이라는 거 있지요. 이 십진법을 처음 쓴 나라는 어디일까요?(CL000189)

はい、では問題を差し上げます。今日、我々が使っている十進法というのがありますね。この十進法を初めて使った国はどこでしょうか。

(242) 이상 저희 조 발표를 마치겠습니다.(4CM00113)

私たちのチームのは以上です。(以上で私たちのチームの発表を終わります。)

(243) 말씀 좀 물겠습니다.(作例)

⁶⁷ 既に挙げた用例であっても前後の文脈を含めて示す場合は日本語訳を付すことにする。

ちょっと、お訪ねします。

(241)から(243)の例を見ると、いずれも発話が終わるや述語の動作が実行されている。(241)は発話の直後に出題がなされ、(242)は発話をもって発表が終わり、(243)は道を尋ねるときの導入文句のように慣例的に用いられる表現である。これらがいずれも発話直後に事態が実現していることを見ると、事態が発話に「近接」しているという「時間直示」的表現といえよう。類例はⅡ型の文にも観察される。

(244) A: 다음은 오늘 일어났던 여러 가지 사건 사고를 종합해서 서전석 기자가 전해드리겠습니다.

次は、今日起こったさまざまな事件や事故をまとめて、ソ・ジョンソク記者がお伝えいたします。

B: 오늘 증권 전산 장애로 주식 거래가 오전 내내 이루어지지 못하고 채권 거래까지 마비되는 증시 사상 초유의 일대 혼란이 벌어졌습니다.

(CL000195)

本日、証券電算障害によって、株式の取引が午前中成立せず、債券取引まで中断する証券史上初めての大混乱が生じました。

(245) A: 오늘은 서울 양천구 목 삼동에 위치한 강서중앙교회를 담임하시는 서달석 목사님의 말씀을 함께 들으시겠습니다.

本日は、ソウルのヤンチョン区モクサム洞にあるカンソ中央教会を担任していらっしゃるソ・ダルソク牧師のお話を共にお聞きいただきます。(お聞きになります。)

B: 애청자 여러분 안녕하십니까? 유대인들은 특별한 선택을 받은 민족이었으나 예수께서 삼 년 반이나 ... (CL000185)

視聴者（愛聴者）の皆様、こんにちは。ユダヤ人は特別に選ばれた民族でありましたが、イエスが3年半ものあいだ...

(244)は司会者であるAの発話直後に記者Bの発話が行われている。(245)においても牧師Bは司会者Aの紹介の直後に説教を始めている。共に時間的「近接」を表す直示的表現である。

次にⅠ型の疑問形である。

(246) A: 특별생방송 국민과의 대화 경제분야에 대한 질문을 계속 받고 있습니다. 다음 질문은 어느 분이 질문을 하시겠습니까?

特別生放送「国民との対話」、経済分野に対する質問を続けて受けています。次の質問はどの方が質問なさいますか。

B: 네, 제가하겠습니다. 저는 서울 와이더부유씨에이 회장 이주영입니다. 취업문제에 대해서 질문을 드리겠습니다. 지금 서울역 등에 나가보면 실업

해 가지고 노숙하는 분들 숫자가 점점 늘어나고, 한끼 식사를 해결하기 위해서 정말 눈물겨운 그런 한끼 식사를 해결하는 분들이 점점 숫자가 늘어나고 있습니다. (CK000138)

はい、私がいたします。私は、ソウル YWCA 会長のイ・ジュヨンです。就業問題について質問いたします。今、ソウル駅などに行くと失業して野宿する方々の数が次第に増え、一度の食事をするために本当に涙ぐましい、そのような一食を済ませていらっしゃる方々が次第に増えていっています。

(246)はテレビの生放送で、大統領が国民の質問に直接答えるという番組である。司会者 A は番組を進行するために質問する意志のある人はいるのかと問いかけており、まさに「発話時」及び「発話現場」における事態についての意志を尋ねている場面である。さらに、質問者 B の発話もその場で意志表明してその直後に質問を始めていることから、リアルタイムの意志を表す発話と、意志決定から事態の成立が近接している発話がなされている。これらは「今」と「ここで」を指し示す「時間」と「場所」に関連した直示表現と考えられる。

(212)'及び(241)から(246)まで、発話と動作が連鎖して実現する用例を挙げてきた。ところが詳細に観察していくと、これらの用例は必ず-ㄷ-を用いた文でなければならない文法的制約があるわけではなく、例えば(212)'や(241)、(246)などは-ㄷ 것이다で言い換えても対話が成立する。一方で、(242)の「~를 마치겠습니다.」は発表や授業を終えるときの常套句になっているし、(243)は見知らぬ人に声をかけるときの表現として慣用的であるし、(244)(245)は放送用語とも言える表現として一般化している。このように-ㄷ-を含んで固定した表現が慣用的に用いられるのは、時間的に近接した状況では-ㄷ-を用いるのがもともと発話状況に適っているからではないだろうか。

これまでは I 型と II 型の文で動詞に結合した用例を見てきたが、III 型の文では「場所直示」的表現が観察される。

(247) A: 우리 집엔 디비디 플레이어 있는데.

家には DVD プレーヤーあるんだ。

B: 좋겠다.

いいな。

A: 저기 플레이 스테이션 투.

ほら、プレイステーション 2。

B: 좋겠다.(6CM00094)

うらやましい。(いいな)

(248) 매표구 앞에 내걸린 포스터를 보니 외국 영화였다. 포스터 앞에서 걸음을 멈춘 동익이 웃으면서 말했다. "재미있겠다."(BRE00093)

チケット売り場の前にかけているポスターを見ると外国映画だった。ポスターの前で立ち止まったトニクは微笑んで言った。「おもしろそうだ」

(247)は学生同士の対話である。Bが「좋겠다」と述べるのは発話現場にいる聞き手のことであり、「うらやましい(いいな)」と感じる事態は、発話現場で聞いたDVDプレーヤーのことであり、それを所持している聞き手のことをうらやましいと感じているのである。(248)は小説の一部である。登場人物であるトニクはポスターを見て「おもしろそうだ」と言う。話し手が「おもしろそう」と感じる根拠は発話現場の空間に存在していることがわかる。

このようにⅢ型の文では、話し手が事態に確実性を認識する根拠が発話現場に依拠しており、事態の主体が発話現場に存在するのである。つまり、事態や話し手の認識的判断の根拠が「発話現場」にあることを指し示す「場所直示」的表現といえよう。ここに挙げたふたつの用例はいずれも感情に関する形容詞であり、-겠-以外の形式では不自然な表現になることがわかる。

Ⅳ型の文では、「時間」「場所」に加えて「人称」にも関連する直示的表現が多い。最も顕著に現われるのが알다に結合するものである。

(249) A: 허수경 씨가 내일 좀 이 새봄을 느낄 수 있는.

ホ・スギョンさんが明日、初春を感じさせる。

B: 알겠습니다.

わかりました。

A: 그런 꽃.

そんな花。

B: 그 정도야 뭐 제가.(BK950012)

それくらいのことは私が。

(250) 간염환자는 원칙적으로는 식사를 따로 하게 되어 있어요. 식기와 수저도 반드시 자기 것만 써야 돼요. 아시겠어요? 식사가 끝나면 식기와 수저를 깨끗이 씻어 말린 다음 침대 아래에다 넣어주세요. 이상이에요.(BRE00088)

肝炎患者は原則的に食事を別にするようになっていています。食器とお箸・おさじも必ず自分のものだけを使用しなければなりません。わかりましたか。食事が終われば食器とお箸・おさじをきれいに洗って乾かした後、ベッドの下にしまっておいて下さい。以上です。

(249)は叙述形である。春を感じさせる花を準備するように依頼されて承諾する発話である。これは「発話時に、発話現場で、私が」という「時間」「場所」「人称」が特定されていることが顕著である。Aの依頼に対してその場で、依頼されたその場所で、依頼を受けた私が「了解」するときだけに成立する発話である。(250)は疑問形であるが、Ⅳ型の文が疑問形になったときには、「人称」が話し手から聞き手に転換する。(250)は小説の一部で、肝炎患者の食事の決まりごとについて聞き手に説明している部分である。알다の対象は、

今、ここで説明した内容であり、主体は聞き手であることがわかる。ここでも、「発話時に、発話現場で、聞き手が」理解したかを尋ねており、「時間」「場所」「人称」が指し示されている。

次に、모르다に結合した用例を見よう。

(251) A: 앞으로 꼭 해 보고싶은 역할?

今後、是非やってみたい役柄は。

B: 모르겠어요.(CK000149)

わかりません。

(252) 내가 설명이 부족했다는 것도 사실이고, 물어 주시오면, 대답해 드리리다,
어? 어디를 모르겠어?(7CM00011)

私の説明が不十分だったのも事実だし、質問してくだされば答えて進ぜよう。どう。どこがわからないの。

(251)は叙述形の例である。(251)を見ると発話現場で示された事柄について発話現場で判断して返答している。「모르겠다」が必ずしも「今、ここで」わからない場合に用いられるという制約は無いが、主体は「私」でなければならない制約がある。つまり、-겠-が用いられると他ならぬ「私が」わからないという解釈しか成り立たない。(252)は疑問形であるが、この場合も問いかけている相手は他ならぬ学生であり、主体は聞き手でならないことがわかる。このことから모르다に結合した場合の主体は、叙述形では話し手を指し示し疑問形になると聞き手を指し示すことが顕著に現われる「人称直示」的表現といえる。

IV型の文は主体が話し手であることを示す慣用的表現が多い。まず、8.2.2で挙げた挨拶表現を再掲する。

(236)' 처음 뵈겠습니다.(作例)

(237)' 다녀오겠습니다.(作例)

(238)' 잘 먹겠습니다.(作例)

(236)'(237)'(238)'はいずれも主体が話し手であり、これらはいずれも「人称直示」的表現である。同時に、(237)'(238)'は発話直後に動作を実現させることがわかるので、(237)'(238)'は「人称」のみならず時間的近接を示す「時間直示」的表現である。

また、固定した表現である次の用例は、「人称」と「時間」に関連する表現といえる。

(253) 걱정돼 죽겠네.(4CM00048)

心配でならない。(心配で死にそうだ)

(254) 아우 정말 나 미치겠어.(4CM00055)

わあ、私、本当に耐えられない。(おかしくなりそうだ)

(253)の場合、明示はないものの主体は話し手であり、「心配でならない」という心の状態は発話時現在のことである。(254)は主体が話し手であることが明示されているし、今現在、おかしくなりそうなほど「耐えられない」心境であることがわかる。これらはともに、「人称」と「時間」が特定された直示的表現である。

「별 ~ 다」で固定した表現は、-겠-の有無で指し示される人称の現れ方が異なる。

(255) 별소리 다 들겠네.(2BEXXX10)

とんでもないことを言うんだね。(とんでもないことを聞くものだ。)

(256) 김 교수, 자네야말로 별소리 다 하는군.(4BE94001)

キム教授、君こそとんでもないことを言ううだね。

(255)の「듣다」の主体は話し手であり、(256)の「하다」の主体は聞き手である。(255)は主体の明示はないものの、必ず主体が話し手であることが特定されている。一方(256)は、主体は「자네」という語彙によって指し示されているが、必ずしも聞き手でなければならぬことはない。「별소리 다 한다」と言えば主体は話し手以外であるという解釈が自然になるが、例えば「내가 별소리 다 하네」、「내가 별소리 다 하는군」というように-네や-군のような感嘆を表す終結語尾と共起したときには、主体が話し手であってもさほど不自然な文にはならない。一方、(255)のように-겠-が用いられた場合、主体は必ず話し手を指し示すことになるため、人称直示的表現と言えるのである。

さらに、修辞疑問においても主体を指し示す用例が見られる。

(257) 두분 이쪽으로 이쪽으로 가까이 오시겠어요?(BK9X0029)

お二人、こちら、こちらの方に近くにおこし下さい。

(257)はテレビ番組の司会者の発話である。ゲストに幼なじみを対面させるコーナーで、対面が実現して古い友人がスタジオに現れた瞬間である。司会者はゲストとその友人に向かって、二人が近い位置に立つようにと誘導しているのである。これが-겠-を含まない疑問形の場合は 8.2.2 で述べたように、「가까이 오세요?」となって単なる疑問文となるか、下降イントネーションなら命令文となり、主体は聞き手以外でも可能な文となって主体が限定されることはない。しかし、-겠-が用いられることで動作を促す修辞的用法として解釈されるのみならず、主体が聞き手であることを示すことになるのである。これは「人称直示」的表現である。

最後に、Ⅲ型の文の中に文脈的指示が認められる用例を見よう。これまでは「現場性」と「主体の固定性」が直示的表現に関連があるとして、「今」「ここで」「私が」というニュアンスが-겠-を用いた文に認められる例を見てきた。それぞれ「時間」「場所」「人称」に焦点をあてながら、「発話時」、「発話現場」、「話し手」が指し示されることを確認してきたが、-겠-がもたらす「確実性」の根拠の存在が文脈の中で現れることがある。

- (258) A: 이 노래가요, 많은 아내들이 남편들로부터 듣고 싶은 노래의 최고입니다.
근데 부인 앞에서요, 이 노래 직접 불러보신 적 있으세요?
この歌が、多くの奥様たちがご主人に最も歌ってほしい歌だそうです。それで、奥様の前で、この歌を直接歌ったことがありますか。
- B: 네. 마음은 항상 있는데 쑥스럽구 창피하구 해서 좀 들 부르는 편입니다.
ええ、気持ちは常にあるんですが、照れくさいし恥ずかしいので、あまり歌わないほうです。
- A: 그럼 한 번두 이런 노래 안 불러 보셨어요?
それじゃあ、一度もこんな歌を歌ったことがないんですか。
- B: 콧노래루 한 번 정도는 불러봤습니다.
鼻歌では一度くらい歌ったことがあります。
- A: 아이구, 저런. 부인께서 섭섭하셨겠네요.(BK950018)
はあ、なんと、奥様は物足りなかったでしょうね。
- (259) A: ...그래서 용기를 갖고 했어요. 그러니깐 뭐 이제는, 뭐 거리낄 게 없어요, 아무 것두.
...それで勇気をもってお話しました。ですから今はもう何も気にかかることはありません。何も。
- B: 지금 들으니까 오히려 마음이 편안하시겠네요. (BK950023)
今(お話を)伺うと、むしろお気持ちは楽でしょうね。
- (260) 사회자 1: 오전에 업무하시면서 받으시는 통화량이 오십통에서 백통 가량 되신대요.
司会者 1: 午前中の勤務で、電話の対応が 50 通話から 100 通話ぐらいになるそうです。
- 세일즈맨: 사실 전화를 받다 보면요, 제가 어느 때는 이 사장님 거 받다가, 이 사장님 거 받다가 말을 어떤걸 이어갈지...
- 세일즈: 正直なところ、電話を受けていると、私が、ときによってはこの社長 長の電話をとっている途中に(また別の)社長の電話をとって、話がどうやって繋がっていくのか...
- 사회자 2: 헛갈리시겠어요.(BK9X0020)
司会者 2: こんがらがるでしょう。

(258)는 A가 B의話を聞いて、B의夫人の気持ちを察して述べている。Bの夫人が「物足りなかった(さみしい思いをした)」であろうと判断する根拠は、直前の夫の発言にある。(259)は、あるテレビ番組でAが自らの秘密を話し終えた心境を吐露している。その発話を聞いてBはAの気持ちを判断して述べている。ここでもBがAの心情に确实性を認識した根拠は発話現場に存在しているのである。さらに(260)は、司会者2人で車のセールスマンを招いてその仕事ぶりを聞いている場面であるが、司会者はゲストが複数の電話に同

時に出る様子を聞いて「こんがらがる」という事態の確実性が高いと認識して述べている。

これらの発話に共通していることは、話し手の発話は聞き手の発話内容に対する反応であるということ。そして、話し手は事態に「確実性」を認識して述べているが、そのような認識を持つ根拠が当該談話内にあるということである。いずれも話し手が発話現場で聞いた内容や状況に照らし合わせて命題が真であることに高い確実性を認識して述べている。亀井孝他(1996:591)は、直示表現は結束性と重なる部分があることを指摘しているが、直示が時間や場所や人称を指し示すものであるとすれば、ある文法現象をコンテキストのなかで捉えてその関連性が説明できるものが文脈指示と言えよう。上に挙げた例はいずれも、話し手が述べる事態は既に述べられた事柄についてであること、そしてその事態に「確実性」を認識する根拠がそこで述べられた内容に存在することで共通している。

これらはいずれも、他の非現実を表す形式で述べることも可能な場合があろうが、-ㄷ-を用いて事態に「確実性」を述べる時、少なくとも形容詞に結合する場合は、談話レベルでみると事態成立を判断する根拠は直前または当該談話内になければならないと言えそうである。そのため、直前の発話内に根拠がない場合は、-ㄷ-を用いて事態を述べると不自然になる。用例を見よう。

(261) A: 내일 등산 가려고요.

明日、山登りしようと思ってるんです。

B: 내일 추울 거야. 옷을 따뜻하게 입고 나가.(作例)

明日は寒い(だろう)よ。暖かい格好で行きなさい。

(261)で発話者 B が、「明日が寒い」だろうことを判断する根拠は A の発話内に存在しない。B は A 以外から得た情報、例えば新聞、ラジオ、その他発話現場以前に得て B の頭の中になる情報を根拠として判断したものである。ここで B が「내일 추울 거야」と述べるのは不自然で、これを自然な発話と解釈するにはかなり特別な文脈に組み込まなければならないだろう。

(262) A: 우리 반에 일본 학생이 들어왔어.

うちのクラスに日本人の学生が入ってきたよ。

B: 그 학생, 한국어 잘 할 거야. 고등학교까지 서울에서 살았대.(作例)

その学生、韓国語が上手なはずだ。高校生までソウルに住んでいたんだって。

(262)の例も同様で、A の発話には B が-ㄷ-を用いて事態に確実性があると認識させる根拠は提示されていない。B は発話現場で得た情報ではない、自らの既存の知識か発話現場以外で得た情報から、「韓国語が上手であろう」と述べている。

5.4.2.2.で、従来の研究で用いられてきた「推量」という表現を用いず「確実性」と称することを述べ、8.2.1.ではその理由を「現場性」という特徴を通して詳しく述べた。「推量」は事態の真偽に関する判断を下す根拠が過去から現在に及ぶ話し手の経験、一般的な

常識や状況のあり方などを思い描いて、そこから得られる情報をもとに推し量った結果であり、-ㄹ-が用いられた文は、話し手が発話現場で直感的かつ体験的に感じたことや状況に依拠して判断を下すことである、というのがその違いであった。

従来の研究の中にも「現場性」や-ㄷ 것 이-との比較について述べる中で類似した指摘がある。第2章でも述べた安明哲(1983:21-29,83-85)は-ㄹ-と-ㄷ 것 이 다の違いを、発話現場の根拠を問題としているか発話上の根拠に関心がないかの差であると述べている。安明哲(1983:69-71)ではその例として「予言」や「啓示」では-ㄹ-よりも-ㄷ 것 이 다が優先的に用いられることを挙げ、「予言」や「啓示」は「何らかの現場的根拠によって成立するものではない」からであるという。また이병기(1997/2000:30-31)でも、-ㄹ-は現場性をその特徴としているのに反して、-ㄷ 것 이-には現場性が欠如しているという。そして-ㄷ 것 이-の特性を説明するのに「予言」の例を挙げて、「予言」は「推定」とは異なり聞く人は予言者が語る「予言」の判断根拠を理解できないので、判断根拠のない「予言」の文には-ㄹ-を用いることができず-ㄷ 것 이-だけが可能であると説明している。日本における研究では野間秀樹(1990:39,55)が、「하겠다는、基本的には発話の現場で得た情報や体験を契機にした判断」であり、할것이다は「主体に関する非現場的事態を推し量って述べるムード」であると両形式の違いを現場的か非現場的かの違いで指摘している。

形態素-ㄹ-に関する議論の中で-ㄷ 것 이-との比較がなされはじめてからいわゆる「推量」に焦点をあてて、主観的か客観的か、あるいはその強弱や確かさなどが論じられた。その後、成者徹(1979/1986)によって「経験の時間上」の違いが指摘されて「現場性」という特徴が提示された。安明哲(1983)や이병기(1997/2000)では「現場性」を「経験の時間」から現場における「判断根拠の有無」という観点から、より具体的にその違いが示されたと言える。しかし、-ㄷ 것 이-の文が必ず発話現場に判断根拠がないとは言えないことは、(258)、(259)、(260)の発話が-ㄷ 것 이-で言い換えることができることからわかる。また、「予言」や「占い」で確信的に述べるときには-ㄹ-を用いた発話が可能な場合もあるだろう。しかし、(261)と(262)の用例で認められるように、談話内に判断根拠が存在しない場合に-ㄹ-を用いた発話は現れないという制約が有ることは言えよう。すなわち、-ㄷ 것 이-は判断根拠の発話現場の談話内の存在の有無に左右されずに出現するが、-ㄹ-は判断根拠が発話現場の談話内にない場合には出現しないという制約が有ると結論づけられよう。

「現場性」は-ㄹ-を巡る多くの論考で取り上げられてきたが、漠然とした意味的ニュアンスがいったいどのような現象であるか、それは何によって現れるものなのか、そしてその現象はいかなる要素であり文法理論の中でどのように位置づけられるのかまでは記述されていなかった。それらの問題点を本稿において直示という現象を用いて、「発話時に」を「時間直示」にあてはめ、「発話現場で」を「場所直示」にあてはめ、そして本稿で提示した「主体の固定性」を「人称直示」にあてはめて用例を分析した。従来は「推量」を中心に「現場性」との関連が論じられてきた中、本稿では-ㄹ-が用いられ4種類の文の叙述形、そして疑問形や修辭疑問の文においても直示的表現が散見されることを具体的な用例を引いて提示できたと考える。特に命題に対して話し手が認識的態度でその「確実性」を述べる時、その判断根拠は当該談話内になければならないことも示した。-ㄹ-が用いられた

文に見られる文法現象をひとつの文の中でだけ捉えようとしていたものを、文脈の中で捉えることによって曖昧な意味的ニュアンスを具体的な現象として説明することができた。

「現場性」と「主体の固定性」は、当該発話における命題が「今、ここで、他ならぬ私が」という発話現場に依存していることを指し示しうる直示的表現であり、それは談話レベルで捉えてこそ説明可能な現象のひとつである。

8.2.4. 前提性

「前提性」は疑問形にのみ見られた特徴であった。ここではまず「前提性」とはどのようなものであるかを確認した後、-ㄹ-を含んだ文にどのような現れ方をするのかを詳細に見る。

8.2.4.1. 前提性とは

第 8 章における叙述形と疑問形の対照を通して見たように、「前提性」は疑問形にのみ確認される特徴である。ここで再度、「前提性」とはどのようなものか、日本語学で用いられている「傾き」を通してその現象を見てみよう。

(263) a. 君、疲れていますか?

b. 君、疲れていませんか?(安達太郎(1999)より)

(263)a,b で示したように、話し手は命題の真偽について肯定・否定いずれの形式でも問いかけることができる。安達太郎(1999)では、「相手が疲れている」という命題が真か偽かを知るためには(263)a と(263)b のどちらを使っても目的は達成されることを述べている。しかし(263)a は相手が疲れているかどうか話し手に判断する材料がない場合に用いられるのに対して、(263)b は相手が疲れているという見込みを持っている場合に使われるとしている。(263)a は「中立的な疑問文」と言えるが、(263)b は相手の様子や状況などから「疲れているだろう」という予測を持っている場合に用いられるというのである。話し手が事態を判断できない状態のときは通常(263)a の肯定形が用いられるが、何らかの判断材料を根拠にして事態に対して肯定的な予測が可能なときは(263)b の否定形が用いられることが多い。このように話し手が持つ事前の予測を安達太郎(1999)は「傾き」と呼び、この例で言えば、(263)b は肯定の「傾き」を有した文ということができる。もちろん(263)a の文でも特定の文脈やイントネーションによって「傾き」が認められる場合もあるが、通常の肯定疑問形は話し手の予測のない中立的な文として成立することが多い。

本稿では、この現象が否定疑問という形態をとらずとも、形態素-ㄹ-によって実現されることに注目した。-ㄹ-を含んだ「前提性」を有した用例を見てみよう。

(198)'A: 벗어 봐. 나도 한번 써보게. 벗어 봐.

(ヘルメットを)とってみろ。俺にも一度かぶらせろよ。とってみろってば。

B: 머리에 들어가겠어?

頭に入るの。

A: 뭐야?

なんだって。

B: 아니, 아니예요.(CK000147)

いえ、なんでもありません。

(198)'の B の下線部の発話には、「君の頭は大きすぎてこのヘルメットは入らない」という話し手の思いが感じられ、中立的な疑問文ではなく否定的「前提性」を持った文であることがわかる。このように-ㄹ-を用いた文は否定的な「前提性」を持ちうるのである。

8.2.4.2. 「前提性」がある文

ここでは-ㄹ-を用いた文が「前提性」を持っている用例を見る。

8.2.4.2.1. 用言語幹に直接結合している文

まず、-ㄹ-が用言語幹に結合して「前提性」をもたらしている用例を見る。

(264) 그거 뭐 누가 사겠어?(BK9X0020)

それ、誰が買うんですか。

(265) 언니가 자기 발로 어떻게 들어오겠어요?(CK000142)

お姉さんが自分の足でどうやって帰って来られるんですか。

(264) と(265)はいずれも疑問詞と共起した文である。(264)は「買う人などいないのではないか」、(265)は「自分からは帰ってこられないだろう」という話し手の否定的な判断が感じられる。

(266) 그러니까 이것은 예, 그, 예, 이제, 그 예배가운의 색깔에 있어서도 반드시 검은 것으로 할 필요가 있겠느냐.(BL940007)

だからこれは、その、礼拝用のガウンの色にしても必ず黒にする必要があるんだらうか。

(266)は副詞と共起した文である。これは話し手自身の疑念を自問している例であるが、반드시という副詞を用いることで条件を限定し、文に否定的ニュアンスをもたらしている。

(267) 일할 맛이야 이거 일할 맛이 나겠어요?(BJ950026)

働く気が…まったく、働く気になりますか。

(199)' 아이엠에프 한파만큼이나 춥겠습니까?(CK000137)

(267)と(199)'は助詞によって意味が加わった文である。(267)は-야、(199)'は-나と、い

ずれも特別な意味を添える補助詞が共起して否定的なニュアンスをもたらしている。

(268) 여의도에서 안 되는 게 산에 간다고 되겠어요?(BK9X0030)

ヨイドで駄目なものが、山に行ったからってうまくいきますか。

(269) 그런 자신 없으면 오겠습니까?(CK000138)

そんな自信がなければ来るでしょうか。

(126)' 범인 열 명을 놓치면 신문, 방송이 조용하겠어요?(BK9X0030)

(268)は引用の連結語尾-다고を用いて一定の条件を示しているが、その状況を否定的に捉えていることがわかる。(269)と(126)'は共に条件の連結語尾-(으)면が先行節に用いられているが、後続節の内容に帰結しにくいような内容が先行説で示されているために否定的なニュアンスが感じられる。

(270) 오렌지족 뭐 이런 거도 있는데, 오렌지 족이 뭐 나라를 망치겠어요?

(BL940003)

オレンジ族っていうのもいますが、オレンジ族が国を滅ぼしますか。

(205)' 아니요, 선배님, 괜찮으시겠습니까?(BK940019)

ここに挙げた文はともに語彙の意味的要素が加わった文である。(270)(205)'とはそれぞれ 뭐 と 아니요 の意味的要素が文に否定的なニュアンスを加えている。

上に挙げた例から「前提性」をもたらす要因と考えられるそれぞれの要素を除くと次のようになる。

(264)' 그거 사겠어?(BK9X0020)

(266)' 그러니까 이것은 예, 그, 예, 이제, 그 예배가운의 색깔에 있어서도 검은 것으로 할 필요가 있겠느냐.(BL940007)

(199)' 아이엠에프 한파만큼 춥겠습니까?(CK000137)

(126)' 방송이 조용하겠어요?(BK9X0030)

(270)' 뭐 여러분들 요즘 뭐 난 말이죠 오렌지족 뭐 이런 거도 있는데, 오렌지 족이 나라를 망치겠어요?(BL940003)

ここに挙げた例を見ると、それぞれ「前提性」をもたらすと考えられる要素を取り除いても、微妙に否定的なニュアンスをぬぐいきることはできないことがわかる。つまり、「前提性」をもたらしているのは共起している要素のみならず、形態素-겠-もその役割を担っているということである。事態に否定的な予測を持って問いかけようとするときには、これらの要素と-겠-が共起しながら文の意味の成立に関与するのであろう。その「前提性」が強ければ強いほど話し手の主張は強まり反語となるのである。

8.2.4.2.2. 文法的連語に結合した文

次に、-겠-と文法的連語が結合して「前提性」をもたらしている用例を見る。

(129)' 당신이라면 그렇게 할 수 있겠어?(CK000146)

(131)' 그렇다고 집안에서 공포분위기까지 조성해가지고, 도대체가 주눅이 들고, 압박과 핍박 속에서 하루하루 살아야겠습니까?(BK950021)

だからといって、家の中で恐怖(の雰囲気)を醸し出して、すっかり萎縮して圧迫と逼迫の中で毎日暮らさなければいけませんか。

(129)'は可能性を表す-ㄴ 수 있다、(131)'は当為・義務を表す-어야 하다に-겠-が結合してムードの重複が見られる。(129)'の例は文脈によって中立的な文ともとれるが、(131)'はそこまでして暮らす必要はないという否定的な「前提性」が感じられる。

8.2.4.2.3. 過去形式と結合した文

さらに、-겠-が過去形式と共起した文が「前提性」をもたらす用例を見る。

(134)' 선생님들도 뭐 좀 나무랄래도 좀 눈치 보였겠어요?(BK9X0029)

(135)' 꽤 힘들었겠어요?(BK950016)

上に挙げた二つの文はいずれも発話時以前の事柄について述べている。聞き手に問いかけるというより話し手が事態に対して感じたことを提示して同意を得ようとしており、答えを求めてはいない。話し手自身が事態をどのように認識しているかを伝えており、叙述形-겠지で言い換えができるようだ。これは話し手の肯定的な思いを伝えているので、肯定の「前提性」と言えるかもしれない。

ここで、聞き手の応答を求める文になるように先行の要素を取り除いてみる。

(134)' 눈치 보였겠어요?(BK9X0029)

(135)' 힘들었겠어요?(BK950016)

(134)'は「눈치 안 보였겠다」、(135)'は「안 힘들었겠다」という否定的「前提性」が感じられる。用例選択にあたって、過去形式の文はほとんどが反語表現であるか同意を要求している文であり、聞き手に応答を求めている用例は見あたらなかった。

8.2.4.3. 「前提性」が現れる文法的要件

Ⅲ型のすべてのケースの用例を提示して母語話者に調査を行った結果を表にすると、次のようになる。インフォーマントが文法的に成立すると判断した場合は○を、成立しない

と判断した場合は×を、成立するが表現が古めかしい言い回しで現代ではあまり使われないと判断した場合は△を付した。

[表 25] 疑問形Ⅲ型の中で「前提性」が認められると判断される場合

	主体が聞き手	結合用言				効/効の共起	句の共起	テンポラリティ	文の成立	傾きに対するインフォーマントの判断
		動	存	形	指					
ⅢA	+	+	-	-	-	-	-	未来	○	
ⅢB	+	-	+	-	-	-	-	現在/未来	○	
ⅢC	+	-	-	+	-	-	-	現在/未来	○	
ⅢD	+	-	-	-	+	-	-	現在/未来	×	
ⅢE	+	+	-	-	-	-	+	過去	△	
ⅢF	+	-	+	-	-	-	+	過去	△	
ⅢG	+	-	-	+	-	-	+	過去	×	
ⅢH	-	+	-	-	-	-	-	現在/未来	○	○
ⅢI	-	-	+	-	-	-	-	現在/未来	○	○
ⅢJ	-	-	-	+	-	-	-	現在	○	○
ⅢK	-	-	-	-	+	-	-	現在	○	○
ⅢL	-	+	-	-	-	+	-	過去	○	○
ⅢM	-	-	+	-	-	+	-	過去	○	○
ⅢN	-	-	-	+	-	+	-	過去	○	○
ⅢO	-	-	-	-	+	+	-	過去	△	
ⅢP	-	+	-	-	-	-	+	過去	△	
ⅢQ	-	-	+	-	-	-	+	過去	△	
ⅢR	-	-	-	+	-	-	+	過去	△	
ⅢS	-	-	-	-	+	-	+	過去	×	

表 25 を見ると、「前提性」が認められるのはⅢHからⅢNまでの文であることがわかる。文法的な条件を見ると、まずは主体が聞き手以外であることが挙げられる。また、テンポラリティが現在か未来の場合は結合用言に制約はないが、過去の場合は指定詞に結合するⅢOは「前提性」がない。しかし、ⅢOタイプは不自然な文なので、主体が聞き手以外で疑問形として成立する文は全て「前提性」が認められうるということになる。

8.2.4.4. -ㄹ-を含まない文との違い

ここでは、反語の用例を対象に-ㄹ-を含んだ場合と-ㄹ-がない場合の「前提性」現象の差異を分析する。

(271) 제가 안 하면 누가 하겠습니까?(CK000137)

私がしなければ誰がするんですか。

(272) 노인, 노인이라고 어디 처음부터 어디 저래 늙었겠습니까?(CK000150)

老人、老人だからって初めからあんな風に老けてましたか。

(160)' 명색이 경찰 고위 간부 체면이 있지 ……물장사를 하겠어요, 술장사를 하겠어요?(BK9X0030)

仮にも警察の高位幹部なのだから体面って言うものがあるでしょ…水商売や酒の商売をやりますか。

(273) 그래야 새끼가 발길질뒹 아프겠습니까?(BK950004)

そうしたって、(つまり、豚の)子どもが足蹴にしたって痛いですか。

(161)' 이 세상에 전부 다 쉬운 게 있겠습니까?(BK940019)

この世の中、すべて簡単なものがありますか。

(274) 말이 삼백대지, 삼백대를 판다는 게 어디 쉬운 일이겠어요?(BK9X0020)

一口に 300 台って言うけど、300 台売るのがそんなに簡単なことですか。

ここに挙げた例はすべて聞き手に応答を要求していない文である。これらの文から反語要因と考えられる要素と-겠-を取り除いて応答を求める文になるようにした文を a、再度-겠-を加えた文を b として、その差異を見ることにしよう。

(271)' a: 제가 안 하면 누가 합니까?

b: 제가 안 하면 누가 하겠습니까?(CK000137)

(271)'a の場合は自分以外でする人がいるのかを尋ねる中立文としても成立するが、(271)'b のように-겠-があると「自分以外に行う人はいない」というニュアンスが込められる。

(272)' a: 처음부터 저래 늡었습니까?

b: 처음부터 저래 늡었겠습니까?(CK000150)

(272)'a の場合は老けていることに驚きを感じてはいるものの、初めから老けていたのかを問う文としても成立するが、(272)'b の文では「初めから老けていたのではない」という話し手の主張が充分感じられる。過去形式の場合は「前提性」現象が現れる場合が多い。

(160)' a: 물장사를 해요, 술장사를 해요?

b: 물장사를 하겠어요, 술장사를 하겠어요?(BK9X0030)

(160)'a は状況によっては中立的な選択疑問文としても成立するのに比べて、(160)'b は特定の文脈を想定しても中立的な疑問文にはなり難い。

(273)' a: 새끼가 아릅니까?

b: 새끼가 아프겠습니까?(BK950004)

(273)'a の場合は特定の文脈を与えないかぎり中立疑問文となるが、(273)'b のように主体に話し手も聞き手も含まれず形容詞に結合する場合は、否定的ニュアンスが強まる。

(161)' a: 전부 다 쉬운 게 있습니까?

b: 전부 다 쉬운 게 있겠습니까?(BK940019)

(161)'a、(161)'b とともに「全て簡単なもの」という名詞句から否定的な応答を予測しがちである。にも拘らず、(161)'a は特定の文脈の中では中立的な疑問文としても捉えられるが、(161)'b のように-ㄷ-が加わると「そんなものはない」という話し手の予測が必ず発話の中に反映される。

(274)' a: 삼백대를 판다는 게 쉬운 일이에요?

b: 삼백대를 판다는 게 쉬운 일이겠어요?(BK9X0020)

(274)'a の場合は、「300 台」が相当な数字であるという前提を与えない限り中立的疑問文として成立するが、(274)'b の場合は「300 台」という数字をどう捉えているかということとは関係なく、「簡単なことではない」という感じがする。叙述形では指定詞と-ㄷ-が結合する頻度は極めて低いですが、疑問形では結合頻度が高まる。これは反語として修辭的に用いられる場合が多いからである。

以上、反語の用例から否定的意味を招くと思われる要素を取り除き、そこに-ㄷ-を加えることでどのような意味的差異をもたらすかを分析した。-ㄷ-が用いられない文ではイントネーションの影響を受けない限り中立的な疑問文としても成立する場合が多く、反語として捉えるには特定の文脈を与えるなりイントネーションを変える必要がある。しかし-ㄷ-を加えることで、文脈やイントネーションの影響を考慮に入れずとも否定的ニュアンスが感じられる「前提性」現象を確認できる。つまり、-ㄷ-が無い場合は中立的疑問文とも反語とも解釈できるが、反語表現として捉えるには一定の条件が必要である。一方-ㄷ-がある場合は条件なしで否定的ニュアンスを与えることができる。これは、話し手が自らの否定的判断を塗りこめようとするときに-ㄷ-を選択して文を成立させ、他の要素と共起させることでその「前提性」のあり方が強くなっていくからと言える。-ㄷ-は、「前提性」をもって命題を疑問化させることを目的に言語操作の装置として用いられた選択性のある形態素である。

一般的真理に-ㄷ-は用いられないことは先に述べたが、一般真理の真逆のことに-ㄷ-を用いると皮肉になり、それを疑問形にすると反語になる。用例を見よう。

(275) 해가 서쪽에서 뜨겠다.(作例)

陽が西から昇る。

(276) 해가 서쪽에서 뜨겠어요?(作例)

陽が西から昇りますか。

(275)のように自然の摂理に反したことを述べる場合それは常に偽であるが、誰もが偽と判断つくことにあえて高い確実性を認めることで発話と真逆のことを強く主張することができる。そして(276)のように疑問形にすると、当然偽である命題について問いかけること

によって聞き手にその命題が偽であることを再確認させることになって反語となるのである。

8.2.4.5. 「前提性」がない文

Ⅲ型の文の中でも「前提性」がない場合がある。どのような場合に「前提性」現象が起こらないのか用例を見ることにする。

(277) ‘나는 문제없어’란 노래, 지금 이 자리에서 되겠습니까?(BK950018)

「私は問題ない」って歌、今この場で歌えますか。

(277)は動詞되다に結合した例である。この動詞は動作性がなく多様な用法を持つが、ここに挙げた例のように「あることが成り立つ」という意味で用いられる場合は「確実性」を認識しているか問う文として成立し、「前提性」を持たない。また、事態に対して判断可能なのは聞き手だけなので、話し手が自らの判断予測を塗りこめることはできない。

疑問詞と共に起しながらも「前提性」が認められない例である。

(278) 그 숫자가 몇 명 되겠어요?(BL940003)

その数字は、何名になりますか。

(279) 저 경비는 얼마나 들겠습니까?(CL000194)

あの、経費はどれくらいかかりますか。

(280) 저희 학생들만 시험을 볼 게 아니라 국회의원도 국정능력시험을 보게 하면 어떻겠어요?(BK9X0030)

うちの学生だけがテストを受けるんじゃないくて、国会議員も国政能力試験を受けるようにすればどうですか。

(278)(279)ともに、具体的な数字や金額について尋ねている。このように、数詞を用いた応答を求める文では「前提性」を有しない文として成立するようである。また、(280)のように、어떻다という疑問詞を用いる場合にも話し手が聞き手に何かを提案する文として成立し、「前提性」は認められない。

次に、文法的連語と結合した場合を見る。

(130)’ 어떻게 했으면 좋겠습니까?(CL000189)

(133)’ 아, 올라가도 되겠습니까?(BK9400199)

(130)’は願望、(133)’は許可を求めるムード形式と結合した例で、中立的な文と考えられる。願望や許可のように、聞き手が事態についての判断材料を持っている場合や聞き手に判断する決定権がある場合は文の意味に「前提性」は認められにくい。

以上の内容を見ると、事態に対する判断が聞き手に委ねられている場合や、具体的な数

字で応答することを求める疑問文の場合など、一定の条件が備われば「前提性」を有しない文として成立するようである。

8.2.4.6. -烈-が用いられた文はどのように「前提性」現象をもたらすのか

「前提性」現象が現れる文法的要件は主体が聞き手以外であることであつた。そのうえで用例を詳しく見ると、主体が第三者の場合が多い。つまり、対話の参与者である話し手と聞き手が、ある対象物なり事象を眼前にして、あるいは発話現場で得た情報を根拠にして対話をしていることがわかる。そのとき、話し手と聞き手が持つ事態に対する情報量は同量且つ同質と言える⁶⁸。話し手が事態に対してどのような認識、判断を持つかという根拠を支える情報が発話現場にあるなら、対話の参与者である聞き手も同じ状況下にある。にもかかわらず話し手が聞き手に問いかけるのは、話し手が自らの未知の部分埋めるのではなく他の目的を持って修辭的に-烈-を選択したのだと考えられる。話し手は、命題の真偽に対する予測を含意させて問いかけることで、聞き手の見解に自らの判断を照らし合わせようとすることができる。そして、「考えても見ろ」という意図を疑問の形式で伝達することにより、聞き手の意識を喚起しながら命題の真偽を再確認させることもできる。その結果、話し手の判断を強く主張する情報提供の文となさしめているのではないだろうか。これは、話し手が事態に対して持っている否定的判断を文の意味に含意させることで文字通りの意味と乖離した内容を提示あるいは主張する語用論的な選択である。このように否定的な見込みが強ければ強いほど反語になっていく。日本語記述文法研究会編(2009:51)は反語の解釈について、「逆の判断を予測させやすい意味内容が疑問化されることで反語解釈が生じることが多い」と述べているが、発話現場の情報を共有する当事者の間で、明らかに正反対の判断を成立させる内容であることを聞き手が認識していれば容易く反語となるのである。

8.3. まとめ

本章では、第5章から第7章における考察結果より得られた先語末語尾-烈-を含んだ文に現れる特徴である「現場性」「主体の固定性」「前提性」について論じた。それぞれの特徴をさらに深く分析するために新たな用例を加えながら、これら3つの特徴が-烈-を含んだ多様な文においてどのように現れるかを詳細に観察した。その結果明らかになったことを以下に示す。

- 1) 「現場性」とは、文の意味に「発話時に・発話現場で」というニュアンスをもたらすということであるが、この特徴は-烈-を含んだ叙述形と疑問形のそれぞれ全ての型

⁶⁸ インフォーマントに、主体に聞き手が含まれておらず用言語幹に結合した普通疑問の用例を依頼すると、反語になってしまって中立的な文が成立する状況を設定しにくいとの指摘があった。しかし一方でクイズ番組などの問題文の場合は不自然さが緩和されるというコメントもあった。

の文において現われることが確認できた。Ⅰ型の文の叙述形は意思決定と発話までの時間が短いこと、疑問形は発話現場で意思決定事項について尋ねるといのように、いずれも「リアルタイムの意思決定」に関わる用例が多い。Ⅱ型の文の叙述形は発話と事態成立が直結する例が多く、疑問形はⅡ型がない形式であった。Ⅲ型の文の叙述形では、話し手が事態の成立に対する「確実性」を発話現場で得た体験的経験による文に認められた。これは、話し手が事態に高い確実性を認識するための情報の出所は話し手の発話時、発話現場における直接的体験という「証拠性」に依拠していると考えられる。Ⅳ型の文の叙述形は、発話時、発話現場で話し手がどのような状態に置かれているかという述べ方に現れ、疑問形は、話し手が発話現場で示した事柄について尋ねる文に認められた。-ㄹ-を含んだ文は叙述形も疑問形も発話現場で起こる限定された個別事項をめぐる文に用いられ、Ⅳ型は特に発話現場でこそ文が成立することが顕著に現われる。また、「現場性」を持たない一般的真理や普遍的事実や習慣的な事柄を語る時は-ㄹ-が用いられない。

- 2) 「主体の固定性」とは、文に明示されていない主体が、叙述形においては「話し手」であり疑問形においては「聞き手」であることが固定しているということである。Ⅰ型の文の叙述形では動作を行う主体が話し手であり、疑問形では疑問化されている事態を成立させるのは聞き手であることが固定されている。Ⅲ型の文では、事態成立に高い確実性を認識しているのは話し手であり、疑問形においては聞き手自身の個人的意見や見解について尋ねているところに、固定性が認められる。Ⅳ型の文においては、叙述形では話し手自身の置かれた状況を述べており、疑問形では聞き手が置かれた状況について尋ねている。また、-ㄹ-を含んだ挨拶表現は、主体が話し手であることの固定性が強く、あえて主体を明示するとかえって不自然な表現になる。また、「普通疑問」のみならず修辭疑問においても「主体の固定性」が観察されたが、本稿では用例を示すのみに留まり詳しい考察にはいたらなかった。「主体の固定性」は、発話現場の対話参加者の主観が発話に塗りこめられるために現れるものであり、これは先に述べた「現場性」という特徴から2次的に導き出された特徴と言えよう。
- 3) 「現場性」と「主体の固定性」を、直示という概念を用いて説明した。「現場性」に認められる「発話時に」「発話現場で」、また「主体の固定性」に認められる「話し手が」を、それぞれ「時間」「場所」「人称」を示す直示的表現と捉え、これらがⅠ型からⅣ型までの叙述形と疑問形においてどのような現れ方をするのかを詳しく分析した。その結果、「現場性」と「主体の固定性」は、命題が「発話時に、発話現場で、話し手または聞き手が」という発話現場に依存していることを指し示しうる直示的表現であり、それは文脈の中で捉えてこそ説明可能な現象であることがわかった。加えて、従来の研究で指摘された-ㄷ 것 이-との比較も参考にしながら、-ㄹ-を用いて命題に対して話し手が認識的態度でその「確実性」を述べる時、その判断根拠は当該談話内にあることを述べた。さらに、-ㄷ 것 이-を含んだ文は判断根拠が発話現場に存在するか否かの制約はないが、-ㄹ-を含んだ文は発話現場に判断根拠がない場合には出現しない制約があることも明らかにした。

- 4) 「前提性」とは、話し手が聞き手に対して問いかけるときに、事態の真偽判断や成立に対する予測を持っていることを言い、疑問形だけに現れる現象である。さらにこの現象には、主体が聞き手ではないという文法制約があるため、Ⅲ型にしか現れない。話し手が疑問化された事態に否定的な「前提性」を持ったうえで聞き手に問いかけるのは、先に述べた「現場性」の関与が考えられる。つまり、対話参与者である話し手と聞き手は、発話現場においては事態の成立に対する情報量は同量かつ同質である場合が多い。そのような発話状況で話し手があえて聞き手に問いかけるのは、本来の疑問形の機能である「質問」が目的ではなく、疑問形という形式を用いて聞き手の認識を喚起したり話し手の主張を伝達したりすることを目的とした語用論的選択である。このことは、-ㄹ-を含んだ疑問形の文は反語表現になりやすいことや修辭的用法が多いことを見てもわかる。ただし、この「前提性」は、特定の疑問詞との共起、聞き手の判断に委ねる場合、特定の語彙的意味を持つ用言など、一定の条件を備えると消失することも明らかにした。

以上のことから、現代韓国語の先語末語尾-ㄹ-は、文の意味に「現場性」「主体の固定性」「前提性」という 3 つの特徴もたらしうることを、叙述形及び疑問形のそれぞれの型の文ごとに詳細な観察及び分析を行って明らかにした。形態素-ㄹ-は、話し手が「発話時に・発話現場で」という状況の下で選好して用いられ、その発話状況が 2 次的に発話参与者の主観が文に塗りこめられることになり、文の主体が話し手及び聞き手であるという「主体の固定性」を導き出すものと考えられる。そのうえで、「現場性」及び「主体の固定性」という特徴を単独の文の構造の中でだけ捉えるのではなく、コンテキストの中で捉えることによって、文法要素が表す曖昧な意味的ニュアンスにすぎなかった特徴を直示という現象を通して具体的に説明することができた。さらには、「現場性」という特徴が文の意味に現れやすい形態素-ㄹ-は、話し手自身が持つ事態の真偽、成立に対する予測を塗り込んで疑問化されるとき、否定的「前提性」を持った疑問となって聞き手に問いかけるという語用論的効果をもたらす。従来の研究において指摘された「現場性」は、主に「推量」に焦点をあてたものが多かった。また、「主体の固定性」は異なった表現で言及された論考もあった。しかし、本稿においては、一部の用法のみならず、全ての用法において現われうる特徴であることを、それぞれの型の文における現われ方を示しながら詳細な分析を通して考察した。そして、これら 3 つの関係性についても言及することができた。

第9章 結論

本論文は、多様な文に用いられる現代韓国語の先語末語尾-ㄷ-がもたらす多義構造を明らかにするために、話し言葉に用いられやすい-ㄷ-の性質を考慮してコーパスの話し言葉のデータを資料とし、-ㄷ-を含む文の意味と形態素-ㄷ-の機能を区別して多彩な用例を引きながら、-ㄷ-と多様な文との関連性を詳細に分析して論じた。本章では、それらの考察結果を述べる。

まず9.1では、第4から第8章までで明らかになったことをそれぞれ整理して示し、9.2で-ㄷ-の機能と多義構造について述べる。

9.1. -ㄷ-の機能と特徴

ここでは、第4章から第8章までの各章ごとの内容を要約する。

9.1.1. -ㄷ-の出現環境について

第4章では、話し言葉を転写した発話データの計量作業とインフォーマントによる内省調査を行い、-ㄷ-と他の語尾との結合関係及び共起関係についての観察を通して-ㄷ-の出現環境を調べた。その結果を以下に示す。

まず、-ㄷ-と後続語尾との結合制約を見ると、終結語尾、連結語尾、冠形詞形語尾、名詞形語尾の4種類すべての語尾の中に、-ㄷ-と結合制約がある語尾が含まれている。その中でも冠形詞形語尾-ㄴ(을)、-ㄴ(은)、名詞形語尾-기と結合制約があり、冠形詞形語尾-는、-던とも結合しにくいという結果が得られたが、これは形態素-ㄷ-が体言を修飾することに関わりにくいことを示唆してくれる。さらに形態的特徴から結合制約を見ると、-ㄴ-で始まる語尾とは結合しないことがわかった。また意味的及び意味機能的側面から見ると、「推量」「意志」「約束」「未来」「選択」「兼行」「連発」「譲歩」「意向」「到及」「添加」「益甚」「推想」「疑念」「必要」に関わる語尾と結合制約が見られるた。

次に-ㄷ-を含む複文における特徴としては、先行節に連結語尾-(으)면が来る頻度が極めて高いことから、複文において一定の条件を示した先行節と-ㄷ-との共起性が高いことが明らかになった。

従来の研究では言語資料を母語話者の直観や文学作品などに頼っていたため、結合制約や共起性の高さなどを数字で提示することは難しかったが、本稿では大量の発話データを用いて計数作業を行い、加えて韓国語母語話者の内省調査を行うことで、形態素-ㄷ-の実際の発話における結合制約や共起性などを、形態的側面及び意味機能的側面から明らかにすることができた。さらにこの結果は先行研究における結合制約に対する反証の根拠ともなった。

9.1.2. 叙述形の文について

第5章では、-ㄷ-が用いられる叙述形の文を、文法的基準を定めて用法を分類し、文の意味と形態素の機能を区別して論じた。その結果を以下に示す。

まず、-ㄷ-が用いられる終結形の叙述形の文は、主体、結合する用言の種類、他の語尾との結合制約、テンポラリティという文法的基準に照らして分類すると4種類の型に分かれる。これら文法的特徴はそれぞれの型の文の用法においても違いがあり、意志を述べる用法、予告する用法、命題に確実性を認識して述べる用法、発話時に主体が置かれている状態を述べる用法として分類できる。便宜上これらの型の文をⅠ型、Ⅱ型、Ⅲ型、Ⅳ型と称した。

次に、Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅲ型、Ⅳ型の文それぞれが、その文の意味の実現において、形態素-ㄷ-には「未来性」「確実性」「婉曲性」をもたらす役割があり、これらは互いに排除することなく文にあって機能しながら文の意味の実現に関与することがわかった。「未来性」と「確実性」は、事態を「非現実」のものと捉えた述べ方であり、文の意味の実現に「現実」に対する「非現実」という文法的な対立をもたらす文法的機能である。一方「婉曲性」は、事態を間接的に述べるものであって「非現実」のものと捉えた述べ方ではなく、文の意味の実現において文法的対立に直接関与しない語用論的機能であり、「婉曲性」は丁寧さ、曖昧さ、誇張表現、主体の感情を慮るという4つの語用論的効果をもたらすことを明らかにした。

最後に、-ㄷ-を用いた文には「現場性」と「主体の固定性」という2つの特徴があることを確認した。「現場性」とは、文の意味に「発話時に・発話現場で」というニュアンスが感じられることである。「主体の固定性」とは、主体が明瞭に提示されないまでも、それが話し手であることの固定性が認められるということである。この2つの特徴のうち「現場性」はいくつかの論考で既に指摘されていたし、「主体の固定性」は一部の論考で「話し手の顕在化」と称されて言及されている。しかし両特徴共に、特定の用法に現れる場合について指摘されるにとどまっているが、本稿では4つの型の文を通して文の特徴として現れうることを発話データをもって裏付けた。

以上のことから現代韓国語の先語末語尾-ㄷ-は、叙述形の文の意味の実現に「未来性」と「確実性」をもたらす文法的機能を有した「非現実」のムード形式であり、異なった次元で派生的に「婉曲性」をもたらす語用的機能も備えた形態素である。同時に-ㄷ-を用いた文には「現場性」と「主体の固定性」という特徴が見られることを明らかになった。

従来の研究においては、-ㄷ-を含んだ文の意味と形態素-ㄷ-の機能を混同した分析及び考察が見られたが、本稿において初めて文のレベルの意味と形態素の機能を区別して論じた。また、文法的機能と語用論的機能を異なった次元と捉えて論じ、文法的機能がどのように語用論的に援用されるのか、またどのように派生していくのかという繋がりを示すことができた。

9.1.3. 疑問形の文について

第6章では、-ㄷ-が用いられる疑問形の文を「普通疑問」と「特殊疑問」に大別して、「普通疑問」は叙述形にならって文法的基準を定めて用法を分類した後、文の意味と形態素の機能を区別して論じ、「特殊疑問」は文の意味的側面から細かく下位分類して論じた。その結果を以下に示す。

まず、-ㄷ-が用いられる疑問形の文の「普通疑問」について述べる。「普通疑問」は、主体、結合する用言の種類、他の語尾との結合制約、テンポラリティという文法的基準に照らして分類すると3種類の型に分かれる。これら文法的特徴はそれぞれの型の文の用法においても違いがあり、聞き手の意志を尋ねる用法、命題に確実性を認識しているのかを尋ねる用法、発話時に主体が置かれている状態について尋ねる用法として分類できる。便宜上これらを叙述形に準じてI型、III型、IV型の疑問形と称した。「普通疑問」のI型、III型、IV型の疑問形の文それぞれが、文の意味の実現において、形態素-ㄷ-には「未来性」「確実性」「婉曲性」をもたらす役割がある。これらは互いに排除することなく文にあって機能しながら文の意味の実現に関与することがわかった。「普通疑問」において「未来性」と「確実性」は、事態を「非現実」のものと捉えた述べ方であり、文の意味の実現に「現実」に対する「非現実」という文法的な対立をもたらす文法的機能である。一方「普通疑問」における「婉曲性」は、事態を間接的に述べるものであって「非現実」のものと捉えた述べ方ではなく、文の意味の実現において文法的対立に直接関与しない語用論的機能であり、「婉曲性」は丁寧さや曖昧さなどの語用論的効果をもたらすことを明らかにした。

次に、-ㄷ-が用いられる疑問形の文の「特殊疑問」について述べる。「特殊疑問」は、終結語尾-지と結合する確認要求の用法と終結語尾-는가と結合する疑念の用法と修辞疑問に下位分類される。

終結語尾-지と結合する確認要求の用法、及び終結語尾-는가と結合する疑念の用法における-ㄷ-の役割は、ムードの観点から「非現実」を表す機能があるということを明らかにするに留まった。

修辞疑問は、さらに反語表現、感嘆を伝える文、話し手の認識を聞き手に提示して同意を求める文、行為を提案・督促する文、行為を求める文、過去の事柄を説明する文の6つに分けることができる。修辞疑問においては、-ㄷ-の有無による意味的な差異が曖昧で、形態素-ㄷ-の機能を明確に見出すことは困難である。しかし、用例を詳しく観察した結果次の3点を指摘することができる。第一に、相手の発話内容に対する反発、または対話における応答の発話では-ㄷ-を含んだ反語表現は現れにくいことが観察される。第二には、「名詞/名詞句 + 아ㄴㄷ-?」の形態で話し手の認識を聞き手に提示するとき、同意要求はできても確認要求はしにくく、-ㄷ-が介入しない「名詞/名詞句 + 아ㄴ-?」の形態では同意要求も確認要求も、さらに発見の驚きも伝えるもできるということが観察された。このことから、話し手の中で事態への判断が成立するには段階があると考えられ、判断が成立過程にある場合には-ㄷ-を用いない「名詞/名詞句 + 아ㄴ-?」のほうが自然であるということができる。第三に、行為を提案・督促する文、行為を求める文における肯定形式の文のうち、聞き手の動作に言及する文では-ㄷ-がないと修辞疑問として成立しなくなることが観察された。

最後に、-ㄷ-を用いた文には「現場性」「主体の固定性」「前提性」とい3つの特徴があることを確認した。叙述形でも述べたとおり、「現場性」とは、文の意味に「発話時に・発話現場で」というニュアンスが感じられることであった。「主体の固定性」とは、主体が明瞭に提示されないまでも、それが話し手であることの固定性が認められることであ

った。そして、疑問形で新たに確認できた「前提性」とは、話し手が聞き手に対して尋ねるときに、事態の真偽判断に何らかの予測を持っていることをいう。

以上のことから現代韓国語の先語末語尾-ㄷ-を含んだ疑問形は「普通疑問」と「特殊疑問」に下位分類され、「普通疑問」において-ㄷ-は、文の意味の実現に「未来性」と「確実性」をもたらす文法的機能を有し、異なった次元で派生的に「婉曲性」をもたらす語用的機能も備えた形態素であり、-ㄷ-を用いた文には「現場性」と「主体の固定性」に加えて疑問形特有の「前提性」という特徴があることを明らかにした。「特殊疑問」においては、確認要求の用法、及び疑念の用法における-ㄷ-には「非現実」を表す機能があることを述べたが修辭疑問における-ㄷ-の役割を明らかにすることはできず、特定の文において-ㄷ-を用いないと修辭的表現になりにくい例を示すに留まった。

従来の研究においては、疑問形における-ㄷ-の詳細な研究が見過ごされていたが、本稿において初めて疑問形の文を細かく分類して、疑問形における-ㄷ-の役割を詳細に分析し考察することを通して、叙述形だけではわかり得なかった-ㄷ-の新たな機能的、意味的側面を示すことができた。

9.1.4. 叙述形と疑問形の対照

第7章で、叙述形と疑問形を対照させながら-ㄷ-の機能や特徴の現れ方を整理した。第5章と第6章において叙述形と疑問形をそれぞれ同じ基準で分類したが、それぞれの形式の文が対をなして並行的に成立するのか、それぞれの機能は同様に現れるのか、文の特徴は同じ様相で現れるのかどうか、違いがあるなら両形式にそれぞれ特有の特徴があるのか考察した。その結果を以下に示す。

まず、叙述形と疑問形の文の種類を対照させると、叙述形が4種類の用法が成立することに対して疑問形は3種類の用法があるのみで、予告する用法のⅡ型に対応する疑問形はないこと、また、Ⅲ型とⅣ型の文でも叙述形に対応する疑問形を持たない場合があることがわかった。このことは、-ㄷ-が疑問形には生起しにくい形態素であることを示唆してくれる。

次に、叙述形と疑問形の文の意味の実現において形態素-ㄷ-は「未来性」「確実性」「婉曲性」をもたらす機能があり、それらは両形式でほぼ並行的に認められる。

最後に、-ㄷ-を含んだ文の特徴は、叙述形と疑問形の両形式において「現場性」が認められる。また叙述形と疑問形の両形式において「主体の固定性」も認めらるが、その現れ方は叙述形においては主体が話し手として固定しており、疑問形においてはそれが聞き手に転じることが明らかになった。さらに「前提性」は、疑問形のⅢ型の文にのみ現れる疑問形特有の特徴であることがわかった。

以上のことから、現代韓国語の先語末語尾-ㄷ-は、叙述形と疑問形において文の型の種類や機能、あるいは文に現れる特徴などが必ずしも並行的ではないことがわかった。また叙述形と疑問形の両形式を、文の型ごとにそれぞれ文法的結合制約及び共起の関係からさらに下位分類して、一々文として成立しうるかどうかを確認することで、叙述形に比べて疑問形が成立しづらいことが明らかになるとともに、どのような文法的条件の下で疑問形が成立しないのかまでも詳細に示すことができた。

9.1.5. -烈-を含んだ文の特徴について

第8章で、-烈-を含んだ文に現れる特徴である「現場性」「主体の固定性」「前提性」について詳しく述べた。それぞれの特徴ごとに、新たな用例を加えながら分析し、これら3つの特徴が-烈-を含んだ多様な用法においてどのように現れるかを詳細に観察した。その結果を以下に述べる。

まず、「現場性」とは、文の意味に「発話時に・発話現場で」というニュアンスをもたらすということであるが、この特徴は-烈-を含んだ叙述形と疑問形のそれぞれ全ての型の文に現われることが確認できた。I型の文の叙述形は意思決定と発話までの時間が短いこと、疑問形は発話現場で意思決定事項について尋ねるということ、いずれも「リアルタイムの意思決定」に関わる用例が多かった。II型の文の叙述形は発話と事態成立が直結する例が多く、II型の疑問形は成立しない。III型の文の叙述形では、話し手が事態の成立に対する「確実性」を発話現場で得た体験的経験による発話に認められた。これは、話し手が事態に高い確実性を認識するための情報の出所は話し手の発話時、発話現場における直接的体験という「証拠性」に依拠していると考えられる。IV型の文の叙述形は、発話時、発話現場で話し手がどのような状態に置かれているかという述べ方に現れた。IV型の疑問形は、話し手が発話現場で示した事柄について尋ねる場合に認められた。-烈-は、発話現場に限定された事柄について述べる場合に多く用いられるが、特にIV型の文は叙述形も疑問形も発話現場で起こる限定された個別事項をめぐる場合でこそ文が成立し、「現場性」を持たない一般的真理や普遍的事実や習慣的な事柄を語る場合は-烈-を含んだ文はほぼ成立しない。

次に、「主体の固定性」とは、文に明示されていない主体が、叙述形においては「話し手」であり疑問形においては「聞き手」であることが固定していることである。I型の叙述形では動作を行う主体が話し手であり、疑問形では疑問化されている事態を成立させるのは聞き手であることが固定されている。III型の文では、事態成立に高い確実性を認識しているのは話し手であり、疑問形においては聞き手自身の個人的意見や見解について尋ねているところに、固定性が認められる。IV型の文においては、叙述形では話し手自身の置かれた状況を述べており、疑問形では聞き手が置かれた状況について尋ねている。また、-烈-を含んだ挨拶表現は、主体が話し手であることの固定性が強く、あえて主体を明示するとむしろ不自然な表現になる。また、疑問形の「普通疑問」のみならず修辭疑問においても「主体の固定性」が観察されたが、本稿では用例を示すのみに留まり詳しい考察には至らなかった。「主体の固定性」は、発話現場の対話参加者の主観が発話に塗りこめられるために現れるものであり、これは先に述べた「現場性」という特徴から2次的に導き出された特徴と言えよう。

続いて「現場性」と「主体の固定性」を直示という概念を用いて説明するために、「現場性」に認められる「発話時に」と「発話現場で」を、また「主体の固定性」に認められる「話し手が」を、それぞれ「時間」「場所」「人称」を示す直示的表現と捉え、これらがI型からIV型までの叙述形と疑問形においてどのような現れ方をするのかを文脈の中で詳し

く分析した。その結果、「現場性」と「主体の固定性」は、命題が「発話時に・発話現場で・話し手が」という発話現場に依存していることを指し示しうる直示的表現であり、それは文脈の中で捉えてこそ説明可能な現象のひとつであることがわかった。加えて、従来の研究で指摘された-ㄷ 것이-との比較も参考にしながら、命題に対して話し手が認識的態度でその「確実性」を述べる時、その判断根拠は当該談話内にあり、さらに-ㄷ 것이-を含んだ文は判断根拠が発話現場に存在するか否かの制約はないが、他方-ㄹ-を含んだ文は発話現場に判断根拠がない場合には出現しない制約があることを明らかにした。

最後に、「前提性」について述べる。「前提性」とは、話し手が聞き手に対して尋ねるときに、事態の真偽や成立に何らかの予測を持っていることを言い、疑問形だけに現れる現象である。さらにこの現象には主体が聞き手以外であるという文法制約があるため、Ⅲ型にしか現れない。話し手が疑問化された事態について否定的な「前提性」を持ったうえで聞き手に問いかけるのは、先に述べた「現場性」の関与が考えられる。つまり、対話参与者である話し手と聞き手は、発話現場においては事態の成立及び真偽に対して「確実性」を認識するための情報は同量かつ同質である場合が多い。そのような発話状況で話し手があえて聞き手に問いかけるのは、疑問形の本来の機能である「質問」を目的としているのではなく、疑問形という形式を戦略的に用いて聞き手の認識を喚起したり話し手の主張を伝達したりするための語用論的選択である。このことは、-ㄹ-を含んだ疑問形の文が反語表現になりやすいことや修辭的用法が多いことを見てもわかる。ただし、この「前提性」は、特定の疑問詞との共起、聞き手の判断に委ねる場合、特定の語彙的意味を持つ用言など、一定の条件を備えると消失することも明らかにした。

以上のことから、現代韓国語の先語末語尾-ㄹ-は、文の意味に「現場性」「主体の固定性」「前提性」という 3 つの特徴もたらしうることを、叙述形及び疑問形のそれぞれの型の文ごとに詳細な観察及び分析を通して明らかにした。形態素-ㄹ-は、話し手が「発話時に・発話現場で」という状況の下で選好して用いられ、そのことが 2 次的に発話参与者の主観が文に塗りこめられて文の主体が話し手及び聞き手であるという、「主体の固定性」という特徴を導き出すものと考えられる。また、「現場性」と「主体の固定性」という特徴は-ㄹ-が備える「時間」「場所」「人称」を指し示す直示的機能によってもたらされるものであることを説明した。

また、「現場性」という特徴が文の意味に現れやすい形態素-ㄹ-は、話し手自身が持つ事態の真偽、成立に対する予測を塗り込んで疑問化されるとき、否定的「前提性」を持った疑問となって聞き手に問いかけるという語用論的効果をもたらす。従来の研究において指摘された「現場性」は、主に「推量」に焦点をあてたものが多かった。また、「主体の固定性」は異なった表現で言及された論考もあった。しかし、本稿においては、一部の用法のみならず、全ての用法において現われうる特徴であることを、それぞれの型の文における現われ方を示しながら詳細な分析を通して考察し、これら 3 つの関係性についても論じた。

9.2. 先語末語尾-ㄷ-の機能とそれがもたらす多義構造

現代韓国語の先語末語尾-ㄷ-は、文の意味の実現に「未来性」と「確実性」をもたらす文法的機能を有した「非現実」のムード形式であり、異なった次元で派生的に「婉曲性」をもたらす語用論的機能も備えた形態素である。このように文法的機能と語用論的機能という二つの次元の機能によって、-ㄷ-を含んだ文の多様な用法が成立する。-ㄷ-が表す「非現実」は「非現実の領域」の中でも「現実の領域」に隣接していると位置づけられる。時間軸上で述べるときは「実現」に近い「今」である。事柄のあり方に対する認識を述べるときは「断定」に極めて近い、高い「確実性」を認識している。つまり、時間的にも認識的にも「現実」の臨界地点に位置していると言えよう。それが一定の文脈のもとでは語用論的に機能して「婉曲性」をもたらすことになる。「非現実」を表す文法的機能が文の意味に「確実性」をもたらすのは断定できない「不断定」によるものであるが、それが「婉曲性」をもたらすことに援用されるのは、話し手が語用論的効果を見込んで「断定」を回避させる「避断定」を目的に-ㄷ-を選択して用いることで事態が間接化されるからである。

さらに、-ㄷ-を含んだ発話は「発話時に・発話現場で・話し手が」という要素が文の意味の成立に反映され、これによって「現場性」及び「主体の固定性」という特徴が導き出される。この「現場性」と「主体の固定性」は、-ㄷ-が「時間」「場所」「人称」を指す直示的機能に起因するものであり、このように発話現場に依拠していることが-ㄷ-を含んだ文が主観的に事態を述べると言われる根源的な理由と言えよう。発話の現場に限定される事柄が発話の現場における証拠をもとに話し手が自らの動作や認識について事態を描き述べるため、そこには「いま、ここで、私が」という要素が色濃く塗りこまれるのである。この「現場性」と「主体の固定性」という特徴は、命題が疑問化されたときにもそのまま発話に塗りこめられ、聞き手に対する「質問」という「疑問」本来の機能にずれを生じさせる。聞き手に命題の真偽を問うというよりも、話し手の持つ命題に対する「前提性」を含ませた文として聞き手に差し出されるのである。

「非現実」を表すムード形式である形態素-ㄷ-が用言に結合して文法的装置となり、文の意味の実現に「未来性」「確実性」というモダリティの意味をもたらすとともに、「非現実」を表す文法的機能が語用論的機能として援用されて「婉曲性」をもたらす。さらに形態素-ㄷ-は文脈の中で「時間」「場所」「人称」を指し示す直示的機能も備えており、その機能が働いたときに「現場性」や「主体の固定性」が文の意味の特徴として現れうる。また疑問形においては、「現場性」に起因した「前提性」という特徴が疑問形特有の現象をもたらす。

-ㄷ-は本来の文法的機能とそれが援用される語用論的機能に加えて、さらに直示的機能という3つの機能が複合的に作用しあって、文法的現象、語用論的効果、さらには談話レベルにまで拡張されて文の意味の成立に影響を及ぼしうる形態素である。このように異なった次元の機能を備え持った形態素-ㄷ-が、さまざまな文法的要件や文脈の中でその機能を多元的に果たすことによってかくも多様な文の意味を実現させ、これら機能の複合的作用こそがその多義構造を支える要因であると結論付けられる。

参考文献

1. 韓国語で書かれたもの(著者の가나다順)
고광모(2002) 「-겠-」의 형성 과정과 그 의미의 발달」『國語學』第 39 輯 : 27-47. 서울 : 國語學會
고영근·이현희교주(1986) 『周時經、國語文法』 서울 : 탑출판사
高永根(1976) 「現代國語의 文體法에 대한 研究-叙法體系(續)-」『語學研究』第 12 卷 第 1 號 : 17-53. 서울 : 서울大學校語學研究
과학백과사전출판사(1979) 『조선문화어문법』 평양 : 과학,백과사전출판사
과학백과사전출판사(1981) 『현대조선말사전(제 2 판)』 평양 : 과학,백과사전출판사
과학백과사전출판사(2004) 『조선말사전』 평양 : 과학백과사전출판사
국립국어연구원(1999) 『표준국어대사전』 서울 : 두산동아
국립국어원(2005) 『한국어 교육 총서 1 외국인을 위한 한국어문법 1-체계편』 서울 : 국립국어원
국립국어원(2005) 『한국어 교육 총서 2 외국인을 위한 한국어문법 2-용법편』 서울 : 국립국어원
김광희 (2004) 「전남 동부 방언의 구술담화에 나타난 인칭직시소의 형식과 기능」『國語學』第 44 輯 : 239-278. 서울 : 國語學會
김영희(1975) 「의문문의 이접적 특성」『문법연구』 제 2 집 : 103-129. 서울 : 탑출판사
김용경(1994) 『국어의 때매김법 연구』 서울 : 서광학술자료사
김차균 (1981) 「「을」과「겠」의 의미」『한글』 173·174 : 65-114. 서울 : 한글학회
나라바야시 아이(2007) 「양태를 나타내는 ‘-게 흐엿-’의 의미변화에 대해서」『國語學』第 49 輯 : 189-224. 서울 : 國語學會
나진석(1965) 「국어 움직임의 때매김 연구」『한글』 134 : 55-147. 서울 : 한글학회
南基心 (1972/1979) 「現代國語 時制에 關한 問題」『國語國文學』 51~73 : 213-238. 서울 : 國語國文學會
남기심·고영근(1993 개정판) 『표준 국어문법론』 서울 : 탑출판사
남윤진(1999) 「균형 말뭉치 구축을 위한 실험적 연구(1)-표본 크기 및 텍스트 범주의 문제를 중심으로-」『언어 정보의 탐구 1』 41-78. 서울 : 연세대학교언어정보개발연구원
박재연(2003) 「국어 양태의 화 청자 지향성과 주어 지향성」『國語學』第 41 輯 : 249-275. 서울 : 國語學會
박진호(2011) 「시제,상,양태」『한국어 통사론의 현상과 이론』 171-224. 서울 : 태학사
박철우(2011) 「화시의 기능과 체계에 대한 고찰」『한국어 의미학』 36 : 1-37. 서울 : 한국어 의미학회
백봉자(1999) 『외국어로서의 한국어 문법사전』 서울 : 연세대학교출판부
사회과학원 언어학연구소(1973) 『조선문화어사전』 평양 : 사회과학출판사 편집부

- 서정수(1978/1985) 「‘ㄹ 것’에 관하여-‘겠’과의 대비를 중심으로-」 『國語學』 第 6 輯 : 85-110. 서울 : 國語學會
- 서정수(1985) 「국어 의문문의 문제점」 『羨鳥堂金炯基先生八耄紀念國語學論叢』 191-215. 서울 : 創學社
- 서정수(1996) 『국어문법』 서울 : 한양대학교출판원
- 成耆徹(1979/1986) 「經驗과 推定- ‘-겠-’과 ‘-을 것이’ 를 中心으로-」 『문법연구』 제 4 집 : 109-129. 서울 : 탑출판사
- 신기철 · 신용철(1974) 『새 우리말 큰 사전』 서울 : 삼성출판사
- 申昌淳(1972) 「現代韓國語의 用言補助語幹 「겠」 의 意義와 用法」 『朝鮮學報』 第 6 輯 : 119-140. 天理 : 朝鮮學會
- 申昌淳(1997) 「用言토의 分析과 樣態範疇」 『國語學』 第 29 輯 : 141-169. 서울 : 國語學會
- 安明哲(1983) 「現代國語의 樣相研究-認識樣相을 中心으로-」 『國語研究』 第 56 號. 서울 國語研究會
- 연세대학교언어정보개발연구원(1998) 『연세한국어사전』 서울 : 두산동아
- 油谷幸利(1978) 「現代韓國語의 動詞分類-aspect 를 中心으로-」 『朝鮮學報』 第 87 輯 : 1-35. 天理 : 朝鮮學會
- 李基用(1978/1985) 「言語의 推定」 『國語學』 第 6 輯 : 29-64. 서울 : 國語學會
- 李南淳(1981) 「現代國語의 時制와 相에 對한 研究」 『國語研究』 第 46 號. 서울 : 國語研究會
- 이병기 (1997/2000) 「미래 시제 형태의 통시적 연구 ‘-리-’, ‘-ㄹ 것이-’, ‘-겠-’을 중심으로」 『國語研究』 第 137 號 ~ 第 163 號(合本). 서울 : 國語研究會
- 이병기(2006) 「‘-겠-’과 ‘-었-’의 통합에 대하여」 『國語學』 第 47 輯 : 179-206. 서울 : 國語學會
- 李智涼(1990) 「叙法」 『國語研究 어디까지 왔나-主題別國語學研究史-』 358-358. 서울 : 서울대학교大学院國語研究會
- 李賢熙(1982) 「國語의 疑問法에 對한 通時的 研究」 『國語研究』 第 52 號. 서울 : 國語研究會
- 李熙昇監修(1974) 『民衆엿센스國語辭典』 서울 : 民衆書林
- 이희자 · 이종희(2001) 『한국어학습용 어미 · 조사사전』 서울 : 한국문화사
- 임근석(2008) 「문법적 언어와 문법화의 관계」 『國語學』 第 51 輯 : 115-147. 서울 : 國語學會
- 임동훈(2001) 「‘-겠-’의 용법과 그 역사적 해석」 『國語學』 第 37 輯 : 115-148. 서울 : 國語學會
- 임호빈 · 홍경표 · 장숙인(1997) 『〈신개정〉 외국인을 위한 한국어문법』 서울 : 연세대학교출판부
- 임흥빈(1980/1998) 「{-겠-}과 대상성」 『국어 문법의 심층 I -문장 범수와 굴절-』 231-269. 서울 : 대학사
- 장경기(1986) 「국어의 부정의문문과 전제」 『語學研究』 第 1 卷第 1 號 : 19-40. 서울 :

서울대학교語學研究

張京姬(1982)「國語疑問法의 肯定과 否定」『國語學』第 11 輯 : 89-115. 서울 : 國語學會

張京姬(1986)『現代國語의 樣態範疇 研究』 서울 : 塔出版社

전혜영(1995)「한국어 공손현상과 ‘-겠-’의 화용론」『國語學』第 26 輯 : 125-146. 서울 : 國語學會

전혜자(2013)「선어말어미 ‘-겠-’이 사용된 문장의 세 가지 특징-구어에서 보이는 ‘현장성’, ‘주체의 고정성’ 및 ‘전제성’에 대하여-」『한글』 제 301 호 : 43-80. 서울 : 한글학회

정경재(2007)『{-겠-}의 발달에 따른 {-것-}의 역사적 변화』고려대학교 석사학위논문
조선 민주주의 인민 공화국 과학원 언어 문학 연구소 언어학 연구실(1960)『조선어문법 1』 평양 : 과학원 언어 문학 연구실

조선 민주주의 인민 공화국 과학원 언어 문화 연구소 사전 연구실(1962)『조선말 사전』 평양 : 조선 민주주의 인민 공화국 과학원 출판사

崔明玉(1976)「現代國語의 疑問法研究-西南 慶南方言을 中心으로-」『學術院論文集』第 15 輯 : 145-174. 서울 : 學術院

최현배(1929/1955)『<김곡침>우리말본』 서울 : 정음문화사

한글학회(1991)『우리말 큰사전』 서울 : 어문각

한현중(1990)『현대 국어의 시제체계의 수립과 그 제약 조건』서울대학교 석사학위논문

후쿠이 레이(2006)「나카무라 쇼지로가 남긴 한국어 학습서에 대하여」『李秉根先生退任 紀念 國語學論叢』 1595-1610.

2. 日本語で書かれたもの(著者の五十音順)

安達太郎(1999)『日本語疑問文における判断の諸相』東京 : くろしお出版

李翊燮·李相億·蔡琬著、梅田博之監修、前田真彦訳 (2004)『韓国語概説』東京 : 大修館書店

池上嘉彦(1975)『意味論』東京 : 大修館書店

池上嘉彦(1978)『意味の世界』東京 : 日本放送出版協会

伊藤英人(1989)「現代朝鮮語動詞の非過去テンス形式の用法について」『朝鮮学報』第 13 1 輯 : 1-44. 天理 : 朝鮮学会

今井邦彦(2001)『語用論への招待』東京 : 大修館書店

梅田博之·村崎恭子(1982a)「現代朝鮮語のテンス・アスペクト」『講座日本語学 11 外国語との対照Ⅱ』 41-60. 東京 : 明治書院

梅田博之·村崎恭子(1982b)「現代朝鮮語のモダリティ」『講座日本語学 11 外国語との対照Ⅱ』 161-177. 東京 : 明治書院

大阪外国語大学朝鮮語研究室編(1986)『朝鮮語大辞典』東京 : 角川書店

太田朗(1980)『否定の意味』東京 : 大修館

尾上圭介(2001)『文法と意味Ⅰ』東京 : くろしお出版

- 尾上圭介(2004)「主語と述語をめぐる文法」『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』1-57. 東京：朝倉書店
- 風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健(2004)『言語学[第2版]』東京：東京大学出版会
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1996)『言語学大辞典 第6巻 術語編』東京：三省堂
- 菅野裕臣(1981)『朝鮮語の入門』東京：白水社
- 菅野裕臣、早川嘉春、志部昭平、浜田耕策、松原孝俊、野間秀樹、塩田今日子、伊藤英人共著(1991)『コスモス朝和辞典(第2版)』東京：白水社
- 菊池康人(2003)「敬語とその主な研究テーマの概観」『朝倉日本語講座 8 敬語』1-30. 東京：朝倉書店
- 金水敏、今仁生美(2000)『意味と文脈 現代言語学入門 4』東京：岩波書店
- 金素雲編(1972)『精解 韓日辞典』東京：高麗書林
- 久野暉(1973)『日本文法研究』東京：大修館書店
- 熊井浩子(2003)「「待遇表現」の諸側面と、その広がり一狭くとらえた敬語、広くとらえた敬語一」『朝倉日本語講座 8 敬語』31-52. 東京：朝倉書店
- 国立国語研究所(1960)『話しことばの文型(1)一対話資料による分析一』東京：国立国語研究所
- 国立国語研究所(1985)『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』東京：秀英出版
- 澤田淳(2010)「直示と視点」『ことばの意味と使用』222-233. 東京：鳳書房
- 澤田淳(2011)「日本語のダイクシス表現と視点、主観性」『ひつじ意味論講座 第5巻 主観性と主体性』165-192. 東京：ひつじ書房.
- 田野村忠温(2004)「現代語のモダリティ」『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』215-234. 東京：朝倉書店
- 朝鮮語学研究会編(1987)『朝鮮語を学ぼう』東京：三修社
- 鄭相哲(2010)「日本語否定疑問研究一中立疑問文を中心に一」『日語日文學研究』第34輯：254-279. 서울：韓國日語日文學會
- 全恵子(2010)「現代韓国語の先語末語尾 {-ㄹ-} の文法的機能について」『朝鮮学報』第216輯：51-99. 天理：朝鮮学会
- 全恵子(2013)「現代韓国語の先語末語尾 {-ㄹ-} の疑問形における機能と特徴」『朝鮮語研究 5』89-128. 東京：ひつじ書房
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』東京：くろしお出版
- 中村明(1991)『日本語レトリックの体系』東京：岩波書店
- 奈良林愛(2012)「-계 き엿-とモダリティー-ㄹ-の理解のために一」『朝鮮学報』第224輯：27-58. 天理：朝鮮学会
- 仁田義雄・益岡隆志(1991)『日本語のモダリティ』東京：くろしお出版
- 仁田義雄(1999)『日本語のモダリティと人称』東京：ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会編(2009)『現代日本語文法 4 第8部 モダリティ』東京：くろしお出版

- 野間秀樹(1988)「<하겠다>の研究－現代朝鮮語の用言の mood 形式をめぐって－」『朝鮮学報』第 129 輯：1-73. 天理：朝鮮学会
- 野間秀樹(1990)「<할것이다>の研究－再び現代朝鮮語の用言の mood 形式をめぐって－」『朝鮮学報』第 134 輯：1-64. 天理：朝鮮学会
- ペネロピ・ブラウン・スティーブ・C・レヴィンソン著 田中典子監訳 齋藤早智子/津留崎毅/鶴田庸子/日野壽憲訳(2011)『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』東京：研究社
- 益岡隆志(1990)「モダリティ」『講座 日本語と日本語教育 12』71-96. 東京：明治書院
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』東京：くろしお出版
- 益岡隆志(2007)『日本語モダリティ探求』東京：くろしお出版
- 宮崎和人(2005)『現代日本語の疑問表現 疑いと確認要求』東京：ひつじ書房
- 森山卓郎・仁田義雄・工藤 浩(2000)『日本語の文法 3 モダリティ』東京：岩波書店
- 安田吉実、孫洛範編(1983)『民衆書林 옛센스韓日辞典』서울：民衆書林
- 梁昊淵(1982)『要説 韓国語文法』東京：高麗書林
- 油谷幸利、門脇誠一、松尾勇、高島淑郎編(1993)『朝鮮語辞典』東京：小学館
- 渡辺伸治(2009)「ダイクシスの定義と下位分類」『言語文化研究』35：161-178. 大阪：大阪大学大学院言語文化研究科
- 渡辺伸治(2012)「直示とコンテクスト」『ひつじ意味論講座 第 6 巻 意味とコンテクスト』1-18. 東京：ひつじ書房.

3. 英語で書かれたもの

- Iksop Lee and S. Robert Ramsey(2000)*The Korean Language*. State University of New York Press.
- Keith Brown and Jim Miller(2013)*The Cambridge Dictionary of Linguistics*. Cambridge University Press.
- Samuel E. Martin(1992)*A Reference Grammar of Korean*. Rutland, Vermont and Tokyo:Charles E Tuttle Company Inc.

コーパス

- 국립국어연구원(1999)『21 세기 세종계획 균형말뭉치』서울：국립국어연구원
- 국립국어원(2010)『21 세기 세종계획 균형말뭉치 최종성과물』서울：국립국어원

ドラマ

- 『브레인』第 19 話

資料

資料 1. 코바스의用例番号とタイトル

- ・出現環境の計数作業及び用例を抽出した『21 세기 세종계획 균형말뭉치』 「純口語」テキストの用例番号とタイトル

BJ950022	뉴스데스크 95-02-09
BJ950023	뉴스데스크 95-02-14
BJ950024	뉴스데스크 95-02-17
BJ950025	뉴스데스크 95-02-22
BJ950026	뉴스데스크 95-02-26
BJ950027	뉴스데스크 95-03-01
BJ950028	뉴스데스크 95-03-03
BJ950029	뉴스데스크 95-03-08
BJ950030	뉴스데스크 95-03-12
BJ950031	뉴스데스크 95-03-13
BJ950032	뉴스데스크 95-03-14
BJ950033	뉴스데스크 95-03-15
BJ950034	뉴스데스크 95-03-16
BK940009	김한길과 사람들 94-12-04
BK940019	남자를 위하여 94-12-12
BK940027	선택, 토요일이 좋다! 94-12-03
BK950001	밤과 음악사이 95-01-11
BK950004	행복이 가득한 집 95-01-08
BK950006	김한길과 사람들 95-01-15
BK950007	김한길과 사람들 95-01-22
BK950008	김한길과 사람들 95-02-05
BK950010	아침마당 95-02-20
BK950011	아침마당 토요일이드 95-01-07
BK950012	아침만들기 95-03-07
BK950013	아침만들기 95-03-10
BK950014	아침만들기 95-03-14
BK950015	아침만들기 95-01-09
BK950016	남자를 위하여 95-01-16
BK950017	남자를 위하여 95-01-23
BK950018	남자를 위하여 95-02-20
BK950021	남자를 위하여 95-01-09

BK950022	밤과 음악사이 95-01-18
BK950023	밤과 음악사이 95-02-08
BK950024	밤과 음악사이 95-02-15
BK950025	밤과 음악사이 95-02-22
BK950026	선택 토요일이 좋다 95-02-04
BK950028	선택 토요일이 좋다 95-01-07
BK9X0002	한밤의 데이트
BK9X0003	한밤의 데이트
BK9X0020	남자를 위하여
BK9X0029	TV는 사랑을 싣고
BK9X0030	단소리 쓴소리
BL940002	네시에 만남시다 94-07-16
BL940003	네시에 만남시다 94-07-23
BL940004	네시에 만남시다 94-07-09
BL940005	네시에 만남시다 94-11-05
BL940006	네시에 만남시다 94-11-04
BL940007	네시에 만남시다 94-07-01
BL940008	네시에 만남시다 94-11-11
BL940010	네시에 만남시다 94-07-29
BL940011	네시에 만남시다 94-07-15
BL940012	네시에 만남시다 94-11-12
BL950009	네시에 만남시다 95-07-08
BL9X0001	네시에 만남시다
BL9X0013	네시에 만남시다
BM9X0001	판소리 인간문화재 증언 자료 판소리 명창 정광수 94-01-09
BM9X0002	판소리 인간문화재 증언 자료 판소리 명창 김소희 94-10-09
BM9X0003	한국연극의 문제점과 연극의 매체에 대한 재인식 94-05-13
CK000137	대통령 당선자-국민과의 대화 98-01-18 전자전사자료
CK000138	김대중 대통령 국민과의 대화 98-05-10 전자전사자료
CK000139	집중분석 드라마여행 98-06-07
CK000140	집중분석 드라마여행 98-06-14
CK000141	집중분석 드라마여행 98-06-21
CK000142	집중분석 드라마여행 98-06-28
CK000143	집중분석 드라마여행 98-07-05
CK000144	집중분석 드라마여행 98-07-12
CK000145	집중분석 드라마여행 98-07-19
CK000146	집중분석 드라마여행 98-07-26
CK000147	집중분석 드라마여행 98-08-02

CK000148	집중분석 드라마여행 98-08-09
CK000149	집중분석 드라마여행 98-08-16
CK000150	집중분석 드라마여행 98-08-23
CK000151	집중분석 드라마여행 98-09-06
CK000152	집중분석 드라마여행 98-09-06
CK000153	집중분석 드라마여행 98-09-13
CK000154	집중분석 드라마여행 98-09-20
CK000155	부동산 전망대 98-07-29
CK000156	부동산 전망대 98-08-22
CK000157	부동산 전망대 98-08-26
CK000158	부동산 전망대 98-08-28
CK000159	부동산 전망대 98-08-31
CK000160	부동산 전망대 98-09-02
CK000161	부동산 전망대 98-09-09
CK000162	부동산 전망대 98-09-12
CK000163	부동산 전망대 98-09-16
CK000164	부동산 전망대 98-09-19
CK000165	부동산 전망대 98-09-22
CK000166	산업 재계 뉴스 98-09-03, 전자전사자료
CK000167	산업 재계 뉴스 98-09-07, 전자전사자료
CK000168	산업 재계 뉴스 98-09-09, 전자전사자료
CK000169	산업 재계 뉴스 98-09-11, 전자전사자료
CK000170	산업재계 뉴스 98-09-14, 전자전사자료
CK000171	산업-재계 뉴스 98-09-16, 전자전사자료
CK000172	산업 재계 뉴스 98-09-19, 전자전사자료
CK000173	KBS 9시 뉴스 98-09-22, 전자전사자료
CK000174	MBC 뉴스데스크 98-03-24, 전자전사자료
CK000175	MBC 뉴스데스크 98-04-01, 전자전사자료
CK000176	MBC 뉴스데스크 98-04-18, 전자전사자료
CK000177	MBC 뉴스데스크 98-04-26, 전자전사자료
CK000178	MBC 뉴스데스크 98-04-28, 전자전사자료
CK000179	MBC 뉴스데스크 98-05-03, 전자전사자료
CK000180	MBC 뉴스데스크 98-05-09, 전자전사자료
CK000181	MBC 뉴스데스크 98-05-15, 전자전사자료
CK000182	MBC 뉴스데스크 98-05-16, 전자전사자료
CL000183	주께로 가까이 90-01-22, 전자전사자료
CL000184	주께로 가까이 90-01-29, 전자전사자료
CL000185	주께로 가까이 90-02-05, 전자전사자료

CL000186	여성시대 3부 96-03-14, 전자전사자료
CL000187	여성시대 1,2부 96-03-14, 전자전사자료
CL000188	여성시대 1,2부 96-03-07, 전자전사자료
CL000189	여성시대 3,4부 96-03-07, 전자전사자료
CL000190	여성시대 1,2부 96-04-01, 전자전사자료
CL000191	여성시대 1,2부 96-05-01, 전자전사자료
CL000192	여성시대 3,4부 96-05-01, 전자전사자료
CL000193	여성시대 3,4부 96-05-10, 전자전사자료
CL000194	여성시대 96-05-20, 전자전사자료
CL000195	출발 서울 대행진 3부 96-05-26, 전자전사자료
CL000196	출발 서울 대행진 4부 96-05-26, 전자전사자료
CM000197	또 하나의 문화 95-06-16, 전자전사자료
CM000198	문화이론 90-04-10, 전자전사자료
CM000199	남녀평등과 인간화 95-05, 전자전사자료
CM000200	20세기 영미시 95-07, 전자전사자료

- 用例を抽出した『21세기 세종계획 균형말뭉치』 「準口語」テキストの用例番号とタイトル

CJ000225	보고 또 보고 14 회
CJ000227	보고 또 보고 16 회
CJ000262	보고 또 보고 14 회
CJ000262	육남매 7 회

- 用例を抽出した『21세기 세종계획 균형말뭉치 최종성과물』 「구어」テキストの用例番号とタイトル

4CM00027	상대화_머리에대해서#2
4CM00029	일상대화_미팅
4CM00055	일상대화_여대생 10 인잡담
4CM00112	발표_대화의기법#3
4CM00113	발표_대화의기법#4
5CM00074	강의_연구방법론
6CM00013	강연_한국어의형태론적이해
6CM00056	일상대화_수강과목
6CM00094	주제대화_영화와배우
7CM00005	독백_군대
7CM00009	수업대화_과외수업#3

7CM00011 수업대화_콘솔#1
 7CM00054 토론_세계화세미나#1,2
 8CK00001 방송_빅마마스오픈키친
 8CL00001 강연_크리스천의대화#1

- 用例を抽出した『21세기 세종계획 균형말뭉치 최종성과물』「문어」テキストの用例番号とタイトル

2CE00020 사바로 가는 길
 2BEXXX10 별거벗은 마음
 4BE94001 하얀손
 BREO0088 해남 가는 길
 BREO0093 숨은 사랑

資料 2. インフォーマントの情報

	年齢	性別	言語形成地	職業	日本滞在年数
A	65 歳	女性	釜山	主婦	韓国在住
B	47 歳	女性	大邱	同時通訳	韓国在住
C	32 歳	女性	大邱	学生	6 年
D	29 歳	女性	釜山	学生	6 年
E	46 歳	男性	ソウル	大学教員	2 年 6 ヶ月
F	38 歳	女性	ソウル	学生	12 年
G	29 歳	男性	水源	学生	韓国在住
H	26 歳	女性	京畿道	学生	韓国在住
I	29 歳	男性	水原	学生	韓国在住
J	28 歳	女性	京畿道	学生	1 年
K	28 歳	女性	ソウル	学生	1 年
L	63 歳	男性	大邱	大学教員	3 年
M	25 歳	女性	仁川	学生	1 年 6 ヶ月
N	33 歳	女性	釜山	通訳・翻訳	10 年
O	28 歳	女性	ソウル	学生	7 年
P	33 歳	男性	ソウル	学生	8 年
Q	29 歳	女性	ソウル	学生	7 年
R	32 歳	男性	ソウル	学生	韓国在住
S	33 歳	男性	仁川	学生	韓国在住

謝辞

本論文は、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程在学中に、指導教員の福井玲先生のご指導のもとでまとめたものです。東京大学大学院人文社会系研究科の福井玲先生には、修士課程入学以来ご指導とご鞭撻を賜り、研究の過程を見守り続けていただいたことに深く感謝申し上げます。また、副指導教員の本田洋先生にはゼミへも参加させていただきながら、異なった専門分野から丁寧なご助言を賜りましたことに心より感謝申し上げます。

東京外国語大学大学院総合国際学研究院におられた伊藤英人先生には、学部時代より多くのご指導を賜りました。また東京外国語大学大学院総合国際学研究院の南潤珍先生には学部時代をはじめ大学院での研究においても多くのことを学ばせていただき、貴重なご助言を賜りました。心よりお礼を申し上げます。

また、東京大学大学院総合文化研究科の生越直樹先生、大阪大学言語文化研究科の岸田文隆先生には、研究会などでご助言をいただくとともに本論文の審査委員をお引き受くださり、貴重なご意見を頂戴いたしましたこと、心よりお礼を申し上げます。

さらに、本研究を進めるに当たり、インフォーマントとしてご協力くださいました韓国語母語話者の方々、そして研究を遂行するに当たり、励ましやご支援をくださいました多くの方々に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

最後に、学部編入から始めた研究生活をさまざまな面から支え続けてくれた、夫の南宮成一、そして家族に深く感謝の意を伝えたいと思います。